Reset

Reset (2011.1)

　祠堂を卒業し、日本の音大に三年、その後フランスに留学して二年。
　その間にいくつかの賞も取り、中には日本人初というものもあった。
　投げ出してしまいたいというくらい辛い練習ではあったけれども、自分の音を認められたようで、とても嬉しかった事を覚えている。
　あとから聞いた話では日本でもニュースやワイドショーなどにも取り上げられ、自分の知らない内に「葉山託生」という名前が勝手に一人歩きしていたようだ。
　そんな事は露知らず、その頃のぼくの悩みは帰国後の事だった。
　賞を取ったからと言って、すぐにバイオリニストとして活動できるわけじゃない。いっそのことフランスに留まって、どこかのオーケストラにでも入団しようかと考えていた時、佐智さんが一人の男性を連れて、狭いステュディオ（ワンルーム）に訪ねてきてくれた。
　その男性が、ぼくのマネージャーである桜井さんだ。
　ぼくのマネージメントをしたいとの申し出に、半ば本気で驚き、半ば物好きなと呆れ、でも佐智さんの後押しもあって、ぼくは全てを任す事にした。
「自分の音に自信を持って」
　昔から何度も佐智さんに言われ、開き直りとも言えるような心境で、自分の音にどうにか自信を持てるようになったものの、『バイオリニスト葉山託生』が世に通じるようになったのは、事務所の売り出し方が上手かったのだと今でも思う。
　以前のニュースなどで取り上げられた賞を前面に押し出しつつ、天才バイオリニスト井上佐智の友人である事（佐智さんに申し訳なく思ったが、反対に「どんどん使って」と笑われてしまった）、愛器がストラディバリである事、とにかくぼくを世に出す為に事務所内はありとあらゆる手段を用いた。
　どういうツテを使ったのか、番組のテーマソングやCMソング、BGMで使えそうなインストゥルメンタルなどを手がけ始めると一気に名前が浸透していき、コンサートもありがたいことに満員の状態だ。
　あまりの勢いに心がついていけなくて悩む事もあったけれど、
「託生君の音楽を、皆さんに聴いてほしいだけだよ」
　だから協力は惜しまない。
　そう笑った佐智さんと桜井さんの言葉に、ぼくはせめて聴きに来てくださる方をがっかりさせないように、黙々と練習を続けるしかなかった。
　プロになって五年。周りの人の尽力によって、ぼくはバイオリニストとしての道を歩いている。

「予定通りに進んでよかったですね」
　佐智さんに誘われ何枚目かの共同CDを作る事になったのは、初秋のパリ。
　二人とも東京にいたのに、なぜわざわざパリなのかと佐智さんに聞くと、
「なんとなく？」
　力が抜けそうな答えが返ってきた。
　たぶん『パリのスタジオにて収録』のような言葉を付けたいが為だと思うけれど（これも戦略のひとつだと桜井さんに教わった）、どこでレコーディングしても同じだとぼくは思う。
　こちら側の事務所と佐智さんの所は今ではツーカーの仲なので、有無を言わさずパリに送り込まれて一ヶ月。今日、レコーディングが無事終了したのだった。
　佐智さんとぼく。それぞれのマネージャーの大木さんと桜井さん。
　四人でパリの石畳の上を歩いていると、スッと車が止まり歩道側の窓が降りた。
　そして。
「佐智？」

　中から聞こえてきた低音に、世界が色をなくした。全てがセピア色に染まり、目に映る風景も人も時間さえも一瞬止まったように感じた。
「義一君、久しぶり」
　佐智さんの声で我に返り、車から離れるように一歩後ずさり俯く。
　こんなところで、会うなんて。
　車の開閉音が耳に届き、風が懐かしい香りを運ぶ。あの頃と変わらない不思議な花の香り。
　視界に靴の先が写りぼんやりと顔を上げると、学生時代より落ち着いた雰囲気をかもしだし、一目で上流階級の人間だとわかる仕立てのよいカジュアルな服に身を包んだギイが、目の前に立っていた。
「託生も、久しぶりだな。元気にしてたか？」
「ギイ……久しぶりだね」
　余所余所しい挨拶。
　それもそのはず。ぼく達は十年ぶりに再会したのだから。
　ぼく一人であったなら、すぐさまなんらかの理由をつけて、この場を離れていただろう。しかし、彼は佐智さんの幼馴染でもあるんだ。居心地の悪さを感じつつも、佐智さんの後ろで会話が終わるのを待っていると、
「義一君、時間があるんだったら、お茶でもどう？僕達が泊まっているシタディーヌ、すぐそこなんだ。ね、託生君？」
　奈落の底に落ちたような気分を味わう事になった。

「堅苦しいホテルよりアパルトマンがいいね。どうせスタジオに缶詰になることもあるだろうし」
　佐智さんの言葉で決まったシタディーヌ。ホテルのサービスがついたアパルトマンというところだろうか。各自の部屋を確保しつつ、リビングとキッチンがついてあるシタディーヌは、仕事の打ち合わせなどもすぐにでき長期滞在には快適な空間だった。
　部屋に荷物を置き力なくベッドに座ると、無意識に震える両手が目に写りそのまま顔を手で覆った。
「ギイ……」
　突然現れたギイに動揺していた。
　忘れたくて、でも忘れられなくて。
　この十年、夢の中に出てきたギイの顔は、最後に見た悲しそうな諦めたような微笑みばかりだった。
　今更会って、ぼくに何が言えるのだろう。卒業式の夜、ゼロ番で別れを告げたこのぼくに。
　自分から手放してしまった、優しい温もり。あの情熱。
　思い出して体が熱くなり羞恥心でいっぱいになったぼくは、このまま部屋に閉じこもりたくなった。ギイに見せる顔なんてあるわけがない。
　しかし「お茶、用意してるね」と佐智さんに声をかけられている状況では不可能な事で、ぼくは頭を振って切り替える事にした。
　ほんの少しの時間だ。それが終われば、もう二度とギイと会う事はない。
　胸の奥にふわりと浮かんだ寂しさに気づかないふりをして、ぼくはドアを開けた。
　リビングに向かうと、もうすでにお茶の用意はできており、ぼくは空いているギイの隣に腰かける。体温が感じられそうな距離に鼓動が跳ね上がるが、ギイの顔を正面から見なくていいのは正直助かる。
「義一君自ら、車を運転してるなんて珍しいね」
　ぼくの戸惑いなど気付いていない佐智さんとギイが、和やかに会話を続けていた。
　よくよく考えてみれば、佐智さんがギイをお茶に誘って当たり前なんだ。忙しい二人だもの。なかなか会う機会もなかったのだろう。だいたい再会したのが、佐智さんが住んでいる東京でもギイが住んでいるNYでもない、フランスのパリというところが、二人の忙しさを物語っている。
「オフだからな。ミシェルのところに行く途中だ」
「あ、もしかして、ミシェル・ド・ルフェビュール侯爵？」

　ぼくにはよくわからない名前が出たところを見ると、二人の昔からの知り合いというところか。
　知らない事には口を挟むべからず。
　そう判断し、大人しくお茶を飲んでいたのだが、
「ブルボネ地方だったよね？」
「ブルボネ？」
　佐智さんが口にした言葉に、無意識に反応してしまった。
「そうだが。ブルボネがどうかしたのか？」
「あ、ううん」
　ギイに問いかけられ、知らず交わった視線に耐えられず首を横に振った。
「ふふっ、託生君はヴィエルの調弦法の種類を思い出したんだよね」
「……はい」
「ヴィエルってなんだ？」
　馴染みのない言葉に、ギイが首をひねる。
「ヨーロッパの民族楽器だよ。バロックやルネサンス時代の。ハンドルを廻して奏でる手回しバイオリンってとこかな。ヴィエルはフランス語読みで、英語ではハーディ・ガーディと呼ばれている」
「ハーディ・ガーディ……聞いた事があるような、ないような」
「それで、ヴィエルの調弦法には二種類あって、その一つがブルボネ式って言われてるんだ。託生君、調弦法のブルボネ式は、このフランスのブルボネ地方から来てるんだよ」
「そうだったんですか」
　さすが佐智さん、音楽に関する事は物知りだ。
「手で廻すのか？」
「そう。右手でハンドルを廻して、左手で鍵盤を押すんだ」
「それって、もしかして、これくらいの大きさ？」
　と言いながら、ギイは両手で架空の箱を作った。
「そのくらいだけど、義一君、どこかで見たのかい？」
「それなら、ミシェルん家にあるぞ」
　ギイの言葉に、佐智さんの目が光ったような気がした。
　佐智さんとの付き合いも十年が過ぎ、さすがにこの人の性格もわかってきたというか、この頃、佐智さんの笑顔がたまに左横の人物に重なるときがある。
「義一君」
「はいはい。何人だ？」
「一人」
「はぁ？」
「僕と大木さんと桜井さんは帰らなきゃいけないんだ。だから」
「託生一人ってことだな？」
「え、ぼく？！」
　なにを話しているのかチンプンカンプンで、てっきり人事だと思ってぼんやりしていたら、急にぼくの名前が出てきて驚いた。
「あの、ぼく一人ってなにがですか？」
「ヴィエルの見学」
「えぇ？！」
　いや、ちょっと待って！
　ヴィエルを見る事なんてなかなかできないことだから、ありがたい話なのだとは思うけれど、そのミシェルなんとか侯爵の所にギイと二人で行くというのは、遠慮したいです！心の準備が！
　そんなぼくの焦りなどそっちのけで、佐智さんは話を進めていく。

「桜井さん、託生君のスケジュール大丈夫ですよね？」
「えぇ、二週間のオフです」
「ね？だから、託生君見ておいでよ」
「いや、でも！」
　だから、ギイと二人というのは……！
「託生君、ヴィエルを見る機会なんてなかなかないよ？音楽家として吸収できるものは、なんでも吸収した方がいい。見る事も体験する事も、全て財産になるんだから」
　『音楽家として』と佐智さんに言われれば、反論はおろか意見もできなくて、しかも大木さんも桜井さんも神妙に頷いている状況で「NO」と言う勇気はぼくにはない。
「託生君、僕は行った方がいいと思う」
　そう、佐智さんに断言されれば。
「わかりました」
　と頷くしかないのだ。
　ギイは、ぼく達の話が纏まるのを待って席を外し、数分後指で丸を作って戻ってきた。
「向こうはOKだ。ただヴィエルはどれだけ触ってもいいけど、たぶん音は出ないだろうってさ。数百年置きっぱなしだからって」
「数百年……」
　さすが骨董品。確かにハンドルが回りそうにない。
　そのまま佐智さんに急かされ、荷物をまとめさせられたぼくは、
「義一君、よろしくね」
　の声に送り出されて、気が付けば車上の人。
　ギイと再会して、わずか三十分。
　まさか元恋人とドライブをする羽目になるとは、思いもしなかった。

　パリ市街を抜け、車は南に向かっているようだった。
　とりとめのない会話さえなく、カーオーディオから流れる音楽だけが車内を満たしている。居心地の悪さにもぞもぞと座りなおし、チラリとギイをうかがった。
　少し、痩せたかな……。
　ギイに会うのは十年ぶりではあるが、ギイの顔は経済誌などでよく取り上げられているので、たまに見かけるときがあった。すでにFグループの後継者として副社長の地位に付き、お飾りだと揶揄されていた時期もあったが、そんな世間の声などすぐなくなりメキメキと頭角を現して、今やギイの一声で世界経済が変わるとまで言われている。
　もう、ぼくの手の届かない場所にいったのだと二度と会う事のない人間だと思っていたのに、なぜこんな事になってしまったのだろう。
「どうした？」
　こっそり見ていたつもりなのに、急にギイが振り返って息が止まりそうなくらい驚いた。
「託生？」
「いや……えっと……急にお邪魔するなんて、迷惑じゃないのかなって思って」
「ホテルになってるから部屋はいくらでもあるし、スタッフが身の回りの事をしてくれるから、ミシェル達の手はわずらわせないよ」
「ホテル？」
「古城ホテルってやつだな」
「お城なんだ……」
　ぎこちなく感じているのはぼくだけのようで、ギイはこの状況に頓着せず、昔二人の間になにもなかったか

のようにぼくに話しかけた。
　……ん？
「ホテルって、泊まるの？！」
「泊まるの？って、お前、荷物持ってきただろ？」
「さ……佐智さんに『荷物まとめて』って言われたから」
　てっきり、合流するには時間が合わないから、一人で帰っておいでという意味だと思っていたのに。
「じゃ、じゃあ、ヴィエル見せてもらったら、ぼく帰るから」
「あのなぁ。城って言うのは、大概人里から離れてるんだ。小さな村は近くにあるが、それなりの大きさの町までどれだけの距離があると思ってる？」
「タ……タクシーで……」
「あんな田舎に呼び出すのか？」
「でも……」
　ギイがどれくらい、そのホテルに泊まるのかはわからないけれど、その間顔を合わせないわけにはいかないだろう。でも、何日も顔を合わせているうちに、ぼくの気持ちがギイに伝わってしまいそうで怖いんだ。まだ、君が好きだって事を。
　口ごもったぼくに、
「ま、託生が気になるのはわかるけどな」
　ギイはそう言うと、腕を伸ばしてポンポンと頭を軽く叩いた。
「佐智が言っている『音楽の為』だと思って、城に泊まればいいさ」
　もしかして、ギイは十年前の別れを指しているのだろうか。別れを告げたギイに、ぼくがいたたまれない思いを抱いて拒否しているのだと。
　オレは気にしていないから、お前も気にするな。そう言いたいのだろうか。
　ギイの優しい瞳に、ふと気づいた。
　あれから十年も経っているのだ……。
　一昔前の恋が、思い出の恋に変わっていたとしてもおかしくはない。
　ぼくはともかく、ギイの中では消化できている終わった恋なのかもしれない。いや、たぶん、そうなのだろう。だからこそ、こんなぼくに笑顔を見せてくれているんだ。
　拒否している理由を勘違いしてくれているのなら、そう思っててもらったほうがいい。
「ありがとう」
　君への想いは胸の奥に閉まっておくから。
　その心遣いに、数日とは言え側にいる事を許してくれた事に感謝する。……だから、気づかないで。
　ギイは一瞬目を見開き、ふっと目尻に皺をよせて静かに微笑んだ。
「ところで、託生。お前、城と聞いてどんな城が思い浮かぶ？」
　話題転換が早いのは、昔からの癖だ。それでも、この重い空気を吹き飛ばすには十分で、ギイの言う「城」を思い浮かべてみる。
「ドイツのノインシュバンシュタイン城のような建物か、ヴェルサイユ宮殿のような建物か……」
「ノインシュバンシュタイン城は十九世紀、ヴェルサイユ宮殿は十七世紀。これから行くシャトー・ルフェビュールが作られたのは十四世紀。どんな建物だと思う？」
「どんなって……見当つかないよ」
　そう。あまりにもヨーロッパには大小問わず城が多すぎて思い浮かばない。ただ、城として古い部類に入るのだろう事はわかるけど。
「全部石造りでな、外から見ると城壁がぐるりと取り囲んでいて、外側の窓は上部に小さいのしかついてないな。今は埋め立てられているが、元々周りは堀になっていたし。こっそり侵入するのは不可能だろう」
「侵入って？」
「他国との戦いに備えた要塞だったんだよ」

「要塞？！」
「だから託生が思っている優雅な城じゃなくて、無骨な感じだな」
「へぇ」
　あまりそういうお城は見た事がないかも。ぼくが頷いていると、
「それでな」
　ギイは、急に声を潜めた。
「……なに？」
　なんとなく嫌な予感がして、顎を引く。
「要塞なんだからもちろんあちらこちらで戦いがあってな、特に北側の一番戦いの激しかったあたりでは夜な夜な鎧を着た人間が彷徨い歩いたりしていてさ……」
「ギギギ……ギイ」
　それってそれって。
　血の気の引いたぼくの顔を横目で見て、ギイが盛大に吹き出した。
「変わらないな、託生」
「ギイ！ぼくが苦手なの知ってて言ってるだろ？！」
　悪戯っ子のようにニヤリと笑い、
「バレたか」
　悪びれずひょうひょうとのたまった。
　『出来る男』の代名詞のようにメディアがこぞって書き立てている冷静かつクールな男は、いったいどこに行ったのやら。
　でも、昔と変わらないやり取りに、涙がこぼれそうになった。

　今思えば、大人の恋と子供の恋だった。
「オレの覚悟はついている」
　何度も聞いて、そのたびに覚悟がついていない自分に歯がゆさを感じ、そしてギイの想いに応えられない申し訳なさを味わい……。ギイに愛されて幸せの中にいるはずなのに、時折大きな渦に飲み込まれそうな恐怖を感じていた。そして、卒業が近づくにつれて、携帯に出るギイの言葉が英語に変わっていくのに気づき、現実を見たくなくてゼロ番への足も遠のいた。
　側にいたいのにいたくない。もっと愛してほしいのに、それが怖い。
　まるで自分の心が揺れるやじろべえのような不安定な状態に耐え切れなくなった時、ぼくはギイに別れを切り出した。
　先の事はわからないから、今を大切にしよう。
　それは、ある意味、ぼくの逃げだった。未来を考えたくなかった、ぼくの我侭。
　卒業式の夜、ストラディバリを持って、ぼくはゼロ番を訪ねた。
「別れてほしい」
　震えそうになる言葉を叱咤して口に出すと、
「わかった」
　静かな了承を告げる声がし恐る恐る顔を上げた。ギイはこうなるのを初めから知っていたかのように、悲しそうな諦めた表情をしてぼくを見ていた。
　あぁ、ぼく達、本当に終わるんだ……。
　自分から言い出した事だけど、ギイに引き止められる事もなくあっさりと頷かれて、心も涙も凍りつく。
「今まで、ありがとう」
「オレこそ、幸せな夢を見せてもらった」
　差し出された右手を握り返しながら、ギイのこれからの幸せを切に願う。

　こんなに愛せる人は、もう現れないかもしれない。だからこそ、幸せになってほしい。
　しかし穏やかな別れの時間は、そこまでだった。
　ギイはストラディバリを返すことを頑なに拒んだのだ。
「オレは、今、返してほしくない」
「でも……！」
　これを持っていると苦しくなる。ギイを忘れる事ができなくなる。
　押し問答の末、ギイはバイオリンケースを開け、
「それなら、ここで壊してやる！」
　あのときと同じ台詞で、でも、あのときとは全然違う激情のままネックを両手で掴みテーブルに叩きつけようとした。
「ギイ、やめて！！」
　ぼくの悲鳴に、叩きつけられる寸前テーブルから数センチでギイの腕は止まった。未だ荒い息のまま震えるギイとストラディバリの無事な姿を見て、へなへなとその場に座り込む。
　目の前に差し出されたストラディバリを震える手で受け取り、そのまま胸に抱きしめた。
「頼む。持っていてくれ」
　そして、ぼくは今でも、ギイから借りたストラディバリを使っている。

「たくみ……託生」
　ギイの声。懐かしい花の香り。
「託生？」
　頭を撫でる優しい手と背中に感じる心地よいスプリングに、ゼロ番のソファにもたれているような感覚になった。……いや、違う。祠堂は遠い昔に卒業したんだ。
　左頬に柔らかな温もりを感じ、ぼんやりと目を開けると、
「起きたか？」
　ギイの茶色い瞳が心配そうに覗いていた。
「……ギイ？！」
　一気に意識が鮮明になり、状況を理解する。あぁ、そうだ。ぼく達はシャトー・ルフェビュールに向かっている所だった。
　のどかな田園風景が続いていたはずなのに、フロントガラスから見える風景はいつのまにか葉が枯れ落ちた木々に囲まれている。
「ごめんね！ぼく、寝ちゃって」
「いや、疲れが溜まってるんだろ？少し、顔色が悪かったからな。この森を抜けたらすぐ着くから」
　助手席で寝るという失態に慌てて謝り起き上がろうとしたぼくを手で制し、ギイは手元を操作して、リクライニングになっていたぼくのシートを戻した。ぼくにかかっていたギイの上着が、パサリと音を立てて膝の上に落ちる。
　さっきの匂いは、これからだったんだ。
「あ、上着、ありがとう」
「いや。……寒くなかったか？」
　上着を受け取りながら、心配そうに、聞く。
　ギイって、こんなに心配性だったっけ。
「寒くなかったよ」
　ぼくの言葉にやっと納得したのか、ギイはアクセルを踏み込んだ。
　ほとんど振動のない走りと音質のいいカーオーディオ、そして極めつけはこのシートの暖かさ。絶対シートヒーター入ってる。

眠たくなくても、眠っちゃいそうな車なんだよね。
そう心の中で言い訳しつつ、先ほど左頬に感じた違和感を思い出した。運転しているギイを見て、ふと浮かんだ都合のいい甘い考えを否定する。
そんな事あるわけないじゃないか。
頭を振って、邪な考えを追い払った。
枯葉の舞い落ちる中を走りぬけ視界が開けると、壮大な城が忽然と目の前に現れその大きさに感嘆の声があがる。
「すごいっ……」
いったいどれだけの高さがあるのだろう。随所に配置されたとんがり帽子のような円塔を繋ぐように城壁が取り囲み、その中に別の三角屋根の建物が見える。
ギイは城の外周道路を回り併設された駐車場に車を止めた。
「中まで入れたら楽なんだけどな。ここから徒歩だ」
トランクに入れた荷物を取り出し、城門を目指す。近くで見れば見るほど、その大きさに圧倒された。
「託生、上ばかり見ていると転ぶぞ」
「だって、すごいんだもん」
こんなお城見た事がない。
坂道を登り、今は飾りとなっている跳ね橋を渡って城門をくぐる。
「うわぁ」
今度は中庭を取り囲むようにそびえ立つ城の全貌に、あんぐりと口を開けた。
想像以上のスケールの大きさに度肝を抜かれ、あれほど拒否していた事もすっかり忘れてしまっていた。

「結構、人がいるんだね」
こんなに大勢の人が、ホテルに泊まっているのだろうか。
「ここは観光スポットにもなっているし、宿泊者以外に見学や食事をする人間も多いからな」
なるほど。これだけの規模のお城なら、観光スポットにもなるよ。逆に中を公開しない方が勿体無い。
”ギイ！”
一際大きな建物の外階段から、一人の男性が下りてきた。
”ミシェル、世話になる”
あぁ、この人が、このお城の主なんだな。
主と言うには少し若い、年頃は三十歳前後くらいの金髪に碧眼の男性だ。そこにいるだけで他の人とは違う気品をかもしだす、生粋の貴族という感じがする。
ギイと肩を叩きあって再会を喜んでいた侯爵が、人懐こい笑顔でぼくに向き直った。
”はじめまして、侯爵。葉山託生です。お世話になります”
”はじめまして。ミシェル・ド・ルフェビュールだ。あぁ、侯爵なんて堅苦しい呼び方は止めてくれよな。ミシェルと呼んでくれ”
”え、でも……”
今は貴族制度がないとはいえ一庶民のぼくが呼び捨てするなんて……。
助けを求めるように隣にいるギイを見上げると、ギイはひょいと片眉を上げ、
”ミシェルと呼んでやれ。こいつは大学時代の悪友だ”
なんと親指で侯爵を指した。
”そうそう。大学時代の悪友…って、ギイ、もう少しマシな紹介しろよ！”
”ナタリーは？”
”おい、人の話聞けって。……ナタリーなら、今お茶の用意をしているよ”
えぇと、貴族と聞いていたから、どちらかと言えばもっと優雅なイメージを勝手に持っていたのだけれど、な

んとなく、こんな事を言うのは大変失礼だとは思うけど、この二人を見ているとギイと矢倉のじゃれあいを思い出した。

　一般客の立ち入りが禁止されているホテル棟は、先ほどの広場の喧騒が嘘のように静かな空間だった。フロント横の階段を上り、複雑な廊下を奥へ進む。あちらこちらにさりげなくほどこされた彫刻が鷹や鷲のような野生的なものばかりで、本当にこの城が要塞として建てられたものなのだと認識する。
「託生の部屋は、ここな」
　勝手知ったるギイの案内で部屋に通されたぼくは、またまた部屋の大きさに驚いた。天蓋つきのベッドなんて初めて使うかも。
「オレの部屋は隣だから、なにかあったら呼んでくれ。サービスの方はフロントに電話してくれたらいいから」
「ここにも、ギイの部屋があるのかい？」
「建てたときからは、ないけどな」
　……当たり前だよ。
　呆れを通り越してがっくり肩を落としたぼくを笑い、
「ミシェルの奥さんのナタリーがお茶を用意してくれているはずだから、荷物を置いたら呼びにくるよ」
　そう言って、ギイは廊下の奥に向かった。
　荷物をクローゼットに入れ大きな窓を覗くと、遥か遠くまで続く森が見渡せた。
　今朝、部屋の窓から見た風景はパリの下町だったのになと、ぼんやり思う。
　さっき、滞在は一週間の予定だと聞いた。
　ここまで来てしまったのだから、腹をくくると言うか諦めが肝心だと言うか。とにかくギイの事は高校時代の友人として対応することにして、音楽の為に古城ライフをエンジョイする。
　そう決めた。
　どうしたって一週間はここにいなくちゃいけないのだから。
　呼びにきたギイと共に階段を下りてミシェルと合流すると（結局呼び名はミシェルの泣き落としにあい、呼び捨てになった）、ホテルの客らしき女性達がミシェルに話しかけた。お茶を一緒に……というところだろう。
　しかし。
”これは、マダム。私の友人が遠方から訪ねてくれまして、とても残念ですが、ご一緒することができません”
　優雅に女性の手の甲にキスをして奥のサロンへと案内し、しばらくしてぼく達の元に戻ってきた。
　ぼく達と話していた時の雰囲気を一切隠し、これぞ貴族の人間だと思わせるような優雅で洗練された振る舞いに目を丸くする。
”一種のパフォーマンスだよ。お貴族様のね”
　侯爵家のプライベートスペースに向かいながら尋ねると、
”僕の貴族ぶりも、なかなかのものだろう？”
　ミシェルは自画自賛した。

”ナタリー、久しぶり”
”ギイ、いらっしゃい。はじめまして、ナタリーよ”
”葉山託生です。お世話になります”
　案内されたリビングは同じ城内ではあるものの、温かみのある優しげで家庭的な空間でホッとした。
　あぁ、やっぱり、ぼくは根っからの庶民だ。
　ナタリー・ド・ルフェビュール侯爵夫人は、とても笑顔が似合う素敵な女性だった。ぼく達を、手作りのクッキーとお茶でもてなしてくれ、
”私もナタリーと呼んでね”

ぼくがミシェルと呼んでいるのを耳にすると、すかさずお願いされ、こちらは泣き落としではなかったけれども押し切られた。この夫婦は、もう……。
話を聞くと、ギイとミシェル、そしてナタリーは、同じ大学の友人だったそうだ。卒業後もその仲は続き、年に一度、休暇を取ってギイが二人の下を訪れるらしく、そのオフにぼく達はバッタリと会ってしまったわけだ。
”ナタリーも、アメリカへ留学したんですか？”
”いいえ、私はアメリカ人なの”
”フランスの方じゃないんですか”
何度も海外に行く機会に恵まれたが、未だにどこの国の人かとんと見分けがつかない。なんとなく、髪の色が濃ければ南、銀に近ければ北、それだけのことだ。
それに、ぼくはアメリカには一度しか行った事がないし。
”ミシェルが留学しているときに知り合って、フランスまで連れてきちまったんだよな”
”お前が言うと、僕が悪者になったような気がするよ”
席を外していたミシェルが、大きなケースをかかえて戻ってきた。
”これだよ、ヴィエル”
”うわぁ”
”見れば見るほど、ボロっちいな”
”ギイ”
失礼な言い様にギイを睨むも、どこ吹く風で、
”開けてみろよ”
ギイはぼくを促した。
ケースに入っていたから埃こそかぶってはいなかったが、黒く変色した木目を見てかなり古い物だと推測する。
”触っても？”
”どうぞどうぞ。骨董品の価値もないから、壊してもいいよ”
茶化すミシェルの声に苦笑いし、丁寧にヴィエルを膝の上に乗せて鍵盤を押してみる。重いキーや押せないキー。最初から聞いてはいたけれど、やっぱり音を鳴らすのは無理かな。
残念に思いつつ、駄目もとでハンドルを廻すと……あ、廻る！
ギギギギギギギギギギ。
なんとも、耳障りで大きな音だ。
”……”
”すごい音だな”
”メンテナンスが難しい楽器だし、中で松脂が固まってるんじゃないかな”
これ以上鳴らすと迷惑になりそうなので、ぼくは音を出すのを諦めて、じっくりとヴィエルを眺めさせてもらうことにした。
本当に、こんなチャンス滅多にない。
”あっちこっちに昔の物があって、その中から出てきたんだよ。誰もそれがなにかわからなかったから、そのまま倉庫に片付けていたんだけどね。そうか、楽器だったんだな”
チューニングも演奏するのも難しいと聞いている。現存する楽器が壊れても部品がなくて、部品を手作りしている人も多いらしい。
そんな難しい楽器ではあるけれど、昔から音楽は人々の近くに存在していたという事実を、この目で見る事ができたのはとても嬉しい事だった。
”このあたりは近くの村くらいしか観光できる所はないけど、城の中ならどこでも見てくれていいからね”
”ありがとうございます”
ミシェルのありがたい申し出にお礼を言うと、
”城の中なら、オレが案内するぜ。絶対迷子になるし”

ギイが案内役を名乗り出た。
しかし。
確かに、これだけ大きかったら迷子になる可能性もあるだろうけど、そうはっきり『迷子になる』と断言しなくても。
ぼくの不服そうな表情を見ながら、
”だって託生、迷子になって霊廟には行きたくないだろ？”
ニヤニヤと笑う。
”霊廟って、もしかして……”
”別名棺桶ルーム？”
全力で遠慮させていただきます！
ぶんぶんと首を振ると三人に笑われたけれど、これだけはイヤだ。
”一見の価値はあるんだけどなぁ”
”ううん、ぼく、いいよ”
”あのライティングが、やけにおどろおどろして”
”だから、いいってば！”
”ちなみに霊廟のプロデュースはオレ”
”そんな、おどろおどろしたの作るな！”
三人の笑い声に囲まれなんとなく腑に落ちない気分だけど、やけに楽しそうなギイを見ているとどうでもよくなってしまった。
絶対、霊廟は行かないけどね。

ギイの昼間の話のせいだけではないとは思う。たぶんこの石造りの部屋が原因だとわかっている。
わかってはいるけれど、やっぱりクラシカルすぎる雰囲気は少し怖くて、ぼくは疲れているはずなのに寝付けずにいた。
もう、時計の針は十一時半を回っている。
「参ったな……」
寝返りをうって大きな溜息がこぼれた時、控えめなノックが部屋に響いた。
こんな時間に？
「ギイ……」
おそるおそるドアを開けるとパジャマの上にガウンを羽織ったギイが立っていた。
なんだか、いい匂いがする。
「起きてたか？」
「うん、少し眠れなくて」
「昼間の責任を取って、ホットワインを持ってきた」
「あ……ありがとう」
ギイはぼくをソファに座らせ、テーブルの上に湯気の立つマグカップを置いた。
さっきの匂いは、これだったんだ。
両手でカップを包み込んで一口飲むと、口の中に濃厚な赤ワインの香りが広がる。少し甘めのホットワイン。控えめなスパイスがのど越しを良くし、程よい熱さが体の芯まで温もらせる。
「美味しい」
「そうか。ゆっくり飲めよ」
ギイは向かいの席で嬉しそうに笑い、ぼくが飲み終わるのを待っていた。
二人きりの空間に最初は緊張していたのだが、漂うホットワインの香りが室内を優しく包んで、こんなゆったりとした時間を共有する事を、許してもらっているような気になってくる。

　ホットワインを半分ほど飲んだ頃。アルコールのせいか体が温まったからか、ふいに疲れと睡魔がぼくを包んでカクンと力が抜けた。一気に酔いが回ったようだ。
　あやうく落ちそうになったカップをギイが取り上げ、ぼくの体を支える。
「このまま眠れそうか？」
「うん……」
　ぐらぐらと揺れる視界に己の体調を考えず飲みすぎた事を知り、ベッドまで戻れるかなと心配になった時ぼくの体が宙に浮いた。
　え……？
「変わらないな」
　ギイは、そう呟いてぼくを抱き上げてベッドに横たえ、シーツを整えてくれた。
「ごめん、ギイ……」
　迷惑かけて。
「仕事の疲れが出たんだよ。ほとんど休みなしだったと佐智に聞いてる。ゆっくり休め」
　髪を梳く優しい指先に、睡魔が急激に襲ってくる。
「託生、お休み」
　ギイの声に見守られ、ぼくは深い闇に沈んだ。

　穏やかな日が続いていた。
　ギイと再会した日は気まずさに言葉が詰まってしまう時があったけれど、変わらなく接してくれるギイの態度に助けられ、ぼく達は寝る時以外の時間を共に過ごしていた。
　城の中を見学したり、時には近くの村を散策し、十年ぶりに会った元恋人だなんて思えないほど、二人の間に流れている空気は自然だった。
　二日目の夜。部屋の前での別れ際、
「ホットワイン、持っていこうか？」
　ギイの申し出に、一日目の醜態を思い出して一瞬どうしようかと思ったのだけれど、
「まずかったか？」
　と聞かれれば、
「すごく美味しかったよ」
　と素直に答えてしまい、ニンマリと笑ったギイの顔を見てしまったと思ったのは後の祭り。
「一時間後くらいに、持っていってやるよ」
　その日から、毎晩ギイがホットワインを持ってきてくれていた。
　ギイの気持ちがぼくにないのは、わかっている。こんな穏やかなオフも、あと数日の事だ。
　ここを出れば、また以前と同じ生活が待っている。
　ギイのいない生活が……。

　カーテンの隙間から入る柔らかい光と小鳥の鳴き声で目が覚めた。時計を見ると午前六時半。
　こんなすっきりとした日は久しぶりで、窓のカーテンを開けると秋晴れの空が広がっていた。
　ギイが朝食に行くのを誘いに来てくれるまで一時間。
「散歩でもしてこようかな」
　ぼくは軽く身支度を整え、裏の森に向かった。
　夏ならば、さぞ緑豊かな森なのだろう。今はひっきりなしに枯葉が落ちて、歩くたびに足元から楽しい音が聞こえてくる。
「祠堂の裏庭も、こんな感じだったよね」

この季節の外掃除ほど面倒な事はなかった。なのに、ギイはそれさえも、焼き芋という魅力ある遊びに変えてしまったけど。
鮮明に覚えている高校時代を思い出しながら、ゆっくりと森の小道を歩いていると、背後から誰かの足音が聞こえてきた。……二人かな？
ぼくと同じように散歩しているのだろうか？いや、この速さはジョギングか。
後ろの人の邪魔にならないよう、左端に寄って歩いていると、いきなり口元を何かでふさがれた！
「んんんっ！！」
逃れようと暴れてみるものの、二人がかりだと身動き一つできない。
ツンとした薬品臭。
吸っちゃ駄目だ！！
本能が告げるものの呼吸困難になりそうになったぼくは、反射的に吸ってしまい目の前が暗くなる。
ギイ……！
崩れ落ち意識がなくなる直前、ギイがぼくを呼んだような気がした。

頭を鈍器で殴られたような鋭い痛みが走り、意識が浮上した。
「託生……？」
「ギ…イ……っ！」
「急に動かすな。エーテルを嗅がされたんだ。頭痛がひどいはずだ」
割れるような頭の痛みに顔をしかめると、ギイは辛そうに膝の上に乗せたぼくの頭を撫でた。
痛みに目が潤み、頭痛だけではなく吐き気までしてくる。浅く呼吸をして痛みの波を何度かやりすごして、
「ここ……は……？」
声がかすれる。喉も痛い。
「どこかの廃墟だろうな」
ギイはぼくの声に眉をしかめ、口唇をかみ締めた。
薄暗い部屋。なぜ、ぼく達はこんなところに？
”なにをしゃべっている？！”
二人だけだと思っていたぼくは、咄嗟にギイの足にしがみついた。
ギイが睨みつける方向に視線だけ向けると、一人の男が銃を持って立っているのが見える。
”気がついたようだな”
……誰？
”そいつを人質に呼び出そうと思ったら、呼び出す前に来てくれて手間が省けたよ。まさかFグループの次期トップが、SPなしでうろつくとは思わなかったがな”
思い出した！裏の森で、ぼくは二人組みに襲われたんだ。
”お前らのターゲットはオレだろう？こいつは返してくれ”
”それはできないな。お前さんをここに引き止める大切な人質だからな”
顔の真横にあるギイの拳が、怒りで震えている。
ぼくが捕まったりしたから、ギイ……。
”崎義一、お前達が見放さなければ、会社は潰れなかった。俺達も路頭に迷う事もなかったんだ”
”GMショックの煽りを受けて倒産した会社なんて、お前達以外にも世界中に星の数ほどある。それだけじゃなかったな。ここ数年、総資本回転率もマイナス続き。建て直しをしようとも、あれだけワンマンな経営をしていれば、GMショックがなくてもいつかは潰れていたさ”
”うるさい！”
男は苛立ちまぎれに、銃口をギイに向けた。無言の睨み合いが続く中、眼光の鋭いギイに根負けしたよ

うに銃を下ろした。
”身代金を要求した。ま、金が入れば万々歳。警察が介入するのなら、お前たちを殺して逃げるだけだ。連絡が入るまで、大人しくしておくんだな”
　そう言うと、ドアの横に置いた箱にどっかりと座った。
「ごめ……」
　ぼくが、散歩にさえ行かなければ、こんなことには。
「謝るな。謝るのは、お前を巻き込んだオレの方だ。すまない」
　そんな辛そうな顔しないで。
「大丈夫だから。いざとなったら、託生だけでも……」
　ぼくだけなんて、イヤだよ。どこかでギイが生きてるから、そう思ってるから、ぼくは今までがんばってこれたのに。
　そう言いたいのに、頭の痛みに耐えるのが精一杯で。
　でも、ぼくよりも辛そうなギイを抱きしめたくて、ぼくは撫でてくれている手を取って、掌に口付けた。

　どのくらいの時間が流れたのか。
　気がつけばぼくの腕にもギイの腕にも時計が存在せず、たぶん男達に取られたのだろうけど窓もないこの空間では今の時刻が全く読めない。
　頭痛も少しは楽になり、「休め」というギイの言葉に首を横に振って壁にもたれていた。いつでも動けるようにしておかなければ。
　ギイの体からは絶え間なく緊張感が漂い、室内にいる男の一挙一動を見逃すまいと神経を張り詰めている。
　その時だった。
　いきなりドカンという大きな爆音と共に、床を揺るがすような振動が響いた。
”な……なんだ？！”
　男がよろめいた一瞬の隙をついて、ギイが銃を蹴り落とす。そして、そのまま首の後ろを殴り昏倒させ、零れ落ちた銃をすかさず拾った。
「ギイ！」
　ドアの向こうから響く荒い足音にギイはぼくを背後に隠し、飛び込んできたもう一人の男の頭に銃を突きつけた。
”銃を捨てろ”
”なぜ、ここが”
”オレがSPなしで本当に動けると思ってるのか？側についていなくても、空から監視されてるんだよ”
　鬱陶しい事この上ないけどな。
　頭に突き立てられた銃への恐怖なのか、計画が失敗した事への悔しさなのか、男の顔から血の気が引き体がガタガタと震える。
”オレが憎かったのならさっさと殺してしまえばよかったんだ。欲ばって金なんかに執着するからこうなる”
　ギイは大勢の足音が近づいてくる気配にニヤリと笑い、
”ゲームセットだな”
　セーフティを戻すと、男の手からガチャリと重い音がして足元に銃が転がった。
　部屋に雪崩れ込む警察官の姿を見てやっと助かったとの安心感からか、ぼくの膝から力が抜ける。
「託生！」
　咄嗟に腋に差し込まれたギイの腕と背後の壁に支えられ、なんとか体勢を整えた。
「すまなかった。もう大丈夫だから」
　心配げに覗くギイの目が赤く充血し、疲労の色が見える。きっとぼくより何倍も疲れているはず。

神経を張り詰めていたギイを少しでも安心させたくて
「ううん、大丈夫だよ。ありがとう」
ギイを見上げて笑った。上手く笑えたかはわからないけれど。
その瞬間視界が閉ざされ、口唇に柔らかな感触を感じた。
な……に……？
それがキスだと本能では理解できたけれども、心が追いつかない。
すぐに離れてギイは苦しそうに、
「ごめん」
と呟いた。
この瞳、どこかで見た事がある……？
確かめる間もなく、その後それぞれ車に乗せられ、薬品を嗅がされたぼくはそのまま病院へ、ギイは事情聴取のため警察署へ送られた。
処置を受けたぼくは入院する必要もなく、付き添いに駆けつけてくれたナタリーと共に城に戻り、ミシェルの心配そうな顔に出迎えられ、部屋で休む事にした。

眠れないのは、事件のせいだけじゃない。
あのキスはどういう意味だったのだろう。
もしかして、ぼくの気持ちに気付いて同情したのだろうか。それとも……。
口唇に手を当てると、あの温もりがよみがえってくるような気がした。周りにたくさんの人がいたのに、一瞬なにも聞こえなくなった。そこだけがポッカリとした別の空間になったようで、ギイの口唇の記憶だけが鮮明に残っている。
大きな溜息を吐いた時、部屋にノックの音が響いてぼくはギクリとした。
反射的に時計を見ると、午後十時半。いつもギイがホットワインを持ってきてくれる時間だ。
慌ててドアを開けると、そこにはギイではなくミシェルが立っていた。
”ミシェル？”
”ギイに頼まれてね。事後処理が忙しいらしく帰るの夜中をすぎるそうだから”
”あ、すみません”
”いやいや、謝る事なんてないよ。今日みたいな日は、ホットワインでも飲まないと神経が高ぶって眠れないだろうからね”
我が家秘伝のレシピなんだよ。ホテルでも、これを出してるんだ。
ぼくに気を使ってかやけに陽気に振舞って、ミシェルはホットワインを置いて部屋を出ていった。
一人きりになった部屋でいつもの通りソファに座り、マグカップを両手で包みこんで一口飲んだ。
味が違う……？
あぁ、我が家秘伝のレシピと言っていたな。ルフェビュール家のホットワインなんだ。
四分の一ほど飲んで、カップを置いた。
美味しいのだろうけど、スパイスが効きすぎてぼくには少し合わない。
ギイが持ってきてくれたホットワインは、甘くて優しくてぼくの好みにぴったりとあって……。
このホットワインは、今日のキスのようだ。少しだけ甘くて、ほろ苦い。……そして涙味。

腫れぼったい目をタオルで冷やして、誘いに来てくれるギイを待っていたのだけれど、時間になっても彼は来ず、もしかしたらまだ帰ってきていないのかもしれないとの結論を出し、一人でダイニングルームに向かった。
一階の廊下の角を曲がると、この時間帯にホテル棟にいる事が珍しいミシェルが、ぼくに向かって片手を

挙げた。
”おはよう、タクミ”
”おはようございます。昨晩はありがとうございました”
”いやいや。これから朝食だろう？あちらの部屋で一緒にどうかな？”
　断る理由もなく、ぼくはミシェルの後をついていった。
　あまり進まない朝食を食べ、食後のコーヒーを飲んでいる時、
”あの、ギイは？”
　この人なら知っているかもしれないと、気になっていたギイの居所を聞いてみた。
”日付が変わってから帰ってきたよ”
”じゃあ、まだ寝てますよね”
　無事帰ってきていた事に、ホッと溜息を吐く。
”いや、いつもの場所に行っているよ”
”いつもの場所？”
　休まずに、もうどこかに出かけている？いや、それとも、もしかして毎朝ぼくを誘いに来る前に、今までも行っていたのだろうか。
　ぼくの不審げな表情に苦笑いし、
”少し昔話をしてもいいかな？”
　ミシェルは軽い口調はそのまま、しかし真剣な目をしてぼくに問いかけた。
”ぼくはね、貴族が嫌いなんだよ”
”はい？”
　唐突な発言に、どんな話なのかと構えていたぼくは、ポカンと口を開けた。
　貴族が嫌いって、ミシェルも貴族なんじゃ……。
　意味がわからないと書いたぼくの顔を気にせず、ミシェルは話を続けた。
”貴族制度なんてとうの昔になくなっていて、その時代に持っていた領地を切り売りして生きてきた。もちろんビジネスで成功している人もいる。けれども、見栄ばかり張って結局家名ごとなくなったところも多い”
”はぁ”
”僕の父親がこの城を抵当に入れ莫大な借金をしていたのを知ったのは、父親が亡くなったときだった。家を嫌ってアメリカに留学していた僕は、葬儀のために呼び戻されそこで知ったんだ”
”借金……ですか？”
”そう、とてつもない金額のね”
　この城が担保なら、いったいどれだけのお金を借りていたのだろう。
”弁護士に我が家の内情を聞かされた。遺産を狙っていた親類も自分に火の粉がかかるのを恐れて、さっさと逃げ出してしまってね。元々貴族である事が嫌だったぼくは、さっさとこの城を手放そうと思ったんだが、この城を売っても借金はなくならない事に気付いた”
”えっ、どうして？”
　これだけの城だったら、かなりの値段で売れそうなのだけど。
　疑問符を浮かべたぼくに、ミシェルは説明を続ける。
”希少価値がある城であれば国から補助金も多少は出るが、なにしろこの国の城の数は4万を超えるからね。早々国から補助金なんて出るわけがない。一般庶民でも買える値段で売られている城もあるんだ。でも維持費が莫大にかかるから、結局は売りに出されてしまう。だから今では年間400件を超える売り物が出ている。そんな状態で、この馬鹿でかい城がいい値で売れるわけがない”
　そうだったんだ。
　需要と供給があってこそ、売買は成立するんだ。売りたくても買ってくれる人がいなきゃ、どうしようもない。だからといって、値段を下げれば、それだけ借金が残るという計算か。
”……そんなとき、ギイが来てくれた”

　ギイの名前が出て、ビクリと肩が揺れる。ミシェルは、一体なにをぼくに話したいのだろう。
”ギイは、ルフェビュール家に関する調査書をテーブルに置いて言ったのさ”

『オレが、全て援助する』

”ギイが馬鹿に見えたよ。こいつ、こんなに頭が悪かったかなって。投資ビジネスなんて言葉があるけど、あれは利益が出ると踏んで投資しているわけだ。もうすでにギイは大学より仕事の方にウェイトをかけていて、Fグループを動かす側になっていたのに、こんな計算すらできないのかと”
”ミシェル……”
　ギイは大切な友達を助けたかっただけなんだと思う。昔から全力で友達のために動いていた彼だから。
”初めは断った。金銭的な問題を友人関係に絡ませたくなかったからね。でも……”

『気持ちはありがたいがな。城を守ったとしても、維持費ってのは莫大なんだぞ。維持費だけじゃなくメンテナンス代だって馬鹿にならない。これだけ古い城なんだ。石垣が崩れ落ちている箇所だってある。ホテルの経営だってうまく行ってないんだ』
『城を売っても借金は残るだろう？それにナタリーはどうする？』
『……別れるよ』
『ミシェル……！』
『名前だけご大層で借金だらけの貧乏貴族に嫁ぐよりは……ぐっ』
『愛してるんだろ？！』
『愛しているからだよ！！ナタリーには幸せになってもらいたいんだ！』
『生きる意味をなくすぞ、ミシェル……』
『ギイ？』

”最終的に僕はギイの申し出を受け、父が道楽のようにやっていたホテル業をギイやコンサルタントの助言で、ここまで立て直すことができた。ナタリーにも全てを話した上でプロポーズをして、苦労を承知でついてきてくれた。優雅な貴族に成りきって客の相手をしろってのは、ギイのアイデアだよ”
”そんな事が……”
　先代の残した借金で苦労していただなんて。何の障害もなく二人は結婚したのだと思っていた。
　でも、こんなプライベートな事を、ぼくが聞いてもよかったのだろうか。
　複雑な顔したぼくに、
”ここからが本題だ”
　ミシェルは居住まいを正した。
　倣って、ぼくも気持ちを引き締める。
”毎年あいつがここに来るのは、僕達に会いに来るのが目的じゃない。ある場所に行く為だ”
”え？”
”今回、君と一緒に来てからは、一度もその場所に行っていなかった。行く必要がなかったんだよ”
”どういう意味ですか？”
”タクミがいたからだよ”
　それは、ぼくが邪魔していたってこと？ぼくに気を使って、行けなかった？
　困惑したぼくに、
”君が考えているような事じゃないから安心してくれ”
　ミシェルは、即座に否定の意を示す。
　じゃあ、なぜ？
”そうじゃなくて……『一生分の幸せを貰った』相手と言うのは、君なんじゃないかと僕達は思っているん

だ”
”ミシェル？”
”以前、恋人も作らず仕事ばかりしているギイに聞いたことがあったんだ。『お前の幸せはどこにあるのか』ってね。そうしたら『オレの幸せはもうないんだ。すでに一生分の幸せを貰ってるから』なにかを思いだすように遠い目をして静かに笑ってたよ。こんな笑い方をするヤツだったんだって、初めて知った。”
　ギイ……。
”フランス人は、基本他人の恋路には首を突っ込まない。大統領に愛人がいようが隠し子がいようが、気にしない個人主義だ。でもね、タクミ。僕は友人であり恩人であるギイに幸せになってもらいたい。今朝のギイは以前と同じ瞳をしている。僕達がこの一週間見た瞳とは全く違う”
　それは、昨日見た瞳の事だろうか。
　以前にも、どこかでぼくは見ている。深い悲しみと傷ついた色を写したあの瞳に。
”ギイは、今どこに？”
”ギイとの交換条件で、これだけは壊さずに残しておいてくれと言われた場所だよ。タクミ、君にならその理由がわかるかもしれない”
　ギイを、頼むよ。
　そう言って、ミシェルはぼくの肩を叩いて部屋を出ていった。

　部屋の窓から見えていた森の小道を逸れると、奥に小さな湖があった。その脇に佇む今にも崩れ落ちそうな古い小屋。
　これが、ミシェルと交わした交換条件。
　軽くノックしてノブを回すと、きしんだ耳障りな音が響いてドアが開き、奥からギイの声が聞こえた。
「託生？」
「あの、ミシェルに教えてもらって」
　なぜここにいるのかというような訝しげな表情に決まり悪く答えると、
「あぁ」
　合点がいったのか軽く頷き、窓の外に顔を向ける。
　ギイは湖面が見える窓の前で頬杖をつき、白く汚れた床に無造作に座っていた。
『洗えば落ちる』
　昔　見慣れた姿にほんの少し笑い、同じように床に座ると、
「体は大丈夫か？」
「うん」
　一人の時間を邪魔したはずなのに、それでも気にかけてくれる。
　かすかな水音だけが聞こえる、小さな空間。ここで、ギイは何を考えていたのだろう。ぼくと目を合わす事もなく湖面を眺めるギイの横顔が、記憶の海を波立たせた。
　この瞳をぼくは知っている。
「ねぇ、ギイ」
「なんだ？」
「昨日のキスは……」
「あたっただけだよ……すまなかったな」
　ぼくの台詞をさらって、ギイが間髪入れずに答えた。まるで初めから答えを用意していたかのように。
「じゃあ、ここを残しておく意味は？」
「ミシェルに聞いたのか……。なにも考えずにいられるからな。ぼんやりするにはちょうどいいスペースだ」
　抑揚もなく淡々と答えるギイ。
　触れられたくない領域に入ったぼくを排除しようと、神経がピリピリしている。こんなギイ、再会してから初

めてだ。
　でも、ぼくは知っている。これは、この瞳は……。
　その時、記憶の中にあるワンシーンが、ジグソーパズルのピースのようにぴったりと重なった。
「卒業間際に、なにがあったの？」
「っ！」
　ピクリと肩が揺れ、わずかにギイのポーカーフェイスが崩れる。
　卒業式の夜。あの時、ぼくは自分の気持ちを伝えるのが精一杯で、ギイの気持ちまで考える余裕がなかった。あっさりと了承された事にショックを受け、その後ストラディバリを壊されそうになって深く考えられなかったけれど、今思えば何かがおかしかった。
　『わかった』と答えたギイの瞳は、今と同じではなかったか？
「なにもなかった」
「嘘だ」
「十年前の事なんて、とうに忘れたよ」
「ギイ！」
「もうオレ達には関係ない事だろ？！確かに十年前、託生とオレは恋人だった。でも今はもう無関係だ」
　振り返って一気に言い切り、ぼくから顔を隠すように窓の外に視線を向ける。
　一瞬の出来事なのに、見えてしまった。『無関係』だと口にした時、自分の言葉に傷ついたギイが。
　ギイは目元を手でかざして軽く頭を振り、放り投げていた上着を手に取った。
「すまない。少し気が立ってたんだ。メシは食ったのか？ここは冷えるから、そろそろ戻ろう」
　話を打ち切り逃げようとするギイに、とてつもなく怒りがこみ上げる。いや、ギイにじゃない。なにも知らなかった自分自身にだ……！
　立ち上がろうとするギイの首に飛びつき、驚きに目を見開いたギイにキスをした。口唇を合わせるだけのキス。拒否しようとすれば一瞬で離せる軽い軽いキス。
　関係ないと言うのなら、ぼくを引き離してみろよ！
「どうして、押しのけないの？イヤならぼくを突き放せばいいじゃないか！」
　体を固めたまま動かないギイを睨みつける。
「……」
「ぼくはずっとギイを思ってた。あの時は、現実の重さに逃げ出してしまったけど、でも、ずっとギイだけを愛してた」
　畳み掛けるように自分の思いを訴え、目を逸らせて何も言わないギイに、もう一度キスをする。啄ばむような触れるだけのキスじゃ足りなくて、深く侵入し舌を絡ませた。昔のぼくからは到底考えられないような、ドロドロとした欲望むき出しのキス。突き放すでもなく抱きしめるでもなく。ぼくのされるがまま人形のように動かないギイの膝に乗り上げて、夢中で舌を絡ませる。ギイの精巧な頬に手を寄せ手触りのいい髪をかきあげ、君が欲しいのだと全身で伝えた。
　まるで一人芝居のような悲しいキス。
　息苦しくなって流れ込んだ蜜をコクリと飲み込んだ時、風が流れかき抱かれるように力強い腕に抱きしめられた。同時にギイの舌がぼくの口唇をこじあける。
「んんっ……！」
　一気に嵐のような激情が流れこんできた。頭と背中を押さえつけられ、指先さえ動かす事が不可能なほど堅く抱きしめられ。
　愛撫する熱い塊に必死に応え、眩暈がするくらいの幸せ噛み締める。
　気がつけばぼく達は床に転がり手も足も絡めあい、お互いの思いをぶつけあっていた。
　キスだけで恥ずかしいくらい息を乱し、布越しに重なる熱い高ぶりに喜びを感じ。
「どうして」
　口唇を触れ合わせたまま、ギイが苦しげに口走る。

「な…に……っ！」
　質問の言葉は、耳元に移った熱い息が鋭い痛みに変わった刺激で裏返った。
　彷徨わせた口唇を顎の先まで戻し、
「オレは！もう二度とお前を巻き込みたくないと！」
　ギイがまくしたてる。
　言っている意味を考えようとも、もうぼくの頭は拒否していて。
　服の上で彷徨うギイの手にもどかしさを感じ、ぼくは自分でシャツのボタンを外して、ギイの手を導いた。

　求めて求められて。与えて与えられて。
　体も心も溶け合って、ただ本能の赴くまま全身でギイを感じ。
　愛してるとささやけばそれ以上の愛を返されて、胸の内を巣食っていた虚無感や寂しさが全て『幸せ』という名の色に塗り替えられていく。
　研ぎ済まされていく感覚とは反対に霞がかってくる意識。
　何度も何度も登りつめ、最後に残ったのは、ギイ、君だけだ……。

　ギイの腕の中で乱れた息を整え周りを見てみれば、汗に埃がまとわりつき髪は白く汚れ、見るも無残な有様にお互い見詰め合って「ぷっ」と吹き出した。
　十年ぶりの行為がこんなおんぼろの小屋の中だなんて、獣じみてる。
　頬に手を当てられ、近づくギイの口唇を受けた。
「大丈夫か？」
「うん」
　心配げに顔を曇らせたギイに、大丈夫だよと微笑みかける。
　さっきまでは聞こえなかった水音と小鳥の鳴き声が、心地よい音色を持って耳に届いた。
「ここ、石渡老人のボート小屋に似てるね」
「……そうだな」
　さっきは答えてくれなかったけど、今なら答えてくれるだろうか。本当の理由を。
「どうして、ここを残したかったの？」
「……託生」
「教えてくれるよね、ギイ？」
　ぼくが知らなかった事、全て。
「長くなるから、ホテルに戻ろう」
　諦めたように溜息を吐き、ギイはぼくの手を取った。

　シャワーを浴びてギイの部屋に行くと、ギイはコーヒーを用意して待っていてくれた。
　ぼくの部屋と同じような石造りのクラシカルな部屋なのに、全く似つかわしくないシンプルなベッド。猫足のサイドテーブルもこれまた機能的なテーブルに変わっており、ソファーに至っては黒い皮製だ。
　ここでもまた我侭を言ったのかと呆れてしまう。
　腕を引かれてソファに座ると、当たり前のように隣にギイが座った。テーブルを挟んだ距離感が、ここまで縮んだ事に笑みが漏れる。
　抱き寄せられギイの腕の中にすっぽり納まると、ギイはぼくの髪に口唇を寄せキスを落とした。無言で何度もキスしながら髪をかきあげ、考えをまとめようと思案しているようだった。
　一体、十年前に何があったのだろう。

「ギイ」
　全部教えてほしいと見上げると、ギイは覚悟を決めたように表情を堅くし、
「話を聞いた後、託生がどうするかは自由だから」
　そう前置きして話しはじめた。
「託生の命を狙われたのが、過去に二回ある」
　全く思いつきもしなかった言葉に、思考が停止する。
　命を狙われた……？
「え……？」
「一度目は車のスリップ事故を装って、二度目はホームから突き落とされそうになって」
　あ……。
　人生に置いて数少ない出来事に分類されるであろう事故は、ぼくの記憶にはっきり残っている。
　でも、それって。
「もしかして一月に外出した時と受験の時の事？」
「そう」
「あれは事故だろ？」
　久しぶりの晴天に雪が溶けて、慣れない山道を走っていた車がスリップして、学校に向かって歩いていたぼくに突っ込んできた。咄嗟にギイがぼくごと横に飛び込んで、事なきを得たけれど。
　そして、ホームから転落しそうになったのは、背後にいた人が眩暈をおこして倒れたからだ。あの時もギイが助けてくれた。
　どちらも偶然が重なった事故だと、今の今まで疑うこともなく思っていたのに。
「ギイ、事故じゃなかったの？」
「あの事故を起こした二人は、もういない」
「え……？」
　それは、どういう意味？まさか……。
　まっすぐと向けられた視線が、ぼくの予想が真実だと物語っていた。
　ぼくの周りでぼくの知らない事があった事実に、今更ながら驚きと恐怖が心を占める。体の震えが止まらないぼくをしっかり抱きしめて、ギイが頭を下げた。
「あれはオレのせいだったんだ。今更謝って済む事じゃないけど、すまなかった」
「ギイ、教えてよ。いったい、十年前何が起こってたの？」
　中途半端に知っているより、全てを知りたい。
　ギイは遠い過去を思いだすように、ゆっくり話を続けた。
「脅迫状が届いていた……。『葉山託生と別れろ。別れなければ失う事になるぞ』ってな。祠堂内でよくある子供騙しみたいなものだと思っていた。しかし、脅迫状は脅迫状だ。出所を調べていたんだが、どれだけ調べてもわからなかった。そんな時に、あのスリップ事故だ。翌日『次は成功させてみせる』と、手紙が届いた」
　その時の感情をよみがえったのか、ギイの握りしめる手から血の気がなくなっていく。力を入れすぎた拳を両手で包んで宥めるように撫でると、高ぶった感情を静めるように、ギイは何度か大きく息を吐いて話を続けた。
「これは祠堂内の話ではないと、間抜けな事にそのとき初めて気がついた。すぐに調査機関に依頼し、託生の身辺に気をつけていたんだ。外出時が一番危なかったから」
　そう言えば、ぼくが麓に行こうとすると、
『買出しなら、オレが行ってきてやるよ。風邪でも引いたら受験に差し障るぞ』
　そう言って、ギイはぼくが祠堂から出るのを止めていた。
　心配性だなぁと笑っていたぼくは、ギイの心情に全く気付いていなかったんだ。
「それでも、受験会場に行くのを止めるわけにはいかなかったから……」

　そうだった。
　音大の受験に行くのに「送らせてくれ」とホームまで見送りに来てくれたギイの目前で、ぼくは転落しそうになったんだ。
「『運がいいな。次はどの手を使おうか』。調査機関の報告書も真っ白、卒業も迫っていた。オレが帰国した後、オレの知らないところで託生が殺されてしまうんじゃないかと、気が狂いそうになった。でも、託生を手放す事なんて考えられなくて」
「ギイ……」
　一歩間違えば、二人とも転げ落ちていてもおかしくはない状況だった。
　電車の警笛と周りの人の悲鳴、そしてわずか数センチの差で眼前を走り抜けて行った車両。パニックになりかけたぼくを必死で宥め、すぐさま学校に連絡しどのような方法を取ったのかは知らないが、ギイはその後ずっと付き添ってくれたのだ。
「託生が悩んでいたのは気付いていた……いや、託生が不安定なのを良い事にオレが仕向けたんだ」
「ギイ？」
「お前の命がかかっているのに、オレは言えなかった。……どうしても託生を手放せなかった！」
　両手を組んで額を押し付け、振り絞るようにギイが告白する。
　ぼくが不安になると必ずきっちりとフォローして、その後ギイはぼくを愛している事を念を押すように言い聞かせた。
　腕の中にしっかり包み込まれて、何度も何度も「愛している」と耳元で囁かれて。それで心が穏やかになったのは、一度や二度じゃない。
　思い返してみれば、卒業間際、そのようなフォローが一切なかった。ゼロ番に行けばいつも忙しそうに携帯で話していて、その状態に耐え切れなかったぼくが「帰るよ」と言うと、「託生、ごめん」と申し訳なさそうな顔はするものの、ぼくを引きとめようとはしなかった。
「託生に別れを告げられて正直安心した。もう託生が狙われる事がないんだと。どうやって調べたのかはわからないが、帰国して数日後に『つまらん』と一言だけ書かれた手紙が送られてきた。念のため数ヶ月ほど託生にSPをつけてはいたが、以後の接触はなかった」
「……なにそれ」
　どれだけギイが傷ついたのか、思うだけでも胸が苦しくなる。人の心を玩ぶような人間がいるなんて。人の命まで巻き込んで「つまらん」の一言で終わらすなんて、許せない！
「脅迫状を送っていた奴等を、しらみつぶしに探して辿り着いたのが一年。根絶やしにするのに五年。正攻法では全く歯が立たない相手だったから、思っていたより時間がかかったけど」
「”奴等”って、一人じゃなかったの？！」
　いったいどんな人間が集まったら、こんなひどい事ができるのだろうか。
「世界には金も名誉も地位もあって、暇を持て余している人間ってのがいてな。世の中の楽しみってのをやりつくすと、人間をターゲットに楽しむようになるらしいんだ」
　ギイの顔が嫌悪感で歪む。
「それって、どういう意味？」
「賭けてるんだよ。人の心を」
　人の心を賭ける……？
　なんて悪趣味な遊びなんだ。ぼく達の時は、死ぬか別れるか。たぶんそんな所だったのだろう。
「それだけじゃないな。殺し屋を雇うだけの金があるのに、わざわざ一般人に破格の金額を提示して依頼し、その人間が金に目が眩むの見て楽しみ、失敗すれば命乞いをする様子を、笑いながら虫けらのように始末する。自分の意のままに状況を動かして、人が苦しむのを嘲笑って……まるで自分達を神のような存在だと勘違いしていた傲慢な奴等だ」
　吐き捨てるように言い、ギイは冷めたコーヒーを一口飲んだ。
　あの時、説明しなかったのは、ぼくを怖がらせない為だったのだろう。たとえぼくに告げたとしても、状況は

変わらない。脅迫している相手もわからなければ、どこで見ているかもわからない状態で、一時別れたふりをしても同じだ。
　それをギイは全部一人で背負って、何年もかけて解決してくれた。
「今回の事も、本当にすまなかった。そろそろ大丈夫だろうと、気を抜いたのが悪かった。オレのミスだ」
「そんな、気にしなくていいよ。それより、ごめん。何も知らなくてギイに負担ばかりかけて……別れてほしいなんて勝手言って……」
「だから、それはオレが誘導したんだ」
「でも……」
　言いよどむぼくの頭を撫で、
「いいんだよ」
　優しく微笑む。
　いつも守られていた。大切に大切に。宝物みたいにぼくを優しく抱きしめてくれていた。
　今のように……。
　暖かい腕の中でうっかりまどろみそうになって、もう一つ、聞き忘れている事を思いだした。本当の理由をまだ聞いていない。
「ギイ、あの小屋は、何のため？」
「……未来を考えないため」
　ポツリと言う。
「え？」
「軽井沢で、急がないって決めたんだ。今がよければそれでいいって。未来は考えないでおこうってな」
「あれは！」
　まだ進路もなにも決まっていない状態なのに、ギイが未来の話ばかりするから。
「わかってるよ」
　そう笑ってふいに口を閉じ、躊躇っているような表情をして視線を逸らせた。まるで、ぼくと顔を合わせたくないように。
「ギイ？」
「それを忘れないために、小屋を残してもらった。未来を考えない。そう思っていたのに、偶然託生と再会して、この数日一緒にいて、未来を考えてもいいのだろうかと勘違いして……」
　ぼくはギイの襟元を両手で掴んで叫んだ。
「勘違い？勘違いって、なに？」
　十年前の事情を知った今、二人の思いが通じ障害もないのに、どうして未来を考える事を否定しないといけないんだ。
「昨日、思いだした。オレこそが原因なんだって」
「そんな事ない！」
「オレと一緒にいなかったら、託生があんな危険な目に合う事はなかったんだ」
　襟元を掴んだぼくの手を握り、淡々と自分の思いを吐露しているつもりなのだろうけど。
　ギイ、泣き出しそうな顔してるよ。
「ぼくなら、大丈夫だよ」
「馬鹿を言え！誰が、大切な人間を危険な目に合わせたいと思うんだよ！」
　この十年。ギイはこんな瞳をして、生きてきたのだろうか。
　寂しさと悲しみを写し未来を夢見ることもなく、ただ流れていく時間の中で彷徨っていたのだろうか。
　誰よりも、輝いていた人が……。
　高校一年生の頃からぼくが傷つけば、自分の事のように顔を辛そうにしかめていたギイ。十年前の事も今回の事も、たぶん、ぼくの何倍も何十倍もギイが傷ついている。
「オレはお前を手放せない。託生に触れれば、もう放すことなどできないとわかっていながら、お前に触れて

しまった。危険な目に合うかもしれないとわかっていても、手放す事ができない。だから、託生から離れてくれ」
　祈りにも似た色を乗せたギイが、ぼくの両肩を掴んで懇願する。
「ぼくは、ギイより先に死なない。そう約束しただろう？」
　ぼくの言葉に、ギイはクッと息をつめた。
「信じられないのなら、ギイがぼくから離れて」
　ギイの背中に腕を回し、頬を摺り寄せる。
　一人にしてしまって、ごめん。側にいるから。もう、そんな悲しい瞳はしないで。
　ギイは溜息を吐きながら、諦めたようにぼくの背中に腕を回した。
「離れるなんて、できるわけがないだろう？」
　腕の中にお前がいるんだ。もう離せない……。愛してる、愛してるんだ。
　ぼくの肩口に甘えるように顔を埋めて、駄々っ子のように訴える。
「じゃあ、諦めて」
　ギイの頬を手で包んで、キスをした。

　車窓をのどかな田園風景が流れている。暖かなシートに座りぼんやり眺めていると、
「託生、寝ていていいぞ」
　ギイの心配そうな声が、隣から聞こえてきた。
「ううん、大丈夫」
　そのまま眠ってしまいそうなくらい快適なシチュエーションではあるけれど、今は眠ってしまうのが勿体無い。

　昨夜は最後の夜だからと、ミシェルとナタリーがディナーに招待してくれた。
　初めて会ったときから笑顔が絶えない二人だったけど、昨夜はぼく達を見ては嬉しそうに微笑み、
「ワインじゃ物足りない！ブルボネ産ウイスキーだ！」
　と、ディナーではなく飲み会のような乗りになってしまった。
　ナタリーの手料理を堪能し談笑していると、しばらくして、
「ギイ、あれ、もう壊していいよな」
　言うタイミングを計っていたのだろうか。
　ミシェルの声に隣にいるナタリーも、グラスを置いてギイの返事を待っていた。
「あぁ、もう壊してくれ」
　ギイの了承の声に、
「あぁ、よかった。お貴族様の領地にあのボロ小屋は不似合いだからな」
　ミシェルはわざとらしく、オーバーアクション気味に両手を広げた。喜んでいるのは、そんな事ではないと承知の上だ。
「悪かったなぁ。ルフェビュール侯爵」
「お前、僕がそう言われるの嫌いだってわかっていながら！」
　ポンポンと言いあうギイとミシェルを見ながら、ぼくも安堵の溜息がこぼれ出た。
　もうギイが『未来を考えない』事はないのだ。それは、ぼく達の未来に続く新しい道に繋がる。ギイのよりどころは、もういらない。
　そして夜が更けた頃、ホテル棟に戻ったぼく達は、迷う事なくギイの部屋に入っていった。

　昨夜の事を思いだしていると、

「託生、あと何日休みは残ってる？」
　確認の為か、ギイが聞いてきた。
「ぼくは七日残ってるよ。ギイは、すぐに仕事なのかい？」
「いや、あと三日残ってる」
　三日あるのか……。
　そう言えば、ギイの予定を聞いていなかった。というか、これから、ぼく達はどうするのか、具体的な話は一切出ていなかった。それどころじゃなかったと言うのが、的確かもしれないけれど。
「来るか？」
「え？」
「NYに」
　それは、ギイのオフが終わるまで、側にいてもいいという事？
　フランスからアメリカへ、そして日本へ。移動でくたくたになりそうだけど、今はギイと一緒にいたい。
「うん」
「じゃ、日本に連絡してお前の荷物送ってもらうか」
「えぇっ？！」
　ちょ…ちょっと待った！いきなり、そこまで飛躍する？！
「ギイのオフが終わるまで一緒にいるだけだよ！すぐにNYに引越しとか、それは無理。ぼく、東京に事務所があるし、その事務所に所属しているのぼく一人だし。他の人に迷惑かけちゃう」
「お前、昨日、オレの側にいると言わなかったか？」
　～～～～～っ！！この傍若無人の我侭男！！側にいるとは言ったけれど、お互いホームグラウンドが違う状態なのに、今すぐこの瞬間から一緒にいるなんて、無理な話に決まってるじゃないか。
「それとこれとは別だよ！ぼく一人で決められる問題じゃない」
　それに、ぼくにとってアメリカは未開拓地だ。事務所からの話があっても、アメリカだけはとことん避けてきたのだから。
　ギイは車を路肩に止めて、溜息を吐きながら向き直った。
「お前のマネージャーの桜井」
「桜井さん？」
「あれ、SP」
「は？」
　SP？SPってあれだよね。シークレットサービスの事だよね。いや、桜井さん、マネージャーなんですけど。なんでSP？
　ハテナマークを頭に飛ばしたぼくを見ながら、
「それと、スタッフ全員、元々アメリカで働いていたFグループの社員な。もちろんマネージメントの腕はトップクラス。事務所そのものもFグループ傘下だし。託生の実力があってこそだけど」
　スラスラと内情を暴露するギイ。
「マネージメントのプロ……」
　新しくできた事務所なのに、どこから資金が出ているのか不思議に思ってはいたけれど。バックがFグループだったなんて。しかもマネージメントのプロ集団。それならば納得できる。無名のバイオリニストの名前をたった五年で浸透させた事に。
「だから、事務所ごとNYに移転しても、なんの不都合もないんだ」
　そう締めくくられても。
　全く気付かなかった裏事情に、唖然呆然言葉が出なくなった。
　ぼく事務所ぐるみで騙されてたってわけ？いやいや、騙されてない。それだけの信頼関係は築けているはずだから、ギイの事だけ黙ってただけだ。
「託生、怒ったのか？」

　黙りこくったぼくを、情けなさそうな顔で覗きこみ、
「託生が心配で、いや、託生の事だからもちろん大丈夫だろうとは思っていたんだが、他の人間がバックに付くよりはオレが付きたかったし、ファン一号としては一番にCDが欲しかったし」
　あたふたと言い訳を募るギイに吹き出した。
　これが、冷静沈着で切れ物の、あのFグループの副社長だなんて。
「託生！」
「ギイ、愛してる」
　身を乗り出して、ギイの頬にキスした。
「託生……」
「もう二度と隠し事なんて許さないからね」
　嬉しそうに目を細めたギイの口唇が近づいて、目を閉じた。
「愛してる、もう二度と離さない」
　触れ合う瞬間、呟かれた言葉に目の奥が熱くなる。ギイの背中をしっかりと抱きしめ、思いの全てを受け止めた。

　離れてしまったぼく達。離れてしまった十年。過去に戻る事はできないけれど、リセットボタンを押して最初から始めよう。
　もう一度、恋を始めよう。

短期集中連載……とする予定はなかったのですが、最終的にはそのようになってしまった「Reset」でした。
年末にたまたまバグパイプの音を聞きまして、そこから昔エレクトーン関係の友人に誘われてハーディ・ガーディを聞きに行った事を思いだし（音がバグパイプ に似てるんです）、フランスで活躍してたんだっけとルートも思いだし、ブルボネ式……フランス唯一のウイスキーもブルボネ産だったよなぁ（←酒飲み）
なんというか、連鎖してしまったわけで。
で、もう終わったから言ってもいいかなぁ。
モデルの城は、コンピエーニュの森のピエールフォン城でありました。
いや、全然描写できてないし；ついでにパリからの方向全く違うし。（ピエールフォン城は北東、ブルボネ地方は南南東）
いいんです。ネタだから（笑）
色々と伏線をとっ散らかして、最後にあたふたと拾ってなんとか整理してみましたが、わかりにくかったかもしれません。

最後に、ものすごく連載という形が苦手で、全く続ける自信がなかったのですが、毎回感想をいただいた事が励みになりました。
感想を送ってくださった方々、ありがとうございました。
連載が出来たということを自信に、これからもがんばります♪
(2011.1.27)

おまけ(2011.5)*Night*

Reset10話のエロ部分のみ、ギイサイドから抜粋しております。
清らかな乙女の方は、引き返してください。

　託生からのキス。
　跳ね除けないといけないのに、意思に反して体が動いてくれない。抱き締めたくなる腕を必死に堪え、拳を握り締めて心を引きずり込まれないように耐える。
　しかし、託生の甘い蜜が流れこみ、柔らかな舌が羽のようにオレの口内を愛撫する様に、オレの心はもっと深く託生を欲していた。
　酸素を求めて離れた託生の口唇を追い、うっすらと目を開けた時、飛び込んできたのは、潤んだ瞳と赤く色づき濡れた口唇、そしてコクリと動いた喉元。
　目にしたとたん、オレは託生に口付けていた。
　触れてはいけない。抱き締めてはいけない。キスしてはいけない。それこそ抱いてはいけない……！
　そう理解しているのに、託生を押し倒し頭を過ぎる忠告に本能が逆らっていく。
　もう限界だった……。
　胸の奥深くに隠していたパンドラの箱。鍵は託生が持っていた。だからこそ、オレは託生に会わないよう避けてきたんだ。
　それなのに、一瞬で開いてしまった。
　託生の手が服の上で彷徨うオレの手を導き、自分の胸元に差し込んだ。直に触れた託生の肌にスパークが飛び、乱暴にシャツを左右に開け胸の飾りにむしゃぶりついた。赤く立ち上がった突起を舌で味わい転がすと、託生の甘い香りが、誘うように匂い立つ。
　獰猛すぎる愛撫に、託生の体が跳ねた。
　切羽詰った欲望が堰を切ったように溢れだし、オレを支配していく。五感全てで託生を感じ、その喜びに理性が麻痺する。もうすでに、託生から離れる選択肢など遥か彼方に飛び去り、ただただ「託生が欲しい」と本能が叫んでいた。
　愛し愛され求め合った遠い記憶が蘇る。眩暈がするくらいの幸福感に、思考が霞がかってきた。
　深く身を沈め一つになったとき、落雷を受けたように震えが体を走り、一気に達してしまいそうになるのを、浅い呼吸を数度繰り返しやり過ごす。
　余裕なんて全くなかった。託生をこの腕に抱いている。その事実が例えようもない喜びとなり、オレを包み込んでいる。
「ギイ……ギ……イ……」
　オレを引き寄せる託生の腕に逆らう事なく、貪りつくすように細い体を思う存分突き上げた。
「託生、愛してる……愛してる……」
　口に出せなかった禁句。
　滑り落ちたとたん、託生を求める想いが一気に高まり腰の動きが早くなる。
「あ……ぁ……！」
　上り詰めた託生に引きずられるように最奥に欲望を放ち、大きく息を吐いた。オレの下で乱れた呼吸を繰り返す託生の口唇を舐め、小さなキスを重ねる。力の入らない腕をオレの肩に回し、キスに応える託生が愛しくて堪らない。
　一度達したものの一向に衰えを見せていない自分自身を自嘲気味に笑い、託生の体を抱き上げ膝の上に座らせた。

「やっ……」
　より一層深く打ち込んだ楔に託生の目から涙がポロリと落ちる。
「まだ、足りない……託生……たくみ」
「あ……ぁ……」
　こめかみに、首筋に、胸元に、ありとあらゆる場所に赤い花を咲かせ甘い肌を味わう。
　背中を通ってオレを受け入れている場所まで手を這わし、わき腹からそろりと内腿を撫でると、託生がブルリと震えた。
　続けざまの愛撫に　一時落ち着きを見せたような託生の呼吸が、また乱れていく。手と口唇だけの愛撫に、託生の腰が物足りないと揺れオレを逃がさないように締め付けた。
　もっと……もっとオレを欲しがってくれ。
「もう……ギイ……！」
　焦らされるのに耐えられなくなった託生の悲鳴のような懇願の声に、オレの体が大きく揺らめく。
「あ……ギイ……ギ……イ……」
　汗を飛び散らせ首を打ち振り、託生の体が艶めかしくオレの上で揺れる。その痴態に煽られ、一層オレの動きも激しくなった。惜しげもなく晒された白い喉元に口唇を寄せ、噛み付くように口付けて赤い所有印を押す。激しさを増すオレに、託生が耐え切れないと言いたげに喘いだ。
「託生……愛してる……」
「ぼ…くも……あ…ん……あぁ……！」
　容赦のない追い上げに託生の体が震え、あっけなく弾ける。
　二度目の迸りにくたりとした託生を横たえようと体を退くと、オレが放った液体が零れ足を濡らした。
　それに気づいた託生が頬を赤く染め、
「ギイ、ダメ……」
　力が入らない体を捻り、逃れようともがく。
「汚せよ、もっと」
　もっと汚してくれ。もっと汚れてくれ。
　ベタベタに濡れた足元さえ煽りの対象にしかならず、組み敷いた体にまた熱くなる。
　まだ荒い呼吸を繰り返している託生の口唇を指先でなぞった。熱い息に紛れ少し乾いた口唇を感じ舌で潤すようにゆっくりと舐める。そして時折隙間から誘いをかけるように滑り込ませ、託生が応えてくれるのを待って濃厚なキスをしかけた。
　性急な営みに疲れきった体を癒すように撫で、託生の熱をゆっくり高めていく。
　擦り合わせた汗ばむ頬に「まだ、欲しい」と囁き、耳朶を口に含んだ。
「止まらないんだ。託生」
　オレの意思を無視して動く体に、託生の口から艶めいた音が零れる。オレの脳に直接響いて、背筋をゾクリと駆け上がった。
　ずっと欲しかったんだ。
　お前に触れ、お前に包まれ、お前に溺れて……あの夢のような時間に戻りたかった。
　渇ききっていた心に染み渡る至高の水。……飲めば最後。お前から離れられない・・・！
　何度目かの頂を越え、二人して床に転がった。

50万HIT、ありがとうございます。
で、何かお礼をと思ったのですが、永遠を書き終わって頭の中がすっからかんになってしまっていて、何も思い浮かびません；
フォルダ内を探したところ、Resetギイサイドがあったので、エロ部分だけ抜粋しました；

お礼にエロってのも、あれなんですが；今のところ、これしかない；
暇つぶしくらいには、なってほしいかな…。
(2011.5.14)

ひとすじの光(2011.2)*Night*

「わかった」
　この一言で幕を引いた夢の時間。
　奈良先輩に言った事が、まさか現実になるなんてあの時は思いもしなかった。このような形で託生を手放さなくてはならない事に……。
　ごめんな。オレが言わなくてはならなかったのに、お前に言わせてしまって。
　最後まで運命に足掻いた馬鹿なオレを許してくれ。
　一生側にいてお前を守ると決めたのに、その誓いさえもここに置き去りにしなくてはならない悔しさ。
　だから、せめてオレが側にいられない代わりに、ストラディバリを持っていてほしかった。二度と会うことはできないけれど、お前の側に心だけは置かせてくれ。
　卒業式の夜……。
　最初で最後の恋を手放した、抜け殻になった夜……。

　祠堂を卒業しNYに戻ったオレは、大学に行きながら親父の仕事を手伝い、島岡と共に脅迫状の犯人を捜していた。
　託生を殺そうとしたんだ。絶対に許すものか。地の果てまで追いかけてやる。
　祠堂の内部に連絡係の人間がいるだろう事はわかっていた。そうでなければ、あれだけタイミングよく仕掛けられる事は不可能だ。
　改めて当時の祠堂の学生を調べあげ一人の生徒にたどり着いたものの、その生徒は退学し行方不明になっていた。事故を起こした二人もすでに変死しており、接触した人間を調べても何も出てこなかった。
　あまりにも手際よく隠された証拠。『遊び』の為にここまでできるのは、たぶん一握りの人種だけだ。
　しかし、手元にあるのはあの脅迫状のみ。印刷されたどこにでもあるような封筒と紙。
　それでも、オレは何もしないわけにはいかなかった。
　必ず突き止めて、死んだ方がましだと言う目に合わせてやる……！

　あらゆる手を使い色々な方向から探っていたものの、何も進展せずあれから一年が経った。
　託生につけていたSPから、もうそのような異変が起こっていないとの報告に、ターゲットから確実に外れていると確信してはいたが、それとこれとは別問題だ。
　終わった話じゃない。絶対に終わらせない。時間も手段もオレは選ばない。
　そんな時だった。古くからの財閥のトップであった故オスカー・キャンベル氏の執事がオレを訪ねてきたのは。
「オスカー・キャンベル氏は、半年前に亡くなったんじゃなかったか？」
「そうですね。会長と奥様が告別式に出席なさってました」
　死んでから半年も経ち、尚且つ親父ではなくオレに何の用があるんだ？
不審な訪問に眉をひそめたが、追い返す理由もなくオレは応接室に足を向けた。
　初老とも言える品のよさそうな男性が、きっちり頭を下げるのを見届け着席を促し、挨拶をすっとばして疑問を投げかける。
「キャンベル氏が亡くなったのは半年前ですよね？何故今頃来られたのですか？」
「主人の遺言だったんです。たぶん自分は殺されるだろうから、3月に崎様にこの手紙を届けるようにと。それより前に動くと殺されるぞ、と」
「殺される？」
　物騒な言葉に島岡と顔を見合わせ、テーブルに置かれた封筒を手に取りペーパーナイフで丁寧に封を

切った。入っていた手紙を開き目を通すと……。
「なっ……！」
「義一さん？」
「島岡！ニューヨーク銀行の貸し金庫だ！」
　オレの言葉に島岡は同封されていたカードを受け取り飛び出した。

　島岡が持ち帰ったのは、今までの経緯を書いた告白文。証明の為にと添えられた書類。そして関わっていた人間の詳細な報告書だった。
　オスカー・キャンベルは、託生を殺そうとした人間の中の一人だったのだ。
「自分の復讐をオレにさせるなよ。どこまでも自分勝手な奴だな」
　告白文に目を通し、テーブルを滑らせ島岡に渡す。
「偶然決まったターゲットがキャンベル氏の古い知り合いだったんですね。それに反対し逃がしたキャンベル氏は裏切り者として殺される事になったと」
「自業自得だろ？」
　今まで笑いながら何人もの人間の運命を変えてきたんだ。この件に関しては全く同情できない。
「でも、これで前に進めますね」
「確かにな」
　ここまで詳細な書類を残してくれたんだ。託生への暴挙は見逃してやる。どちらにせよ、殺されているしな。
「キャンベル氏含めて、全員で5人。やっかいなメンバーばかりですね。正攻法は使えなさそうですよ。どうしますか？」
「……裏工作は得意なんだ。徹底的にやってやる」
　ニヤリと笑うと、
「お手伝いします」
　人の悪い顔で島岡も笑った。
「リチャード・エドワーズ。こいつが親玉か。身内は……」
「メアリー・エドワーズ。リチャード・エドワーズの唯一の身内で孫娘。溺愛しているそうですよ」
　報告書を片手に、島岡が補足する。
「まだ10歳か。使えないな」
「待てばいいでしょう？」
「島岡？」
「5年もすれば15歳。いい頃合だと思いますが？」
　意味がわからないはずもなく。
　……なるほど。その方向で追い詰めるのが一番の得策だな。
「OK。わかった。こいつに関しては5年後だ。他の奴等から行くか」
　5年も生かせてやるんだ。感謝しろ。おっと、その前に死ぬなよ。オレが最高の終焉を用意してやるから。
　エドワーズの報告書を指で弾いた。

　あれから5年。
　告白文の中には、まだオレがマークされている事が書いてあった。執念深い人物だから最低3年はマークされるだろうと示されている。
　敵もよく調べていやがる。3年そこそこで諦める人間ではないけどな。
　マークされている状態で動くのは危険だと判断し、5年後に狙いを定め水面下で準備を進めてきた。その

人間に対して一番効果的な方法で、苦しみのどん底へ引きずり落とす。そのまま殺しはしない。死んだほうがましと言いたくなる状況まで追い詰める！
　この5年の間にターゲットの一人ランドルフ・クラウンが死んだ。
　全員が初老とも言える年齢だ。死んでもおかしくはないが、出来る事ならこのオレが地獄に叩きこみたかった。
　ただ、火事による焼死というアクシデントだったから、まだ老衰で死なれるより溜飲が下がった。苦しんで死んだのだろうから。
　残り3人。
　全ての準備が一線に並んだとき。
「そろそろ仕掛けようか。一週間で方をつける！」
　オレの一言に、島岡が頷き即座に指示を飛ばした。
　二日後。政界の長老アルフレッド・カーターが大統領の暗殺疑惑を容疑に逮捕された。
　朝から流れている番組も朝刊も、このニュース一色だ。
「うまくいったようだな」
　アルフレッド・カーターが白人至上主義だというのは、この世界では有名な話だ。そんな人間の大統領の暗殺疑惑。たとえ政界の大物であっても、否、だからこそ、見過ごせない事態だ。
「CIAが動くの早かったですね。匿名でディスクを送ってまだ二日だというのに」
「それだけ当局がピリピリしてるんじゃないのか？大統領暗殺計画の『盗聴記録』があったら一気に動くだろうしな。声紋も特徴もばっちり。研究員がんばってくれたからな」
「それは当たり前ですよ。研究費が倍額。しかもこの件に関してはどれだけ金を使ってもいいという指示なら、やりたい放題徹底的に作りますからね、彼らは」
　研究する事に喜びを感じる人種。とことん突き詰める性格上、妥協は許せないらしく、完璧な『盗聴記録』を作ってくれた。
　どれだけ奴が否定しても、それこそ証拠を取ってくれと言っているようなもんだ。全て録音されディスクと照合される。
　政界の長老として皆にひれ伏された人物が、一躍政治犯。CIAはとことん行くからな。今までの自分の扱いとのギャップにどれだけ持つか、楽しませてもらおう。
「今回のおかげで色々と特許も取れそうだし、一石二鳥というところか」
　それなりの金も使ったが、すぐに元が取れそうだ。
「次は誰にします？」
「決まってる。あいつだ」
　その夜、オレはある人間と接触を取り網を張った。
　さて、予想通り網にかかってくれるかな？

　翌日の午後。
　商談のためオフにしていた携帯の電源を入れてみると、画面にずらりと並ぶ着信履歴が現れた。名前はメアリー・エドワーズ。
　……かかったな。
「Hello、メアリー？」
「ギイ！お爺様が反対してるの！」
「今はどこ？」
「学校よ。でも行きも帰りも監視されていて出られないの」
　そんな事百も承知だ。
　アルフレッド・カーターがああなった以上、次は自分の番だとすぐにわかるだろう。大切な孫娘にオレが接

触していた事に激怒しているはずだ。
「それなら、今すぐ早退しておいで。すぐに迎えの車を寄越すよ。今日は3thストリートの角だ。いつもの場所で待ってる」
「わかった」
　毎回違う迎えの場所。
　当たり前だ。オレとメアリーの接点を作ってはいけないのだから。
　民家のない郊外に作らせた小さなログハウス。ここがオレとメアリーの密会の場所。
　既に着いていた車を横目に、
「島岡、撤去する準備を始めろ」
　次の指示を飛ばす。
　もうここはいらない。今日限りメアリーとの関係も終わりだ。

　身に纏う女の匂いに吐き気がする。腕にかかる白い手も気持ち悪いだけだ。払いのけたいのを我慢してサイドテーブルから煙草を取り火をつけた。
「ギイ、今日はどうしたの？なんだか激しかったけど」
「だってメアリー、これが最後なんだ」
　そう。やっとだ。こんな茶番は今日限りなんだ。
「イヤよ！そんな事言わないで」
「君のお爺様が反対しているんだろ？君のお爺様が頑固なのは有名な話だ。たぶん面会を求めても拒否されるだろうね。それに……そろそろオレも周りがうるさいし」
「それって、ギイが誰かと結婚するって事？！イヤよ！ギイと結婚するのは私！」
　笑いが込み上げるほど、子供じみた一直線の思いこみ。
　お前と結婚なんて、死んでもするか。
　灰皿に煙草を揉み消し、メアリーを抱き寄せた。
「君のお爺様がいなければ、メアリーと結婚できるのにね」
　耳に口唇をつけて囁く。
「お爺様がいなければ……」
「こんなにメアリーを愛しているのに、別れなければならないなんて……。君のお爺様さえいなければよかったのにね」
「お爺様さえいなければ、ギイと結婚できる」
　ちょっと優しい言葉をかけ愛を囁けば、本気だと勘違いし付いてきた少女。誰にも内緒の恋だからと言えば秘密を共有する楽しみをも生み、オレの言う事に従順に従った可哀想な少女。
「ギイ？」
「アロマの用意してくるよ」
　ローブを引っ掛け隣の小部屋に入り、ハーブに薬を混ぜロウソクに火をつけた。立ち上る煙に眉をしかめ素早く部屋を出て声をかける。
「メアリー、隣で休んでおいで。オレはシャワー浴びてくるから」
　メアリーはシーツを巻きつけ、ふらふらと隣の小部屋に入っていった。
　勝手にやってろ。薬はごめんだ。
　バスルームに入り、気持ち悪い匂いと感触を一秒でも早く落としたくて一気にレバー回す。頭から熱い湯を浴びながら、虫が這い上がるような感触を思い出し数度吐いた。
　あの女、ベタベタ触りやがって。
　経験上、誰でも抱けると思っていた自分が、こんなに苦痛を感じるとは想定外だった。体の快楽と心は別物だと。切り替えれば大丈夫だと勘違いしていた。

もうオレの体は託生しか受け付けない。
バスルームを出ると、メアリーはまだ小部屋から出てはいなかった。
手袋をはめメアリーの鞄からオレが渡した携帯を取り出す。ついでに彼女所有の携帯も取り出し、オレの痕跡が残っていないか確認した。
「本当に素直だな」
渡した携帯からでないと通じないと言い含ませておいたからか、所有の携帯には何一つ残っていなかった。数人のアドレスのみ。
個人を見る前にバックの大きさに尻込みされ、メアリーには友人と言えるような人間が誰一人いない。周りにいるのは、友人のふりをして付きまとう下心のある人間だけだ。
だからこそ、優しい言葉をかけるだけでついてきた。寂しがり屋のメアリー。
「あのじいさんの孫に産まれた事を恨むんだな」
所持品を全て確認し終わったオレは、
「メアリー、そろそろシャワーを浴びておいで。オレが洗ってやるよ」
殊更優しく声をかける。
オレの声にのろのろと小部屋から出たメアリーの肩を抱き、バスルームへといざなった。
薬入れすぎたか。かなり髪に移っている。
レバーを回し、触りたくもない体からオレの痕跡を綺麗に洗い流した。
「ねぇ、ギイ。お爺様がいなかったら結婚してくれる？」
「もちろんだよ」
「キスマークもつけてくれるの？」
「君がオレの物になったらね」
「本当？」
「本当だよ」
薬が効きトロンとした口調でメアリーが何度も繰り返す。
どれだけ強請られても付けなかったキスマーク。
オレがオレの痕跡を残したいのは、この世でただ一人だけだ。肌を愛でるなんて気持ち悪くてできるはずがない。
メアリーの髪を乾かし服を着せ、待機してある車に乗り込む。遠くなるログハウスを見るのは、これで最後だ。
あとは島岡に任せておけばいい。
「お爺様がいなければ……」
車に乗ったあと、自分の世界に閉じこもりブツブツ言っているメアリーを眺めた。
どこからどう見ても、完璧に薬中だな。
屋敷の2ブロック前で降ろし、ぼんやりと歩いていくメアリーを車の中から見送る。
「Good luck、メアリー」
明日の朝には全てが終わっているだろう。

「お待たせして、申し訳ありません」
「いえ、こちらこそお忙しい所をお邪魔しまして」
会議が終了したと同時に、島岡から警察の人間が訪ねてきている事を耳打ちされ、気を引き締めた。来る事は予想内だが、どこまで調べてきたのか。
「先日祖父殺しで逮捕したメアリー・エドワーズなのですが、あなたと結婚するために殺したと供述してまして」
もちろん話の内容がわかってはいたが、

「そう言われましても、私はメアリー・エドワーズとは面識がないのですが」
　オレは驚きと戸惑いを顔に浮かべ、刑事らしき人物を見た。
　オレを疑っている様子はないな。痕跡は見つからなかったということか。
「やはりそうですよね。メアリーの携帯を調べても、それらしき名前も番号も見当たらない。通信履歴を見てもそう。そしてあなたと会っていたと言う建物も見に行ったのですが、存在しない。何かであなたの写真でも見たのでしょうか？」
「面識がない以上、そうとしか考えられませんが」
　笑いたくなるのを堪え、ポーカーフェイスを被りなおす。
「やっぱり薬による妄想ですかね」
　刑事は一人で納得し、
「お仕事のお邪魔をしまして、申し訳ありませんでした」
　島岡に案内され退室していった。
　リチャード・エドワーズ。
　託生を殺そうとした親玉。
　溺愛している孫娘に殺されるなんて最高だろ？
　笑いを噛み殺し、最後の一人ブライアン・ピーターソンの顔を思い浮かべた。

　ハーレム近くの汚い下町。
「落ちたもんだな」
「今は、小さなアパートの一室で暮らしています」
　まさかこんなよぼよぼのじいさんが、あのピーターソン・コンツェルンの先代だとは誰も思わないだろうな。息子夫婦を頼るも、門前払いだったらしい。あれだけやりたい放題にやって、暴力三昧の父親なんか顔も見たくないだろうさ。
　元々は、息子に会社を譲り自分は楽隠居したつもりだったのだろう。事実、隠居したって有り余る金が懐に入っていたはずだ。
　ただ、資産が現金じゃなかったのが痛かったな。お前が持っていた株券は、全て紙切れになっちまったんだもんな。
　この5年。密かに圧力をかけ持ち株会社を全て倒産に追いやった。
　ピーターソンが持っていた株は、全てが仕手株。安定株と違い投資目的で売買される仕手株は、業績が株価を決める。
　株価の上がり下がりが激しい会社ほど、何らかの黒い部分があって当たり前。そこを突けば、おのずと状況判断した株主の売り注文が多くなり、結果連日ストップ安。経営を立て直す前に倒産だ。
　そこの社員に恨みはないから、全てFグループで引き取ったが。
　そのおかげで、何故かオレの評価も高くなって副社長の座につけたのだが、これはおまけだ。
　お前を地獄に落とす事だけが、オレの目的なのだから。
　よろよろと歩いていたピーターソンがつまづいた。足腰が弱っているらしく、すぐには立てないようだ。
　島岡が差し出したケースの中から針を持ち、車のドアを開け手を差し伸べた。
「ありがとうございます」
　目の前に現れた手に何の疑問も持たず、ピーターソンは素直にオレの手に重ね……。
「つっ！」
　自分の掌に深く刺さった針を凝視し、瞬時顔を上げオレの顔を見たとたん血の気を失っていった。一応オレの顔は覚えていたようだな。
「崎義一……」
「どうせ老い先短いんだ。いつ死んでもどうってことないだろ？」

殺すだけが復讐じゃないさ。
刺された針を慌てて抜き、
「お前は、なにを？！」
くしゃくしゃの口から涎を流し、わめき立てた。
「研究所で発見された名前も付いていないウイルスだよ。もちろんワクチンなんて物は存在しない。動物実験の結果、人間でも致死率100％だけどな」
オレの言葉に、パクパクと口を動かし言葉にならない言葉を発して脂汗を流す。
人を殺す事が趣味な癖に、自分が死ぬ事は怖いのか。
「……いつ……いつ発症するんだ？今すぐなのか、数ヵ月後なのか、数年後なのか？！」
「さてね？人間で実験はしてないから」
苦しむがいい。恐怖に震えるがいい。いつ発症するかわからない未知のウイルスで。
いや、その前にショックで逝くかもな。
そのまま動かなくなった奴を置いて、車に乗り込みシートにどさりと座りこんだ。
……これで、終わりだ。
やり遂げた達成感と心が空っぽになったような虚無感にぼんやり窓の外に視線を向けた。
長かったような短かったような曖昧な時間。
これまで復讐のためだけに生きてきた。終わった今、託生のいない現実をこれからどう生きていけばいいのか。……生きていけるのだろうか。
しばらくして車が停車し、島岡がドアを開けた。
「ここは……」
ケネディ国際空港。
「義一さん、これを」
渡された封筒に入っていたのは、シャルル・ド・ゴール空港行きの航空券と託生のフランス公演初日のチケット。
「島岡……？」
「2階席の端です。舞台からは遠くてギイとはわかりません」
行ってきて下さい。
思考力なんてなかった。
そのまま搭乗口まで連れて行かれ、人波に押されるがまま旅客機に乗り込んだ。
NYからパリまで8時間。その間、自分が寝ていたのか起きていたのか、全く記憶がない。ただ、託生の事だけを考えていたように思う。

花市場で花束を作ってもらい会場まで来たものの、オレは中に入る事ができなかった。眼鏡をかけるだけで印象が変わるのか、知っている顔がちらほらいるものの、誰もオレだとは気づかず目の前を通り過ぎていく。
何を考えて島岡は用意したんだ？
チケットを何度も手でなぞり、立ち尽くしていた。開演まであと5分。
託生の顔を遠くから見るだけだ。
そう決断しギリギリに滑り込んだ会場内は既に客電が落とされ、息を整える間もなく託生が舞台に現れた。
託生……！
遠く……顔もわからないくらい遠い距離なのに、オレの心はざわめいていた。6年ぶりに見た託生。昔と変わらない華奢な体つきに周りを包む優しげなオーラ。
託生の深く澄んだバイオリンの音色が……どす黒いオレの心に春風のような優しい音色が響いてき

た。
　今のオレには眩しすぎるほど強い光。人間の心を失い凍っていたオレを一瞬で溶かす。
　あの温室で、佐智の別荘で、いつも音楽に真正面から向き合っていた素直な心。その心に愛され包まれた幸せな日々。託生の怒った顔、泣いた顔、笑った顔。鮮やかによみがえる祠堂での時間が、走馬灯のように現れては消えていった。
　託生の姿がぼやける。
　あまりにも愛しすぎて、心が張り裂けそうなくらい苦しい。
　アンコールを待たずに花束を座席に置き、会場を抜け出した。

　あの夜から6年。
　託生と別れ、奴等を追いかけ。地獄に落としてやると執念だけで生きてきた。その後のことは一切考えていなかった。いや、死のうが生きようがどうなってもいいと思っていた。
　それなのに託生への想いを再認識したとたん、溢れる恋心が胸に渦巻きお前を求めてやまない生命力ともいうべき力が沸いてくる。もしも託生が昔と同じようにオレを求めてくれるのならば、全身全霊をかけて愛していく。
　しかしこの事件でわかった事が一つある。
　託生の側にオレがいると、託生が危険な目に合うという事。
　これから先も、同じような事が起こる可能性の方が高いんだ。自分の幸せの為に託生を犠牲にするなんて、できるわけがない。
　たとえ託生が愛してくれたとしても、もう一緒にはいられない。
　どれだけそこにいたのだろうか。
　ふいに話し声がして、その方向を向くと託生がスタッフ数人と並んで歩いてきた。
　咄嗟に物陰に隠れ様子を伺っていると、会場の方から誰かが走って託生を呼び止めた。
　オレが置いてきた花……。
　花束を差し出され両手で受け取った託生は、キスをするように香りを嗅ぎ、大切そうにふわりと抱きしめ微笑んだ。
　誰からの花束でも、託生はそうしていただろう。しかしオレの想いを抱きしめてくれたような幸せが、オレの心を満たしていく。忘却の彼方に置き忘れていた幸せが……。
　託生の後姿が通りの向こうに消えるまで、オレは立ち尽くしていた。
「託生……」
　幸せは、もうオレの中にあったんだな。
　あの短い日々の中で、託生は一生分の幸せをオレに与えてくれていた。
　それだけで十分……。
　愛している。ずっとお前だけを想っている。
　この想いだけで生きていけるから。だから、ずっと輝いていてくれ。

「Reset」設定の卒業直後から6年目までのギイ側の話でした。
そして、最初に謝ります！アメリカでの株の売買システム、私知りません（極汗）日本のやり方で書いてますので、そのあたりは読まれた後ですがスルーしておいてください。だったら調べろよってのは、ちょっとなしで；
予告どおりというか、好き嫌いが別れそうな黒ギイ。
書きながら「悪魔だ……」と呟きつつ、「ま、いっか」と自分に甘くなり、なんだかふらふらしながら書いたよ

うな気がします。
内容はResetを書いている時に、浮かんでました。ギイの事だから、これくらいはするだろうなぁみたいに。
ただ書くとなると内容が内容だけに、やっぱり躊躇してしまうわけで;
今回も、皆様の後押しで書けたようなものです。ありがとうございました。
(2011.2.4)

仲直り計画(2011.6)

「共同CDですか？」
「えぇ。レコーディングはパリでどうです？1ヶ月ほどの予定で」
　まだ託生さんが無名に近かった頃はもちろん、バイオリニストとして名前が浸透した今でも、佐智さんは「託生君と弾くのが楽しいから」と帰国されたときには必ずこちらに顔を出し、同時に新しい仕事の話を持ち込んでいました。
「そうですね。パリだったら託生さんもよく知っている場所でしょうし。来月頭からならスケジュールが空きますが…」
「それは、よかった。僕も来月は空いているんです」
　佐智さんの了承の声に、託生さんの来月のスケジュールは決定しました。細かい事は大木さんと打ち合わせる事にして…と思考を巡らした私の顔を、佐智さんが表情を引き締め見つめた。
　そして。
「桜井さん、託生君の本当の音、聴いてみたくないですか？」
「本当の音……ですか」
　託生さんのマネージャー兼SPとなって5年。一番近くで託生さんの音を聴いていたつもりだったのに、本当の音とはいったい……。
「託生君もプロですし、もちろんプロとしての音を持っています。でも、本当の音は違います。僕はもう一度聴いてみたいんです」
「……聴いた事があるんですか？」
「えぇ、もう10年以上前に」
　10年前と言えば、まだ託生さんが高校生だった頃の話ですね。その頃に奏でていた本当の音。たぶん、技術的には今よりも劣っていたはずの音なのに、天才バイオリニストがもう一度聴いてみたいという音とは、どんな音なのでしょう。
「本当の音がどんな音なのか私にはわかりませんが、聴けるものなら聴いてみたいとは思います」
　私の答えに佐智さんは満足そうに笑い頷きました。
「一種の賭けなんですが、手伝ってもらえますか？」
「それは、もちろん」
　その音が聴けるのなら。
「今度のレコーディングの予定を、託生君には3週間だと言ってほしいんです」
「3週間？」
「それと……義一君にもね」
「副社長にもですか？」
「もう、いい頃合いだと思うんですよ」
「佐智さん？」
「いいかげん、託生君に義一君の事を黙っておくのも、皆さん苦痛でしょ？」
「それは……」
　私を含めてスタッフ全員、副社長からの厳命を受けていました。絶対に、託生さんには気付かれるな、と。
　ただ、やはり、託生さんを騙しているような後ろめたさが、常に付きまとっていました。
「副社長と託生さんは、お知り合い……なんですよね？」
「えぇ」
「仲違いをしているのですか？」
「さぁ。それは、聞いていないのでよくわかりませんが」
「ようするに、二人の仲を戻せば、託生さんの本当の音が聴けると？」

「そういうことです」
　託生さんと副社長が同じ高校に通ってらしたのは知っていました。
　学生時代に喧嘩別れでもしたのでしょうか？あ、心優しい託生さんなら、ご友人との喧嘩別れで傷ついて引きずっていることも考えられます。
「レコーディングの最後の1週間は、初回特典という形のおまけを作る事にします。話は向こうに行ってから決まったという事にして。そして、最終日に託生君と義一君をバッティングさせます。その後は、義一君自らが動くようにしますから」
「……そんなに上手く行くんでしょうか？」
「大丈夫です。島岡さんも、こちらに引き入れています。僕達は、時間通りに動くだけです」
　島岡さんまで協力しているのなら心強い。それに、託生さんからは副社長の名前を聞いたことはありませんが、副社長が託生さんの事を気にされているのは明 白です。そのための事務所なのですから。何らかの理由があったとしても、やはり本人同士きちんと話し合わなければ何も始まりません。
「わかりました。私も託生さんの本当の音を聴いてみたいですから、できる限りの協力をさせていただきます」
「ありがとうございます」
　そうして始まった副社長と託生さんの仲直り計画。上手くいけばいいのですが……。
　そう言えば、最後に佐智さんが、
「ただ、桜井さんが、今まで以上に大変になるかもしれません」
　と言い残していったのですが、あれは、どういう意味だったのでしょう。

ブログより転載
(2011.6.30)

松本君の、これが本当の日常(2012.9)

　副社長がフランスから戻り、休暇延長という前代未聞のアクシデントを葉山さんの鶴の一声で乗り越え、そして昨日、無事葉山さんが日本へと帰国した。
　そう、無事に……。
　飛行機に乗られるまで、これまた大変だったのだ。
「託生、やっぱり荷物を送ってもらおう！」
「だから……。すぐに移転できるわけないじゃないか。もう、向こうでスタッフが準備に入っていると思うけど、ぼくだってお世話になった人達に挨拶回りしたいし」
　両肩を掴み、泣き出さんばかりの副社長に引き止められても、それは社会人として当たり前ですよね、葉山さん。
　それに、もうここはケネディ国際空港の出発ロビー。
　副社長、諦めましょうよ。
「オレと一緒にいるって言ったじゃないか。あの小屋で愛を確かめあっ……むぐっ！」
「……何を言ってるのかな、ギイは」
　ドスがきいてます、葉山さん。
　大丈夫です。誰も聞いてません。聞こえてません。ここはアメリカ。SPだって英語しかわからない者ばかり。
　僕と島岡さんを除いては……！
「はい、ストップ。義一さん、お時間です。託生さん、お坊ちゃまのために滞在を引き伸ばしていただきまして、ありがとうございました」
「いいえ、休暇中でしたので、気になさらないでください」
「たくみぃ……」
「じゃあね、ギイ。次は荷物を持ってくるから、それまできちんとお仕事してね」
　この副社長の変わりように度肝を抜いたのは僕だけのようで、島岡さんは慣れた様子であっさりと二人の間に割り込み、首根っこを掴むがごとく葉山さんから副社長を引き離した。
　そして、恨みがましい眼差しを物ともせず受け流し、さっさとSPに副社長の周りを固めさせ逃亡を阻止する。
　はい。葉山さんを追いかけて成田行きの飛行機に乗られる危険性が、ここにいる誰からも見えましたから。
　そのような攻防戦の中、葉山さんが無事ゲートをくぐられたときには、心底ホッとしたものだ。
　その後の副社長の落胆振りは、言うまでもないだろう。

　葉山さんが帰国した翌日の今日。
　さぞかし不機嫌なんだろうなとペントハウスに足取り重く迎えに行ったものの、さすが経済界のカリスマ副社長。気持ちの切り替えは早いらしく、昨日の意気消沈した面影はどこにもなく、いつもと変わらないクールな様子に胸を撫で下ろした。
　いつになるのかはわからないけど、葉山さんがアメリカに住まいを移すことは副社長から、さ、ん、ざ、ん、聞かされていたから、それまでの我慢だと思っておられるのだろう。
　そんなことよりも、今日は仕事が山積みだ。
　なぜなら、休暇延長を却下する代わり、葉山さんと毎晩ディナーができる時間までに帰宅と、島岡さんが副社長に話をつけたのだ。
　直々に島岡さんがスケジュール調整をし、あとに回せるものは全て回せとばかりに後日に詰め込んだものだから、真夜中までスケジュールが満員御礼。

ぼんやりと考え事をしている場合じゃない。
僕は次の会議に必要な書類を持って、副社長室に向かった。

重厚なドアをノックして、副社長の返事を待ってから開ける。
「会議か？」
「はい。あと十分です」
大きなデスクの上に置かれたノートパソコンから目を離さず、副社長は僕に問いかけた。その整った横顔に溜息を吐く。
やっぱり、同じ男から見ても惚れ惚れするくらい、いい男だよなぁ。
思ったと同時に、昨日の葉山さんを引き止めていた副社長が脳裏に浮かび、頭を振る。
あれは、たまたま。偶然だ。副社長でも、恋人と離れるときくらい、常人と同じく気を落とされる。ただ、それだけのことだ。
「書類は？」
「こちらに」
渡した書類をパラパラと捲り、内容を確認して副社長が椅子から立ち上がりかけたとき、どこかから振動音が聞こえてきた。
僕の携帯じゃないな。とすると、副社長の？
音のありかを探そうと視線を彷徨わせる中、予想通り、副社長が胸元から携帯を取り出しフラップを開けた。
あぁ、もう一台、増やされたんだな。
もしも副社長が一台しか携帯を持っていなかったら、ずっと話し中ばかりだ。それこそ、何かの緊急時に僕や島岡さんが連絡を取ろうとしても、絶対繋がらないだろう。
だから、常に数台持っておられたが、やっぱり、今の台数では事足りなかったか。
見慣れない携帯に、そう考えていた僕は、直後、目の前でゆらゆらと揺れている銀色の物体に釘付けになる。
あれは、なんだ……？
ゆらゆらと。小さいながらも、とんでもなく存在感のある、あれ。
「副社長……」
「なんだ、松本？」
応えながら手早く操作して……メールを打っているのだろう。
数秒で打ち終わり、チュッと画面にキスをしてフラップを閉めた副社長と、その手の中にある携帯にくっついている銀色の物体を交互に見やる。
「あの、それは……」
「見てのとおりの携帯だが」
えぇ、携帯。それは、僕だって知ってます。というか持ってます。ガラケーとスマホの二台を。
じゃなくてですね！
「その、銀色の……」
窓から差し込む光に、キラキラと輝くハート型のストラップは、いったいなんすか？！新手の嫌がらせですか？！じゃなくて、恥ずかしくないんすか？！
もしも最愛の恋人に渡されたとしても、これは絶対付けられない。たぶん僕だけじゃなく、世の中の男全員！
「あぁ、これか？」
問いかけながら、でも僕に説明することなく大切そうに手のひらに乗せ、感慨深げにストラップを見詰める副社長にクラリと眩暈を感じた。

副社長とハート。
どうやったら、そんなメルヘンちっくな組み合わせになるんすか？
頭の中で盛大に突っ込みながらも呆然としてしまった視界に、またもや飛び込む新たな事実。
……先週の定期検査で、コンタクトの度を上げるべきではなかったかもしれない。
見たくはなかった……僕は、見たくなんてなかった。
『Ｔ＆Ｇ』なんてイニシャルが彫られていることなんて、僕は知らずにいたかった！
となると、これってオーダーメイド？でもって、銀色の金属ってプラチナプレートで、小さく光っている石はダイヤモンドとか？
副社長、そのストラップは、いったいお幾らなんでしょう？　僕の給料、何ヶ月分集めたら買えるのでしょうか？
絶対、買いませんけど！
現実逃避したくなった空間の中、島岡さんが音を立ててドアを開き顔を覗かせた。
「義一さん、会議の時間……松本君、なにやってるんですか？ぼんやりしている時間はないですよ」
「島岡さん……」
振り向きざま、ストラップにキスをしている副社長が視界に入ったような気がするけど、気のせいだ。うん、気のせいにしておこう。
「義一さん。ストラップと戯れるのはあとにしてください。今日は時間がないんですから」
「はいはい」
気の……せいにさせてください！
胸元に大切そうに携帯を入れ、今度こそ立ち上がってドアに向かう副社長の後に続きながら、ふと気付く。
葉山さんも、あのストラップをつけているのだろうか……。

ブログより、加筆転載
（2012.10.4）

動き始めた時計(2012.10)

「託生が足りない……」
「……副社長」
　ボソリと呟いたオレの隣で、呆れたように脱力した松本が大きな溜息を吐いた。
　ただの独り言だ、独り言。
　秘書なんだから答えがいるかいらないか瞬時に見分け、そのくらい受け流せ。
　証拠に、島岡を見てみろ。聞こえていただろうに、右から左に通り抜けただけ。……それはそれで、なんとなく腹立たしいがな。
　だいたいな、オレ達は新婚なんだぞ。
　やっと託生がアメリカに来て、一緒に暮らしだして二週間。それなのに、託生の寝顔しか見ていないってのは、どう考えてもおかしいだろうが。
　寝込みを襲うようなマネをすれば、翌日から寝室は別にされてしまうから、あの無防備で可愛い託生の寝顔を見るだけで我慢しているんだ。
　と、口に出したら情けなくもなるので心の中で叫び、むっすりと腕を組む。
　そんなオレに声をかけても仕方がないと思ったのか、松本が窓の外に視線を移したとたん、なにかに気付いたように、
「あ……」
　と呟いた。
　その声に釣られて窓の外に視線をやると、小さな子供が悪魔の仮装をして手にカゴを持ち、はしゃいだ様子で母親の手を引っ張っている。
　そして「Trick or Treat？」とでも言っているんだろう。
　店先で配っているお菓子を貰い、母親に見せ嬉しそうに笑っていた。
「お前も、あぁやって子供の頃、お菓子を貰いに行っていたのか？」
「えぇ、友達と一緒に家を回ってお菓子を貰ってましたね。その夜は母がパンプキンパイを焼いてくれて……」
　懐かしいなぁと目を細める松本が見ているのは、あの小さな子供ではなく、後ろを歩いている母親の姿だろうか。
　今日はハロウィン。
　もうすでに、仮装をした人間がいたるところに見受けられ、店のディスプレイも全てハロウィン仕様に変わっていた。
　元から、イベントごとになると、とことんまでお祭り騒ぎを楽しむアメリカ人。ハロウィンは、子供だけじゃなく、大人もパーティやパレードを楽しむ一大イベントだ。
　でも、眺めるだけだったよな。オレには、松本のような思い出はない。
　「Trick or Treat？」なんて、各家庭を回るようなことは、セキュリティ上できるわけがなく、せいぜい絵利子と仮装してペントハウス内の使用人に声をかけたくらいだ。
　ぼんやりと子供の頃を思い巡らせていたとき、車が予期せぬところで止まり、島岡がドアを開けた。
「島岡？」
「今日のスケジュールは、託生さんの事務所訪問で終わりですので降りてください。松本君も」
　有無を言わせぬ物言いに首を傾げるも、託生の事務所訪問が仕事だと言われれば、託生不足のオレ的にはありがたい。
　しかし。
「どうして、松本まで？」
　託生の事務所に行くのに、こいつはいらんだろ。
　不服な口調のオレに、

「……ハロウィンですので」
　島岡は意味深に笑ってオレと松本をその場に放り、一人車に乗り込んでさっさと立ち去った。
　邪魔者はいるけれど、寝顔以外のナマ託生だ。
　気持ちを切り替え嬉々として事務所のフロアまで上がり、エレベーターのドアが開いたとたん、目の前の光景に思わずサイドの操作盤を確認した。
　……合ってるよな。
　ドアが閉まりそうになり、松本がOPENのボタンを咄嗟に押す。
「この階でしたよね？」
「あぁ」
　エレベーターを長時間停止させておくのも迷惑なので、一歩ホールに足を踏み入れた。
　ここは、いつのまにお化け屋敷になったんだ？
「副社長！」
　警備に当たっている忍者が駆け寄り……忍者ぁ？
「誰だ？」
「マイケルであります」
　黒尽くめの衣装の胸元に折り紙で作った手裏剣を挟み、見えているのは目だけ。これで判別しろというのは無理だ。
「どうしたんだ、これは？」
　山ほどのジャック・オ・ランタンに、色とりどりのオーナメント。ロビーの隅には蜘蛛の巣まで張っている。
「ハロウィンですから」
　……あぁ、ハロウィンだから。
　マイケルは島岡と同じ台詞を口にし、……それで、オレは納得しないといけないのか？
　一歩、事務所内に入ると、今度はオレに気付いたフランケンシュタインが近づいてきた。
「これは、副社長」
「……桜井、それは自前か？」
「えぇ、まぁ」
　元から強面なのに、子供がいたら「本物のフランケンシュタインだ」と、間違いなく泣くぞ？
　いつもなら託生のバイオリンが流れているのに、今日のBGMはアヴェ・サタニ。確かオーメンのテーマ曲だったな。
　厳かなと言えば聞こえはいいが、悪魔礼賛の曲。
　この雰囲気にぴったりな曲を流すとは、ここのスタッフは趣味がいい。
　ハロウィンのデコレーションに凝りに凝りまくった事務所内。薄暗い廊下の先には、電気キャンドルが揺らめき、天井から吊るされているオーナメントの影が、不気味なほど大きく壁に映っている。
「島岡さん、言ってくれれば、僕だって着替えてきたのに……」
　背後にいる松本が恨みがましくボソリと呟いた。
　松本も、こういうの好きそうだよな。
　でも、島岡がわかってて送り込んだということは……。
「その心配はしなくていいと思うぞ」
「え？」
　託生がどこにいるのかは、もうすでに予想はついているが、ここはとりあえずスタッフルームに足を向ける。この調子でいけばスタッフルームも、とんでもないことになっていると思うが。
　と、開けたドアの向こうから、
「Trick or Treat！」
　あちらこちらからうようよと、お化けが寄ってきた。
　誰が誰だか全然わからないが、こういうのは久しぶりだ。今まで、イベントを楽しむ気にもならなかったから

な。
「すまん、なにも持ってないんだ。どんな悪戯してくれる？」
　ニヤリと笑うと、心得たもので、
「お菓子を持っていない副社長と松本さんには、お仲間になってもらいまーす」
　その言葉に松本の顔が輝き、手招きされて入った応接室の有様に歓喜の声を上げた。
「すげーっ！どれ選んでもいいんですか？！」
「はい。お好きなのをどうぞ。着替えはそちらにパーテーションがありますから」
「やりっ！副社長、どれ選びます？」
「オレは……あぁ、これにしよう」
「じゃ、僕は……」
　と、選び出した松本を尻目にさっさとパーテーションの奥に移動し、ネクタイに指をかける。
　どうせ仮装するなら、託生に気に入ってもらえるものにしないとな。
　数分後。
「おい、松本。着替え終わったか？」
「は……い……。よっこらしょ……」
　よっこらしょ？
　なんだ？こいつ重量級のなにかに仮装し……はぁ？
　パーテーションの影から出てきたのは全身緑の……。
「……河童？」
「はい！一度、日本の妖怪をやってみたかったんです！」
　頭に皿を乗せ、背中に甲羅を背負い、全身タイツの嬉しそうな松本がそこにいた。
「あれにしようかなと思ったんですけど、邪魔になりそうだったんで」
　と松本が指差したものは、ぬりかべ。
　そのチョイスは、なかなかのものだぞ。さすがオレの秘書。
　しかし、託生の仕事関係には必要ないから、ここにある衣装は全てハロウィン用なのだろう。誰の趣味かわからないが、よく集めたものだ。
「どうだ？」
　応接室を出ると、スタッフ達はオレを見て溜息を吐き、続いて出てきた松本に容赦なく爆笑した。
　気を良くした松本をその場に置き、オレは廊下の先に向かった。絶対、託生は防音室にいるはずだ。
　案の定、防音室の前には、トトロの着ぐるみを着たガードのジョンがいた。……が、なぜ、トトロ？
「ふ……副社長」
　オレに気付いて慌てて立ち上がり一礼をする。
「今日はジョンがガードか」
「はい。託生様の指名で。マイケルだと見えにくいからと」
　それらしい託生の言い訳が、やけに可愛らしい。
　あの黒装束はたしかに闇に紛れて見にくいが、１００パーセント、それが原因じゃないと思うな。
「なんで、トトロなんだ？」
「え？……あぁ、ジブリのファンなのと、都市伝説なんですけどトトロは死神だと言われているので」
　頭を（もちろん着ぐるみの上から）照れくさそうにかき、ジョンが答える。
　そういうことなら、ハロウィンにはもってこいの仮装だな。託生も、助かったと思っているだろう。
　ドアの前でしゃがみこみ、そっとドアを開ける。疑問符を浮かべたジョンに、「静かに」と人差し指を立て、防音室の中に忍び込んだ。
　ポーン、ポーンと、ピアノの音が響いているが、託生の姿はピアノの陰に隠れて見えない。しかし、下部の空間から託生の生足が見える。……生足？
「Trick or Treat！」

　オレの声に、傍目にもわかるほどビクリと驚いて立ち上がった託生が、オレの姿を見てポカンと口を開けた。
　が、それはオレも同じ。
「託生、それの格好は……」
「……鬼太朗」
　あぁ、そうだ鬼太朗だ。ご丁寧に、頭に目玉親父を乗せて、わらじまで履いて。
　これを選んだのは託生なのか？それともスタッフか？
　いや、どちらでもいい！すらりとした生足はGood Jobだ！
　ゴクリと生唾を飲んで、その場から動かない託生の側に足早に近づき抱きしめた。
　驚きすぎて固まっていた託生の腕が、ぎこちなく背中に回り、やっと落ち着いたのか、体の力を抜いてホッと溜息を吐きながら肩に頬を預ける。
「……驚かせるなよ」
「ごめんごめん」
　照れ隠しなのか、ぶっきらぼうに訴える託生にクスリと笑って、背中を宥めるようにポンポンと叩いた。
「ギイ、それ、懐かしいね」
「だろ？」
　祠堂の文化祭で扮したドラキュラ伯爵。
　怖がりの託生は、３－Ｂの教室には頑として入って来ず、結局、朝チラリとオレの仮装を見ただけだったが覚えていたらしい。
　可愛らしく頬を赤く染めている託生にキスをしようとして、
「……」
「どうしたの？」
「いや」
　ちらちらと視界に入る目玉親父が非常に気にかかるが、気を取り直してキスをした。
　柔らかく甘い口唇を堪能してピアノに視線を移すと、そこに置いてある五線紙は案の定、白紙。
「なにしてたんだ？」
「なにも……」
　託生は口唇を尖らせて、あらぬ方向に視線を向けた。
「託生くん？」
「だって……怖いんだもん」
　やはりな。あの三年の文化祭のときでさえ、教室に入らなかった託生だ。
　予算なんてないに等しかった高校生が作るお化け屋敷とは雲泥の差の出来栄えに、逃げ込むしかなかったということか。
「日本でもやってたんじゃないのか？」
「まさか！事務所を飾り付けるまで、ハロウィンは浸透してないよ」
「じゃ、これ、初めてなんだ」
「うん。なんか、みんなすごく盛り上がって、桜井さんなんて、あれで迎えに来たんだよ？」
　真面目な顔をして、あのペントハウスのロビーで待っているフランケンシュタインを思い浮かべ吹き出しそうになったが、泣きそうな顔をして切々と訴える託生に顰蹙を買いそうでグッと堪える。
「それは、大変だったな」
「うん。事務所に着いたら着いたで、お化け屋敷みたいになってるし、みんな仮装して怖いし、これ着てくださいとか言われて着替えさせられるし」
「まぁ、あいつらも久しぶりにアメリカに帰ってきたから、嬉しくなったんだろ」
「あ……そうか。みんな、元々こっちにいたんだよね」
　この事務所の裏事情を忘れていたのか、こくこくと頷いて納得する。

「託生にアメリカのハロウィンを教えたかっただけだろうから、あまりふくれるなよ」
「ふくれてなんかいないよ」
　怖かっただけ。
　ボソボソと言い訳する託生に、もう一度、口唇を重ねようとした瞬間、
　ドン！ドン！ドン！ドン！
「副社長ーっ！葉山さーんっ！」
　……まーつーもーとーっ！
　慌てて託生がオレを押しのけ、ドアに駆け寄って開いた。が、ノブを握り締めたままその場で固まる。
「ぶっ……ま……松本さん、それ……」
「河童です」
　顔を覗かせた松本の姿に吹きだし、託生は腹を抱えて笑い出した。
　おい、レベルアップしてるぞ、松本。いつの間に顔まで緑のファンデーションを塗ったんだか。
　松本の背後に見えるジョンも、声も出せずにソファに突っ伏している。
「あ、葉山さん、それ妖怪の大元締めですよね？！」
　嬉しそうに松本が指摘するが、そうなのか？鬼太朗って、そういう漫画だったか？
　託生も疑問に思ったのか、首を捻りながら、
「ギイ、そうだったっけ？」
　と、振り返る。
「そこまで日本文化は知らんぞ」
　それよりも、自分の国のことを、アメリカ人のオレに聞くなよ。
　相変わらずな託生に笑いそうになったが、松本の存在が邪魔だ。
「で、なにか用か、松本？」
「あ、そうです！これから、ハロウィンパーティをするらしいので、会議室に来てくださいって」
「……パレードにでも繰り出すんじゃないのか？」
　オレ達は無理でも、あそこまで仮装してるんだ。松本もスタッフも、そのままパレードに紛れ込める。
「いいえ。先ほど島岡さんから連絡が入ったのですが、事務所の引越し祝いも兼ねているそうです」
　後半は、託生に聞こえないように、こそっと松本が耳打ちする。
　なるほど。だから、オレと松本を、ここに送り込んだのか。
　オレは事務所のオーナーとして。松本はムードメーカーとして。さすが島岡、気が利くな。
　会議室に移動しようと廊下に一歩踏み出したとたん、くいっとマントが後ろに引っ張られた。
「託生？」
「ううん。なんでもないんだけど」
　引きつり笑いを浮かべつつ、オレを盾にしてお化け屋敷が目に入らないように隠れる託生をマントで包み込む。
「ちょ……ギイ」
「ドラキュラには獲物が必要だよな」
「獲物って……」
　呆れながらもマントの中から出てこないのは、深い意味はない。単純に怖いから。
　変わらない託生に頬が緩み、左手でマントを上に上げ影に隠れてキスをした。
　会議室の中は、すでにパーティの準備が整い、乾杯を待つばかりだ。
「すごい」
「島岡さんがケータリングを手配してくださったんです」
　託生の感嘆の声に、フランケン……いや、桜井が答え、多少この状況に慣れてきたのか、それともオレが側にいるからか、託生が嬉しそうに微笑む。
　シャンパンが配られ、桜井がオレに挨拶を頼んできた。

「慌しい事務所の海外移転、大変にご苦労だった。本拠地を移し戸惑うことも多いだろうが、これだけのチームワークを見せてもらったので、全くオレは心配していない。これからも、バイオリニスト葉山託生を盛り上げていってくれ」
　同意の拍手の中、託生が隣でペコリと頭を下げた。
「料理が冷めてしまうので乾杯と言いたいところだが、こういう面子が揃っているのだから、今夜はこれだよな。Happy Halloween！」
「Happy Halloween！」

　ハロウィンパーティは深夜まで盛り上がり、アメリカ式のパーティに託生も徐々に慣れてきたようだった。
「楽しいか？」
「うん！」
　弾けるような託生の笑顔が、すぐ側にある。託生が、ここアメリカに来たのだと実感する。
　こうやって時間を重ねていけば、十年のロスなんて、いつか笑い話になるのだろうか。
　もう一度刻み始めた運命の時計。
　今度は止めることなく、永遠に回し続けよう。

ハロウィンが終わるまでに間に合わないと思っていたのだけれど、半端ない集中力を使ってしまいました。
すげーと、自画自賛（笑）
一応、時流に乗りましたよ～♪
(2012.10.31)

flower(2011.2)

　会議が長引き一便遅れて着いたシャルル・ド・ゴール空港。
　慌てて花市場に行き、
「花束を一つお願いしたいのですが」
　飛び込んだ店の女性に注文した。
「……『永遠の愛』でよろしいですか？」
「え？」
　オレの驚いた顔見て、女性は「ふふふ」と口に手をあて上品に笑った。
「以前、こちらで花束を作られた事がありましたよね？」
「あ……」
　島岡に背中を押されてパリに来て、ふらふらと入った店はここだったのか。当時の記憶が、オレにしては珍しく曖昧なので忘れていた。
「あんな思い詰めたような顔をしておっしゃるものだから、もしかして心中でもされるのかと心配していたんですよ」
　からかう様にかけられた言葉に苦笑する。
　そうだったかもしれない。あの時オレは生きる理由をなくしていた。託生のいない現実を改めて認識して、これから何の為に生きていくのだろうと、暗闇に放り出されたような気分だった。
　あんな状態だったのに、オレはそう応えていたのか。
　当時を思い出し、今の幸せに感謝する。
　今日も。いや、これからも。
「『永遠の愛』をお願いします」
　オレの言葉に女性は嬉しそうに頷き、手際よく花束を……紫チューリップの花束を作ってくれた。
「お幸せに」
　女性の声に見送られ、パリの下町に飛び出す。
　この花束を見て、託生はなんと言ってくれるだろうか。いや、コンサートのたびにいくつもの花束を貰っているあいつは、もうすでに忘れているかもしれない。
　それでも、オレはこの花束をお前に贈ろう。
　――――――永遠の愛を、お前に誓う。

お口直しに。
(2011.2.5)

flowerのおまけ(2011.2)

　幕が下り慌てて駆け付けた託生の楽屋は、すでに花で溢れかえっていた。
　しかし、この手で花束を渡せる喜びの前では、どんな花も気にはならない。
「託生、ほら」
「ありがとう、ギイ」
　託生は両手で嬉しそうに花束を受け取り、あの時と同じように顔を近づけ、ふと怪訝な表情をした。そして、花を見て小首を傾げ、オレを見る。
「どうした？」
　もしかして覚えているのか？
「初めてのフランス公演の時に、同じ花束を貰ったんだけど…」
「けど？」
　託生は言うか言うまいか、迷ったように口ごもった。
「何かあったのか？」
　あの後、何か記憶に残るほど嫌な事でもあったのだろうか。桜井からは、そんな報告はなかったはずだが…。
「……ギイ、このチューリップの花言葉知ってる？」
　それは、もちろん『永遠の愛』だが、今更託生に伝えるのも少々照れる。
　黙ったままのオレをどう取ったのかはわからないが、
「紫のチューリップって永遠の愛なんだって。あとから聞いて、どうしようって思っちゃって」
　託生は困ったような顔をした。
「どうしようって？」
「だって、ぼく、そんな気持ち受け取れないし……」
　あぁ、託生は、オレじゃない他人からだと思ったんだな。
　…って、お前、その花束どうしたんだ？！捨てたとか？！
「で、どうしたんだ？」
　さりげないふりをして、誘導する。捨てたとか言わないでくれよ！
「うん。深い意味はないかもしれないと思って、花瓶に入れた」
　ほーっと安堵の溜息がこぼれる。
　捨てたとか言われたら、当分立ち直れそうにない。
「チューリップって可愛い花だと思ってたけど、紫のチューリップは綺麗な花だよね」
「そうだな」
　花言葉の話は終わりだと言うように、託生は花束をしげしげと見て嬉しそうに笑った。
　ま、託生に伝わらなくても、24時間365日年中無休で誓ってるけどな。
「もう帰れるのか？」
「うん」
　疲れているだろうから、早くホテルで休ませてやって……。
「あ！」
「どうした？！」
　突然の大声に託生の荷物をまとめていたオレが慌てて振り返ると、託生は片手で口を押さえ花束を凝視していた。
　そして。
「もしかして、ギイ？」
「なにが？」
「以前貰ったチューリップ」

う……。終わった話だと思っていたのに、続いていたのか。
「ギイだよね？」
何がそう確信させているのか、嬉しそうに託生が聞く。
「さあ？」
ここはシラを通すしかない。
「ギイだよ」
だから、今更言うのは恥ずかしいんだってわかれよ。
「だってギイしかいない……んん」
だから、言わせるな。
少し長めのキスをして、おまけに桃色に染まった頬にもキス一つ。
ごまかされたと拗ねた目にクスリと笑い、荷物を持ち上げた。
言わなくても、わかってるんだろ？これからは、ずっと紫のチューリップを贈り続けるから、それで許してくれ。

ブログより転載
(2011.2.6)

flowerのおまけのおまけ(2011.2)

　おかしい。なにかが、おかしい。
　普段のギイなら、深い意味はないかもしれないけれど、意味深な花言葉を持つ花を貰ったりしたら、機嫌が悪くなるだろうに。それが数年前であっても。
　文句一つも言わずにスルーするなんて、ギイらしくない。
　古城にいた頃は親しい友人に接するような振る舞いを見せてはいたけれど、二人の仲が戻ったと同時にギイの態度はあっという間に元通り。
　傍若無人で我侭でヤキモチ焼きで。そして宝物みたいに大切にぼくを愛してくれている。
　だからこその違和感。
　こういう所は今でも変わっていないのに……。
　ぼくの荷物を手際よく片付けているギイを横目に、もう一度紫チューリップを見た。
　あの時と同じチューリップ。あの時と同じピンクのリボン。
　花言葉『永遠の愛』
　あ……！
「もしかして、ギイ？」
「なにが？」
「以前貰ったチューリップ」
　あ、一瞬目が泳いだ。
　ギイ、来てくれていたんだ。
　紫のチューリップを貰ったのは一度きりの事だから、たぶんギイが来てくれたのも一度なのだろうけど、嬉しくて顔がゆるんでくる。
「ギイだよね？」
　すました顔でオレは知らないとでも言いたげに、
「さあ？」
　首を傾げている。
　でもね、耳が赤くなってるよ。ポーカーフェイスを被り損ねたみたい。ギイ、照れてる。
「ギイだよ」
　過去も現在も未来も、『永遠の愛』をぼくにくれるのはギイだけ。
　それなのに、知らんぷり。
「だって、ギイしかいない……んん」
　黙れと言わんばかりに降ってきたキス。
　少し乱暴に揺さぶって、吐息まで貪って、ぼくの思考をかき乱すように甘くねじ伏せる。
　こうなると喋れなくなるのがわかってるのに、ずるい。
　余裕で笑うギイを睨みながら、いつか仕返ししてやると心密かに決めた。

おまけのおまけ（笑）
(2011.2.6)

小さな記憶～After～Resetバージョン(2011.4)

《穏やかな時間の中で》カテゴリーの「小さな記憶」の続きです。

「なに、これ？！」
　暇つぶしに本でも借りようかとギイの書斎に行ってみると、さっきまでいたはずなのに本人は不在で、でも机の上に出しっぱなしのパソコンを見て、すぐに戻ってくると判断したぼくは、壁際の本棚を眺めて待っていた。
　そして、見つけた懐かしい1冊のアルバム。
　その隣にあるのもアルバムだろうけど、見覚えのあるのはこれだけ。
　真夜中のゼロ番で写真を一緒に貼った幸せな時間を思い出して、アルバムをパラパラ捲っていると、高校時代直後のページから、ぼくの写真が……どう見ても離れていた頃の写真が、所狭しと貼られていた。
　雑誌に載ったような写真をスクラップしたものじゃない。俗に言う、生写真と言うものだ。
　しかもコンサート中だと思われるテールコートもあれば普段着のものまで、ありとあらゆるぼくがそこにいた。
「まさか」
　置かれている数冊のアルバムも取り出して開けると、
「やっぱり……」
　ここにも、１０年間のぼくがいる。その数、実に数百枚。
「託生、どうし……」
　部屋に戻ってきたギイが、ぼくの手元にあるアルバムに気づいたとたん、固まった。
「ギイ、これ、どうしたの？」
「あー、色々とコネを使ってだな」
「はっきり言いなよ。もしかしなくても、桜井さん？」
　これだけプライベートな写真なんだ。桜井さんしか、絶対撮れない。
　視線を彷徨わせていたギイが、諦めたように溜息を吐き、
「そうだよ。桜井に送ってもらっていた」
　腹をくくったように白状する。
「だから、私用で桜井さんを使っちゃダメって言ってるだろ！」
　ただでさえ、マネージャー兼ＳＰという大変な仕事をしているのに。あんな真面目な人に隠し撮りを命令するなんて、絶対桜井さん悩んでいただろうなって、このぼくでもわかる。
「いいだろ。写真でしか託生を見れなかったんだから」
　開き直ったのかギイはぼくの隣に座りこみ、パラパラとアルバムを捲り始めた。
　ぼくもそうだったから、ギイの言い分はわかるけど。それに……人の事言えないし。
「そう言えば、託生のアルバムは？こっちに持ってきたのか？」
　ヤバイ。
　瞬間、引きつったぼくの顔をギイが見逃すわけもなく、
「たくみくん？」
　その締まらない顔は止めてくれ。クールで敏腕な副社長のイメージが台無しだよ。
「あ……あのね」
「オレ、日本の雑誌の取材を受けた事とか、結構あるんだけどな」
　そうだね。知ってるよ。毎月チェックしていたし。
　じりじりとにじり寄るギイに、後ずさるぼく。
　詰め寄らなきゃよかった。後悔先に立たず。いつまでも学習できない、ぼくの頭。
　壁際まで追い詰められて咄嗟に右方向に飛び出すも、反射神経が素晴らしいギイにあっけなく捕まり柔らかな絨毯の上に転がされた。

「往生際の悪いヤツめ」
　口角を上げて楽しそうに眺めるギイに、
「……お手柔らかに」
　一応要望を口に出すと、意外そうに眉を上げ、
「了解」
　軽々とぼくを抱き上げ、寝室のドアを開けた。

「Destiny」「Secret内Life」にも、それぞれのアフターがあります。
(2011.4.1)

Good Night(2014.5)

　かすかな衣擦れの音を耳が拾い、指先に触れたシーツを探るように腕を伸ばした。……つもりだったが、たぶん1ミリも動いていないだろう。
　ふわふわとした心地よい睡魔と、余すところなく愛された名残が、幸せと共に気だるく体を包み込み、また夢の中に引きずり込まれそうだ。
　うとうとと夢と現実の狭間を行き来している耳に、また衣擦れの音が届いた。
　ぼんやりと重い瞼を開け音のした方向に視線を向けると、ギイがいた。
　窓の向こう側は朝を迎えた気配がするけれど、カーテンを閉め切った室内はまだ薄暗い。
　ぼくを起こさないようにか、ゆっくりとした動きでシャツのボタンを留めるギイの後ろ姿だけが部屋に浮かび上がっている。
　背中、広いなぁ。
　綺麗にプレスされたシャツが体のラインを写し、何度も見ているはずなのにドキリと心臓が鳴る。
　帰る家は同じなれど、ここ数週間仕事ですれ違い、会ったとしても寝顔だけという、なんとも複雑な日が続いていた。お互い仕事をしているのだから、仕方が ないのはわかっていたけれど、隣にギイが寝ていて我慢しなければならないことも、疲れているギイに対してそんなことを考えてしまう自分に自己嫌悪に陥ったりもした。
　だから珍しく早く帰ってきたギイに求められても、なぜだか腹が立って拒否してしまって……今考えれば、完全なる八つ当たりだと思うけれど、そんなぼくにギイは苦笑しつつ言葉巧みに丸め込み、気付けばギイの腕の中。
「託生の寝顔で我慢してたんだぜ？」
「う…そ……つき……っ」
「ほんとだって。確かめてみろよ、託生」
　揺れる体と視界に映る光る汗。口唇に直接吹き込まれる囁きが、ぼくの脳内をかき回し、文句はいつのまにか言葉にならないものになっていた。
　……と、ギイの背中を見ながら思い出し、一人顔を赤くしていたら、
「まだ、寝てろよ」
　ネクタイを結びながら振り向きもせずギイが言い、飛び上がらんばかりに驚いた。
　気付かれていないと思っていたのに、なぜ？！
　あたふたとシーツを引っ張り上げて、赤くなった頬を隠そうとしたぼくの視界に、壁にかけてある鏡の中でニヤリと笑うギイが映る。
「……ギイっ」
　気付いていたなら声をかければいいのに、相変わらず意地悪だ。
　こっそり見ていただけじゃなく、昨晩のあれやこれやを思い出してしまった気恥ずかしさから、乱暴に寝返りを打ったぼくに頓着せず、大股にベッドに近づきギイは枕元に腰かけた。
「悪趣味だよ」
「ごめん、託生があまりにも可愛くて」
　言いながら大きな手が頬を滑り、反対の頬に口唇が触れる。
「オレに見惚れた？」
「見惚れてません」
「ずっと見てたじゃん」
　ニヤニヤと嬉しそうに指摘され、
「あー、もう、しつこいな」
　目の前にある頬を撫でる親指を苛立ち紛れに噛み、ふと思いついてそのまま舐めてみた。とたん勢いよく視界がぐるりと回り、熱い口唇に簡単に塞がれてしまう。

「誘ってる？」
「誘ってません」
　舌を絡めながらくぐもった声で返事しても信憑性は薄いと思うけど。
　覚醒しきっていない意識が、今度は甘く移り変わっていく。
「こんなになってるのに？」
　シーツに潜り込んだ悪戯な手が、ぼくの肌を探っていく。昨晩、指先がたどった軌跡を体が思い出し、体温がふわりと上がったような気がした。
　あんなにもしたのに、まだギイが欲しいなんて……。
　少し掠れたギイの声に流れてしまいそうになったとき、素肌に当たった時計の冷たさに意識がクリアになった。
「……ィ、ギイっ！仕事！松本さん、迎えに……」
「待たせておけよ」
「なに言っ……ダメだったら、ギイ！」
　ぼくは、人を待たせてまでSEXできるほど厚顔無恥じゃない。そんなことをして、次にどんな顔で松本さんと顔を合わせればいいんだ。
　ジタバタと暴れだしたぼくに、先を進めることを諦めたのか、
「相変わらず、男心の妙がわからんヤツだな」
　全体重を乗っけて枕にどさりと頭を置き、ギイは大きな溜息を吐いた。
　失礼な。昔はともかく今は理解してるよ。仕事で出かける用事さえなければ、このまま二人でベッドにいてもいいかなと思うくらい。
　だから、
「続きは、今夜にしよ」
　早く帰ってきての願いと、その気にさせられたことへの仕返しを兼ねて、俯せているギイの耳に口唇を触れ合わせ囁く。これだけで悶々とした一日を送るだろうことは承知の上。
　案の定、ギイはビクリと体を震わせ「くそっ……」低く唸り、勢いよくベッドから起き上がった。
「絶対、帰ってくるからな。拒否るなよ」
「うん」
「寝てても起こすからな」
「いいよ。どうせならバスローブ一枚で待ってようか？」
　ぼくが言うなり、ギイは鼻を押さえて俯き、
「あー、うん、そうだな」
　などと、ボソボソと口の中で唱えて諦めたように力なく立ち上がった。と同時に、ぼくもベッドの上に起き上がる。
　あちらこちらにキスマークが散っているのは、昨日の情事を思い出せば見なくてもわかること。そして、これが煽る材料になるのも、ギイの性格を知っていれば簡単に想像がつく。
「いってらっしゃい」
　恨めしそうに見るギイに、にっこりと手を振ると、
「いってくる」
　軽くキスをして上着を手に取り、ギイは部屋を出ていった。
　――――――――――三秒後。

「ちくしょーーーっ！」

　廊下から聞こえてきた絶叫に吹き出し、
「いつまでも、やり込められると思うなよ」

　呟いて、もう一度ベッドに潜り込む。
　あれだけ煽れば、昨晩以上に濃厚な夜になるのは絶対だから、夜までに体力を戻さなきゃね。
「おやすみなさい」

先日のフォルダ上書き事件で、旧フォルダから捨てたはずのファイルが復活し、どうせだからと仕上げてみました。
山なし谷なしだったから、ボツったんですけどね；
暇つぶしのショートショートだと思ってください。
(2014.5.5)

十年越しのSilent Night(2011.12)

　本来クリスマスというのは、イエス・キリストの降誕を祝う日。
　欧米諸国では祝い方はそれぞれだが、基本誰もが家族だけの大切な時間を過ごす。
　だからクリスマス休暇というものがある。
　それなのに、日本ではクリスマスというのは恋人の日なのだ。イブは恋人とディナーを食べ、イルミネーションを見て、一夜を過ごす。
　一夜を過ごすような仲でなくとも、映画を見たりコンサートに行ったり、とにかくクリスマスは恋人と過ごす日と日本では広く認識されている。
　ようするに、コンサートを開催する側にとって、クリスマスは仕事の日……。
「いったい誰が決めたんだ？！」
「うーん。昔の女性誌が提案したらしいよ。『クリスマスは恋人と過ごしましょう』って」
　激高するオレとは反対に、託生はのほほんと答え暖かいホットワインを一口飲んだ。
「うん、美味しい」
　満足げな表情にオレの心も幾分浮上しそうにはなったが、さすがに今回はこの託生の笑顔でも納得はできそうにない。
「それ、邪道だぞ？クリスマスは家で家族と過ごす日だ」
「言われてもねぇ。仕方ないじゃないか。それが日本文化なんだから」
　いや、違う！絶対、間違ってる！
「ギイだって、仕事だろ？」
「でも、さすがにクリスマスは早いぞ。イブは大晦日。当日は正月みたいなもんだ。日本でも年末年始に働いているやつは珍しいだろうが！」
「と言ってもね」
　あぁ、あぁ、日本文化だろ？
　確かにクリスマスは元々欧米から入ってきたもので、キリスト教文化云々よりも日本ではイベント化している。小さな子供がいる家庭はともかく、その日はどこもかしこもカップルで溢れかえっているのは言うまでもない。
「ギイだって、結局は恋人の日にしようとしてるじゃないか」
　……そうだけどな。じゃなくて、違うぞ！一緒に住んでるのだから家族だ、家族！
　だから、オレが託生とクリスマスを一緒に過ごしたいってのは、当たり前のことなんだ。
　憮然としたオレを呆れたように見つめ、託生は溜息を吐いた。
「あのね、ぼくの年間スケジュールが決まったのは一年前なんだ。ギイと再会する九ヶ月も前だよね」
「……そうだな」
「チケットももう発売されてる。今更言われても変更はできないよ」
　理性ではわかる。
　オレのいない場所で、託生は託生の生活があり、仕事があり、そうしてこの十年を過ごしてきた。オレの意見など全く無関係の生活。あの時再会しなければ、託生は今でも日本に住み、それまでと同じ生活を続けていたはずだ。
　しかし、二人一緒にいるために託生はアメリカに来てくれ、今はオレと一緒に暮らしている。
　少しくらい我侭言ったっていいだろ？十年ぶりのクリスマスなんだぞ？
「なぁ、クリスマス……」
「一緒にいることは無理だね」
　しつこく続けたオレに、託生はあっさりバッサリぶった切った。
　十二月早々、札幌からツアーが始まり、博多、広島、大阪、名古屋、ラストに東京二日間。しかもイブとクリスマス当日！

　クリスマス一色に染まるこの街に、オレ一人残されるのか……。
「あのさ。この際だから言っておきたいんだけど」
　がっくり肩を落としたオレに、託生がついでとばかりに声をかけ、オレは力なく託生に目を向けた。
「なんだ？」
「これから毎年クリスマスを迎えるたびに言い合いするの嫌だし」
「毎年……」
　あぁ、そうか。クリスマスは毎年あるものだった。この十年、クリスマスなんて眼中になかったからな。……と言えば、託生に突っ込まれるか。
「そう、毎年。ギイには悪いなとは思うけど、こういう仕事をしているんだし、やっぱり日本でのクリスマスコンサートってぼくにとっては仕事収めみたいなものなんだ。だからクリスマスに会うのは諦めてほしい」
　昔ならオレの意見も考慮して、もう一度考えてくれたところだろうが、こと仕事に関してはきっぱり諦めろと託生は言う。
　仕事だから諦めないといけないのか？このオレが？託生に会うのを？
　いや、あの小屋を処分したときに決めたんだ。もう二度と託生を諦めないと。
　託生が日本から動けないのなら。
「じゃ、オレがその時日本にいれば会えるか？」
「コンサートが終われば会えるけど、でもギイも仕事だろうし無理してもらいたくないんだ」
「無理じゃない！」
「そう言ってもね、忙しいだろうし。ギイがオフで日本にいたら会おうよ」
「絶対だな？」
　そんな都合のいいことなんて、どれだけスケジュール調整してもありえなさそうだけど、足掻けるものなら最後まで足掻きたい。
　クリスマスなんだから。
「うん。ギイがオフならね」
　ニコリと笑う託生に「約束だぞ」と合わせた口唇から濃厚なワインの香りが漂い、その香りに誘われるように口付けを深くした。

　十二月早々、託生は桜井と日本に飛び、オレはなんとか仕事を詰め込みオフをもぎ取ろうと懸命になったものの、すでに今日は二十四日。
　日本はあと少しで二十五日に日付が変わるだろう。
　イルミネーションが輝き、人々の姿が少なくなり、誰もが家族と大切な時間を過ごしていると言うのに……。
　やはり諦めるしかないのか……。
　大きな溜息を吐いたとき、ノックもなしに松本が飛び込んできた。
「なんだ、松本？」
「会長のスケジュールが変更になり、急遽代理で日本のパーティに出席してほしいと、島岡さんから連絡が入りました」
「日本？」
「はい、日本です」
「飛行機は？」
「パーティに間に合わないので、ジェットを使えと」
　天はオレを見捨ててはいなかった！今からなら数時間だけでもクリスマスを託生と過ごせる！
「副社長……？」
「なにをグズグズしている？松本、行くぞ！」

託生のいる日本へ！
グググと拳を握りこんだオレを覗き込んだ松本が、オレの叫び声にギョッとして後ろに一歩下がり、
「はははははいっ！」
飛び込んできたときと同様、今度は慌てて飛び出した。
今から行くぞ、託生！待ってろよ！
約十三時間のフライト。到着するのは日本時間二十五日の夕方。パーティに出席したとしても、残りの数時間は託生と一緒に過ごせる。
プライベートジェットに乗り込み、ここ数日睡眠不足が続いていたオレは、そのままシートを倒し横になった。
十三時間後、松本の声に起こされ、すっきりとした頭で空港に降り立ち……。
「日本と言ったよな」
「はい。日本……ですよね？」
予想していた風景と全く違う目の前の景色にクラリとした。だだっ広い滑走路の向こうにはターミナルビル。しかし、その周りには空港関係のビル以外は何も見えない。それもそのはず。確かにここは日本だが……。
「大阪じゃないか！」
海に囲まれた関西国際空港。冷たい海風が頬に痛い。
オレは、東京に行きたいんだ！
「なに、言ってるんですか？パーティがあるのは大阪ですよ」
呆れ顔の松本に舌打ちし背後を振り返り、今乗ってきたばかりの機体に目を向ける。
「ジェットは、そのまま置いておけよ」
「あ、それは無理です」
「松本～～」
「このまま成田に飛んで、そのあと会長が使うそうです」
なら、このままオレも乗せていけ！
「副社長、時間がないんですから急いでください」
むっすり黙ったオレに頓着せず松本が急かし、オレを逃がさないためかSP二人が背後に張り付いた。
くそっ、ジェットが使えないなら、新幹線を使うしかないのか。いいかげん日本もリニアを走らせろってんだ。
「僕、大阪に来たの初めてなんです」
迎えの車に乗り込み湾岸線を走る車の窓から、暢気に外を眺めながら話しかけてきた松本に、
「大阪は粉もんが名物だからな。機会があったら食べにいけばいい」
そう答えつつ、さりげなくタブレットを開き時刻表を確認する。
「粉もんですか？」
「小麦粉を使って鉄板で焼いたものにソースを塗った……お好み焼き、タコ焼き、イカ焼き、ネギ焼き、キャベツ焼き……あぁ、大概お好み焼き屋には焼きそばもあるぞ」
松本がゴクリと喉を鳴らした。
食い物の話題にかぶりついている松本を横目に、のぞみの最終は……。ラストの数便を頭に叩き込む。
東京駅に着くのが日付変更の十五分前でも、クリスマスはクリスマスだ。なんとしてでも、今日中に託生に会ってやる。日本にまで来ているのだから。
空港から約一時間。パーティが行われるホテルに着き、通された部屋はキャッスルビュー。
「あれが大阪城なんですね。すごいなぁ。日本の城って格好いいですね！」
のこのことオレの部屋に着いてきた松本が、窓から見える大阪城に歓声を上げる。日系とは言えアメリカ生まれのアメリカ育ち。
東京の皇居には天守閣がないからな。こんなに近くで日本の城を見たのは初めてなのだろう。
「天守閣の見学は夕方までだが、ライトアップは二十三時までやっているから、公園内は自由に歩けるぞ」

「本当ですか？！」
「パーティが終わったら行ってみたらどうだ？ここからなら、そこに見えている大阪城新橋を渡って大阪城ホールの裏に周り、青屋門から極楽橋を渡って道なりに上っていったら天守閣だ。ただし、昔合戦があった場所だからな。覚悟して行くんだな」
　目を輝かせて振り向く松本にニヤリと笑う。
「覚悟って……」
「鎧兜を被った人間と会わなければいいな」
「副社長～～～」
「ほら、さっさとお前も用意してこい」
　松本を追い出しシャワーを浴びてタキシードに着替え、着てきたスーツはクローゼットにかけることなくスーツケースに入れた。
　どうせここには泊まらないのだから、散らかす必要もない。部屋に戻る時間がないのなら、松本に持ってこさせればいいだけの話。財布と携帯さえあれば事がすむ。
　あらかじめクロークにコートを預け、松本と合流して二階のパーティ会場入った。
「クリスマス当日にパーティをするなんて不道徳だぞ」
「なにか言いました？」
「いや、なんでもない」
　当てつけのように飾られている大きなクリスマスツリーに呟くも、このパーティがなければ日本に渡れなかったのだから、お門違いの八つ当たりなのだが。
　関西圏を中心とする企業のお偉方が揃ったパーティは、オレから見ればただの忘年会。それでも親父の代理だからと、にこやかに挨拶回りを開始する。
　飲み物片手に次々と足早に話しかけ、会場内を一回りした頃にはすでに一時間が経っていた。
「松本。一通りの挨拶は終わったから食ってこいよ。このホテルの料理は旨いぞ」
「はい！」
　オレの言葉に受け皿を手に取り松本がテーブルに近寄って選び出したのを確認し、そっと二階のバンケットルームを抜け出した。
　東京行き最終ののぞみが二十一時二十分。ホテルから新大阪までタクシーで約二十分。それも混んでなければの話だ。切符も買わなければいけない。
　所要時間を考えて逆算すると、ホテルを出るのは遅くとも二十時四十分。これがぎりぎりだ。
　腕時計を見て部屋に戻るだけの時間が残されていないと判断したオレは、そのままホテルを出ようと、エスカレーターで吹き抜けのエントランスホールに降りようとしたとき、
「副社長、どこに行かれるんですか？！」
　慌てて呼びかけてきた松本の声に舌打ちをする。
　食ってたんじゃないのか？！どうして、こいつは、こう目ざといんだ？！
「野暮なこと言うなよ」
「はい？え？」
「一時間出れば十分だろ？」
「いや、それは困ります！会長の代理なんですから！」
「もう義理は十分果たしただろうが。挨拶回りも終わった。オレは急いでるんだ」
「急ぐって……副社長、待ってください！」
　口論している内に、SPまでも追いかけてきて苛立ち紛れに前髪をかきあげた。
　廊下に置かれている置時計の針が八時三十五分を指している。タイムリミットまであと五分。
　力ずくでエスカレーターを駆け下りようと振り向いたオレの視界に、フロントでカードキーを受け取っている愛しい姿が目に飛び込んできた。
「託生……？」

「葉山さんですか？」
　オレの声に同じように一階を覗き込んだ松本が、
「葉山さーんっ！」
　手を振りながら大声で叫んだ。
　突然の大声にギョッとなる。お前、ここは一応名のあるホテルだぞ？
　松本の声にキョトンと顔を上げた託生は、一言二言フロント係と言葉を交わしたあとエスカレーターを上ってきた。
「託生、お前……」
　コンサートは、どうした？と続けようとしたオレの声をさえぎって、
「葉山さんっ！副社長が、副社長が！！」
　松本が託生の両手を握り泣きついた。
　おい、こらっ！託生はオレの物だと、初対面のときにあれだけ認識させたのに、お前の頭は鳩頭か？！
　松本の言葉に、託生がキッとオレの顔を睨みつける。
「ギイ、なにしてるの？」
　いや、オレこそ同じ質問を託生に返したいんだが。
「い……いや、ただの夕涼み」
「もう、夜だよ」
　しみじみと呆れた声に、苦しい言い訳だなと自分でも突っ込み、数週間ぶりの恋人の姿を眺め気がついた。舞台衣装のテイルコートの上にそのままコートを羽織り、手にはバイオリンケースのみ。
「託生こそ……」
「島岡さんにギイが大阪にいるって聞いたから来ちゃった」
「来ちゃったって……」
　お前、コンサートは？桜井はどこにいるんだ？それに、NYから持ち出したあの大きなスーツケース……。
「パーティはまだ終わってないんだろ？」
「あ、あぁ」
「じゃ、ぼく部屋で待ってるから、行っておいでよ」
　その言葉に、オレではなく松本がホッと溜息を吐く。
　あからまさまなその態度にムッとする。お前、託生をなんだと思ってるんだ？お前専用の救世主じゃないんだぞ。
　片手で松本とSPを追い払いエレベーターのボタンを押した。
「わかった。もう少しだけ出てくるから、待っててくれよ」
　監視カメラの前でキスをするわけにはいかず、そっと頬にかかった黒髪を指先で梳き親指で頬を撫でる。
　つと伏せた目を上げオレの視線に絡み合わせ、
「うん、待ってる」
　囁いた託生の瞳は、オレと同じ色に染まっていた。

　濡れた肌に手を滑らせ、やっと穏やかなキスを仕掛けると、託生がくすぐったそうにクスリと笑った。
「うん？」
「切羽詰っていたみたい」
「お互いな」
　部屋に戻り託生の姿を捕らえたと同時に腕が絡まった。どちらが先に伸ばしたのか、今となってはささいもないこと。言葉もなく湿った音だけが二人を繋ぎ、気付けば床の上で縺れ合っていた。
　飢えをしのぐ様な肉の疼きに限界はなく、ベッドに移動する時間さえもお互いの肌は離れることを知らず、白い波に倒れこみ何度も溺れた。

「今、何時かな？」
「んー、十時五十分……しまった！」
「ギイ？」
　ベッドサイドの時計を覗き込んで時間を確認したオレは、手早くガウンを羽織り、隣の部屋からグラスとシャンパンを持ち出した。
　オレの手にあるものを見て「あ」と短く託生が声を上げ、オレと同じように今日この日を忘れていたことに照れを感じたのか、いそいそと枕をベッドヘッドに置き上半身を起こす。
　シャンパンを注いだグラスを託生に手渡し、カチンとグラスを合わした。
「メリークリスマス！」
　せっかくクリスマスに間に合ったんだ。それなのに乾杯さえしていなかったのは、少々問題が残る。
　口の中で弾ける感触に、先ほどの自身の感情が弾けるさまを思い出し、また体が熱くなるのをとりあえず理性で押し殺した。まだまだ時間があるんだ。そう急がなくても夜は逃げない。
「美味しい。ね、ギイ、もう一杯」
「はいはい。運動のあとだから喉が渇いてるもんな」
「ギイ」
　声は怒りつつも目が笑っている託生のグラスに注ぎ、そのまま自分のグラスにもにも注ぎいれた。
　窓の外には暗い森の中に浮かび上がる古い城。NYの街を彩るイルミネーションもクリスマスらしくていいが、こういう静かなクリスマスもいいかもしれない。
「ここって、大阪城がよく見えるんだね」
「まぁ、住所そのもの城見だしな。でも託生も何度か大阪には来てるんだろ？」
「うん。つい数日前も来たけど、SホールかFホールだから、大抵大阪駅前か新大阪周辺なんだよね。隣のIホールは、初めて大阪に来たときに演奏したけど……あ、消えた」
「ライトアップは二十三時までなんだよ」
「そうだったんだ。最後に見れてラッキーだったね」
　周りはまだ明るく輝いている中、大阪城の敷地内のみ闇に包まれる。まるで大切な宝物を隠してしまったかのような光景に、オレの心が重なって分厚いカーテンを閉めた。
　世間に閉ざされた二人だけの空間。
　ぼんやりとオレの行動を見ていた託生の瞳にぶつかり、片隅に置いていた疑問を思い出す。
　どうやって東京まで行こうかと思案していたのに、託生がここに来てくれオレ達はクリスマスの夜を過ごしている。しかし、どうやっても時間のイリュージョンがオレにはわからなかった。この託生がコンサートをボイコットすることは、絶対に考えられない。
「あのな。どうしてもわからないんだけど、コンサートはどうした？」
「もちろん終わらせてきたよ」
「でも時間……」
「あぁ。二十五日のコンサートはお昼なんだ」
「昼ぅ？！」
　聞いてないぞ、そんなこと！
「うん。アンコールが終わって楽屋に戻ったら島岡さんから電話がかかってきて、ギイが大阪にいるって教えてくれたんだ」
　なるほど。親父に同行している島岡なら、オレが大阪にいることはもちろん、スケジュールも把握しているだろう。
「それで……」
「うん、あとのこと桜井さんに任せて新幹線に飛び乗ったんだ」
　なんてことはないように託生は言うが。
　オレが日本にいる。それだけでコートを羽織りバイオリンだけを持って、文字通り飛んできてくれた。

　オレが託生を求めるように、託生もオレを求めてくれた。
「そんなにオレに会いたかった？」
「うん、会いたかったよ」
　嬉しさに茶化した言葉に、昔なら恥ずかしがって言わない台詞を、惜しげもなく口にする託生にオレの方こそ面食らった。
　クスクスと笑いながら、
「会いたくないとでも思ってた？」
　と聞かれ「まさか」と首を振る。
　さすがにそうとは思わなかったけど、託生の線引きした態度に不安になったのは事実だ。恋人と仕事。比べられるものではないのはわかっているが、初めから諦めているように見えて、オレの存在は託生にとって仕事以下のものなんだと勝手に落ち込んでいた。
「クリスマスだよ？日本人だからね。世間に踊らされているとは思うけど、やっぱりギイと一緒にいたかったよ」
　十年ぶりだし。
　囁くように続けられた言葉に、口付ける。
　同じ気持ちでいてくれたことが嬉しい。求めているのはオレだけなのかと感じた飢餓感が、少しだけ薄らいでいくのがわかる。だからと言って、薄らぐだけで消えることはない。
　オレはいつだって、お前を求めているのだから。
「十年ぶりだね。クリスマスを過ごすの」
「あぁ」
　託生と過ごした初めてのクリスマスは、人生初の風邪を引いたのと引き換えに、初めて『抱いて』と託生からの誘いの言葉を貰った。
　ただ笑ってくれるだけでよかった。それだけで幸せだったんだ。
　祠堂でふわりと心を包み込むような暖かな幸せを知ってしまったオレにとって、この十年は流れいく時間に任せるように漂い、虚ろに生きてきた。
　託生がこの腕の中に戻り、彩を取り戻したオレの人生。
　五年後、十年後と、この日側にいることが叶わなくても、お前の心はオレの側にいるのだと言ってくれるだろうか？
「来年のクリスマスの予約をしてもいいか？」
「うん。来年からはスケジュールをずらしてもらえるように、桜井さんに言ってみるよ」
「再来年は？」
　重ねて問うたオレに、託生は首に腕を絡ませ、
「これから先、ずっとね」
　耳元で悠然と笑い、鳥肌が立つように一気に煽られた。

わかる方にはすぐにわかってしまうホテルニューオータニ大阪がモデルでございます。
いや、別の場所でもよかったんですけど、調べるのが面倒で地元にさせてもらいました。
うん、大阪城なら初彼とよく行っていたから、隅々までわかる（爆）
本当は桜井さんもいたんです。
でも、さすがに時間的に無理で、ごっそりと抜きました。
ごめんね、桜井さん。
とにかく、PCの前に座れない、テレビが五月蝿い、ダンナも息子も五月蝿い。これが、邪魔でした。
なんとかクリスマスにアップ！

(2011.12.25)

Birthday (2014.2)

「あのね」
　呆れたような大きな溜息を吐き、
「この歳で誕生日ってのも別に嬉しくないし、だいいちにギイが仕事を疎かにすることほど、ぼくが嫌なことはないんだよ？」
「それは、わかってるけどさ……」
　のろのろとスーツに着替ている間に、さっさとコートをクローゼットから持ってきた託生が、腰に手を当ててすごんだ。
　託生の言わんとするところはわかる。
　オレだって、自分の誕生日は今更だと思うし、まぁ、それにかこつけ託生に我侭言ったりはするだろうけど、一つ歳を取ったからと言って嬉しいなんて思わない。
　けれども、託生の誕生日となれば別。
　この世に生まれてきてくれて、こうやって、今オレの側にいてくれる奇跡を祝う日なんだ。しかも、十年ぶりに。
　だから、なにがなんでも今日は休暇を取りたかったのに、どうしても抜けることが許されない契約で……、他のヤツを行かせば相手の機嫌を損ねてサインをし てくれないか、イチャモンをつけて契約条件を変更させられるか、とにかくオレが行かなきゃどうしようもない契約があって、渋々仕事に行く用意をしていたわけだ。
　そのとき、部屋の内線が鳴り、受話器を取った託生が一言二言喋ったあと、
「松本さんが迎えにきたって」
　受話器を静かに戻し、振り向いた。
　瞬間、むっすりと表情を変えたオレに、
「松本さんに、当たらないでよ」
　松本の顔を見たとたん、嫌味を言いそうなオレに釘を刺す。
「わかってるよ」
　託生の前で、そんなことするかよ。怒られるのはオレなのに。やるなら、車に乗ってからだ。
「ほら、そんな顔しないで。ぼくの誕生日なんだから」
　びよーんと遠慮なくオレの頬を伸ばして、託生が笑う。
　確かに、自分の誕生日に恋人が不機嫌なのは良くないよな。
　天を向いて大きく溜息を吐き、腕の中に託生を閉じ込める。
「早めに帰ってくるから。夜は二人でお祝いしような」
　スケジュールはいっぱいだけど、託生が生まれた日を祝いたい。……次は祝えるかどうか、わからないのだから。
「無理しないでね。いってらっしゃい」
　そんなオレの暗い心に気付かず託生がオレの頬にキスをし、応えるように行ってきますのキスを口唇に落とし、コートを片手に部屋を出ていった。

　午前中は視察に商談にと、あちらこちらに飛び回り、本社に戻ってきたのは昼過ぎのこと。次の仕事は、面倒なあの契約だ。
「お食事を、こちらにお持ちします」
「あぁ」
　それほど腹は空いていないけど、自分の体調管理も仕事の内。
　島岡が戻ってくるまでの間に、さきほどの商談内容をまとめておこうとPCに向かって数分後、ノックが鳴っ

た。
「どうぞ」
　声をかけつつも、ディスプレイから目を離さない。どうせいつものことだし、島岡も食事を置いて、すぐ部屋を出ていくだろう。
　そう思っていたのに、
「副社長。どちらに置けばいいですか？」
　なんて聞かれて、
「いつもの……え？」
　聞こえてきた声に思考が停止しギギギと顔を上げると、
「副社長、お昼ご飯の時間ですよ」
　してやったりというような表情で、託生がにっこりと笑った。
「託生……」
「今日だけ、秘書見習いの葉山です」
　首に許可証をかけ、スーツを着た託生がワゴンに手を添えてオレを見ている。
　ポカンとしてしまったオレに、
「で、ギイ。お昼ご飯、どこで食べるの？」
「え……あ、そのテーブルで」
　と応接セットを指差すと、託生は手際よく二人分の食事をテーブルに並べ、オレを手招きした。
「冷めちゃうから、ギイ、早く」
「あ、あぁ」
　どうせここには託生とオレしかいないのだからと、画面を開けたままソファに移動し、座ったと同時に託生が濡れタオルを手渡した。条件反射で受け取り、しかし、むくむくと疑問が沸き起こる。
「朝、そんなこと言ってなかったじゃん！」
「うん。島岡さんにも松本さんにも口止めしてたし」
　それでか。八つ当たりしても、なぜか松本がへこんでなかったのは。
「今日だけ？」
「そう、今日だけ」
「なんなら、これから空いた日は……」
「きょ、う、だ、け」
　ばっさりぶった切り「いただきます」と手を合わせた託生は、パクリとフォークを口にくわえた。
「やっぱり邪魔かな？」
「そんなことはない！」
　邪魔なはずあるか。託生が一日この副社長室にいて、秘書をしてくれるなんて！
　……ん？よく考えれば、託生が秘書をしてくれて嬉しいのは、オレ。しかし、今日は託生の誕生日。オレが喜んで、どうする？
「あのな」
「なに？」
「今日は託生の誕生日なんだから、オレが託生になにかをしたいんだけど」
「だから、やってもらってるよ」
「なにを？」
「お仕事」
　なにを今更と言いたげに、託生が首を傾げた。その角度が、また計算されたように託生の可愛らしさを倍増させているのだが、今日でお前何歳になったんだっけ？こんなに可愛くていいのか？歳、誤魔化してないか？
　いや、それよりも、託生。お前の台詞、答えになっていないと思うのだが、気のせいか？

「オレが仕事するのは当たり前のことなんだけど」
　そう。言い方は悪いが、託生のために仕事しているわけじゃない。オレは、自分のやらなければいけないことを、やっているだけだ。
　あ、そうかと呟いて、
「んー、ぼく、ギイがお仕事しているところが見てみたかったんだ」
「はい？」
　興味津々にキラキラとした目で見つめてくれるのはいいけれど、そんなの見て面白いのか？
「だって、恰好いいだろ？」
　当たり前のように言われて、口に入れたブロッコリーが丸ごとゴクリと喉の奥に消えていく。食道を通って、あ、今、胃に到達したな。……じゃなくて！
　相変わらず、お前、なにも考えずにしゃべってるだろ？
　呆気に取られて思わず絶句してしまったオレを見てどう思ったのか、
「あっ！ギイは、いつも恰好いいけどね！ほら、たまに対談してテレビに映ってたら、また別の角度からギイを見れるっていうか、だから、あの……」
　両手をわたわたと振って言い訳する託生の右手を取り、手のひらにチュッとキスをした。
「わかった。今日はバリバリ仕事するから、じっくり見てくれ」
　託生が、そう望んでいるのなら、恰好いいというオレを思う存分見せてやる。
　託生は目を細めて「うん」と嬉しそうに頷いた。

　とは言え、その後オレがこの部屋にいたのは二時間ほど。次は厄介な契約だ。さすがに社外の人間を連れていくことはできなくて、託生は本社で松本と留守番となった。
　でも、こうやって見送られるのも、いいものだな。
「火打石で、お見送りしてあげたいくらいなんだけどね」
　気難しい相手だと松本に聞いたのか、託生が残念そうに呟いた。
「火打石？あー、切り火を切るのか」
　厄除けと縁起担ぎのまじないだったな。しかし、日本であっても、今の時代なかなかそんな代物を目にすることもできないだろうし、なにしろ、ここはNY。
　託生の、その気持ちだけで……。
「あ、僕、火打石持ってますよ！」
　すかさず申告した松本に、顎が落ちる。
　なんで、火打石なんて持ってるんだ？！しかも、スーツのポケットから、なぜ出てくるんだ？！
「セキュリティチェックで、よく引っかからなかったな」
「最初、これはなんだ？と言われましたけど、日本の江戸時代の云々って言ったら、すぐに許可が出ましたよ。『Oh！Cool！』って、しばらく遊んでましたけど？」
　それでいいのか？ここは、本社だぞ？頭が痛い。
「じゃあ、お借りしていいですか？」
「どうぞ、どうぞ」
　でもって、疑問にも思わず借りるのか、託生？
　なんだか眩暈がしてきた。ここは江戸の長屋ではなく、本社のオレの執務室の前だよな？
　島岡、咳払いで誤魔化そうとしているみたいだが、笑いを堪えてるのがバレバレだぞ。
「火災報知器、大丈夫かなぁ」
「ライターの火に反応しないので、大丈夫ですよ」
「あ、そうですか。うーんと……」
「左手で石を持って、右手で火打鎌を石に打ち付けるんです」

「こうかな？」
　そうして時間も押し迫っていることだしと、カチカチッと火花が飛んだかどうかは知らないが、形だけオレに向かって切り火を切り、
「副社長、いってらっしゃいませ」
　にっこり笑い、託生が頭を下げた。
　あー、なんだか、本当に託生が秘書になったみたいだ。

　二度目の「いってらっしゃい」に見送られ、上機嫌で訪問したオレの勢いに圧倒されたのか、あっさりとサインをもらい、時間を繰り上げ本社に向かう車の中、オレは島岡に疑問をぶつけた。
「いつ、託生に言われたんだ？」
「十日ほど前です。貴方の電話が終わるのを待っているときに零されたので、それなら、次の休暇に来られますか、と」
　Fグループ本社の、しかもオレの部屋への許可を一秘書が出すのは普通あり得ないが、島岡なら別。元々、親父の秘書で信用度は誰よりも高い。
　どちらにしろ、託生がなにか損害を与えるなんてことは万が一にもないし、それどころか、オレのモチベーションを高めてくれ契約もあっさりと決まった。
　しかし、秘書ならばこの状態を喜んで然るべきなのに、島岡の表情は硬い。
「サプライズ好きの貴方が、花束しか用意していなかったようなので、少しお手伝いをさせていただいたつもりですが？」
　案の定、口調は穏やかなれど、オレを見る目が笑っていない。責めるよう視線から逃れるように顔を窓の外に向けた。
「……託生が物はいらないと言ったからだぞ？」
「いい口実ですね」
「島岡……」
　含みのある言いように睨むも、島岡はどこ吹く風だ。
　託生へのプレゼントを、ずっと考えていた。しかし、どれだけ考えても、託生の手元に残るものは避けるべきだと思ったんだ。いつかまた手放さなければいけないのに、オレを思い出させるようなことはしたくない。
　今、託生がここにいるのは一時的なこと。それを、オレは忘れてはならない。
　そんなオレを横目で見ながら溜息を吐き、
「……今日の仕事は、ここまでです。託生さんが自然史博物館で待ってます」
　島岡がモバイルをパチリと閉めた。
「調整してくれたのか？」
「私から託生さんへのプレゼントです」
「そっか。サンキュ」
　あらかじめ運転手に指示していたのか、車は自然史博物館の前で止まった。
「今は、あのときとは違います。託生さん自身、自分の意思で動けるだけの行動力を持ってます。貴方がどう思おうとも、自分で納得しない限り、託生さんは貴方から離れないでしょう」
　車外に出ようとしたオレの背後から、島岡が声をかける
　それは、もう遅すぎるということなのか？託生の手を取ってしまった、オレの落ち度と言いたいのか？
　緩やかに動いている託生の周囲が、いつ、なんどき、オレの利害の影響を受け嵐のようになるかもしれないのを、一番よく知っているのは島岡だ。
「……肝に銘じておくよ」
「いいえ、ギイ。私は覚悟を決めろと言ってるんです」
　振り返ったオレに、島岡は真剣な瞳で忠告した。

　さすが真冬のNY。こんな雪の中、自然史博物館に遊びに来るような物好きな人間はいないようで、海底のフロアには誰もいなかった。託生以外は。
　オレに気付いた託生が、嬉しそうに小さく手を振る。
「お疲れ様。契約、うまくいった？」
「いったいった。託生こそ、臨時秘書、お疲れ」
　ベンチに座っている託生の隣に腰かけ、頭上のクジラを見上げた。ここに来るのも久しぶりだ。託生を思い出してしまうからと、オレはこの十年、自然史博物館に近寄ることはなかった。
　誰もいない館内に安心してか、ポテッとオレの肩に頭を乗せ、同じように託生もクジラを見上げている。
　世界が、海底にいるように二人だけなら、ずっと離さないのに……。
「今日は楽しかったよ」
「そうか？オレ、部屋にいるときは、PCに向かっているか電話だけだったろ？」
「それでもさ。ギイの側にいるだけで楽しかった」
　そう言って託生が幸せそうに微笑む。
　オレがいるだけで充分なのだと、とても単純で、そして難しい望みを真っ直ぐにぶつけてくる。お前のその気持ちが、嬉しくて哀しい。
　NYまで連れてきてしまったけど、オレは……。
「会社の帰りに待ち合わせなんて、オフィスラブみたいだね」
　いたずらっ子のような表情で、託生がオレの目を覗いた。託生にそのつもりはないだろうけど、オレの心を見透かされそうな気分になり、暗い気持ちを奥底に隠す。
　今日は託生の誕生日なんだ。楽しい思い出だけで終わらせたい。
「禁断のオフィスラブか。なかなか美味しいシチュだな」
　気持ちを切り替えニヤリと笑うと「なに考えてんだよ」軽く肘で突く真似をしながらクスクスと笑う。
　暗い海の底に沈みこみそうなオレの腕を引っ張り上げ、託生が心ごと抱き上げてくれる。
「会社帰りに待ち合わせをして、まずはディナーかな」
　言葉にしながら、託生の手を取り立ち上がらせた。
　ペントハウスで祝うつもりだったから、ここに花束はないけれど、この時間なら充分デートコースを楽しませてやれる。
「そのあとは？」
「映画でも観劇でも、どこでもお望みのままに」
「うーん。でも、ギイに任せちゃっていい？まだ、NYのこと、よくわかってないから」
「あぁ。その代り、最後までオレに任せろよ？」
「……オフィスラブのデートの最後は、なに？」
「それはもちろん、濃密なベッドタイム」
　耳に口唇を寄せて囁くと、顔を少し傾けて小さく口唇の端にキスをし、
「お任せします。ふ、く、しゃ、ちょう」
　艶っぽく託生が微笑んだ。

急に思い浮かんだので、慌てて書いてみました。が、慌てすぎて、どうなのかちょっと疑問。
タイトルも、まんまという。
昨日の内にアップしたかったんですけど、仕事の関係で間に合いませんでした。

でも、まだ、NYでは１８日だし……という、こじつけでアップします。

なにはともあれ、託生くん、誕生日おめでと～。
(2014.2.19)

波間を照らす月

　大人のニューヨーカーが着飾り街に繰り出すこの時間、仕事用のスーツを着ている自分が野暮に思えるが、こればかりは仕方がない。実際、仕事中なのだから。
　帰社時間を三十分ほど遅らせ、洒落たレンガ造りのマンションの前に車を止めた。
　内ポケットに入れたＵＳＢメモリーを服の上から確認し、インターフォンを鳴らす。事前に連絡を入れていたので、応答の声がないままロックがカチリと解除された。
　エレベーターで何度か通った階まで上がり招き入れられた部屋には、上品な調度品が飾られ、落ち着いた女性らしい甘い香りが漂っている。
「やっと手に入れたよ」
「ありがと」
　艶っぽく女が微笑み、受け取ったＵＳＢメモリーをテーブルの上に置いたノートに刺して、ざっと中身を確認した。
「どう？」
「さすがね」
「だろ？」
　男が甘えたように女の背後から腕を回し頬を寄せた。その腕に白い手を添え、
「今日は泊まっていくでしょ？」
　女が自分を抱きしめている男に視線を流す。
　一般的なノーマルな男として女に誘われて悪い気はしないが、今日は生憎そういう気分じゃないんだな。仕事中だということを抜きにしても。
　一度この女と寝たら病みつきになるだろう、極上品の体。
　ただ、今の自分は快楽に溺れる余裕が全くないだけの話だ。
「がんばったご褒美を貰おうと思ったんだけど、社に戻らないといけないんだ」
「あら。もしかして抜け出してくれたの？」
「だって、早い方が良かったんだろ？その代わり、今度のオフは大人のデートをお願いしたいな」
　男の思惑など気付く様子はなく、残念そうな口調で、しかし、しっかりデートの約束を取り付けるような子供っぽい行動に女は声を出して笑い、
「いいわよ、ボーヤ」
　約束の印と男の口唇に口づけた。
　女の部屋をあとにし駐車していた車に乗り込んで、普段はあまり吸わない煙草に火をつける。高揚している気分と溜息を煙と一緒に吐き出した。
　ぼんやりと少し開けた窓から流れ出る煙を視線で追い、自嘲気に口元を歪ませる。
　この世界は情報が全てだ。誰よりも早く情報を掴み、そして有効活用していく。どの分野においても最先端を行かなければ生き残れない。
　だからこそ産業スパイなんてものが、どこにでもいる。
　さっきの女のように、金で体で情報を手に入れ、相手会社に売りつけるブローカーのようなヤツも数多い。
　まさか自分が声をかけられることになるとは思わなかったが。
　あの女。自分を利用しているつもりで、まさか利用されているとは露にも思っていないだろう。
「こんなチャンス、みすみす見逃せないよな」
　あのデータが誰に渡っていくのかはわかっている。それによって、どういう事態を引き起こすのか。そして、自分がどうなるのか、も。
　もう、すでに覚悟はついていた。
　短くなった吸殻をアッシュトレイに押し付けエンジンをかけた。
　ヘッドライトに照らされた街角をうっとりと見詰め、男は低いエンジン音と共に街の中に消えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　ふらりと事務所に現れるのはいつものこと。でも、Fグループの副社長なんだから、こんなに頻繁に抜け出したら、仕事に差し支えるんじゃないかと人事ながら心配になる。
　防音室で練習をしていたら、おざなりのノックと同時にドアが開きギイが顔を覗かせたのだ。
「ギイ」
　諌めるつもりで名前を呼ぶと、
「いいじゃん、別に。動いてる託生を見るの、四日ぶりなんだぞ？」
「ぼくはロボットか……」
　子供のような言い訳に、ぼそりと呟いて脱力した。
　ソファにどさりと腰を下ろし、内ポケットを探ろうとした手を睨みつけると、ギイがぼくの視線に気付いてその手を頭の後ろで組んだ。
　はい、ここは禁煙です。
　ペントハウスと同じくベーゼンドルファーのモデル214が置いてある場所で煙草なんてとんでもない。用意してくれたのはギイだけど。
「仕事の邪魔をしているつもりはないぞ」
「でも、練習の邪魔だよね」
「気にせず練習すればいいじゃないか」
「だから、人前では練習したくないの」
　これはプロの意地だ。これでお金を貰っている限り、たとえギイ相手であっても、いやギイだからこそ、最高のものを聴かせたいし聴いてほしい。
　というのを百も承知のはずなのに。
　大きな溜息を吐いてバイオリンをケースに置き、ソファに体を投げ出しているギイの隣に座った。
「ぼくがNYに来たことで、ギイが仕事を疎かにするのは嫌なんだ」
「疎かにはしてないぞ。託生を充電しないと動けないんだよ」
　言いながらぼくを抱きしめ髪に顔をうずめる。
「んー、生き返る」
「大袈裟だよ」
　自分が納得するまで居座るつもりなんだろう。説得を諦めて背中に腕を回した。
　ぼくだってギイの顔を見るのは四日ぶりなんだ。寝ている間に帰ってきて、早朝仕事に行ってしまっているのだから。
　頬をすべりギイの口唇がたどり着く。欲をぶつけるような性急な激しさはなく、ただ穏やかに吐息を交換して鼻の頭をぶつけた。
「ここに来る時間にお仕事して、早く帰ってきてくれたほうが嬉しいんだけど」
「オレも早く帰って託生を抱きたいよ」
　ここぞとばかりに過激なことを言うも、そのままずるずるとぼくの上半身をすべり足に頭を乗せる。
　疲れてるんだろうな。
　どれほどの重圧がギイに圧し掛かっているのかぼくには皆目わからないけれど、ギイの一声で経済界が変わると言われている世間の評価を見ると、それだけの動きをギイがしているからだ。
　何万人もの人の生活が、この肩に乗っている。
　学生の頃、今とは比べ物にはならないけれど、グロッキーになったギイが、よくぼくの膝枕で休んでいたっけ。二人の時間を持つことで、ギイは自分のコンディションを戻していた。
　毎回、島岡さんや松本さんが迎えに来るけれど、ギイが抜け出すのを見て見ぬ振りをしてくれているんじゃないだろうか。

　いや、たぶん、そうなんだろう。でなければ、本社ビルの一階ロビーでギイは足止めされているはずだ。
　しばらくして小さくノックの音が響き、ギイが渋々頭を上げた。どうせ返事をしても声は届かないのでドアを内側から開けると、案の定桜井さんが立っていた。
「あの、副社長は？」
「ギイ」
　振り向きざま時間切れだと匂わせ、退出を促すようにドアから一歩ずれる。
「副社長、お迎えにあがりました」
　と同時にドアの向こうから聞き慣れない声がし、そちらに視線を移すと落ち着いた感じの綺麗な女性が現れた。
　Fグループ本社に女性社員がいるのは当たり前のはずなのに、ぼくは驚きを隠せなかった。今まで見かけた人が男性ばかりだったから、このように女性がギイの側にいることを考えられなかったのだ。
　秘書である島岡さんや松本さんに代わってギイを迎えに来るということは、この人はギイに近い立場の人間なのだろうか。
「わかった。ロビーで待っててくれ」
　いつもならグダグダと文句を並べるのに、ギイは大きな溜息を一つ吐いて指示を出し、素直に立ち上がった。
　その態度にムッとする。……それがくだらないヤキモチだとは自覚してるけど。
　一礼して出ていった彼女をなんとなく見送ってしまっていたぼくの肩をギイが掴んだ。
「託生」
「うん、なに？」
「……いや。来週三日間のオフだろ？」
「そうだけど」
「オレも同じ日に休みを取ったから」
「ほんとに？」
　ギイが連休を取るのは、きわめて難しいことをぼくは知っている。せいぜい一日オフが重なればいいほうなのに、それが三日間とは。
　あぁ、そのための連日不眠不休なのか。
　ギイの忙しさに納得して、
「楽しみにしてるね。でも無理はしないでよ」
　にっこり笑うと、ギイは満足そうにぼくにキスをした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　……と言ったのに。
「悪い！本当にすまない！」
「仕事だったら仕方ないよ」
　明日から二人合わせて三日間のオフという段階になって、ドイツの支社で問題勃発。急遽オフ返上で出張になったというわけだ。
　ぼくだってバイオリニストとしての仕事を持っているから、こういう予定外の仕事には理解はできる。
　できるのだけど。あれを見なかったら、ぼくだって素直に見送れたのになぁ。
　ぼくは、先日、事務所にギイを迎えに来た女性のことをまだ引きずっていた。
　あの女性も同行するのだろうか……。
「帰ったら絶対埋め合わせするから！」
　慌しく手を動かしながらも、ぼくへ謝り続けるギイに、なぜだか無性に腹が立って、
「やだ」

スルリと口から零れ落ちた。
こんな我侭言うつもりなかったのだから、これはギイのせいだ。ギイがあのとき事務所に来なかったら、あの女性を見ることがなかったのだから。
ぼくの言葉に、ポカンとしてギイが振り返る。
「やだ？」
「うん、やだ」
「と言われても……」
ギイの心底困りきったような表情に、今度は悪戯心がむくむくと湧き上がり、
「帰ってくるまで待てないから、今、埋め合わせして」
「はい？」
スーツケースの蓋を閉めようとしていたギイの頭を抱きしめて、口唇を重ねた。
深く深く舌を絡め、ベッドの中でしかしないような濃厚なキスを堪能し、一分後ギイを開放した。口唇を離すときにペロリとギイの口唇を舐めたのはご愛嬌。
ちなみに、ギイとベッドを一緒にしたのは、二週間も前のこと。
「はい、終わり。気をつけて行ってらっしゃい」
これで浮気してきたら、蹴りだしてやるからな。ここはギイのペントハウスだけど。
「お……おまえ……悪魔……」
体が多少前かがみだけど、大丈夫だよね、ギイ。
ヨロヨロと出て行ったギイに満足しつつ、三日間なにをしようかとソファで考えていたぼくは、一時間後に飛び込んできた松本さんにドイツまで拉致された。

ケネディ国際空港からから八時間強。ニューヨークでは真夜中の時間だけれど、こっちはすでに朝の光が溢れていた。
フロントで鍵を受け取り案内された部屋に入って鞄を置く。
松本さんも一緒にホテルまで来たけれど、荷物を置いてすぐにドイツ支社に向かったはずだ。
「葉山さんを連れて行かないと、副社長にボイコットされるんですぅ」
半泣き状態の松本さんを前に、行かないという選択肢はぼくに選べなかった。松本さんも気の毒に……。
しかし、一泊はできるだろうけど、まるで気分は日帰り旅行だ。たった三日間しか休暇はないのだから。
「ぼくだって久しぶりのオフだったんだぞ」
だから、ゆっくりのんびりしようと思ったのに。
そりゃ、ギイの仕事が入ったことは少し寂しかったけど。ギイを煽った自覚もあるけど、これはあんまりだ。
ブツブツと文句を言っていると、背後のドアが開き、
「託生」
ギイが顔を覗かせた。
「ギイ！」
「よ。無事着いてたか」
「着いてたかって、どういうことだよ、これ？ぼくまでドイツに来る必要はないだろ？」
「オレにはあるの」
「なんで！」
「オフがおじゃんになって、託生とのデートがキャンセルになっただけでもガックリ来てたのに、あんなに煽られてオレに我慢しろってか？」
言いながらぼくの腕を引っ張りドアに押し付ける。
ギイの瞳が欲望を染まっているのを見て息を飲んだ。

　でも、ここではヤバイ。このドアの向こう側は公共の廊下なのだから。
「ギイ！仕事……んんっ」
　噛み付くようなキスに言葉を切られ、その衝撃にドアがガタンと鳴って体が竦んだ。
「ギ……ゃ……ぅ」
　逃げても追ってくる口唇に、胸を叩こうと腕を上げるも、その腕ごと拘束されるように抱きしめられる。形を変えた下半身を押し付け、ギイが自分の現状をぼくに知らせた。
　明確な意思を持って、ギイの手がぼくの体を這い回り、自分の体が恥を知らず熱くなっていく。
「ギイ、ダメ……って……仕事……」
「そう、仕事。十分しか時間がないんだよなぁ」
「それなら……あっ……！」
　そう言いながら、下半身を這う手がベルトを外しファスナーをおろした。
「なに……？」
　そのまま足元に座り、ギイがためらいなくぼくを口内に捕らえ、ぼくの体が跳ね上がる。
「あ……ギイ……くっ……」
　腰を抱きこみ熱い舌がぼくを愛撫する様に、引き離したくてギイの髪を掴んだのに、ぼくの手は強請るように頭を引き寄せ、ギイに与えられる快感を追っていた。
「んっ……、ギイ……ギ……」
　容赦のない責めに、体全体がガクガクと震えだす。抗うこともできないまま、波が押し寄せてくる。
「飲ませろよ」
「あ……あぁっ……！」
　真っ白に焼き切れる瞬間。
　ゴクリと喉を鳴らして飲み込んだ音が、やけにリアルに聞こえた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あ……れ……？」
　見覚えのない部屋。清潔なシーツ。
　ここは……？
　ベッドに起き上がり部屋をぐるりと見回して、隅に置かれた自分の鞄が目に入ったとき、全てを思い出し頬に血が上った。
　誰もいないけれど恥ずかしくなって枕に顔をうずめる。
　いつ誰が通るかわからない廊下を背に、ギイの口で……。
「あー！思い出すの、やめっ！」
　頭を振って思考を蹴散らす。そうしないと、また体が熱くなりそうだ。
　ギイだけじゃない。ぼくだって二週間ぶりだったのだから。
「今、何時だろ？」
　思考を切り替え時計を見ようとして、サイドテーブルに置いてある白い封筒が目に入った。
　ぼく宛だ。ギイが置いていったのかな？
　折っただけの封を開けて中の紙片を取り出すと……。
「うわぁ！佐智さん、今ミュンヘンにいるんだ」
　今夜の日付が入った、佐智さんのコンサートチケット！
『オレは行けないけれど、楽しんできてくれ。託生のスーツはクローゼットに入っているから。佐智によろしく。今夜は絶対帰るから寝るなよ———G』
　と書いてあるギイのメモも同封されてあった。
　詫びのつもりだろうに、きっちり自分の要求を忘れないところがギイだよね。

コンサートチケット一枚で機嫌が直る自分を現金だなぁと笑いつつ、今度こそベッドから起き上がり、しわくちゃになった服を脱ぎ捨てバスルームに向かった。

ヨーロッパの町並みは好きだ。新しく建設された建物もあるけれど、風情を残し優しく包み込んでくれる。特にドイツはグリム童話の中に飛び込んでしまったかのような気分になる。
フランスのパリに留学したとき。ギイを思い出してボロボロになって日本から逃げたぼくを、あの古い町並みが癒してくれた。
どこからともなくパンの焼ける匂いが漂い、人々の生活音が耳に届き、細い石畳の道を、そしてセーヌの辺を歩き、ぼくはバイオリンを弾く生活にどっぷり浸かることができた。
あの赤い夕焼けを見たときには、ギイを忘れることはできないんだと覚悟を決めたけれど、それは哀しいを通り越してやけに清清しい気分になったことを覚えている。
こんな自分でも人を愛し続けることができるんだ、と。
音楽をやっている人間にとって、留学先はドイツという選択肢もあったのに、ぼくがフランスに行ったのは、今思えばギイの中に四分の一流れるフランス人の血のせいだろう。
ギイを忘れたいと思いながら、ギイと繋がっていたいなんて、相反するものだけど、あの頃はいっぱいいっぱいで、自分のことなのに気付かなかった。
でも、あの二年間の留学生活は、ぼくの人生を変えたと思う。
バイオリンの技術もそうだけれど、自分の人生観と言うか価値観と言うか、狭い世界で代わり映えのしない日々を送っていたぼくの頑固な考え方を、粉々に砕いてくれた。
「託生に見せたいものが世界中にある」
学生時代、ギイはそうぼくに言った。
でも、あの頃のぼくは、ギイが言う「世界」とは、景色や建物など目に見えるものを指しているのだと思っていたのだ。
だから、言葉も生活習慣も知らないと言い訳を口にし、ギイが開けてくれているドアをくぐることはできなかった。とても遠かった。未知の領域と言ってもいい。
でも、今ならわかる。ギイが言っていた「世界」というのは、そういうものじゃない。
小さな殻の中で育てたちっぽけな価値観を取り払い、ぼく自身を成長させたかったんだ。
「愛してる」に込められていた、ギイの深い想い。
認識できず受け取れなかった子供のぼくは、別離を選択した。
でも、今なら、全てを受け入れられるような気がする。いや、そうであってほしい。
ぼくだって、ギイを愛しているのだから。
ミュンヘンの街が夕闇に包まれ、街燈の明かりがぼんやりと灯っていく。街が優しい色に包まれていく。
「うん。やっぱりグリム童話だ」
絵本を抜け出してきたかのような風景に溜息を吐き目を細めた。
クラシック音楽のルーツがヨーロッパだからかもしれないけど、ぼくにとってヨーロッパはとても身近な存在のような気がする。
でも、そう言うと、ギイはちょっと拗ねるかな。
NYにもいいところはあるぞって。

チケットを渡し会場内に入ると、華やかに着飾った人々で溢れかえっていた。
さすが佐智さん。
ギイも、よくチケットを入手できたもんだ。大木さんか、もしくは佐智さん本人に頼んだのかもしれない。あとでお礼を言わなくちゃ。

座席を確認しようと壁際に歩きかけたとき、その人に気付いた。
人の顔を覚えるのが苦手なぼくだけど、この人だけは覚えてしまった。
人ごみに紛れ込むように立っている、先週、事務所にギイを迎えに来た女性だ。
なぜ、ここに？
あの人もギイに付いてドイツに来ていたのだろうか。それにしては、今のドレスアップしている姿は、仕事とは無関係のようだけど。
ふと彼女がなにかに気付いたように入り口を見詰め、そして何事もなかったかのように、すっと方向転換して客席に向かうドアを開けた。
人を待っていたんじゃないのか？
ぼんやりと女性を見送りつつ、ぼくは違和感を感じていた。
「あの人も佐智さんのコンサート聴きにきたんだ……」
ロビーの中にいる人々は佐智さんのバイオリンを心待ちにし、誰もが浮き足立って幸せそうな表情をしている。
しかし、彼女は違ったのだ。音楽を楽しむような雰囲気は微塵も感じられなかった。
じゃあ、彼女はどうして、ここにいるのだろう……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

オフ返上のドイツ出張を終えNYに帰ってきたオレは、数ヶ月前から話を進めてきた技術提供の詰めの打ち合わせを、相手方フェラー・コーポレーションの本社で行うため訪れていた。
しかし。
「契約は白紙と。そう言われるんですね？」
「はい。我が社の研究所も黙ってみているわけではありませんので」
「……なるほど。そちらでも研究を重ね、結果が出たと？」
「そういうわけなのです。ですから、もうFグループの提携なしで事業を進めることが可能になりまして」
自信ありげに白紙撤回だという男を鼻で笑った。
自社だけでなんとかなるのならば提携なんて野暮だ。利益の取り分が少なくなるからな。
しかし、この男は目の前にあることだけしか考えられないようだ。今回はともかくとして、Fグループとの繋がりを蔑ろにできるほど大きな企業ではないのに、あっさりと切り捨てるとは、自社の未来を全く考えていない。おめでたいことだ。
自分の息子ほどの歳のオレに頭を下げるのが、よほど気に入らないらしい。
それはそれで構わないが、この提携話が出たときに、フェラー・コーポレーションが研究をしていた事実はなかったはず。
となると……。
まぁ、いい。それは本社に帰ってから考えるか。
「わかりました。では、この話はなかったということに」
「ご足労いただきまして、ありがとうございました」
外交用の笑みを浮かべその場をあとにする。
同席していた島岡が車に乗るや否や、モバイルで本社のサーバーにアクセスしだした。

「島岡、どう思う？」
「ありえませんね。仮に同じ研究をしていたとしても、前提にあるものでさえこちらは公表していません。それがなければ、この研究は成し遂げられない」
戻ってきた副社長室で、フェラー・コーポレーションの情報を再確認しつつ相槌を打った。

　やはりな。いったい、どれだけの金を使ったのやら。
「漏れたか」
「十中八九、それしかないでしょうね」
「だな」
「産業スパイってことですかっ？」
「たぶんな」
　大人しくオレ達の話を聞いていた松本が息を飲む。
　どれだけセキュリティを強固にして外部から守ったとしても、内部の人間が持ち出すことは可能だ。
　さて、どこから漏れたのか。研究所内の関係者が有力だが。
「でも、あのデータって……」
　遠慮気味に指摘した松本に、ニヤリと笑う。
「そう。お前も知っているとおり、一部が足りない」
　元々技術提供をする話だったのだ。
　データを渡さずこちらで処理し、結果をあちら側に渡す契約になっていた。だから、データをどうやって保管しようがあちらに言う必要もない。
　オレでさえ、一部欠けた状態でしか見ることはできないんだ。
「あれは軍事転用ができるものだから、誰もがアクセスできるわけではないし、全てのデータは所長が持っている。研究員が知っているのはその内の九割ほどだ」
　だから、もしもフェラー・コーポレーションにデータが漏れていたとしても、今すぐ慌てる必要はない。使うことができないのだから。
　まずは、事実調査からだな。
「島岡。今までに似たようなケースがあったか研究所の所長に確認を取ってくれ。他の部署もだ」
「わかりました」
「松本は、フェラー・コーポレーションの研究所が、いつからこのデータを研究し完成させたのかを調べてくれ。そんな事実はないと思うが一応な」
「はい！」
「情報提供者のいぶり出しは、そのあとだ。まずはデータ漏洩の事実を突き止めるのが先だからな」
　オレの指示に、足早に島岡は退出し、残った松本が机に広げた資料を慌しくまとめ始めたのだが、今日は眼鏡をかけているせいか別人のように見えて、じっと松本を凝視していたらしい。
「副社長、どうしました？」
　オレの視線に気付いた松本が、訝しげに聞く。
「いや……お前も眼鏡をかけると印象が変わるなと思って」
「え？どんな感じにですか？似合ってますか？」
　とたん、はしゃいだ様子で松本が嬉しそうに笑うのを見て、溜息を吐いた。
　この状態で、はしゃげるお前は、ある意味大物だよな。
「それなりに知的に……黙って立っていればな」
「副社長、ひどい……」
　よよよと泣きまねをしている松本に、
「ほら、さっさと行ってこい」
　発破をかけて部屋から追い出す。
　デスクの上に置いてあった煙草を手にし、火を灯し深く紫煙を吸った。
「誰だか知らないが、あのデータに手を出すとは命知らずだな」
　軍事転用できると想像つかなかったのか。その時点で、手を引けばよかったものを。
　喉の奥で笑いを噛み殺した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　NYに移転するときにギイが用意してくれた事務所は、ビルのワンフロアー全てを占めていた。
　エレベーターを降りるとすぐに入り口があり、セキュリティカードがないと入室できず、しかも常時SPのマイケルかジョンが入室者と不審物をチェックしている。
　日本とは全く違う厳重な警備に、
「ここはNYだし、Fグループ傘下だと知られているから、念のため、な？」
　ギイは申し訳なさそうに説明した。
　裏を返せば、それだけギイは危険と隣り合わせなのだと思い知らされる。
　普段何人ものSPが付き、オフでさえも衛星で常時居場所をチェックされ、普通の人間ならばその煩わしさに発狂してしまいそうな状況の中、あの強い精神力で維持している。
　その精神力を揺るがしてしまうのが、たぶんぼくなのだろう。あの十年前の事件も、ギイの心配性に拍車をかけていると思う。
　だから、せめてギイが不安にならないようにと、自分の行動に注意するようになった。
　VIPでもないのに送迎されるなんてと、ここに来た当事は思っていたが、これもギイを安心させるためなのだと思えば目を瞑るしかない。
　桜井さんには仕事を増やして申し訳ないとは思うけど。

　ぼくの仕事はバイオリンを弾くことだ。なので、これと言った打ち合わせがなければ、事務所に来ずともペントハウスで練習しても構わなかった。ギイが勿体ないくらいの防音室を作ってくれているのだし。
　でも、自分の中でメリハリがつくような気がして、同じ時間に事務所に行き、バイオリンの練習をしたり作曲したりして、同じ時間に帰ってくる。急な仕事が入ったときでも、すぐに対応できるし。
　ぼくって、サラリーマン体質なのかな。
　今日も朝から事務所に来ていたけれど、なんとなく気分が乗らなくて、お茶でも飲んでこようとスタッフルームに足を向けた。
「託生様？」
「気分転換にお茶でも飲みに行こうと思って。一緒に飲みませんか？」
　防音室の前の椅子から立ち上がったマイケルに声をかけ、二人並んで廊下を歩き事務所の入り口付近に差し掛かったとき、桜井さんの声がした。
「わざわざ、ありがとうございました。お預かりします」
「いえ、今から空港に行く途中でしたので、ついでですわ」
「これから出張ですか。道中お気をつけて」
　廊下の影からそっと覗いて相手の顔を見るなり、なんとなく顔を合わせたくなくて立ち止まった。
　あの女性だ。ここにギイを迎えに来た。
　にこやかに桜井さんと挨拶を交わす姿にまた違和感。
　普通に笑えるんだ、あの人。
　佐智さんのコンサートでの表情が脳裏に浮かび、そのあまりの違いに首を捻る。棘が刺さったかのようになにかが引っかかる。
「託生さん。どうされましたか？」
「あ……お茶でも飲もうかと……」
　いつの間にかあの女性は退出し、桜井さんがぼくに気付いて声をかけてきた。その桜井さんの手に小さな紙袋が一つ。
「あぁ。DVDのマスターの最終チェックが終わったので、持ってきてくださったんですよ」
　ぼくの視線に気付いて桜井さんが説明した。

「最終チェックって、本社でやってるんですか？」
　この事務所はFグループ傘下とは言え、どちらかと言えばギイの個人的主観で作られたものなのに、そこまで本社が携わっているのだろうか。
　小首を傾げると、桜井さんはごくごく当たり前のように理由を言った。
「いえ、副社長がチェックなさってるんです」
「は？」
「DVDだけですが」
「毎回？」
「はい、毎回」
　初耳だ。知らなかったぞ、そんなこと。
　それと同時に、ギイが最終チェックをする理由が、なんとなく理解できて脱力した。
　以前、ライブDVDの話が出たとき、
『託生の映像をバラまきたくなかったんだよ』
　なんてバカなことを言って反対していたからなぁ。
　そりゃ、ぼくもCDはともかくとして、ライブDVDの発売に需要があるのか？と疑問を浮かべたが、事務所内で決定したことに意義を唱えたことはない。
　マネージメントのプロ集団ということ以上に、何年も一緒に働いてきた仲間だ。だから、ぼくはスタッフに任せておけば大丈夫と全幅の信頼を寄せている。
「お帰りになってからで構わないので、一応、託生さんもチェックしてもらえますか？」
　がっくりきたぼくに頓着せず、桜井さんは紙袋を渡しながらにこやかに宿題を言いつけた。

　DVDをペントハウスに持って帰っては来たけれど、自分の演奏している姿をこういう風に見るのは実に恥ずかしい。何度経験しても慣れない。
　第一、ぼくがこれを見たところで、なにをチェックしたらいいんだろうと、いつも思う。
　しかし、これも仕事の一つだと思いながら赤面しつつテレビ画面を見詰め、約二時間に渡るコンサートの終盤、アンコールの拍手が鳴り響く中、客席が映った。
「あれ？」
　その客席の中に違和感を感じ、早戻ししてスロー再生してみた。そしてあるシーンで一時停止をしてじっくり画面を見てみる。
「やっぱり、あの女性だ……」
　右の端に小さく映った、今日の女性。
　ぼくのコンサートにも来ていたんだ。
　しかし、彼女だけ周りから浮いていた。佐智さんのコンサートで見たときのような冷めた表情で、だからこそ普通なら見過ごすシーンに違和感を感じたのだ。
「まさか、他のコンサートにも来てないよね？」
　なんとなく気になって、今までのDVDを片っ端からプレーヤーに入れ探してみたところ、その内の二枚。先程より遠く小さいのに、ぼくは、彼女に気がついた。
　奇妙な違和感を感じながら。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　空中公園ハイライン（High Line）。二〇〇九年に廃線を利用して作られた二キロメートルにも及ぶ公園だ。
　廃線であることを前面に押し出し線路や枕木などもそのまま、ここが人工的に作られた公園であるにも

関わらず、本当に打ち捨てられた廃線の横を歩いているような不思議な感覚になる。
　また、ハイラインから見える看板はアーティスト達の発表の場となり、建物と植物とアートが融合した人々の憩いの場になっている。
　セントラルパークのような公園とは違い、ビルの間を通る長細い公園なので、NYの空気を感じながらのんびりと散歩するには丁度いい。
　ぼくは休日によくここに来てニューヨークの風景を堪能していた。
　今日も、緑を楽しみながら歩いていると、通りのカフェテラスに見覚えのある後姿を見つけ、階段を下りてみた。
「松本さん？」
「はぇ、ひゃひゃひゃひゃん」
　ぼくの声にクルリと松本さんが振り向いたのだが、Fグループの秘書というエリートな職業についている大の大人と口いっぱいに頬張ったハンバーガーとのギャップに、思わず吹き出してしまった。
　慌てて松本さんがハンバーガーをビッグサイズのコーラで流し込んだものの、口の横にケチャップ……。
「ここ、ついてますよ」
　テーブルにあった紙ナプキンを差し出し、自分の口を指差して指摘した。
「え、あ？……あぁ！」
　そんなに強く拭かなくてもいいのに、渡した紙ナプキンでごしごし口をぬぐっている松本さんのいちいち大袈裟なリアクションに、笑いを止めようと努力するものの止まらない。
　黙っていれば格好いいのに、松本さんって……。
「そんなに笑わなくても……」
「す……すみま……ぷっ……」
　笑いを堪えるように口を手で覆ったものの、その情けなさそうに目尻を下げた表情が、またツボに入る。
「葉山さんって、意外と笑い上戸なんですね」
「すみません……」
　失礼なことに散々笑って、やっと笑いが止んだものの、笑い疲れてぐったりして、松本さんの呆れたような拗ねたような目に謝罪して小さくなった。
　ごめんなさい。こんなに笑うつもりはなかったんです。
　アメリカ生まれでアメリカ育ちの日系人だからかもしれないけれど、松本さんがオーバーアクションすぎるんです。
　けれども、そんなぼくの失礼な態度に頓着せず、
「あ、そうだ！先日は、すみませんでした！」
　反対に松本さんが足に胸がつくくらい頭を下げた。
「えっと、なにか松本さんしましたっけ？」
「ほら！葉山さんをドイツに無理矢理連れて行ったでしょう？」
　そう言えば、そうだった。思い出せば松本さんと会うのも、あれ以来だ。
　でも、あれに関しては松本さんは全然無関係なんで、
「気にしてませんよ。元はと言えばギイの我侭のせいですし」
　とギイに責任を丸投げしたけれど、どちらかというと煽ったぼくのせいだと言うか。
　しかし、ドイツと聞いて、またあの女性が脳裏に浮かんだ。
　ここまで気になる自分はおかしいのだろうか……。でも、なんとなく胸の中がもやもやして、すっきりしないんだ。
　ふと、同じFグループの松本さんなら、あの女性を知っているかもと思いついた。
　忙しくてギイと話す機会もないし、聞いてみようか。
「あの」
「はい？」

「以前、ギイを迎えに事務所に女の人が来たんですけど、あの人は……」
　と、話始めたはいいけれど、いったいどう聞けばいいんだろう。
　一番知りたいのは、コンサートに来ている理由だけど、そんなプライベートなことを松本さんが知るはずないし……。
　と悩んでいると、松本さんはその女性が誰なのかわかったらしく、
「あぁ。秘書室のエリザベス・イートンですね。島岡さんも僕も手が放せなくて、一度頼んだことがありました。ミス・イートンがなにか？」
　すんなり名前を教えてくれた。
　エリザベス・イートンというのか。
　ギイ付きの秘書と秘書室の秘書との違いが、ぼくにはわからないけれど、それならギイの出張に付いてドイツに来ていても不思議じゃないかな？と思い、続けて聞いてみる。
「じゃ、ドイツに行った時も、一緒だったんですね」
「ドイツって、こないだの出張ですよね？ミス・イートンは一緒に来てませんよ」
「そうなんですか？」
「だって、常時副社長に付くのは男と決まってるんです」
「はい？」
　男限定？なに、その規則？
「ほら、女性が出張に随行すると、変な噂を立てられるかもしれないじゃないですか。そういう面倒なことに時間が割かれるのを副社長が嫌っているんです。だから、秘書ではあるんですけど、副社長とは別のルートで情報などを集めるため各国を飛び回ってます」
　確かにギイ、そういうことに煩わされるの、すごく嫌がりそうだ。
　女性蔑視、女性差別だと指摘されそうな内容だけど、ギイにとっては区別なんだなと納得した。
　火がないところに煙は立たぬ。それなら、最初から女性の専属秘書はつけない。
　合理的なギイがやりそうなことだ。
　しかし、世界中を飛び回っているとは。
「すごい女性ですね」
「数ヶ国語を操る才女なので」
「へぇ」
　なら、ドイツで見かけたのも、別件の仕事だったのか。その合間の余暇に、佐智さんのコンサートを聴きに来ていた……。
「葉山さん？」
　じっと考え込んでしまったぼくを、松本さんの声が引き戻した。
「いえ、なんでもないんです。あ！松本さん、時間大丈夫ですか？」
「あぁ、そうでした！」
　松本さんは時計を覗いて、
「じゃ、仕事に戻りまーす」
　と、慌ててゴミを集めてゴミ箱に投げ入れ走っていった。
　あの女性、ミス・イートンがドイツにいた理由はなんとなく理解できた。
「けどなぁ」
　やっぱり、なにかが引っかかっている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　先ほど島岡が「調査途中ですが」と持ってきた報告書を眺めていた。
　漏洩していた可能性があるいくつかの案件を目の前にして、その分野の違いに首を捻る。

何人もの産業スパイが紛れ込んでいるということなのだろうか。それとも、元締めがいて各分野から情報を集めてきているのか？
今回の件はたぶん研究員の誰かから漏れたのだろうが、相手会社との取引方法も受け渡し方法もわからず、携わった人間の情報も皆無。八方塞だ。
どこかに綻びがあれば、そこから一刀両断できるのに。
指でデスクを叩きながら考え込んでいたときノックが響き、返事を返したあとドアが開いた。
「副社長、ただいま帰りました」
「あぁ、ご苦労だった。わかったか？」
「はい。フェラー・コーポレーションで研究していた事実は、どこにもありませんでしたよ」
「そうか」
午前中から調査のため、社外に行っていた松本がフェラー・コーポレーションの、ここ一年の研究内容を置く。
全く関係ないことばかりじゃないか。それに、研究されている内容も、こちらではすでに結果が出ているものばかりだ。あそこの研究員も碌なもんじゃないな。いや、うちと比べるのは酷か。
「こちら側からの漏洩で確定だな」
「そうですね」
これは、全研究員の調査をするしかないのか。それとも、フェラー・コーポレーションの社長を調べたほうが早いのか？
今後の動きをシュミレーションしている横で、松本がコーヒーメーカーをセットしながら、
「そういえば、さっき葉山さんにお会いしましたよ。ハイラインの横のカフェで」
世間話をするように、愛しい恋人の名前を口に出した。
「託生と？」
そういえば、NYに来てしばらくしてから、ハイラインに連れて行ったことがあったな。無機質なビル街の間をぬって走る、レトロな雰囲気が好きだとはしゃいでいたっけ。
「ハンバーガーを食べていたら、なぜか葉山さんに笑われました。葉山さんって笑い上戸なんですね」
と律儀に報告するのはいいが、松本……。
それは、今まで託生と談笑してましたと言っているのと同じだってことに気付かないのか？
オレでさえ、ここ数日託生の顔をまともに見てないというのに……！
ドイツで佐智のコンサートがあると教えてくれたのは感謝しているが……おかげで、託生に怒られることはなかったが、お前まさか託生に惚れてるわけじゃないだろうな？
でも、まぁ、託生のことならなんでも知っていたいオレとしては、なにを話していたのか気になるのも事実。
「託生となにを話したんだ？」
「えーっと、ミス・イートンのことを聞かれました」
「……秘書室のイートンのことか？」
「はい。そのイートンです」
Fグループの社員とはいえ、島岡や松本と違い、託生にはなんの関係もない女のことを？
「なんて聞かれたんだ？」
「これと言って、はっきりしたことは……ただ、気になっていた感じだったので、『秘書室のエリザベス・イートンだ』とだけ葉山さんには教えましたが」
「そうか」
胸の奥がじわりとなにかに侵食されていくような気がした。
オレといる限り、託生の身に危険が及ぶ可能性がある。出来る限りの防御策を取っているが、それでもゼロではない。
本当は、一緒にいてはいけないのだと。託生の安全を考えるのであれば、手放さなければいけないのだと、オレはあの卒業式の夜、頭に叩き込んだ。

　だから、もしも託生が別のヤツと恋仲になったときには、すんなりと別れてやらなければと理解しているはずなのに。理性ではわかっているのに、心が追いつかない。
　あのとき、事務所に来たイートンを託生は見詰めていた。他人に対して、どこか一歩引いてしまう託生にしては珍しいことだ。
「副社長？」
　気付けば松本がコーヒーカップをデスクに置きながら、オレを覗き込んでいた。
「……いや、なんでもない」
　託生はイートンに惹かれているのか？
　オレは、また託生を手放さなくてはいけないのだろうか……。

　ペントハウスに帰り、その足で託生の防音室に向かった。託生の真意を見定めるために。
　たった一度、しかも一分にも満たない擦れ違いのように会った女が、なぜ気になるのか。
　そして、もしも託生がイートンに特別な気持ちを持っているのなら……。
「あ、ギイ、お帰り」
　オレの顔を見て嬉しそうにソファから立ち上がった託生の側に足早に近寄った。
「松本に会ったらしいな」
「うん。松本さんに聞いたんだ？」
「松本にエリザベス・イートンのことを聞いていたそうじゃないか？」
　声が震えそうになり、誤魔化すために託生の腕を引っ張りソファに座る。
「あぁ、あの人ちょっと気になってるんだよね」
　オレの内心に気付かず、託生は素直に肯定した。
　それを見たとたん、じわりとしたなにかが、理性を食い尽くしていくような気がした。
　託生の身の安全のためとか、手放さなければとか、頭の片隅にいつも置いてある自制心をも食い尽くしていくなにか。
　託生に恋をしたとき、恋心と同時に自分の心の中に生まれたものだ。
「ふぅん」
「あのね……うわっ、ギイ、なにするんだよ！」
「気になる……ね」
　託生の目がオレ以外のヤツに向けられるのが気に入らない！
　託生の口からオレ以外の名前が出るのが気に入らない！
　託生がオレ以外のヤツのことを考えているのが気に入らない！
「ギイっ……？」
「託生は、女の方がいいってわけだ」
「違う違う！ギイ、違うよ！」
「どこがだよ！気になるって、お前、そういうことだろ！」
　乱暴にソファに押し倒し、噛み付くように口唇を重ねる。これ以上、託生の口からイートンの名前を聞きたくなくて。
　託生を閉じ込めておければいいのに。誰にも見せず、誰をも見ず、託生の心がオレでいっぱいになるように、オレしか考えられなくなるように。
　誰にも渡したくない。オレだけの……！
「託生……たくみ……」
「ギ……あぁ……ん！……やぁっ！」
　息を継ぐ間も与えず、上り詰めるたびに次の波間に引きずり込んだ。
　託生の懇願も涙も、オレの中を占めるなにかを止めることはできない。この腕の中にいるのに、なぜ？

何度目かの頂を越えたとき、腕の中でくたりと託生が意識を手放した。その重みに我に返る。
白い肌に残る無数の紅い跡。涙で濡れた痛々しい頬。
「た……くみ……」
残酷な仕打ちに眉を寄せていいはずなのに、託生は無垢な表情を浮かべていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

目覚めたとき、隣にギイはいなかった。カーテンの隙間から入る日差しは、かなり明るい。
体は清められ、着た覚えのないパジャマを身に付けている。
防音室から寝室に運んで、ギイが着替えさせてくれたんだな。
「痛っ！」
寝返りを打とうとして動かした瞬間、体中に痛みが走りベッドに逆戻りした。
「はぁ、もう……」
動くのは無理だな。
「愛している」と。「オレだけを見ていろ」と。「離れないでくれ」と。
何度も訴えるように耳元で囁かれた言葉が、まるでギイの悲鳴のように聞こえていた。
たまに喧嘩はあるけど、お互い言いたいように言い合って、でも一方的ではなく歯車が噛みあうところをお互い見つける努力をして、昔のようにやってきたつもりだった。
———そう、昔のように。
人は変わるんだってことを、ぼくは忘れていた。
ぼくに対するギイの気持ちは変わっていない。けれども心は変わっている。
あの呆れるくらいの心配性も、ぼくになにかがあった場合、ぼくが離れていくんじゃないかと不安になっている裏返し。
杞憂なのに。ぼくがギイの側から離れるなんて、あり得ないのに。
ギイ自身、ぼくと離れたほうがいいと心の奥底で思っているのを知っている。でも、ぼくが離れることは、ギイにとって恐怖になっている。
相反する気持ちに、ギイは戸惑っているんだろう。
だから、昨晩のように、なってしまうんだ。
ベッドサイドに、ギイが置いていったと見られる薬とミネラルウォーターを見つけ手を伸ばした。メモも置いていたみたいだけど、面倒なので読むのを止めた。
ギイが帰ってきたときに話せばいい。
錠剤を手に取りミネラルウォーターで流しこんだとき、口元から水が零れて枕が少し濡れたけれど、動くのはだるい。いつか乾くだろうから放っておこう。
しばらくすると、頭がぼんやりとしてきて目を閉じる。アメリカの薬って、どうしてこんなにきついのか不思議だ。
でも、今はなにも考えずに眠りたい。
ぼくは、眠気に抗おうとはせず、そのまま暗闇の世界に引き込まれた。

「託生……？」
小さく呼びかけられて目を開けた。窓から差し込む光が赤い。あぁ、もう夕方か。
こんな時間に帰ってくるなんてギイには難しいのに。また、島岡さんに無茶を言ったんじゃないだろうか。
心配そうにぼくを覗き込む薄茶色の瞳。
そんな泣きそうな顔をするくらいなら、最初から話を聞いてくれればよかったのに。
「託生、気分はどうだ？」

「……お腹空いた」
「あ……あぁ、少し待っていてくれ」
　ぼくの訴えにギイは慌てて内線で食事を頼み、またぼくを覗き込んだ。
「喉、乾いた」
　今度はバタバタと冷蔵庫からミネラルウォーターを持ってきてキャップを開けた。
　ぼくの背中に腕を回し抱き起こそうとするギイを、じっと見詰める。
　ギイは無言の要求に躊躇いながらミネラルウォーターを口に含み、そっと口唇を寄せて流し込んだ。
「もっと」
　ぼくの言葉に、もう一口流し込む。
「もういい」
　次の言葉を待っているらしいギイに首を振った。
　キャップを閉めてベッドサイトにペットボトルを置き、いつ怒られるだろうと小さくなっているギイの襟元を掴んで引き寄せ、形のいい鼻を噛んだ。
　犬のように鼻の頭を濡らしたままのギイの、右頬を噛んで、左頬を噛んで、顎の先を噛んで　耳たぶも噛んで、空腹と抗議と八つ当たりをセットにする。
「た……託生……」
「お腹空いた！」
「もう少し待ってくれ！すぐに出来るから！」
「待てない！」
　心底困った顔をして、たぶん厨房に行こうとしたんだろう。立ち上がったギイに向かって両手を伸ばす。
　ギイはおずおずとぼくを抱きしめ、肩口に額をつけた。
「託生……ごめん……ごめ……」
「ギイって、バカだよね」
　大きな溜息を吐いて、広い背中を抱きしめる。
　結局傷ついてるのはギイじゃないか。
「離れないって言ったじゃないか。ずっと側にいると言ったじゃないか」
「……あぁ」
「ギイが離れろって言ったって、もう無理なんだからね」
　ぼくは、あの朽ち果てた小屋で決めたんだ。もう二度とギイの側から離れないって。
「愛してる、託生」
「うん」
「愛してるんだ」
「ぼくも、ギイを愛してる」
　ギイの胸の中にある恐怖感がなくなってくれるなら、何度でも言うよ。愛してるって。
　顔を上げたギイの目のふちが赤い。
「最初からギイに聞けばよかっただけの話だし。おあいこにしよ」
　ギイの頬を両手で包んでキスをした。

　持ってきてもらった食事をベッドトレイに置き、いそいそとぼくの世話を焼くギイに呆れながら食事を終え、食後のコーヒーでやっと一息ついてギイと向かい合った。
「ミス・イートンのことだけど。ギイ、今度はきちんと聞いてくれよ？」
「あぁ」
「あの人が気にかかるのは、この頃よく見かけたせいなんだ」
「どこで？」

「最初に見たのは、ギイを事務所に迎えにきたときなんだけど、そのあとドイツでの佐智さんのコンサートで見かけて、こないだも事務所に来てたから」
「事務所？なんの用だ？」
　訝しげに眉を寄せたギイに、首を傾げる。
「ギイが頼んだんじゃないの？DVDのチェックが終わったから持ってきたって。これから空港に向かうからついでにって」
「……いや、あれは松本に頼んだはずだ。あいつ、調子よく丸投げしやがったな」
　宙を睨みそのときのことを思い出したのか、ギイがムッと口を尖らせた。
　でも、ぼくのDVDチェックなんて、ギイの個人的趣味みたいなものだから、秘書である松本さんの仕事じゃないような気がするんだけど。
　と言えば、脱線しそうなんで、軌道修正。
「それで、そのあと、ぼくもDVDのチェックして気付いたんだけど、ぼくのコンサートにも来てたみたい」
「イートンが託生の？」
「うん。ついでに気になって調べてみたら過去のDVDにも映ってた」
「……クラシックファンなんじゃないか？」
「かなって思ったんだけど、なんだか違うような気がするんだ。表情がね。コンサートを楽しんでいる顔じゃない。なにか別の用事で来ているような感じ。でも、ぼくの気のせいかもしれない」
　ぼくの言葉にギイは顎に手を当てて考え込んだ。
　近所に住んでいるとか、同じ職場や学校にいるとか、同じ趣味であるとか。そういう共通したものがあるわけでもないのに、ここまでぼくがあの人を見るというのは、さすがに偶然というには無理があるような気がする。
　一歩引いて偶然だとしても、あの表情がなぜか気になるんだ。
「もしかして……」
「なに？」
　心当たりがある？
「託生、そのDVDはどこだ？」
「居間のテーブルの上にあるよ」
「お前、佐智のも持ってたよな？」
「うん。オーディオラックに並べてるけど」
　聞くなりギイは立ち上がり、隣の居間からぼくと佐智さんのDVDを持ってきた。
「これ、借りてっていいか？」
「うん、いいけど」
　それは、構わないけど。
「ギイ。なにかあったの？」
　単純にミス・イートンの表情が気になっただけなのに、ギイを見ていると、とんでもないことが隠れているような気がする。
「まだ確証がないから言えないけど、もしそうだったときには言うよ」
　軽い口調とは裏腹に、ギイは口元を引き締めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　託生からイートンの話を聞き、調べてみる価値があると思ったオレは、島岡にイートンの素行調査を指示した。
　そして、託生に借りたDVDを片っ端から調べた結果、数枚のDVDからイートンが見つり、託生の言うとおり、イートンの表情はコンサートを楽しんでいるようには全く見えず、別の思惑が隠れているような印象を

受けた。
　それと、もう一つ。
　託生はイートンしか目に入っていなかったようだが、必ず横に日本人の男がいた。
　偶然隣り合った席に座っている他人を装っているようだが、これだけ何度も隣り合うわけがない。知り合いなのは一目瞭然。
　これは、きっとなにかがある。

　イートンに的を絞ったせいか、たった数日で報告書が出揃った。
「託生さんの勘が当たりましたね」
　島岡がイートンの足取りと漏洩事件の時期をまとめたものを、テーブルに置いた。見事なほど、ぴたりと重なる。
「ここ一年間のイートンの足取りを調べました。おっしゃったとおり、各国で開催された日本人のクラシックコンサートに足を運んだ直後、大小関わらず情報が漏洩していた可能性があります。情報の内容は多岐に渡りますが、どの社でも研究されているような内容ばかりですから、先に結果が出たのだと当時は思っていたようです」
　島岡の報告に頷き、松本を見上げる。
「隣に座っている男はわかったか？」
「はい、名前は田村。ミス・イートンはこの男の愛人をしているようです。田村の足取りを調べたところ、こちらの漏洩事件先の国をコンサート後に訪れています」
　松本が用意した報告書の時期も、イートンのそれと重なる。
　仕事柄、各国を回るんだ。誰も疑うことはなかっただろう。
「なるほどなぁ。でも、これだけの情報をイートンはどうやって手に入れたんだ？まるきり分野はバラバラだろう？」
　あまりにも多岐に渡りすぎている。
「イートンもブローカーなのだと思いますよ」
　オレの疑問に迷うことなく島岡が答える。
「元の情報提供者がいるってことだな」
「それが一人なのか数人なのかはわかりませんが。情報提供者がイートンに情報を流し、クラシックコンサートで田村に情報を渡す。その後、田村が各社に売っていた。たぶん流れはこういうことでしょう」
「金か体か。その辺りに興味ないが、大胆にやってくれたもんだ」
　いっそのこと、天晴れと褒めたいくらいだが、あのデータに手を出したのが運のつき。イートンも田村も未来はない。
　駒を一歩前に進めるためには。
「情報提供者に動いてもらうか」
　島岡と松本が頷く。
　情報提供者が動けば、イートンと田村も必ず動く。
「所長に連絡して、最後のデータを公表してもらおう。フェラー・コーポレーションもデータが足りないことに気付いたみだいだしな」
「そうなんですか？」
「今頃になって恥も知らずにもう一度打診が入ったんだよ。共同プロジェクトの」
「それはそれは」
　軽くあしらい、
「そして、もう一度『話はなかったことに』と言わせるんですね」
　島岡がニヤリと笑った。

「言う暇はないと思うがな」
　笑い返しながら、胸元から携帯を取り出して気付いた。
「あ、松本。近々開催される日本人のクラシックコンサートを調べておいてくれ。向こう側も時間がないから、たぶんNY中心の都市しかイートンも動けないはずだ」
「はい！」
　足早に松本がドアの向こうに消えるのを見ながら、研究所のコールを鳴らした。

　所長に連絡をし手筈を整え、網にかかるのを待って五日後。松本がコンサートの予約をイートンが入れたとの情報を持ってきた。
　しかし、予約したのがNYで行われる託生のコンサートだと知り、目の前が暗くなる。
　よりによって託生のコンサートとは……。
「使いたくはないんだが……」
「でも、これしかないんです」
　それはわかっている。これが託生のコンサートでなく佐智のコンサートであれば、さっさとオレも佐智に話をしている。それどころか事後承諾で、勝手に話を進めているかもしれない。
　託生だって、話をしたら迷うことなく「使え」と言うだろう。
　けれど、託生が大切にしているものを、このような形で使うなんて。
「副社長！これからも葉山さんのコンサートが使われるかもしれないんです！ここで捕まえないと！」
「松本……」
「葉山さんだって、ご自分の演奏を聴くつもりのない客なんて、迷惑以外のなにものでもないと思います」
　拳を握り締めて、きっぱりと松本が断言する。
　最後のデータを握らせた今、チャンスは一度きり。それがたまたま託生のコンサートを使われただけのこと。
「義一さん」
「副社長」
　二人が決断しろと迫る。いや、覚悟を決めろ、か。
　これから先も託生のコンサートを取引の場に使うなんて。
　託生のバイオリンを汚すようなことは、オレがさせない。そんなことは絶対させてはならない！
「島岡。FBIに連絡を」
　オレの言葉に、松本がホッとしたように微笑んだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　ピアノの伴奏の人とコンサートの最終打ち合わせをし、エレベーターまで見送った背後から、桜井さんが慌しくぼくを呼んだ。
「どうしました？」
「副社長から連絡が入りまして、すぐにペントハウスに戻ってほしいと」
「ギイが？」
　時計を確認すると、まだ夕方の時刻。こんな時間にギイがペントハウスに帰るなんて、いったいなにがあったのだろう。
　急いでペントハウスに戻ると、ギイはプライベートの居間にいると言う。
　そして、桜井さんも一緒に呼ばれ、ドアをノックをして開けると、そこにはギイの他に島岡さん、松本さん、そして数人の男性がいた。
「託生、お帰り」

「ただいま……どうしたの？」
　小声で聞くとギイは曖昧に笑い、
「託生も桜井も、そこに座ってくれ」
　言われて首を傾げつつ、ソファに座った。
　普段ならこれだけの人数が集まれば玄関ロビーの奥にある居間を使うはずなのに、なぜこの居間なんだろう。しかも、他の部屋からソファを移動させてまで。
　メイドがぼくと桜井さんの前にコーヒーを置き、ギイはすぐに出ていくように指示した。そして、居間の鍵を閉める。所謂密室状態だ。
　改めてぼく達に向き直り、ギイが見知らぬ男性を紹介した。
「こちら、FBIの捜査官だ」
「はじめまして。葉山です」
「マネージャーの桜井です」
　挨拶をして首を傾げる。
　FBI？どうして、そんな人がいるところに、ぼく達が呼ばれたのだろう。
　説明を求めてギイを見ると、真剣な表情でギイは口を開いた。
「前に託生が、エリザベス・イートンのことが気になるって言ってたよな？」
「うん、そうだけど」
「それで調べてみた」
　言いながらギイは紙の束をテーブルに置いた。
　これって、報告書だよね。
　一番上にはミス・イートンと日本人の男性の写真がクリップで留められている。
「イートンとこの男……田村と言うんだが、Fグループの情報を流している産業スパイだった」
「え？」
　隣に座っている桜井さんも、動揺しているようだった。だって、見知らぬ人ではないのだから。
　桜井さんと顔を見合わせ、もう一度写真を見る。確かに、この人の表情が気になっていたけれど、まさかそんな重大なことが隠れているなんて、思いもしなかった。
「だから、社内ではなくここに集まってもらったんだ。どこから情報が漏れるかわからないからな。漏洩の流れはこうだ。イートンが情報提供者から手に入れた情報を田村に渡し、田村がその情報をいい値で買ってくれる所を見つけて売る。ただ……」
　ギイは少し口ごもって一呼吸おき、ぼくを真っ直ぐに見た。
「イートンから田村に情報を渡している場所が、日本人のクラシックコンサートだ」
　あ……。
　それが、あの表情の答えだったのか。
　取引に来ていただけで、音楽を聴きにきているわけではなかったんだ。
「日本人のクラシックコンサートを使っていたのは、客に日本人がいてもおかしくない環境だからだ」
　ギイが説明に補足する。
　確かにどこの国でコンサートをしても、日本人の人が必ず来てくれている。それは、ぼくが日本人だからだ。
「それで、どうするの？」
　ぼくの問いにギイは膝の上で組んだ手に力を入れ、そしてFBIの人と目配せして、もう一度ぼくを見た。
「数週間前に漏れた情報があるんだけど、それは完成品じゃなくて一部が欠けた状態のものだったんだ。相手方もそれに気付いたから、改めて完成品の情報を置いたのが五日前だ。そして、今日イートンが、来週の託生のコンサートチケットを購入したことがわかった」
　そこでギイは言葉を切った。固い表情。
　言わなくてもギイの気持ちがわかりすぎるほどわかる。ぼくがこの場に呼ばれた理由を。

「ぼくのコンサートを使えばいいよ。現行犯なら確実に捕まえられるだろ？」
「……いいか？」
「うん」
　ギイがぼくとぼくを繋ぐもの全てを大切にしてくれるように、ぼくだってギイが大切だ。
　それに、ギイに協力できるなんてこと滅多にないのだから、正直ぼくは嬉しいんだ。だから、そんな苦しそうな顔をしないでほしい。
「具体的には、どのようにされるのですか？」
　桜井さんが、話を先に進めた。
　動きを把握しておかなければ、コンサートへの影響が出てくるかもしれないからだ。対応が遅れてお客さんに迷惑をかけるわけにはいかない。
「イートンと田村の周りを我々が固めます。また、どのような形でデータの受け渡しをしているのかがわからないので、隠しカメラを仕込み監視する予定です」
　もうすでに話がついていたのか、捜査官が質問に答える。
「では、控え室を何室か押さえておきます。そちらをお使いください」
　そうして、捜査官と桜井さんの間で会場内での打ち合わせが始まり、
「島岡は、オレと一緒に会場のモニタールームに詰めてくれ。松本は、本社にていつもどおりの振る舞いをしつつ連絡係を」
「わかりました」
　ギイと島岡さん、松本さんは、当日の動きを決めていた。
　皆を見送って部屋に戻ると、どちらともなくぼく達は抱きしめあった。
「ごめんな」
「ギイは、なにも悪いことなんてしてないじゃないか」
「でも、託生のコンサートを、こんな形で使うなんて……」
「そんなこと……。ぼくだって他の人だって、自分のコンサートが取引の場に使われるなんて許せないからね」
　それに、他の聴きにきてくださっているお客さんにも失礼だ。
「この二人を確保するのは、終了直後だ。コンサートの邪魔はしないから」
「うん」
　ギイは約束の印とキスして、ぼくの肩に顔を埋めた。
　しかし、ぼくにはもう一つ気になることがあった。誰もなにも言わなかったけれど、どうするのだろうか。
「ねぇ、ギイ」
「なんだ？」
「ミス・イートンに情報を渡していた人は？」
　ぼくの問いにギイは顔を上げ、静かに微笑んだ。

　ーベルが鳴り客電が少し落とされた。ざわざわとした客席の様子が、舞台袖のモニターに映し出されている。
「託生さん、計画通り、あちらは周りを固めたようです」
　チューニングを終わらせ、舞台袖で待機していたぼくに、桜井さんが耳打ちした。
「そうですか」
　こちら側のスタッフにはなにも伝えてはいない。知っているのは桜井さんだけだ。どこから情報が漏れるかわからないからと、監視カメラの準備も昨晩に仕掛たはずだ。
　ギイと島岡さんは、数人のＦＢＩの人とモニタールームで待機している。
「あと一分です」

桜井さんの声に、ぼくはいつもどおり胸に手を当て目を閉じた。そしてギイを思い浮かべる。
これは、人前で演奏するようになってから始めた儀式みたいなもの。ギイが側にいてもいなくても、ぼくはギイを想ってバイオリンを弾くから。
本ベルが鳴った。
幕が上がる。
ぼくは、視線を真っ直ぐに上げ、光に向かって歩き出した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

幕が上がった。
まばゆい光の中に託生がいる。
全てを共有したいオレにとって、見ていることしかできない歯がゆさを感じるが、この光の中にいる人物がオレの恋人なのだと思うと、誇らしいような、少し寂しいような複雑な気分になる。
バイオリニスト葉山託生の世界が、そこに広がっていた。
物々しい雰囲気の一角を除いて、客席に座っている全員が託生の音に引き込まれている。
オレのことをすごいとよく言うけど、託生、おまえこそすごいよ。己の腕だけで、これだけの聴衆を幸せにできるんだからな。
「しかし、残念だな」
同じ建物の中にいるのに、託生の演奏をこんなモニターでしか見れないのは。
「託生さんの生の演奏は次回のお楽しみですね」
クスリと笑いつつも、島岡もモニターから目を離さない。
どのような受け渡し方法が取られるかわからなかったため、あの二つの席の周りには三百六十度死角がないように隠しカメラが仕込まれている。よって、目の前には幾つものディスプレイが配置されていた。
第一部、そして十五分間の休憩を挟み第二部と、二人に動きはなかった。
情報を売っているのは、こいつらじゃないのか？
いや、そんなことはない。いつか必ず動くはずだ。
じりじりとした心境で待ち続け、アンコールが終わり幕が下り始めた直後、イートンが二つ折りにしたプログラムを落とした。
紙を落としたにしては空気の抵抗を感じないような不自然な落ち方に、モニタールームに緊張が走る。
そしてイートンが、落としたプログラムに目もくれず立ち上がった瞬間、田村が素早くプログラムを拾った。
これだ！
捜査官が二人を挟んでいる部下に指示を飛ばすや否や、隣の人間が田村の腕を捕獲しプログラムを取り上げ、そして、前席にいた人間がプログラムを広げ頷いた。
反対に歩き出そうとしたイートンも、FBIに阻まれ逃げ場を失っている。
一角でそのような捕り物劇が行われているとも知らず、人々は感動に浸りながら出口に向かっていた。
潮が引くようにホール内は空になり、残されたのは、イートンと田村、そしてFBIだけだった。
『イートンと田村を確保。証拠品も押収した』
インカムから聞こえてきた声に、モニタールームに歓声があがる。
「やりましたね」
「あぁ」
FBIがいっせいに動き出し、ホッと一息ついて椅子の背もたれに体重をもたせ掛けた時、控えめなノックと共に託生が顔を覗かせた。
「ギイ？」
「託生、お疲れさん」
インカムを外して席を立ち、両手で託生の肩を寄せ頬にキスをした。

　コンサート直後の紅潮して汗ばんだ頬は桃のように瑞々しくて、本来なら強く抱きしめたいところなのだが、こんなに人間がいる場所では託生が嫌がるだろう。
「どうなった？」
　託生はオレの背後にあるモニターを覗き込むように視線を移し、小さく聞いた。
「あぁ。無事容疑者は確保したよ」
「そっか、よかった」
　安心したように笑う託生に、釣られて笑った。
　この数日、ぴりぴりと集中していた神経が落ち着いていく。……まだ終わってはいないけれど。
「オレは後片付けがあるから、もう少しここに残るよ」
「うん、じゃ、ぼくは先にペントハウスに戻ってるね」
「あぁ。桜井、託生を頼む」
「はい。託生さん、行きましょうか」
　軽く手を振り、桜井と共に出て行った託生を見送りながら、島岡に目で合図した。頷いたのを確認して、FBIの責任者に声をかける。
「あとは任せてもかまいませんか？」
「はい。なにかありましたらご連絡さしあげます」
　慌しく動いている部屋をあとにし、無機質な廊下を歩き裏口から外に出ると、いつものリムジンではなく、目立たない普通のセダンが二台待機していた。
　よくここまでオレの思考を理解しているもんだな、島岡は。
「気に入りませんでしたか？」
「いや。さすがだなと思っていたところだ」
「恐れ入ります」
　人の悪い顔で島岡が笑う。
　お前も気付いていたか、あいつに。
「さてと。そろそろ黒幕に出てきてもらうかな」
「そうですね」
　今頃、あいつも覚悟を決めているだろう。今か今かと迎えを待っているはずだ。
「島岡。あの場所にヤツを連れてきてくれ。オレは先に行っている」
「わかりました」
　オレの言葉に頷き、島岡が携帯を手に取った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　あれから何年経っただろうか。
　目の前には鬱蒼とした雑草だらけの空間があった。まさか数年前、ここにログハウスがあったことなど誰も想像できないだろう。
　あのとき警察でさえ確認できないほど、完璧に隠蔽したんだ。そのまま放ったらかしにすれば、自然が全てを覆いつくしてくれる。
　ぼんやりとした月明かりしかない闇に、小さな光が見えた。車のエンジン音が近づいてくる。
　車が止まり、後部座席から島岡とあいつが降りてきた。その周りをSPが取り囲み、抵抗する様子も見せず、オレに向かって歩いてくる。
「理由はわかっているな？」
「はい。副社長に気付かれているなとは思っていました」
「へぇ。いつ？」
「葉山さんを巻き込んでいるのに、情報提供者を探さなかったからです」

「なるほど」
　だよな。託生のコンサートを使うということは、それを知った提供者が託生を襲う危険性があった。
　数年、オレの側にいたんだ。思考回路は充分把握していただろう。
「副社長こそ、いつ僕だと気付いたんですか？」
「あまりにもお前が託生に構いすぎたからだよ。託生が不自然に感じるほどイートンとバッティングさせたろ？あいつがイートンの名前を出さなければ、オレ達はいつまでも辿りつけなかったんだからな。釜をかけたら、お前は見事に引っかかってくれた。……最後のデータは研究員には公表していない。知っているのは、オレと島岡とお前だけだ。念のため中身はまるっきり別のデータに変えているけどな」
「それで……」
　納得したのか、緊張した面持ちの表情を緩め肩の力を抜いた。
「予想は付くが、一応お前の言い分を聞いておこうか、松本？」
　イートンが産業スパイだと確信を持った時、ふと託生の口からイートンの名前が出た不自然さが浮き彫りになった。
　オレを事務所に迎えにきたこと。ドイツの佐智のコンサート。DVDを事務所に届けたこと。
　全てに関わっていたのは、松本だった。
　託生が気にかかるくらいイートンをぶつけ、そしてオレに調べさせた。
「リチャード・エドワーズをご存知ですか？数年前、孫娘のメアリーに殺された」
「あぁ。あのときは、オレも多大な迷惑をかけられたからな」
「……そうでしたね。祖父を殺したのは副社長と結婚するためなんて、妄言を言ってましたね」
　こいつは真相を知っているのか？それとも、メディアの情報だけなのか？
「リチャード・エドワーズは、お前の父親の義父だろ？」
　話を長引かせるのは面倒なので、こちら側が知っている情報を先に出した。こいつも説明する手間が省けるだろうし。
「……ご存知だったんですか？」
「そりゃ、秘書にしようとする人間の素性は調べるさ。一般の社員とはわけが違う」
「そうですね。僕の父の再婚相手の……いえ、僕の母とは結婚していないから、単純に父の結婚相手がリチャード・エドワーズの娘だっただけなんですが」
　松本は一呼吸置いて説明を続けた。
「僕は父が学生のときの子供で、日本人だった母は父の一族に反対されて、けれど子供は寄越せと言われて逃げたんです。Fグループのような大きな会社でもなかったので、調査できるほどの情報収集力がなく母は逃げ切り僕を産みました。その数年後、父の一族の会社が倒産の危機に陥り、ちょうど娘しかいなかったリチャード・エドワーズが次男であった父を婿養子に迎え、一族の会社はエドワーズのグループ下に置かれて、なんとか持ち直したそうです」
「メアリー・エドワーズはお前の異母兄妹だな？」
「そういうことです」
　松本は、自分の父親がエドワーズの婿養子に入っていることを知らなかったらしい。いや、知る必要もなかったんだろう。自分の生活に関係なかったのだから。
「母と二人、静かに暮らしていたのに。それなのに、エドワーズは簡単に見つけました。そして脅迫状が届いたんです。持ってきたのは父の兄でした。二週間後に僕を殺すと。助けたいのなら、自分が死ねと。その場で脅迫状を燃やし証拠隠滅を図り、その日から僕は毎日死ぬほどではないけれど、いたぶるように狙われ、それに耐え切れず母は自殺しました。僕の代わりに。……あいつらに殺されたと一緒だ！」
　やり場のない怒りが松本を包む。
　エドワーズの娘が夫の過去を知り『気に入らない』とでも言ったのだろう。
　あれだけメアリーを溺愛していたヤツだ。自分の娘も溺愛していたのだろう。だから、ゲームのターゲットに松本の母親を選んだ。

「母の仇を討ちたくても表向きは自殺だから、警察も動いてくれません。証拠もないし、僕自身もまだ子供でした。その後、父親と再婚相手が事故で死に、リチャード・エドワーズもメアリーに殺され、メアリーも数ヶ月前死にました。……残るは父の一族のみ」
「フェラー・コーポレーションだな」
　ほんの少し驚いたように目を見開き、静かに頷いた。
「ハロルド・フェラー……僕の祖父で、現社長は僕の伯父です。あの脅迫状を持ってきた」
「それで、フェラー・コーポレーションに行くときに眼鏡をかけていたわけだ」
「顔を覚えられている可能性がありましたので」
　松本の話に、こいつがメディアのみの情報しか持っていないことを確信した。さすがに当時学生だった松本が、裏の情報を手に入れることは不可能だ。
　さて、どうするか。こいつのこと、結構気に入っているんだよな。
「ようするに、お前は父親の一族への復讐を企て、それを完遂させたわけだ」
　ただでさえエドワーズの死後、資金繰りが危うい状態だったのに、この漏洩事件により、各方面への賠償金が発生し、それ以前に信用ががた落ち。
　それだけならいいが、データが完成したとき、万が一のことを考え軍部には直接話をつけた。このデータの使用はFグループ内と軍部だけに留め、もしも外部に漏れた場合は、漏らした人間及びデータを知った人間の処理を軍部に任せると。
　暗に、どう処理しようと……この世界からその人間がいなくなろうと、オレは関知しないと明言してある。
　数ヵ月後、フェラー一族の人間が生きている保証は限りなくゼロだ。仲介をした、イートン、田村。そして、情報提供者の松本も。
　……ということを、こいつはもちろん承知している。
「僕が情報を流しました。出頭する準備も終わっています」
　出頭すればどのようになるかは、自分が一番よく知っているだろうに。最初から覚悟を決め、父親一族を道連れにするつもりだったのだ。
　だからこそ、ここに連れてきた。松本を見極めるために。

「……お前の名前はあがらないさ。ＦＢＩにはわざと囮を使ったと言ってあるし」
「なぜですか！」
「このまま、お前を放し飼いにするわけにもいかないしなぁ」
「え？」
　呆然と見返す松本に、クスリと笑った。そして、今は雑草だらけの空間に目を向け、胸元に手を差し込んだ。指先に冷たい感触が当たる。
「さっきの話は嘘だ」
「どのお話……ですか？」
「秘書になる人間だからお前を調べたって話。オレがお前を調べたのは、十年前だ」
「え？」
「リチャード・エドワーズの血縁ではないが、メアリー・エドワーズと繋がりのある者だったからな」
「メアリー……？」
　どうしてここでメアリーの名が出てくるのか不思議そうだな。
「ここには、オレとメアリーが密会していたログハウスがあったんだよ」
　振り返り銃口を松本の眉間に狙いを定めた。それが合図となり、周りを囲んでいたＳＰ達が銃を構える。
　驚愕の表情に変わっていく表情を、どこか冷めた目で見ているオレがいた。この数年一緒に仕事をしてきた相手でも、オレには関係ないらしい。

「じゃあ、メアリーが言っていた妄言は……」
「ターゲットはリチャード・エドワーズだった。あいつが溺愛しているメアリーを使って殺すのが一番効果がありそうだったから、少し入れ知恵をしただけさ。そのついでに、お前を調べた。異母兄妹だからな」
　もしも妹メアリーの妄言を信じ、調べるようなことがあれば、いつでも始末するつもりで。
「僕を秘書にしたのは……」
「監視のつもりであったのは否定しないが、秘書として優秀な要素があった。それは保証する。お前を第二秘書に押したのは島岡だからな」
　一石二鳥ではあったけれど、実際松本は秘書に向いていた。こいつの行動力と情報収集能力、そして勘の良さは抜群だ。島岡ほどになるには、あと数年かかるだろうが。
　ふと松本がなにかに気付いたように首を傾げ、目を見開く。
　そう、こういう勘の良さが、お前のいいところだよ。
「まさか副社長。メアリーが死んだのは……」
「薬のOver Doseだろ？……表向きは、な」
　リチャード・エドワーズは孫娘に殺され、アルフレッド・カーターは獄中死。ピーターソンもスラム街の一室で変死した。
　そして最後の生き残りメアリーも、出所と同時に売人を送り込み甘い言葉と薬に溺れさせた。罪人とは言え、一生遊んで暮らせるだけの金は持っていたからな。売人達のいい鴨になり、メアリーはドラッグパーティであっさりと死んだ。
　当事者全員が死に、今やオレと島岡、そしてごく少数の実行部隊しか知らないトップシークレット。
　風が葉を揺らし、月が雲に隠れた。
　松本の顔が闇に混じり、表情が見えなくなった。反対に、松本からもオレが見えないだろうから丁度いい。
「死ぬか生きるか、お前に選ばせてやるよ。どうする、松本？」
　元から死ぬつもりで、お前はイートンに情報を提供したのだろう？
　ＦＢＩに出頭し人知れず秘密裏に殺されるなら、この場でオレが殺してやる。トップシークレットを知った口封じとして。
　だが生きるのならば、監視代わりにオレの側にいてもらうしかないな。
　お前はどっちを選ぶ？
「リチャード・エドワーズを殺した理由を……お聞きしてもいいでしょうか？」
　そんなこと。ここまで知ったんだ。いくらでもネタばらししてやるよ。
「簡単なことさ。託生を狙ったからだ」
「葉山さんを……！」
「リチャード・エドワーズとそのお仲間達は、人の命を賭けて楽しんでいた。……お前の母親も賭けのターゲットになったんだろうな」
「賭け……人の命で遊んでいた。そういうこと、です、か？」
　松本の無念は、誰よりもよくわかっている。
　命よりも大切な託生を、二度にも渡り殺そうとした。あの手放さなければならなかった悔しさは、たぶん一生忘れられないだろう。
　雲が流れた。柔らかな月の光がオレ達を浮きぼりにする。
　松本は、背筋を伸ばしまっすぐにオレを見ていた。
「これからも、よろしくお願いします」
　銃を胸元に入れ、頭を下げた松本の肩を軽く叩く。島岡が片手を挙げ、ＳＰに合図を送った。
　綺麗ごとばかりで世の中が上手くいくのなら、それに越したことはないが、生憎オレの周りは許してくれない。
　そんなオレの秘書を続けられるのは、島岡とお前くらいだろう。

「お前は、いい秘書になるよ」
　オレの言葉に松本は嬉しそうに頭を上げ、今まで背負っていた悲壮感が漂う空気を綺麗さっぱりと吹き飛ばし、
「島岡さんを倣って、がんばります！」
　まるで選手宣誓のように言い切った。
　……大物過ぎるぞ、松本。切り替えの早さも天下一品だな。
　それよりも。
「ほどほどでいいぞ？」
　これ以上、小うるさいのが増えてもらっては困る。
　苦虫を噛み潰したようなオレに一礼をし、松本は島岡の側に走りよった。自分を秘書に押してくれたことに対する礼を言っているようだ。義理堅いヤツめ。
　煙草に火をつけ、月を仰ぎ見る。
　闇を照らすたった一つの光。おぼろげに照らす先には、それぞれの道が浮かび上がる。
　託生が月のように輝いていてくれるから、オレは道に迷わず歩いていけるんだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お帰り、ギイ」
「ただいま……まだ、起きていたのか？」
　日付が変わり、コンサートの疲れから、もう寝ているだろうと思っていた託生が、ソファに座っていたことに驚きの声を上げた。
「うん、ちょっと眠れなくて」
　そう言いながら、右手でグラスを上げる。
　眠れない時は寝酒でも飲んで寝ろと言ったのを、実行しているわけだな。
「ギイも飲む？」
「あぁ、少し貰おうかな、ロックで」
　託生の隣に座り、グラスに氷を入れウイスキーを注いでいる託生を見ていた。
「はい」
「サンキュ」
　置かれた酒を一口飲むと、自然に大きな溜息が零れ落ちる。
　疲れてたんだな、オレ。
　自覚して背もたれに体を預けると、託生がオレのネクタイの結び目に指をかけた。
「なんだ、積極的だな」
「もう！窮屈そうだから外してあげようと思っただけだろ？」
　ほんのり目元を染めて睨むも、その流し目は色っぽいだけだぞ。
　スルリとネクタイを落とした指先を捕らえ、口唇を重ねる。冷たい口内が熱く変わるまで舌を絡ませてから解放すると、ほぉと託生が甘い吐息を漏らした。
「終わった？」
「うん？」
「漏洩事件」
「あぁ、終わったよ」
　二人きりの空間で、なんとも色気のない話題だが、託生を巻き込んでしまったのだから、結果は伝えなくてはいけないだろう。
　松本のことを除いて。
「明日から余罪を調べることになるそうだ」

「そう」
　キスの余韻に浸っているのか、単純に眠たいだけなのか、託生はオレの胸に頭を預けながら目を閉じている。
　しっとりとした黒髪を梳きながら託生の香りを楽しんでいると、ふと託生が顔を上げた。
「ミス・イートンは……」
「なに？」
「彼を愛してたんだね」
　その断定的な言い方が、託生らしくない。酔っているのか？
「そうか？」
「だって、彼のために犯罪に手を出したんだろ？」
　愛する男が望んだことだから、犯罪に手を染め他の男に抱かれたと、そう言いたいのか？
　馬鹿馬鹿しい。それは愛じゃない。単なるイートンの自己満足だ。ここまでして、田村を愛しているのだと自分に酔っていただけだ。
「それなら、田村はイートンを愛してなかったんだな」
「え？」
　田村にとってイートンは手駒でしかなかった。金のために、自分の女を動かし他の男に抱かせた。
　オレなら託生にそんなマネは絶対させない。考えるだけで虫唾が走る。
「ふぅん」
　託生は否定も肯定もせず相槌を打った。元から、それほど深い会話をする気もないようだ。
　ぼんやりとグラスに口をつけている託生を見ていたら、ふと聞いてみたくなった。
　託生はなにも聞かない。オレがあいつらをどうやって潰したのか。
「もしも、オレが犯罪に手を染めるようなことになったら、託生はどうする？」
　オレの質問に、託生はオレの真意を見極めるようにじっと瞳を見詰め、
「どうもしない。変わらないよ」
「託生……？」
「ぼくはギイを愛してるから。もしもギイの手が汚れるようなことがあるのなら、ぼくも同罪だよ。ギイのためなら、自分の手が汚れてもいい」
　きっぱりと覚悟のほどを見せ付けられて息を飲んだ。
　託生は、知っているのかもしれない。知っても、尚、オレの側にいるのだと、離れないのだと、そう言ってくれているのか？
　しかし。
「そんなこと、オレがさせない」
　そんなことはオレだけでいい。託生には、そんな汚いことは絶対させない。
「託生」
　助けを求めるように手を伸ばしたのに、託生は綺麗に微笑んで腕の中に落ちてきた。
　直接手を下さないまでも、オレは何人もの人間を死に追いやっているというのに、お前はオレと一緒だと言う。
　いや、波に飲み込まれるのはオレだけだ。
　闇夜を照らす優しい月の光のように、お前はそこにいてくれ。
　それだけで、オレは永遠に幸せな夢を見ていられるのだから。

お読みくださり、ありがとうございました。
「えぇ？！」と、なってくれていたら、私がニヤリと笑います（笑）

彼を出したときから、いつかは仲間（？）に引きずり込まないといけないよなぁとか考えておりました。
なので、今回、こういう形で入れちゃいました。
……にしても、私の頭の中が、ずっとパズル状態でして；
今回、すごく難しかったです。色々と。伏線が。
あまり、無謀なことは考えないほうがいいなと実感しました。
仲間にはなりましたが、彼の性格というのは変わらないと思いますので、これからも、ヨロシクお願いします。
(2012.8.2)

背中で感じる恋(2011.7)

　高校時代。託生は将来の事を、何も決めてはいなかった。明確なビジョンを持つ学生の方が少ないだろうし、それが間違っているとも思わない。なので今はバイオリンを弾く事以外考えられないからと、漠然と音大に進んだのは当然の事だ。
　ごく普通の大学生活を送り、ごく普通に就職活動をし、卒業後は音楽関係ではあるだろうが一般の学生のように仕事に就くのだろうと考えていたオレの予想を裏切り、託生は大学を中退してパリに留学した。
　託生の性格上、冒険をするようなやつじゃないのはわかっている。それに音楽を競うようなやつでもない事を。
　しかし、ヨーロッパで数々の賞を取る様子に、バイオリンで生きていく事に決めたのかと疑問を抱いたオレは、託生の意思を知るために、NYフィルとの共演を終えた佐智の楽屋に顔を出した。
　託生には関わらない。たまに託生の様子がわかれば、それで十分だった。
　だが、託生がソリストを目指しているならば話は別だ。
　一般の人間が当たり前のようにソリストになれるのならば、佐智のサマーキャンプなんて必要ない。託生ならば、すぐに後見人がつくのは予想できたが、オレの心が許せなかった。
　オレ以外の人間が託生の後見人につくなんて。
　託生と関わってはいけないとわかっているのに、それに逆らう本能。
　葛藤を胸に秘め、佐智と向かい合ったオレに、
「義一君の話って？」
　半ば呆れたように話を振った。
　佐智がこちらでの定宿代わりにしている井上家のマンションに移動し、ソファに座った直後の事だ。
「……託生の事だよ」
「うん。それは、わかってるよ。今更、託生君の何が聞きたいんだい？」
「あいつは、卒業後、どうするつもりなんだ？」
「託生君は、どこかの楽団にでも入るつもりみたいだけど？」
　どこか投げやりに質問に答えた佐智の顔が、不満に染まる。佐智自身、託生の選択に納得していないのか。
「じゃあ、バイオリニストの佐智に聞きたい。託生の意思がもちろん最優先だが、佐智はあいつの将来をどう思っているか？」
　オレをチラリと見上げ、
「あれだけ幾つもの賞を取っているからには、どこの楽団ででも通用するだろうね。ただ、どれだけの賞を取っていても、楽団に入ればただの下っ端。虐めや妬みがそこら中に横行しているクラシック業界だ。ストラディバリを持っているだけで、目をつけられるのは火を見るより明らかだし。第一に託生くんの持ち味が殺され埋もれてしまうのは悔しい」
　まるで八つ当たりのように言葉を連ね、コーヒーを一口飲んだ。
　いや、実際八つ当たりなんだろうな。
　託生がソリストとしてやっていくために、一番必要なものがわかっているからこそ、オレに文句を言ってるんだ。
「佐智は、ソリストとして活動したほうがいいと思ってるのか？」
「そうだね。今、託生君に足りないのは……後見人だけだ」
　きっぱりと言い、オレの真意を量るように睨みつける。
　覚悟を決めろと。そう言いたいのか、佐智？
「……わかった。オレが後見人になる」
　静まり返った部屋に響く自分の声が、まるで他人の声のように聞こえた。
　オレが表に出なければいいんだ。それならば、託生を巻き込む事はない。

「マネージメントのプロを集めて事務所を作る。それで、いいか？」
「義一君にしては上出来だね」
　責めるような眼差しから一変、佐智の表情が柔らかく緩んだ。
「託生は納得するかな？」
「協力は惜しまないよ」
　あぁ、そうだろうな。佐智があれだけ気に入っていた託生の音が、世の中に出るんだからな。こっちが言わなくても、協力は惜しまないだろうさ。
「ただ、託生君が素直に日本に戻ってくれるかが問題なんだよね」
「は？」
　溜息混じりに言われた言葉に、あんぐりと口を開けた。
「パリが気に入っているのか？」
「じゃなくて、日本が気に入らないんだ」
　なんだ、それ？
　日本生まれで日本育ちの人間が、日本を気に入らないとはどういう事だ？
　ということは、まさか……。
「託生は日本が気に入らないから、パリに行ったとでも？」
「そうだよ」
　あっさりと頷いた佐智を凝視する。初めて聞いた裏事情が、理解できない。
「気になるなら、いつか聞いてみなよ。託生君に」
　佐智の言葉に、口元を歪ませ視線を外した。
　オレがその理由を託生に聞く事は、一生ないだろう。
　あいつらを根絶やしにしたって、オレの置かれた立場は変わらない。もう巻き込みたくはないんだ。
　オレの命より大切だから。
　もう、二度と託生には会わない。

　祠堂を卒業して十年。
　フランスで偶然再会し、変わらぬ愛を確かめ合ったオレには、もう託生と離れて暮らす事など考えられなかった。
　誓いは託生に触れたことで脆く崩れ落ち、一度は日本に帰らなければならないという託生をギリギリまで引き止め、事務所の移転まで会えないとわかると日本への出張を無理矢理ねじ込んだ。
　渇ききっていた心に染み渡る至高の水。無意味に生きていたオレの生活を一変させ、鮮やかに彩りを変える。
　祠堂にいる頃も、託生なしに生きてはいけないと思っていた。しかし、今。もう一度この腕に抱き締めてしまった瞬間から、託生はオレの半身となり生きる糧となった。
　だから、事務所の移転に伴い、スタッフと同じようにマンションを探すという託生の荷物を勝手にオレのマンションに運びいれ、有無を言わせず連れてきた。
　どれだけ託生が文句を言ったって、これだけは譲れない。
「託生が別で暮らすと言うのなら、オレがそっちに転がり込むぞ」
「何言ってるんだよ、Fグループの副社長が。そういうわけにはいかないだろ？」
「それを言うなら託生もだろ？バイオリニストが家事なんて、聞いた事がないぞ。指を怪我したらどうする？」
「……コンサートの二週間前からは、全部外食してたよ」
「そんな不経済で栄養が偏るようなマネするな。オレん家だったら、バランスの取れた食事をシェフが作ってくれる！」

屁理屈と駄々をこねまくるオレに根負けした託生は、
「わかった。その代わり。仕事には口を出すな。出した時には事務所の出入り禁止。それ以上の事をするんだったら、日本に帰る」
これが、同居の条件だからと突きつけた。
間髪入れずに了承し満面の笑顔で託生を抱き上げたオレに、呆れたような顔をしながらも、仕方がないなと託生は微笑んだ。
託生がNYに来て半年。
お互いの仕事で一緒にいる時間など、なかなか取れない状態ではあるが、オレは幸せな日々を送っている。
それなのに、何故、胸の奥に巣食う飢餓感がなくならないんだ？
もう二度と訪れることがないと思っていた幸せが、今ここにあるというのに。

真夜中過ぎ。疲れた体を引きずり、ペントハウスに帰りついた。
託生の寝顔しか見ていないのは今日で何日目だ？
浮かんだ不満に、我ながら苦笑する。
託生と離れていた時間、いつ帰ろうがいつ寝ようが、そんな些細な事に一切文句はなかった。全てがただ無機質に流れ、食事さえ生命維持活動の一つくらいにしか思っていなかったのに。
家に帰れば託生がいる。一人きりのベッドで眠っていた空しい日々に比べれば、雲泥の差だ。
そんな事を思いながら静かに寝室のドアを開けた向こうに、てっきり寝ていると思っていた託生が月明かりの中に浮かんでいた。
「あ、ギイ、お帰り。お疲れ様」
振り向いた託生の顔色の悪さに眉をひそめ、
「ただいま。まだ寝ていなかったのか？」
「うーん、目が冴えちゃったのかなぁ。なんだか眠れなくて」
脱いだ上着をソファに放り足早に近寄って肩を抱き、ただいまのキスをして託生の顔を覗き込む。
やはり月明かりのせいじゃないな。熱はなさそうだが少し目も赤い。泣いていたのか？
「何かあったのか？」
「ううん」
「……本当に？」
「うん」
重ねて聞くオレに小首を傾げ、
「ギイこそ、どうかしたの？」
不思議そうにきょとんと反対に聞いてくる。
この様子だと、本当に体調が悪いだけか。
「そんな時には、寝酒でも飲んで寝てしまえよ」
「その手があったか」
ポンと手を叩く素直な託生に笑みが漏れる。
「よしっ、特製ホットワイン作ってきてやる」
「い……いいよ！ギイも疲れているんだし」
「いいから。五分だけいい子で待ってろよ」
踵を返して、今歩いてきた廊下を戻る足取りが軽かったのは言うまでもない。

昼食会を終えオフィスに戻ると同時に、内ポケットで携帯が震えた。

　ディスプレイを確認して……佐智か。こんな時間に珍しい。
「義一君、ピーター・モリスの変な噂を耳にしたんだけど」
「NYのやり手プロデューサー？そいつがどうかしたのか？」
　開口一番聞こえてきた台詞に、噂なんかでわざわざかけてくるなよと一瞬頭を過ぎったのだが、続けられた言葉に目を見開いた。
「『ピーター・モリスがストラディバリを狙っている』」
「なに？」
　どういう意味だ？
「NYフィルの人が内密にと教えてくれたんだけど、ピーター・モリスがそっちのクラシック業界でタクミ・ハヤマを使うなと圧力をかけているらしい」
「なんだと？！」
「どこの楽団も経営が大変でさ。観客を引っ張るにはやっぱりメディアの力が必要だから、テレビ局から圧力がかかるとどうしようもないらしいんだよ」
「いつからだ？」
「二週間くらい前かららしいけど」
「そんな事、託生は一言も……」
　託生の顔色が悪かったあの夜には、事が起こっていたんじゃないか。
　仕事上とは言え、そんなトラブルに巻き込まれている事を、何故オレに言わなかったんだ。それどころか、このオレを完璧に誤魔化した。
　その事実に愕然とする。
　オレは、託生の恋人じゃなかったのか？相談相手にもならない人間だったのか？
　打ちのめされたような気持ちを押し殺し、改めて佐智に確認する。
「とにかく、モリスが託生を狙っているんだな？」
「そうだと聞いてる」
　どういう意味でなど聞かなくてもわかる。モリスはバイで有名なんだ。託生自ら動かざるを得ない状況を作り上げ、手中に収めようって魂胆か。
　佐智に礼を言い携帯を切ったオレは、すぐさま島岡にモリスの調査を指示した。そして、全てのスケジュールをキャンセルし、託生の事務所に足を向けた。

「桜井！」
「副社長、どうしました？」
　スタッフルームに飛び込み桜井を呼ぶと、会議でもしていたのであろう、スタッフの視線がオレに集まった。
　つかつかと歩み寄り、その場に立ち上がった桜井に詰め寄る。
「どうして、黙っていた？」
「あの、なにを」
「ピーター・モリスの事だ！」
　その名前にスタッフ全員の顔色が瞬時変わった。佐智の言っていた事は、やはり本当だったのか。
「仕事上の報告はしなくていいとは言ったが、こんな託生の重大問題まで黙っていろとは言っていないはずだ！」
「も……申し訳ございません」
　怒りに桜井の襟首を掴み拳を振り上げた瞬間、視界に黒い何かが横切った。
　そして。
「託生さん！」
　悲鳴と桜井に背中を預けたまま崩れ落ちる託生の体。握り締めた右手の痛み。

「た……くみ……」
「っ……！」
　目の前にある光景に、音を立てて血の気が引いていく。拳の震えが全身に伝わっていくようだ。
「託生さん！」
「だいじょ……ぶ……」
　桜井の腕の中で米神の辺りを押さえ、痛みを堪えるようにギュッと目を閉じる託生の姿を、信じられないような思いで見詰めていた。
　オレは、何て事を……。
「託生さん、タオルを！」
「ありがとうございます」
　体勢を立て直し濡れタオルを受け取った託生は、呆然と突っ立ったままのオレの腕を引いた。引かれるがまま、その場に膝をついたオレの右手に濡れタオルを巻きつける。
「ぼく、石頭だから、きっとギイの手の方が腫れるよ」
「託生……」
「落ち着いた？」
　そして、どっこらしょとその場で胡坐をかいて、オレの目を覗きこんだ。
「ここは祠堂の裏庭じゃないんだよ？もう、幾つになっても血の気が多いんだから」
　あからさまに作ったとわかる渋い顔をしながら、目は優しく微笑んでオレを諌める。
「ごめん……」
　動揺に震えるオレの声に、
「冷静沈着の副社長を、どこに落としてきたんだよ？」
　あとで拾いに行かなくちゃねと、可笑しそうに茶化した。
　張り詰めた空気を物ともせず、のほほんとした態度を崩さない託生に、スタッフ達の肩の力が抜ける。
　再度、差し出された濡れタオルを自分の頭に押し付け、
「ぼくが言わないでくださいと頼んだんだ。いつかギイの耳に入るとは思っていたけどね。心配かけちゃって、ごめん」
　託生は困ったように微笑んだ。
「本当……なのか？ピーター・モリスがお前を手に入れるために、各所に圧力をかけているのは？」
「みたいだね」
「どうして、オレに……」
　言わなかった？と続けようとしたオレの言葉を遮り、
「あのさ。日本でもこういう変な人っていたんだよ。ここまでの妨害はなかったけど、やっぱり絡まれたりもした。その度に、皆で一緒に乗り越えてきた。だからね。今度も大丈夫」
　きっぱりと言い放つ。
　スタッフへの絶対なる信頼が、託生の顔に浮かぶのを見て気がついた。
　あぁ、そうだ。ここにいる連中は五年一緒にやってきた仲間なんだ。恋人とは言え、付き合いの短いオレよりも信頼関係が密なのは当たり前。
　オレは部外者なのだと痛いほどに感じ、離れていた十年の重みを改めて思い知らされたような気がした。
　いつも感じていた飢餓感の原因はこれだったのか。
「ごめん、痛かっただろ」
「謝るなら、皆に謝って」
　びっくりしてるじゃないか。
　プッと子供のように頬を膨らませた託生に、お前こそ一体何歳だよ？と思うだけにして、
「すまなかった」
　頭を下げたオレに、成り行きを心配そうに見ていた皆は、ふるふると頭を振って弱弱しく笑顔を作った。

「痛っ！」
　その様子を見てクスリと笑った拍子に痛みが走ったのか、痛そうに顔を歪ませた託生に、
「桜井！病院に連絡しろ！」
　慌てて桜井に指示を出す。
「はっ！」
「病院なんて大げさな……って、うわっ！ギイ、おろして！」
「頭だぞ？！すぐに診てもらわないと！」
　オレが本気で殴ったんだ。暢気に話をしている場合じゃなかった。
「大丈夫だってば。たんこぶくらいはできるかもしれないけ……」
「副社長、すぐに来てくださいと」
「わかった。車の用意を」
「だから、おろせってばーーーーっ！」
　顔を真っ赤にしてギャンギャン騒ぐ託生を横抱きにし、ロビーへと向かう。
　託生、口を閉じた方が視線は集まらないんだけどな。言っても無駄か。

　託生が検査を受けている間、オレは桜井から事の次第を細かく聞いた。
　きっぱりと断った託生に、いやらしい笑みを浮かべ、
「後悔しますよ。気が変わったら、こちらへ連絡ください」
　と言い残し、その翌日から全ての仕事をキャンセルされたらしい。
　そのときの事を思い出したのか、桜井の顔が嫌悪に歪む。
「モリスの件はオレが動く。スタッフには、何も心配するなと伝えてくれ。託生を……いや、いい」
　付き合いの長さで行けば、オレよりこいつの方が長いんだ。わざわざオレが口を出さなくとも、託生の事はわかっているはずだ。さっきも、こいつらの絆の深さを目にしたばかりじゃないか。
「副社長。私は、託生さんが怒鳴ったり殴ったりしたのを見た事がなかったんです」
「え？」
　押し黙ったオレに、桜井がおもむろに口を開いた。
「バイオリンを弾いている時は、もちろん真剣な表情をされていますが、それ以外はいつも穏やかな笑みを浮かべて……初めて副社長を殴ったのを見た時、心の底から驚きました」
「それは、誰でも驚くだろ？」
　一応、託生の後見人だからな。
　例えは悪いが、部下が上司を殴るようなもんだ。
「いえ、殴った事実に驚いたのではなく、託生さんの表情に驚いたんです。これが本当の託生さんだったのだと、私達はこちらに来て初めて知りました」
　オレには昔と変わっていないと思っていた託生を、五年も一緒にいたのに初めて知ったのだと桜井が言う。
「表情が豊かになったと同時に音も変わりました」
「そうなのか？」
　CDでしか聴く事がなく、こちらに移ってからも練習を見せてもらえないオレには、よくわからないが。
「佐智さんに『これが、本当の音だ』と教えていただきました。聴いているこちらまで幸せな気分になるような、とても優しい音なんです。NYに来てからの託生さんが、本来の託生さんだったんですね」
　感慨深げに桜井が目を細めた。
「託生さんにとって、副社長はとても大切な方なのだと、私は思います」
　五年間、託生の側にいたスタッフより、たった二年の付き合いであるオレの方が深いと、そう言いたいのか？

それでも、満たされない想い。心の渇きは、いつまでも潤ってはくれない。
こんなに愛しているのに……。

看護師に無理やり張られた湿布を目にし、島岡が「どうしたんです？」と問いかけてくるのをひらひらと手を振ってやり過ごす。
託生を殴っただなんて、口に出したくはない。
「何かわかったか？」
数時間そこらで大した事はわからないだろうが、それなりに束となった報告書を島岡はデスクの上に置いた。
クリップで挟んだ報告書を一枚一枚捲り、頭に叩き込んでいく。さすが業界人。交友関係が多岐に渡っているな。
「モリスが寝たとされる人物はこれだけか？」
「いいえ、まだ調査中です。モリス自ら声をかけた人物は、明日にでも出揃うでしょう」
なるほど。こいつらは、自分からモリスに体を売り込んだ人間なんだな。
「数回はモリスの番組に出ているはずです。その後は、さっぱりですが」
「そんなもんだろ。一応ヤツはNYのトッププロデューサーだからな。掃いて捨てるほど代わりはいる」
それなのに、託生に目を付けた。
怒りに頭が沸騰しそうになるのを奥歯を噛み締めてやりすごし、報告書を閉じる。
人気プロデューサーとは言え、所詮テレビ局の一局員。
「どうします？」
オレの考えは既に理解しているだろうに、わざわざ聞いてくるとは島岡もいい性格をしている。
「オレ、ハムラビ法典の支持者なんだよな」
ニヤリと笑い、写真を指で弾く。
「だが、まだ材料が足りない。託生を傷つけたんだ。それ相応の報復はさせてもらう」
ピーター・モリス。
笑っていられるのも、今の内だ。
オレの託生に手を出した事を、死ぬほど後悔させてやる。

その夜、シャワーと仮眠を取るために戻ったペントハウス。
ベッドに腰掛け、丸くなっている託生の髪をそっと撫でた。手のひらから伝わる熱が、切なく心に染み渡る。
「いつになったら、お前の一番になれるのかな？」
高校時代、オレはいつもお前の兄貴に負けているのだと思っていた。勝ったつもりでいたのに、渡辺綱大の出現によりわかった敗北。
そして、今は……。
託生の気持ちを疑っているわけじゃない。愛されていると思う。
しかし、お前が大切にしている人間の中の一人なだけで、特別だと実感できないんだ。
狂ってしまいそうなくらいの空虚感。
「愛してるんだ、託生」
零れ落ちた言葉に、目の奥が熱くなる。お前を求める心が底なし沼のように、深く沈み込んでいく。
「愛してるよ」
柔らかな頬にキスを落として、バスルームに向かった。

　古ぼけたテーブルの上に置いたトランクを、男が震える手でロックを外した。中身を恐る恐る触り本物だと確認したとたん、声にならない歓喜の声をあげる。
「ほ……本当に、いいのか？」
「かまわん。さっさとそれを持って、どこかに行ってくれ」
「あぁ。これだけあったら、どこにでも行ける。あのモリスからも逃げ切れる！」
　男はガタガタと椅子を鳴らしトランクを両手で抱きかかえ、逃げるようにドアの向こうに消えた。
　手袋をはめた島岡が、男が置いていった鞄からディスクを一枚取り出し、ポータブルプレーヤーにセットする。
「胸糞の悪い趣味だな」
「それには同意しますね」
　音声をオンにすれば、甘い嬌声どころか悲鳴が聞こえてくるだろう。託生も同じような目に合わされていたかもしれないと考えるだけで、血が逆流するくらいの怒りを感じる。
「一応、残りのディスクも確認しておいてくれ。明日の朝一番で、各社に指示を。違約金が発生するなら、こちらに回せと言っておけ」
「承知しました」
　桜井によると、事務所にはまだとぼけた電話が入るらしい。託生が落ちるのを、涎を垂らしながら待っているのだろう。
　託生を汚らわしい目で見やがって。
「それだけで、十分罪になるんだよ」
　画面の中で醜い体を晒しているモリスに吐き捨てた。

　島岡の配慮により、いつもよりは早く帰宅できた。この時間であれば、まだ託生も起きているだろう。
　そう思いながら入った寝室に託生の姿はなかった。
　バスルーム、隣の居間と覗いて、部屋の向かい、防音室のドアをノックする。ややあってドアが開き、託生が顔を出した。
「ギイ…！」
「ただいま」
　滅多にないオレの早い帰宅に目を丸くしつつも、
「お帰り」
　嬉しそうに微笑む託生の頬にキスをする。
　目を閉じてキスを受けた託生が、どうぞという風に一歩後ずさり、オレは部屋に足を踏み入れた。
　託生がNYに来る前に、急遽リフォームした防音室。部屋の中心にベーゼンドルファー。小さな応接セットとは別に物書き用のデスクがあり、その横のサイドテーブルにはノートパソコンが開けっ放しで置いてある。更にその横には日本から持ち込んだキーボード（鍵盤楽器）とプリンタ。
「キーボードで弾けば、自動的に楽譜にしてくれる便利なもの」
　と、パソコンの扱いが苦手なのにも関わらず、こと音楽ソフトだけは使いこなすという、器用なのか不器用なのか未だに判断できかねる託生の一面だ。
「まだ、練習していたのか？」
「もう、終わりだけどね」
　そう言いながら、譜面台に乗せていた楽譜を片付け、ピアノの椅子に座ってクロスでバイオリンを丁寧に拭き始めた。
　手入れが終わるのをソファに座って待っていると、
「明日から恋シリーズのレコーディングなんだ」

　託生が世間話をするように口を開いた。
　いつもより早い時期でのレコーディングは、モリスのせいだろう。今の託生にはレコーディングくらいしか仕事がない。
　ごめんな。あと数日で決着つけるから。
「今度のCDは、こちらに来てから作ったものばかりを集めてて、ちょっと今までとは雰囲気が違うんだよ？」
　楽しみにしててねと託生が笑う。
　桜井から仕事の報告をなくしたのは、託生から直接聞きたかったからだ。しかし実際はオレから言い出さなければ、託生は仕事に関して何も話さなかった。
　だから、今のように託生から聞くのは初めてだ。
　どういう心境の変化だ？
　オレの声が聞こえたかのように、
「ギイが不安なら、全部話すよ？」
「え……？」
　バイオリンから目を離さず、ポツリと言う。
「練習は見せられないけどね」
「なぜだ？」
「思ったとおりに弾けなくて、落ち込んでいる姿なんて見せられないよ」
　クスクスと笑いながら託生は言うが、
「そんなの今更だろ？」
　祠堂でどれだけ託生の練習を見てきたか。何度も何度もフレーズを繰り返し、自分が納得するまで練習をしていた姿が鮮やかに蘇るのに。
　ケースの蓋をカチリと閉めて振り返り、託生はオレを見詰めた。
「ダメだよ。ぼくはプロなんだ」
　そう言い切った託生の顔が、佐智と重なった。

　ノックの音と共に島岡が顔を出し、
「アポなしで、モリスが乗り込んで来ているようですが」
　どうします？と、面白そうに問いかける。
「計算どおりだな」
　オレまでたどり着くのに、きっちり一週間。そう思って、ここ二日はデスクワークを入れていたんだ。
　クスリと笑い「会ってやるか」オレの返事に、島岡は階下に連絡を取った。
　下準備が済んだ一週間前。モリスの持っている番組全て、Fグループ関連はスポンサーを降りるように指示を出した。モリス以外の番組はそのままなのだから、ターゲットは自分なのだと本人も、そして他の人間も気付いているだろう。
　人気プロデューサーとは言え、スポンサーがつかなければ番組は成り立たない。ちょうど番組編成が行われる時期だ。当然、局からも干されているだろう。
　なんてことはない。託生がされた事を返しただけだ。
　数分後、数人のSPに連れられて、モリスが部屋に入ってきた。
「初めまして。ピーター・モリスと申します。突然の訪問、申し訳ありません」
　怒りを押し殺して頭を下げるモリスにソファを勧め、
「今日は、どのようなご用件で？」
　すっとぼけた振りをして、話を振った。
「どうしてFグループが私の番組のスポンサーをいっせいに降りたのか、理由をお聞きしたくて参りました」
「理由ね……それは、貴方が一番よくおわかりだと思いますが？」

「わからないから、尋ねているんです！副社長のお気に触るような事を、私はやった覚えがない！」
「ふぅん」
　軽く頷いて胸元から取り出したカードを、モリスの前に滑らす。名刺とは別に使っているらしいプライベート用のカード。桜井が保管していたのをオレが預かったのだ。
「タクミ・ハヤマのストラディバリは、オレの物なんだ」
　カードを凝視していたモリスの顔から、血の気が引き額に脂汗が滲んでくる。自分が誰に絡んだのか、これでわかるだろう。
　一局のプロデューサー風情が、この崎義一に喧嘩を売るとどういう事になるか、身を持って教えてやっているのだから感謝してもらいたいものだな。
「ベッドを断られたから、その腹いせに音楽活動を妨害とは大人気ない事してくれるじゃないか。バイオリニスト一人を潰すことなどわけはないとでも？舐めたまねしやがって」
「そ……それは……」
「芸能界の裏世界なんて、お前らが勝手にやっているだけだろうが。お前達には体を使う事など当たり前だろうけどな、一般常識を逸脱している行為なんだって事を認識しろ。託生をその辺りの芸能人扱いなど、このオレが許さん」
「も……申し訳ありません！」
　その場で床に頭をこすり付けているヤツを一瞥し、
「島岡、モリス氏がお帰りだ！」
　話は終わりだとばかりに言い捨てた。
「あの！もう二度と、このような事はしませんから！お願いします！このままでは私……！」
　この期に及んで自己保身か。自分がまだ許されると思っているのか？能天気なやつ。
　退室を促す島岡の手を振り払って、必死の形相で追いすがるモリスを鼻で笑い、
「……もう一度スポンサーについてやってもいいぜ」
　とりあえず天国に引き上げてみる。
　オレの言葉にモリスの顔が輝く。
「あ、ありがとうござ……」
「お前が、ここから局に戻れるのならな」
「そ…それは、どういう……」
　数枚の写真を床に放り、
「お前の性癖も警察にバラしておいたから。ロリコン趣味のSM好きだってな」
　あっけなく天国から地獄に突き落とされ、わなわなと体を震わせ激高して掴みかかろうとするモリスを、SP達が羽交い絞めにし部屋から連れ出した。廊下で何か叫んでいるようだが、もうお前に用はない。
　ビルの前には、島岡から連絡を受けた警察が待機しているだろう。
　未成年者への淫行、しかも十三歳未満の子供を手にかけたんだ。性的虐待に傷害容疑。モリスも、これで終わりだな。

『どうしましょうか？』
「圧力がかかったのが原因でも、託生を締め出したんだからな。多少嫌味を言っても許されると思うが。その辺りの駆け引きはお前達の得意分野だろ？任せる」
『わかりました』
　携帯を切りガラスのテーブルに置いた。
　眼前には透き通るような青い海が広がっている。
　オレの誕生日に合わせて取った一週間のバカンスは、どうしても二人きりで過ごしたかった。それだけの為に島を買った事は、託生には内緒だ。オレにとっては、貴重な一週間なんだからな。お小言は遠慮した

い。
　頬を撫でる心地よい穏やかな風に乗って聴こえてくるのは、できたばかりの恋シリーズだ。旅行前日に託生が持ち帰り、そのまま荷物に紛れ込ませた。
「ギイ」
「サンキュ」
　ぼんやりと海を眺めていると、アイスティーを持って戻ってきた託生がそのままオレの隣に座り、ポスンと肩に頭を預けた。潮の香りと託生の甘い香りが混じり眠気を誘う。
　こんなにゆったりとした時間は、託生がNYに来てから初めてじゃないか？
　バイオリンの音が止み、次の曲へと移った。NYの夜景をイメージしたような、煌びやかな中に物静かなフレーズが流れている。
「なぁ、いつから作曲してたんだ？祠堂では作っていなかったよな」
「うん。留学……してからかな」
　のんびりとした口調に、託生もオフモードに切り替わっているのかと感じ、クスリと笑う。放っておけば、今にも昼寝しそうな声だ。
　……そう言えば、昔、佐智が言っていたな。託生は日本が嫌で留学したと。
　今まで聞く機会がなかったけど、託生はどんな十年を送っていたのだろうか。
「どうして留学したんだ？バイオリンで生きていく事を決めたからか？」
「え？」
　ぼんやりとしていた託生がポカンとしてオレを見、質問を反芻して首を振る。
「当時はバイオリンで生きていく事なんて、考えてなかったよ」
「じゃあ、何故？」
　突っ込んだ質問に、託生は遠くに視線を移し、
「……考えたくなかったから」
　ポツリと言った。
「何を？」
「……ギイを」
　躊躇いがちに答えた託生を、ハッとして見詰める。
　遠くを見詰める託生の瞳が、当時を思い出すように細くなった。
「日本にいたら考える時間が多すぎて。留学したら、ぼく言葉なんて全然わからないから、必死で勉強しなくちゃいけないから、考える時間がなくなるだろ？」
「託生……」
「ギイを忘れようと思った。無理なのにね」
　苦く笑って託生はグラスに口をつける。
「実際、バイオリンとフランス語の勉強だけで、精一杯だったんだ。でもね、大学からの帰り道に夕日を見てさ。……祠堂で見た夕日と同じで。そしたら、忘れようと思っていた思い出が流れ込んできて……。どこに行っても無理なんだとわかったら、仕方がないなと開き直っちゃった」
　自嘲気にクスリと笑った横顔に、そっと口付けた。
　苦しかったのは託生も一緒だったのだと、どうして考えなかったんだ。
　オレ自身、確かに同じ十年を生きてきた。しかし、復讐という目的があったから、まだ耐えられたんだ。バイオリンしかなかった託生の気持ちを思うと、オレが取った行動が本当に正しかったのか迷うばかりだ。
「ごめんな」
「ううん。でもね、ぼく、ギイと離れた事を後悔してないよ」
　後悔……してない？
「今回のCD、ぼくがタイトルをつけたんだ」
「託生が？」

　確かタイトルは……裏返されていたCDケースを手に取り、
「背中で感じる恋」
　呟いて首を捻る。
　今回、やけに変なタイトルだなと思っていたら、託生がつけたのか。
　悪戯っ子のような表情でオレを見ている託生に、
「意味わかる？」
　と聞かれ、
「いや、全然」
　首を振る。
　背中に恋人が抱きついているシチュくらいしか、思い浮かばないぞ。
「ギイ、あっち向いて。体ごと」
「こうか？」
　託生の言われたとおり右を向くと、背中ごしに託生の重みがかかった。じんわりと背中いっぱいに広がる温もりに、託生が背中を預けてきたのだと認識する。
「いつもギイとは見ている風景が違うけど、でもギイの心をずっと感じてるよ。こんな風に」
　背中合わせに座った託生の声が、振動と共に聞こえる。視界に託生はいないけれど、託生を背中で感じてる。
　もしもどちらかがその場を退けば、もう一人は倒れてしまうだろう。支えあう力が対等だからこその背中合わせ。
　離れていた間に、託生はバイオリニストとしての立場を確立し、オレはFグループの後継者として、実質副社長の地位についている。
　もしも、別れることなくあのまま付き合いを続けていたら……。たぶんオレは託生を自由に飛び回らせることはできなかったに違いない。託生自身、バイオリニストの道を選んでいたかもさだかではない。
　それは、依存しあい、お互いの人生そのものを潰しあうような、哀しい生き方になってしまうだろう。
　託生が伝えたかった事が、何となくわかったような気がした。
　手を繋ぎ合って一緒に歩く季節は、もう終わっていたんだ。
　お互いに生きていく世界がある。違う方向を向きながら、けれども振り向けばいつでもそこにお前がいる。
「ギイ」
「ん？」
「愛してる」
　体を包み込むように響く託生の声。
「あぁ、オレも。愛してるよ」
　託生の温もりを背中に感じながら、空を見上げた。この広がる青空は背中越しの託生にも続いている。
　背中を預けあって、同じ空を見よう――――――――。
　未来に続く、オレ達の空を見よう――――――――。

短期集中連載しちゃおうと思ったのですが、できちゃったorz
ので、一気アップしました。
連載の方が楽しいよなぁと思いつつ、更新作業の手間を考えると、一回で済むし。
すみませ～～～～ん；横着者で。
(2011.7.23)

夏の日の約束(2014.2)

　遠く小波の音が聞こえる。聞き慣れない響きにうっすらと目を開け、あぁ、託生とバカンスに来ていたのだと思い出した。
　ずっと、ここに留まっていたいほど穏やかな空間。モリスの件を片付け、慌ただしい日常から逃げ出すかのように訪れた小島は、静かにオレ達を迎え入れてくれた。
　しかし、隣で眠っているはずの託生の姿が、月の光と取って代わっているのを見て、一気に目が覚める。
「託生？」
　手を添えたシーツは、まだ温かい。
　いったい、どこに……？
　手早く脱ぎ捨てていた服を身に着け、寝室のドアを開けた。

　ベッドを抜け出した託生を追って降りてきた砂浜は、淡い月と降り注ぐような星の光しか見えない闇だった。
　湿った海風と波の音。人間の五感を刺激するような空間に、白く浮かび上がるように託生が立っている。
　託生の姿を確認し、知らず安堵の溜息が零れ出た。
　ここは小島で、託生がどこかに行く手段もないのに、腕の中にあった温もりが消えていることに気付いたときは血の気が引いた。今までのことは、全て夢の中の出来事だったのではないかと、立っている地面が崩れ落ちていくような感覚になったのだ。
　そう思った自分に、打ち消すように首を振る。
　いや、本当は、託生がオレから離れていってくれたほうがいいんだ。そうすれば、託生の身に危険が迫ることはない。
　日本にいた頃とはわけが違う。NYに来たことにより、Fグループの、オレのバックが付いていることが世間に知られ、馬鹿モリスの件でそれは一気に広まった。現に事務所の方には、音楽関係どころか、それらしい理由つけた無関係なところからもアクセスしてきている。
　今はスタッフに選別をさせているが、NYに戻ったら一度チェックしなければならないだろう。託生の実力を評価してなのか、オレとの繋ぎを狙っているのか。それとも、オレの喉元にナイフを突き立てたいのか。
　どちらにしても、託生の仕事にまで影響を与えているのは事実。
　……そう、オレは理解している。
　ゆっくりと驚かせないように、託生に近づいた。
　ぼんやりと浮かんでいた託生の体が、はっきりと輪郭を作っていく。まるで触れることが許されなかった過去と、手を伸ばせばすぐに抱き寄せられる現在のように。……未来は、いったいどっちなんだ？
「託生、無防備すぎるぞ」
　そんな格好で。
　少し冷えた体を温めるように、背後から託生を抱きしめたとたん、潮風と一緒に託生の甘い香りが届き、無意識に頬を摺り寄せる。
　この愛しい者がいない世界。数か月前までのオレの日常だったはずなのに、身震いするほどの恐怖を感じ腕に力を込めた。
　――――――――離したくない。もう一度、この腕に戻ってきた託生を離したくないんだ。
　理屈と本音。しかし、どちらもオレの本心。託生の命以上に大切なものがあるはずないのに、オレは、決めることができなかった。
　この蜜月のような甘美な生活を、オレはずっと夢見ていたから。
「だって、ここにはぼく達しかいないんだろ？」

少し前まで濃厚な大人の時間を過ごしたはずなのに、無垢な子供のように言い訳する託生のギャップに苦笑し、羽織っているだけのシャツのボタンを一つ外した。
「ギイ……！」
「だから無防備だと言ったんだ」
さらりとした肌に手を滑らせ、しかし、安心しきった顔で背中を預ける託生に気をそがれる。ここで襲われるなんてこと、露ほども考えていないらしい。
一瞬呆気にとられ、しかしクスリと笑って疲れを癒すように撫で下ろした。お前がそう思っているのなら、今はそういうことにしておこう。
こんな恰好をしているのに、ここまで無防備になるのは、オレの臆病な心に気付いているからなのかもしれない。
ときに託生は、オレの沈んだ心を引き上げ、自身の存在をオレに示し、現実を見せる。自分は、ここにいるのだと。
無意識なのかもしれないが、そんな託生にオレは救われていた。
二人でいることが当然なのだと錯覚するほどに。離れなければと考えることが罪なのだというように。
「あのさ、ギイ」
「うん？」
「この十年、ギイ、がんばってたよね？」
「え？」
「会えないと思ってたけど、新聞とか経済紙とか、ギイが載っているのは見ていたんだ。副社長になったのだって、知ってたよ？」
視線だけオレに寄越しニコリと笑ってくれるが、あれは、復讐していたときに瓢箪から駒のような状態で地位が上がっただけの話だ。
託生に、詳しいことは話していない。知った託生がオレを怖がって離れて……話した方がいいのだろうか。そうすれば、お前はオレから離れていくのだろうか？
そう考えた瞬間、ヒュと喉の奥が鳴ったような気がした。息ができなくなりカラカラに口の中が乾いていく。目の前が暗くなる感覚に、咄嗟に抱きしめた腕に力を入れ意識を保とうとしたオレの手を、託生の手が柔らかく包み込んだ。
とたん失っていた視界が戻り、呼吸が楽になる。
「ギイ？」
「いや、あのスクラップの山は、そういうことだったんだなと思って」
「もう……！」
照れ隠しに睨んで見せた託生の頬にキスをしながら、小さく息を整えた。
記憶の底に眠る光景が浮かんでくる。託生の命が狙われたのだと知った夜と卒業式の夜だ。オレは同じように呼吸が止まり、冷たい床の上に転がった。そして、涙した。
死ぬかもしれないという命の危機よりも、オレは託生を失うことを恐れたのだ。
そんなオレに気付かず、くすぐったそうに肩をすごめた託生が言葉を続ける。
「ぼくも、がんばったつもり。色んな人に助けてもらったし、亀のようなスピードだったかもしれないけど、自分なりにがんばったと思ってる」
「いや、託生は、昔から人一倍の努力をしてたさ。言葉もわからないのに留学するなんて、人間接触嫌悪症だったのに全寮制の祠堂に入学したことと変わらない」
いつも、そうだった。弱いように見えるかもしれないが、託生は自分の成長のために自ら困難な道を選び、全てに打ち勝ってきた。
今、バイオリニストとして表舞台で活躍できるのは、託生の人並みならぬ努力の結果だ。事務所やオレの力じゃない。バックアップこそすれ、客の心までは動かせないからな。
「祠堂の頃は、色々とギイに頼って心配かけたりしたけれど、今は大丈夫だから……」

　言葉を切り、腕の中の託生が体を捻ってオレと向かい合う。真っ直ぐ見上げる目に迷いはない。
「だから、ギイのように経済界を変えるような大きな力は持っていないけど、それでもギイを支えるだけの力はつけたと思うんだ」
「託生？」
「もしもギイが、ぼくを排除しようとしても、ぼくはぼくの意志でここにいる。もしもギイが、事務所を解散させても、NYで仕事をしていくことは可能なんだ。ぼくだって、そのくらいのコネは持ってる。だから、これから先、NYから離れるつもりはない」
　きっぱりと言い切る託生に、ゾクリと鳥肌が立つ。
　フランスで再会し、離れたくないからと半ば強制的に事務所を移転させた。危険に近づける行為だとわかっていたが、どうしても離れられなかった。
　そして、今、慌ただしく動く周囲の状況を改めて見て、やはり託生を連れてくるのは間違いだったと、自分の過ちに気付いたのに……。
　元々事務所の人間が、こちらにいた人間なのだと伝えれば、すんなり納得して異議を唱えることもなかった。あのとき、託生が求めたのは移転作業のための時間だけだ。
　オレの我儘を許してくれているだけだと思っていたのに、託生は……。
「ぼくは、ギイから離れない。ずっと側にいる」
　腕をオレの首に絡ませ、そっと託生が口づけた。
　オレの答えなんて初めから聞くつもりもないらしく妖しく舌を絡ませ、オレの髪をかきあげる。あの小屋で、オレが欲しいのだと訴えたときと同じ口づけ。
「愛してるんだ、ギイ」
「……託生」
「愛してる」
　ねだっても恥ずかしがって口に出さなかった愛の言葉を、惜しげもなく何度も囁き、託生が熱く口唇を重ねてくる。
　その口づけに答えながら、胸が詰まった。
　オレの側にいれば自分の身に危険が迫るのだとわかっていたはずなのに、なにも言わずにNYに来てくれた。昔、幾度と求めていた覚悟を、一人胸に秘めて。
　託生。　愛してる、お前だけを、ずっと……。
「次の夏もここに来たいな」
　そっと口唇を離してオレの肩に頭を預けた託生が呟く。
「……託生がおねだりなんて珍しいな」
　そう揶揄しながら、オレは眩暈を感じるくらい甘く魅惑的な未来に想いを馳せた。
　次の夏……これからまた一年、オレの側にいてくれるのか？その次の夏も、そのまた次の夏も、これから先、ずっと……。
　しかし、差し出された小指を見てハッと現実に気づく。
　離さなくてはいけないのに、そんな約束をしていいのか？
「ギイ？」
　うろたえて小指を凝視したオレを、託生が覗き込む。その瞳が、覚悟を決めろと言っているように見えた。
　次の夏まで。一年だけ許されるだろうか。託生が、オレの側にいても大丈夫だろうか。
「……約束するよ」
　託生の小指にキスをして、震えそうになる自分の小指を絡ませた。

どこかで見たな？という方もいらっしゃると思いますが、小話ついったー《短文問題集》で、『「深夜の海辺」で登場人物が「約束する」、「雷」という単語を使ったお話を考えて下さい。』という問題がありまして、以前託生くんバージョンで書いた物のギイバージョンです。
というか、元々がこちらで、でも短文にはならないし、設定ファイルみたいだし、雷使えないしと急遽託生くんに当時変えたんです。
託生くんの方は、小話ついったー《短文問題集・お題》のどこかにあると思います。すみません、不親切で；
そのままファイルが残っていたんで、とりあえずなにか書いておこうと思いましたので、仕上げてみたのですが、結局、最初から最後まで、うじうじ悩んでいるギイ…になってしまいました；
(2014.2.3)

Love Messages(2013.7)

「お帰りなさいませ。義一様」
「あぁ。託生は？もう、休んでいるのか？」
　いつもとそう変わらない時間にペントハウスに帰り着き、玄関ロビーで出迎えた執事にいつもと同じように問いかけた。
　託生がNYに来て、一緒に暮らすようになってからの日課だ。
　このペントハウスで執事を初め数人が働いているが、今まであまり会話なんてものは必要なかった。この家の管理は執事に任せているし、オレの指示を仰ぐような余程のことがない限り、必要最低限の会話のみで済んでいたのだ。
　だいたい、オレがこのペントハウスにいる時間なんて、一日の内たった数時間のこと。出張も多いから月の半分は留守だ。
　ここは家と言うよりは、寝る場所を確保していたに等しい。いっそのこと本社近くのホテル住まいにした方が、楽だったかもしれない。
　しかし、託生がNYに来たことにより、ここはオレの帰る家となった。
　託生も仕事を持っているとは言え、レコーディングやツアーなど忙しくなる時期を除き、決まった時間に事務所に行き、そして夜には必ずここに帰ってくる。
　それに気付いたとき、初めてペントハウスの存在を家なのだと認識した。
　忙しい日々に変わりはないが、オフを取らないようなワーカーホリックから、少しは人間らしい生活になっていると思う。
　執事に脱いだ上着を渡しネクタイを緩めながら、いつもどおりの返事を期待していた耳に、
「いえ、まだお帰りになってません」
　予想に反した言葉が届き、唖然として少し顔を曇らせた執事を見返した。
「帰ってない？」
　腕時計に目を落とし時間を確認する。既に時刻は午後十一時半を回っていた。
　託生も子供じゃないのだから、付き合いで遅くなる日もあるし、仕事が長引くときもある。しかし、そのようなときは、必ずメールを入れてくれていた。オレが心配するだろうからと。
　ただし、事務所スタッフが有能揃いなので、突発的な付き合いはともかく、ほぼスケジュール通りに事が進み、イレギュラーな行動はなかったのに。
「連絡は？」
「桜井様より、もしかしたら事務所でお泊まりになるかもしれないと」
「泊まり？なんだ、それ？」
　追い討ちをかけられたような気分で反芻する。
　本来は、別に託生が事務所に毎日行く必要はない。ただ、日本にいた頃から、毎日事務所に顔を出していたことと、気持ちの切り替えがしやすいかららしいの だが、コンサートツアーが終わった今、スケジュールも特に入っていないはずなのに、事務所で泊まりになるような仕事があるのか？
「桜井に電話してみるからいいぞ。お前も休め」
　心配そうな表情をしている執事に指示を出して足早に自室に入り、桜井の携帯を鳴らす。
　コール一回鳴るか鳴らないかで繋がったライン。
「桜井、どういうことだ？」
　しかし、その素早さに疑問を感じることもなく、単刀直入切り出したオレに、
「申し訳ありません。託生さんが作曲中なので、いつ終わるのかわからない状態なんです」
　少し落とした桜井の声が聞こえてきた。
「……作曲？」
「はい。作曲されている時は、声をかけない方がいいと佐智さんに言われておりまして……」

……あぁ、そうだった。託生はバイオリニストであり、作曲者でもあったんだ。
オレとしたことが、忘れていた。
それで、桜井が声を潜めているんだな。託生の邪魔をしないように、配慮しているというわけか。
佐智の助言ならば、桜井が託生に声をかけるのを躊躇うのはわかるし、オレだって、そのような状況になれば、託生の邪魔をせず見守ろうと思うだろう。
創作活動というのは、人それぞれ。どのような状況で、どのような作り方をするかなんて、他人にはわからない。
第一に、オレはこれまで託生の作曲する姿を見たことがないのだから、下手に口出しするよりは、ここは桜井に任せるのが賢明だとは思うのだが……。
「メシは食ったのか？」
「いえ、ずっとピアノに向かったままなので……」
「食べてないんだな？」
「はい」
予想通りの答えが返ってきて、前髪をかき上げ大きな溜息を吐く。
学生時代、当時はバイオリンの練習だったが、集中すると周りの一切が目に入らなくなり、気付けば時間が過ぎていた……ということが何度もあった。
あまりにも変わらない託生に懐かしさを感じるが、付き合わされる桜井も気の毒だし、体にも悪い。
それに、託生が晩メシを食っていないのであれば、桜井も食べていないはず。
「わかった。今からそっちに行くから待ってろ」
そう言い置いて携帯を切り、スーツからカジュアルな服に着替え車のキーを手に取る。
途中ファーストフード店でテイクアウトした食料を手に事務所のドアを開け、薄暗い廊下を進むと防音室の向かいのソファに座っていた桜井がオレに気付き立ち上がった。
「託生は？」
「まだ、防音室におられます」
ガラス越しに部屋を覗くと、真剣な顔をした託生が五線紙に向かって書き込んでいた。ときおり確かめるように鍵盤を鳴らし、またペンを走らせる。
ペントハウスに帰ればキーボードを弾くだけで楽譜ができあがるのに、その時間さえ惜しかったのか。
「何時間くらい、あそこにいるんだ？」
「約六時間でしょうか」
「六時間……ものすごい集中力だな」
こんな状態を目の当たりにしたら、集中力をそぐような真似はしたくないけれど、このまま脱水にでもなって倒れられたら、それこそ一大事だ。
買ってきたバーガーの袋を桜井に押し付ける。
「お前も食ってないんだろ？」
「でも、託生さんが食べていらっしゃらないのに……」
「食べさせるから気にするな」
「え……でも……」
慌ててオレを止めようとする桜井に、人差し指を口の前に立て防音室のドアを開ける。
さらさらと、ペンを走らせる音だけが響く室内に足を踏み入れ、静かに託生の側に寄り、袋から取り出したバーガーを託生の口元に当てた。
託生は、当たり前のようにパクリと一口かじって咀嚼し、また一口かじった。その間、視線は五線紙から微塵も外れない。
三口ほど食べたあと、もういいという風に微かに首を振った託生にアイス・オ・レを差し出すと、これまたパクリとストローを咥え喉が鳴る。
まるで親鳥から餌を貰う雛のようだな。

　あまりにも無防備に食べるものだから、半ば呆れ半ば感心し、しかし、このまま放っておけば、食事も睡眠も取りそうにない無頓着ぶりに、一度説教しなければと心に決める。
　オレ達の様子を心配そうに見ていた桜井にウインクして、口パクで「食え」と首を振ると、安心したように微笑みソファに座った。
　ピアノの上の五線紙が、途切れることなくどんどん音符で埋め尽くされる様子に、もう少し時間がかかりそうだなとバーガーとアイス・オ・レを交互に口にあて、ようやく食べ終わった託生を横目に、手早くゴミを片付け、託生の視界に入らないように一歩後ろに下がる。
　オレには全く理解できない音符の羅列だが、託生の頭の中ではきちんとした音楽として再生されているのだろう。
　NYに来てからも、いくつかの作曲をしているのは知っている。現に先日発売された恋シリーズは、全てこちらに来てからのものだと聞いた。
　しかし、一緒に住んでいるとは言え、すれ違いが多いこの生活の中で、託生がどのような毎日を送っているのかオレは把握していない。
　垣間見た「音楽家、葉山託生」の顔。
　オレの最愛の恋人で、託生の全てを知っていると思っていたのに、それは違ったようだ。音楽という神聖なオーラに包まれた託生に、ゾクリと鳥肌が立つ。
　オレの前で指鳴らし程度に曲を弾くことはあっても、託生は絶対にバイオリンの練習をしない。
　白鳥が水面下で激しく足を動かしているのと同じように、練習している姿は絶対に見せるべきではないと、プロとしてのプライドを持っている。
　優雅で華やかに見えるかもしれない音楽の世界は、実際は己の腕一つで勝負しなければならない孤独で厳しい場所だ。
　こうやって今まで生きてきたのか……。
　初めて見る表情が、離れていた十年間を彷彿させる気がして苦く微笑んだ。

「おっと」
　しばらくするとようやく終わったのか、ピタリと託生の腕が止まった。……と同時に、そのまま頭を落とした託生と鍵盤の間に腕を差し入れる。
「託生？」
　そっと呼ぶ声に答えたのは、小さな寝息。
　ほんと、羨ましいくらいマイペースだよな。
　クスリと笑いドアから顔を出した桜井を指先で呼んで、託生を抱えなおす。
「託生さんは？」
「眠っているだけだ。このまま連れて帰る」
「はい。よろしくお願いします」
　ゆっくりと椅子から抱き上げると、桜井がバイオリンケースを持ち、あとを付いてきた。防音室はそのままだから、車まで荷物を持ってくれるつもりなのか。
「こういうことは、今まで何度かあったのか？」
　毎回こんな状態だったのなら、さぞかし桜井も大変だっただろう。……と同情したのは、ほんの欠片ほど。桜井の腕に抱きかかえられたことが何度あったのだろうかと考えると、腸が煮えくり返りそうになる。
　今更言っても仕方がないことだが。
「事務所で作曲されることは何度もありましたが、そのまま眠ってしまわれたのは初めてです」
「初めて？」
「はい。それに、副社長のように、部屋に入ることも近寄ることも不可能でした」
　てっきり同じことを繰り返していると思っていたから、桜井の言葉は意外だった。

人当たりのいい……それこそ、ペントハウスの使用人相手でも、いつの間にかオレよりも託生の方が親しくなっていたりするのだが、音楽が関わると自分のマネージャーであっても寄せ付けなくなるのか。
だからこそ、桜井がじっと待っていたのだろうが、裏を返せばオレだから近寄ることを許してくれたのかもしれない。こうやって眠ってしまったのも、オレがいるからと無意識に安心して甘えてるのだと思えば、優越感に頬が綻んでくる。

『ぼくの作った曲は全部ギイを想って書いた曲だから、ギイに選んでもらうのは恥ずかしいんだよ』

以前、恋シリーズの選曲メンバーに混ぜろと言ったとき、少し目を伏せて告げられた言葉。
女性スタッフがなにを思ってインストゥルメンタル集に必ず『恋』の文字を入れているのか知らないが、託生の気持ちと一致していたからこそ、バイオリニスト葉山託生の名を浸透させたのではないだろうか。
留学時代から作り始めたという曲。
ここまで身を削るような無茶をしなくていいのにと思いつつ、曲を作っている間中、オレのことを想ってくれていたのだと認識すれば、その深い想いに感謝と感動がない交ぜになってオレの心を占めていく。
一枚目の恋シリーズを聴いた当時、オレは復讐を終え、託生との幸せな思い出を胸に生きていこうと決めたところだった。託生が誰を想っていようとも、誰と結ばれようとも、見守らなければと自分を諌め、心を封印した。
二度と託生と会うことはないと。
それなのに、託生は自分の想いを曲に秘め、人知れず「愛してる」と言い続けてくれていた。
それが、大胆かつ究極の告白であることに、託生自身気付いていないだろうけど。
オレの腕の中で、子供のように安心しきった表情で眠る託生に愛しさが募る。
オレは託生のように想いを形することはできないけれど、いつも、いつまでもお前に誓うよ。
命の尽きる瞬間まで、託生を愛し続けることを……。

以前、小話ついったーで、「押してだめなら引いてみろ」というような小話を流したと思うのですが、そのときに書いていて放り投げたものを仕上げてみました。
Resetの設定ファイルのようなものなので、いちゃいちゃしてません。
それどころか託生くんの台詞がない;
こういう感じで、託生くんはお仕事してます、という話でした。
(2013.7.5)

月夜に揺れる白い花(2013.8)

　ギイとNYで暮らすようになって初めて迎えた夏も、そろそろ後半に入っただろうか。
　NYもそれなりの暑さで、少々グロッキー気味ではあるけれど、三日後からアジアツアーに出発するため、事務所での最終打ち合わせに出席していた。
　今までも、アジアの各都市でコンサートをすることはあった。でも、ここアメリカから行くとなると、どうしてもツアーにしてしまわないと効率が悪いということで、二週間の強行軍で数箇所回ることになっている。
　曲の順番を覚える以外は、ほとんど桜井さん任せではあるけれど、修正の入ったスケジュール表の変更箇所をひとつひとつ確認し頭に叩きこんだ。
　ふと目を上げると会議室の窓から見える高層ビルが、西に傾いた太陽の光を反射し赤く染まっている。
　あぁ、同じ夕日の色だ……。
　祠堂の寮の屋上で、ギイと二人、沈みいく太陽を見ていたときと同じ色。
　黄色からオレンジ、そして真っ赤に染まり、徐々に姿を隠しながら、鮮やかなグラデーションを空に描いていく。漆黒の闇に包まれる直前にしか見れない自然のプリズム。
　同じタイミングで指差した一番星に、どっちが先に見つけたかと言い合いになり、でも、そんな些細なことで口喧嘩している自分達にハタと気付いて、どちらともなく吹き出した。
　本気で怒って、本気で泣いて。でも、最後には二人で笑いあって。
　鮮やかに彩られた思い出が、この夕日の色に溶けている。
　ギイともう一度思いを交わすまで、ぼくはこの夕日を見ながら、ギイを愛し続けている自分を感受していた。そして夕日が落ち訪れる一人きりの宵のうち、ギイへの想いを胸に抱いて眠りについていたんだ。
　今、ぼくの側にはギイがいて、もう二度と離れないと覚悟を決めた。ここNYで、ギイと一緒に生きていく。
　ギイが、どう思っていようとも。
　ぼくは、そう決めたんだ。

　打ち合わせが終わり、桜井さんに送られて帰ってきたペントハウスのドアを開けると、楽しそうなギイの笑い声が奥から聞こえてきて足を止めた。
「託生様、お帰りなさいませ」
「ただいま。ギイ、帰ってるの？お客様？」
「はい、つい先ほど、お客様とお帰りになりました」
「へぇ」
　珍しいことがあるものだ。なぜなら、ギイはペントハウスに他人を入れたがらないと思っていたから。
　四六時中、島岡さんや松本さん、そしてSP集団が側にいて、仕事だってよくは知らないけれど、人と話すことが多いだろう。
　だからこそ、プライベートの空間は自分を休める場所だと位置付け、玄関ホールより先は滅多に人を入れることがなかった。
　そんな中に招待し、そして談笑しているというのは、ギイに近しい人なのだろう。
　出迎えてくれた執事に荷物とバイオリンを渡し、でも、ギイ個人のお客様なら邪魔になるだろうと、自室に向かおうとしたぼくの背後から、
「お帰り、託生」
　弾むような声がぼくを引きとめ、いつものようにくるりと長い腕がぼくを包み込んで頬にお帰りのキスをした。
「相変わらずだなぁ、お前達」
　直後、呆れ半分、笑い半分、懐かしい声が耳に届き、慌ててギイを押し返そうとするも、がっちりと抱き締められていて、肩口から顔をあげることもできやしない。
　でも、ギイがわざとこういうことを見せ付ける人間は、昔から決まっている。

「章三、邪魔すんなよ」
「こっちは客だぞ。自重しろ、自重。よ、久しぶりだな、葉山」
「……赤池君！」
「いてーっ」
　ギイの足を渾身の力で踏んで、腕の中からもがき出たぼくの前には、数ヶ月ぶりに会った章三が笑いを噛み殺していた。

「僕も急だったし仕事が立て込んでいたから、自分の空く時間がわからなくて、なかなか連絡が取れなかったんだよ。スケジュールが合わなかったら仕方がないなと諦めていたんだ」
「いつから、こっちに？」
「一週間前だな。明日の便で帰るから、最後に会えてよかった」
　厨房から酒とつまみをプライベートの居間に持ち込んで、小振りの応接セットを囲んだ。
　章三なら今更飾る必要もないし、それこそ他の人に邪魔されたくはない。
　こうやって三人で集まることなんて、祠堂卒業以来だ。まるでゼロ番で談笑していたときのような和やかな空気と懐かしさ。
　もちろん、ギイと章三は、ぼくの壮行会で十年ぶりに顔を合わせていたが、あのときはお互い嫌味の応酬に忙しかったようで、それに、ほかの友達も来てくれていたから、それほど親密に話はできなかった。
　しかし、どれだけ離れていても相棒は相棒らしく、十年のブランクなんてなんのその。すっかり元鞘に収まったようだ。

　去年、ギイとフランスで再会したあと、アメリカに行くと章三に伝えたとき、
「十年もかかるとは、ギイにしては手際が悪かったのか、相手が悪かったのか。それとも解決したのに、臆病風吹かせて葉山に会わなかったのかの、どれかだな」
　と、章三は皮肉った。
　しかし、その目が安心したように微笑んでいるを見て、章三がこの十年なにも言わずに見守ってくれていたのだと、そのとき知った。
　十年前の事件の全容は知らずとも、ギイの周りでなにかが起こっていたことには気付いていたらしい。
　さすが相棒と感心したのだが、
「三年生に上がったとき、チェック組の争奪戦に巻き込まないように、僕達と距離を置いたじゃないか。それと同じだよ。根が単純だから行動がわかりやすい」
　その解釈に、なるほどと思ったものだ。

「あ、そうだ。赤池君、利久のことなにか聞いてない？この一ヶ月、連絡が取れないんだ。なにか事故でもあったんじゃないかと心配してるんだけど……」
　あっちこっちに話題が飛びながら、それなりに酒の空瓶が並びだした頃、ずっと気になっていたことを思い出し、ここぞとばかりに聞いてみた。利久本人じゃなくとも、誰かから耳に入っているかもしれないと。
　利久とは、日本にいるときも、月に一度くらいの割合で連絡を取り合っていた。お互い仕事があるし、今は時差もあるからメール中心になっているけれど、利久から返事が来なかったことは今まで一度もない。
　それなのに、この一ヶ月返事がないのは、あまりにも違和感を感じる。
　初めは、仕事が忙しいのかな？と考えて数日待ってみたけれど返事は来ず、それならメールが届いていないのかもと電話をかけたが、結局利久には繋がらなかった。
　こうなれば、事故か体調を崩したかくらいしか考えられなくて、心配をしていたのだ。

「いや、なにも聞いてないな」
　そう答えて、章三はグラスに手を伸ばした。
　でも、ぼくは気付いてしまった。口を開く直前、章三が視線をギイに滑らせたのを。ほんの瞬きをするくらい一瞬の出来事。
　その動きに、利久になにかがあったんだと直感した。
　ギイの相棒を名乗るだけあって、章三はギイの気持ちを誰よりも理解している。ギイが一番に考えるのは、ぼくを守ることだと。
　だから、たぶんこれは、ギイがぼくに聞かせたくない話、イコール、利久の身に良くないことが降りかかっているってことなんだ。
　しかし、章三の口の固さは相当なものだ。今までの経験上、こうなれば絶対口を割らないだろう。
　それなら……。
「……赤池君、ぼく三洲君からブレーメンの写メ譲ってもらってたんだけど、奈美子ちゃんに送っていい？」
　とたん、章三はビールを気管に詰まらせ、勢いよくむせ返った。
　いつだったか三洲と呑む機会があって、そのときに「昔の携帯から、懐かしいものが出てきた」と見せてもらい、そこにギイが写っていたから譲ってもらった物だ。
　一度しか使えない奥の手だし、ギイの赤鼻のトナカイも消えてしまうけど、利久のことがわかるなら仕方ない。
「はや……ま、お前……っ！」
「知ってるんだろ？」
　でなければ、ギイにあんな視線を送らないはず。
　この二人にかかれば、適当な理由でぼくを誤魔化し、気付かせないようにするのは簡単だから、卑怯な手かもしれないけれど背に腹はかえられないんだ。
「容赦ないなぁ、託生」
「ギイは、知ってたの？」
「いや、オレはなにも聞いてない」
　軽く笑いながら首を横に振ったギイだけど、その目はとても複雑な色を映していた。
　章三のあの視線に気付いていただろうし、相棒がそう判断したものをぼくに聞かせたくないのだろう。
「葉山、写真は消せ」
「利久のことを、嘘偽りなく教えてくれたら消す」
　睨み合いの続く中、先に視線を反らした章三は、どっかりとソファの背もたれに体を預けて舌打ちし、ギイを睨んだ。
「ギイ、葉山の教育間違ってるぞ」
「オレのせいかよ？」
「お前が、葉山に交換条件なんて教えるからだろうが」
「でないと、なかなか託生といちゃいちゃできなかったしなぁ」
「いちゃいちゃせんでいいわ！……ギイ、きっちり責任取れよ」
　いつものような軽い応酬の結末は、含むような章三の大きな溜息だった。

「片倉に直接聞いたわけじゃないんだが……」
　ソファに座りなおして、慎重に章三が話を切り出した。
「仕切り手形を掴まされたらしい。不渡りになって、気付いたときには取引先は逃げていたと」
　章三の言葉に、ギイは眉間に皺を寄せた。
「片倉って、親父さんの鉄工所を継いだんだよな？」

「あぁ、体を壊した親父さんが引退して、去年、後を継いだって聞いたよ」
「被害金額は？」
「いや、これ以上のことは、なにも聞いていない」
　そうかと呟いて、ギイは口元に手をやった。
　二人のただならぬ深刻な様子に、利久がなにかしらの事件に巻き込まれたのだと認識したのだが、どのくらい深刻なことなのかが、ぼくには想像できなかった。
　それに、
「仕切り手形って、なに？」
　元々、そういう分野に馴染みはないけれど、初めて聞く名称だ。
「約束手形は知ってるか？」
「詳しくは知らないけど……お金の代わりに渡されて、書いてある支払い期日に銀行に行って換金するもの？」
「それで正解。簡単に言えば、仕切り手形ってのは、その約束手形を悪用した手形のことだよ」
　じゃ、利久は約束手形を渡されて、銀行に換金しに行ったら不渡りになったってこと？
　でも、それだけなら、普通に『約束手形』というはずだ。わざわざ『仕切り手形』とは言わない。
「約束手形を悪用したら仕切り手形になるの？どうやって、悪用するの？利久は、それを渡されて、今いったいどうなってるの？」
　続けざまの質問に、ギイは硬い表情をしたまま、ぼくを見詰め返した。
「……詳しく聞きたい？」
「うん」
　ギイが、そう前置きするってことは、難しい話なのだろうけど、今の利久の様子がわかるのならば聞きたい。
「そうだなぁ。……仮に、オレが章三に百万円で物を売るとする」
　と言って、ギイは章三の前に自分のライターを置いた。とたん、
「僕が悪役かよ？」
　ぼくにはわからないけれど、ギイのやろうとしていることを瞬時に理解したのか、間髪いれずに章三がクレームを入れた。
「託生に説明しやすいんだよ。潔くビンボーな悪役になってくれ」
　ビンボーな悪役？
「……相手は葉山だ。仕方ない」
　片眉を上げ、あっさりと納得した章三にムッとするが、少しでもわかりやすく説明してくれるのなら、章三の失礼な態度もスルーしよう。今は、それどころじゃないのだから。
「話を戻すぞ。章三は、これの代金百万円をオレに払わないといけないよな」
「そうだね」
「けれども、章三には金がなかった。それどころか、もう夜逃げしないといけないような経済状態だ」
「うん」
「現金もなく、自分名義の約束手形も過去に不渡りを出して使えない」
　ようするに、全然お金がなくて首が回らない状態で、百万円の物を買ったというシチュなんだね。うん、ここまでは理解できた。
「そこでだ。他人名義の約束手形を一枚幾らか……今は五万から八万円くらいかな。バブル崩壊時代は、数が出回っていたからもう少し安かったらしいけど。それを買って金額欄に百万円とチェックライターで打ち、『別の取引で渡された手形だけど、これをそのまま受け取ってくれ』とかなんとか言って、オレへの支払いに当てる。もちろん、もう一人別の人間の裏書付きで」
「裏書って？」
「保証人みたいなもんだな。『もしも不渡りになった場合は自分が払います』というサインを、約束手形の

裏に書くんだ」
　章三が、テーブルの上に置いてあるメモを一枚ちぎって「A株式会社　百万円」と書き込み、支払期日に三ヶ月先の日にちを指定し、裏には「Z株式会社」とサインしてギイの前に置いた。
　えぇっと、A株式会社が名義人の約束手形を章三が買って、代金の代わりにギイに渡した……でいいのかな？でも、あれ？
「根本的に約束手形って売ってるの？」
　素朴な疑問。あれって、銀行が発行するんじゃなかったっけ。
「裏ルートでな。こういう人間が関わってるから、一般の人間にはお目にかかれない種類の手形だ」
　そう言って、自分の頬を切るように、斜めに指を滑らせた。
　あぁ、裏ルートっていうのは、ヤのつく職業の人が作っているルートのことか。
「章三と同じように金がなくて、夜逃げをしないといけないようなヤツが、手形帳五十枚つづり数冊まとめて二、三百万、一枚あたりの単価二万円弱で買取りってとこだな。裏の業者に手形帳を持ち込んで買ってもらい、裏業者が自分の取り分を上乗せしてバラ売りする」
「そのバラ売りの一枚を赤池君が買った？」
「そういうこと。ここまではOK？」
　ぼくが頷くのを確認して、ギイは話を続けた。
「その約束手形は金額が書いてあっても、ただの紙切れだ。全ての約束手形には同じ支払期日が書いてあって、ぎりぎりまで会社は存在しているけれど、支払期日の五日から一週間前には、手形の名義人……この場合A株式会社は会社を畳んで逃げるのが相場だ。手形帳を売ったときの金は、言うなれば逃亡資金だな」
「じゃ……じゃあ、このA株式会社名義の約束手形を、支払期日に銀行に持っていっても……」
「相手がいないのだから、もちろん不渡りになる」
　最初から逃げるつもりで、A株式会社は約束手形を売ったのか。
「章三も支払期日までに行方不明な。約束手形を買った費用だけで手に入れた物は、転売して金にすればいいし」
　章三が目の前にあるライターを、テーブルの隅に移動させる。そして、メモ用紙に「現金」と書いて自分の前に置いた。
　物はなくなり、ギイに残っているのは、不渡りになった約束手形だけ。
　あれ、でも……。
「裏書は？Z株式会社の人が保証人だろ？」
　不渡りになったとき代わりに払う人だって、さっきギイが説明した。
　紙をひっくり返し表れた「Z株式会社」の文字を指で叩きながら、ぼくに視線を移し、
「この人間もグルだったら？」
「あ……」
　質問を投げかけられて、すんなり理解した。これは、もう、最初から流れが決められていたのだと。
「わからないものなの？」
　仕切り手形だってこと。
「受け取った時点で、その会社は実在するからな。ただ、同じ名義人の手形が大量に出回るんだから、信用調査をすれば危ないという結果が出て、なにかしらの手が打てるかもしれないが、手形の譲渡ってのは普通に行われているし違法じゃない。期日前に額面の何パーセントかを手数料として引かれて、銀行などで換金するシステムもある。ちなみに、この行為は『手形を割る』と言って割引手形って名前だ。手渡された約束手形に問題があるかどうかなんて、一般の人間には判断がつかないことが多い」
　昔からある取引方法で、正当な使い方をすれば問題はないけれど、悪い人にかかればこんなことができてしまうんだ。知らなかった。
「もっと悪質なのは、時間をかけ裏の業者と章三が手を組んで仕込むことだな」

「仕込むって？」
「章三が自分名義の約束手形を使って大口の取引を何度も装い実績を作る。裏の業者と架空の取引をしたっていい。これで銀行側の信用が上がるよな。調査したって優良会社としか出ないだろう。そうすると、こちら側は安心するから、百万ぽっちじゃなく数千万の取引に手形を使っても不思議じゃない。なにしろ、相手は今まで大口の取引を成立させている章三なんだから。安心して章三と取引をし、ある時期が来たら章三はドロン。そして渡された約束手形は不渡りだ」
　付け焼刃のように約束手形を一枚買ってきたわけじゃなく、最初から人をはめるために実績を作る。
　その考え方に、ゾッとした。お金は大切なものだけど、人を騙してまで手に入れるものじゃない。
「そのような経緯を辿って悪用された約束手形のことを、仕切り手形、もしくはポン手と言うんだ。嫌な言葉だが、支払期日のことを命日と言うらしい」
　ギイは目の前の紙切れを指先で摘んでライターで火をつけ、灰皿の上に置いた。一瞬で焼け落ち灰になる。
　それが、利久の今の状況を反映しているように見えて、口唇を咬んだ。
「どうにもならないの？」
「前者なら逃げた人間を見つけても、ない袖は振れないだろうから回収は難しい。後者であれば……裏の業者よりも立場が上の人間と話をして、それ相応の礼もして、業者に話をつけてもらうしかないだろうけど、たぶん無理だ。一般の人間がそのような人間と知り合いになれるなんて、ほぼ不可能だから」
　ギイの言うとおり、たしかに現実的じゃない。それなら、
「警察は？一種の詐欺だよね？」
　正攻法で訴えることができるのでは？
「いや、立件ができないんだ。最初から企てていたという証拠がない。『知りませんでした』で逃げ切れる」
「それじゃ、泣き寝入りしかないってこと？」
「残念だけど、そうなるな」
「そんな……」
　利久……。
　去年、まだぼくがギイと再会していなかった頃、利久からお父さんが倒れ、自分が社長になることを聞いた。
『頼りないだろうけど、皆に安心して働いてもらえるような自分に一日でも早くなるよ』
　と、少し緊張したような、でも決意に満ちた声で電話をかけてきた。
　そのときのことを思い出し、膝の上に置いた拳を握り締める。
　もしも鉄工所が倒産でもしたら……。
「ただ、片倉の場合、前者だろうから、それほど大きな金額じゃないと思うけど」
　ギイの言葉に慌てて顔を上げた。
　テーブルからライターを摘んで、ぼくの顔の前にかざし、
「片倉んとこは鉄工所なんだから、取り扱っているのは鉄製品だ。こんなに小さな物じゃない。取引先だって大きな倉庫が必要になってくる。倉庫を用意してまで仕込むなんて危ない橋を渡ることは、リスク負担を考えるとありえない」
　そう言って、安心させるようにギイがぼくに微笑みかけた。
　それだけで、鼓動が早くなって感じていた胸の痛みが和らいでくる。
「じゃあ、鉄工所の存続に関わるくらいの被害は……」
「大丈夫だろ。どの会社でも色々なリスクを考えて、貸倒引当金（かしだおれひきあてきん）という金を、あらかじめ用意してるんだ。それで充分補える」
「よかった……」
「片倉も、まだ後始末に追われているだけだろう。もう少し待って連絡を取ってみたらどうだ？」
「うん……」

安堵に涙ぐんだぼくの頭を引き寄せ、ギイが髪にキスを落としながら、落ち着くようにゆっくり背中を撫でてくれた。
こんな状況じゃメールどころじゃないよね。ギイの言うとおり、時間を置いて改めて利久に連絡してみよう。
おとなしくギイの胸に頭を預けていたぼくの耳に、どこからかカサカサという音が聞こえ、
「章三、空気読めよ」
ギイの台詞と共に丸めた紙が目の前に落ちてきて、一気に現実を思い出しギイから慌てて離れた。
「あああああ赤池君！」
「……僕の前でいい根性だな、二人とも」
「妬くな、章三」
「誰が、妬くか！」
利久は大丈夫だ。ギイが言うなら、利久はきっと大丈夫。
でも、ショックを受けていないわけはないだろう。信用していた人に騙されたのだから。
今度、日本に行ったときには、一番に利久に会いにいこう。
気の利いた慰めの言葉なんてぼくには言えそうにないけれど、側にいることはできるから。

託生には心配いらないと言ったけれど、約束手形ってやつは、それなりの信頼関係がなければ使わない。金を払うと書いた、ただの紙切れだ。
片倉の性格上、かなり慎重……悪く言えばリスクを伴うことを嫌う怖がりだから、軽々しく手形なんてものは扱わないだろう。だから、第三者名義の手形を、片倉が受け取るとは考えられなかった。
片倉を騙したヤツは、十中八九、何度も取引を重ねたことがある相手。長年の付き合いのあるところ。
そうなると、被害額が巨額になっている可能性がある。
案の定、ホテルに送るリムジンの後部座席で、
「かなり危ないって噂だ」
章三が、重々しく口を開いた。
「お互い代替わりはしているが、親父さんの代からの取引先だったらしくて、ここの取引は昔から全て約束手形を使ってたんだそうだ」
「その息子が片倉をはめたんだな」
「あぁ」
親父同士は長年の付き合いで信頼関係が築けていたのだろうが、息子達もそうだとは限らない。二代目なんて言葉ばかりで、親に甘やかされチンピラまがいのヤツだっている。
経営が上手くいかず、建て直す努力もしないまま、あっさり会社も従業員も捨て、自分だけ金を持って高飛びしたんだろう。
「ギイに言うべきかどうか迷ったんだが……」
章三が歯切れ悪く口篭る。
連絡があったときから、なにかを言いたそうにしているなと気付いていた。それが片倉のことだと知ったのは、もちろん託生が話題に出したからだが、章三が迷っていたのは、この話を聞いたオレがどうするか……わかっているだろうに、十年離れている内に勘がにぶっちまったのか？
「いや、いつかオレの耳には入っていた。事が終わってから知らされなくてよかったよ。今なら、まだ間に合う」
「ギイ……！」
もしも、鉄工所が潰れたならば、託生は自分のことのように泣くだろう。それに「心配いらない」と言ったオレの言葉も嘘になる。
嫌悪症だった託生を理解してくれていた数少ない人間の中の一人だ。一年生のとき、片倉がいなかったら託生はどうなっていたかわからない。
今、託生がここにいることさえ、夢のような幻になったかもしれないんだ。

　そして、章三と同じように、離れていた十年を見守ってくれていたからこそ、託生は昔と変わらぬ笑顔を持ち続けている。
「片倉はオレの恩人なんだぜ？」
　この恋を手放せないオレにとって、片倉は一生の恩人だ。
「ギイ、片倉を頼むな」
「あぁ」
　オレの目の奥ををじっと見詰る章三に力強く頷き、拳をぶつけ合った。

　アジアツアーに出発した託生から数日遅れて日本に渡ったオレは、仕事をこなしながら片倉鉄工所の情報を集めていた。そして、片倉と話をすべく島岡にスケジュール調整を頼み、日本での最終日、やっと仙台に来ることができた。
「ここだな。ＳＰは待ってろ」
　少し離れた場所に車を停めさせ、一人で車を降りた。
　とたん、強い日差しと湿度が体を包み込み、日本独特の蒸し暑さに眉をしかめる。
　外壁沿いに工場をぐるりと回ると、大型車両が敷地内から出て行くのが見え、ついで大きな門が眼前に現れた。
　鉄工所としては、中堅というところか。門の向こうには、大きな工場の扉が開け放たれ、大型の機械が所狭しと並んでいるのが見える。しかし、機械が動いている様子はない。
　ちょうど休憩時間だったようで、数人の作業服を着た人間があちらこちらで休んでいるようだ。
「兄ちゃん兄ちゃん、ここになんか用か？」
「こんにちは」
　門を抜け、事務所に向かうオレに気付いた男が、人懐こい笑顔を浮かべ首にかけたタオルで額の汗を拭きながら近づいてきた。見たところ五十歳は軽く回ってそうだが、作業服から覗く腕は隆々とした筋肉がつき、腕っ節の強さが感じられた。
「この暑い中、セールスかい？でも、ここは金がないから、なにも買えないぞ？」
「いえ、社長の学生時代の友人の崎と言います。仕事で仙台まで来たものですから、寄ってみたんですけど」
　人受けする笑みを作り訪問の理由を述べると、男は、さも自分のことのように驚きと喜びを顔に浮かべ、
「社長の友達か！時間があるなら、待っててくれ。社長もじき戻るから。学生時代の友達なら大歓迎だ」
　そう言って、日陰にある喫煙所らしき場所にオレを案内した。
　一つ一つ買い足していったらしい、バラバラのデザインのベンチがいくつか並べられた喫煙所には、何人もの筋肉質な男達が油で汚れた作業服をまとい、世間話をしながら休憩しているようだ。
「社長の友達だってよ」
「おぉ、この暑い中、よく来たな」
「大学のお友達かい？」
　ベンチを空けてくれながら方々から親しげに声をかけられ、少々面食らいつつも外交用の笑顔を浮かべ、
「いえ、高校時代の……」
　と、口に出したとたん、
「あぁ、祠堂の！」
「そりゃ、社長も懐かしかろう」
　大きく頷いてあっさり納得した男達に驚く。
　自分が働いているところの社長の学歴なんて普通興味もないだろうし、知っていても大学名くらいだろう。高校と聞いて、すぐさま祠堂の名前が出るとは……。

「よく、ご存知ですね」
「そりゃあ、俺達は先代から世話になってるし、社長がこーんな小さな頃から知ってるからな」
　自分の膝あたりで水平に手を振りながら笑う男を見て、片倉を社長と呼んでいるのは表向きで、自分の子供のように可愛がっている様子がうかがえた。
「しかし兄ちゃん、それ暑いだろ？脱いだらどうだ？」
　オレの普段着のようになっている上下のスーツに目をやり、男が眉間に皺を寄せる。
　たしかに、こんな日差しの中じゃ見ている方が暑いだろう。
「じゃ、失礼して」
「ネクタイも外せ外せ。仕事じゃないんだし。若いからって自分の体力を過信しちゃなんねぇ。熱中症は怖いんだからな」
　自分の父親ほど年上の男達に囲まれ、息子の友達を相手にしているような歳相応の対応に、遠慮なくスーツの上着を脱ぎネクタイも第一ボタンも外した。
　おかげで窮屈な首元に風が入り、無意識に大きな溜息が零れる。
「あー、暑かった……」
　ボソリとぼやくと、豪快な笑いと共に肩をバンバン叩かれ、その裏表のない表情に心が安らんでいくのを感じた。
　毎日、狐と狸の化かしあいではないが、いかにして有利に商談を進めようかと、相手の言葉の裏を読んで計算ばかりしているものだから、緊張感を持たずにいられる空気が新鮮で居心地がいい。
　この鉄工所を作った片倉の親父さんも、裏表がなく気立てのよい人間に違いない。
「兄ちゃん、煙草吸うかい？」
　と、煙草とライターを胸ポケットから取り出した男に、
「えぇ、オレもご一緒させてもらっていいですか？」
　傍らに置いた上着から煙草を取り出す。
　灰皿代わりに使っているらしい、ペンキで赤く塗った一斗缶には「火の用心」と擦れた白文字が浮かび、錆がこびりついていた。
　これも、かなりの年代物なんだろうな。
「片倉……いや、社長は元気ですか？」
「んー、ちょっと色々とあってさ」
　紫煙を吐き、一斗缶の淵で灰を落とした男が口を濁らせる。
「なにか、厄介なことでも？」
「いや、まぁ、詳しいことは俺達から言えないけどもさ」
「そうですか……」
　それは、そうだろう。片倉の友人とは言え、初対面の部外者に内部事情を話すことなど、もってのほか。と同時に、従業員全員かどうかはわからないが、ここにいる男達はなにがあったのか知っているのだと確信する。
　しかし、口を濁らせながらも、片倉の状態が普通じゃないんだとオレに話す理由はなんだ？
　脳裏に浮かべた疑問は、すぐに解けた。
「あっちこっちに駆けずり回って、いつか社長が倒れるんじゃないかと心配してんだよ。俺達相手に愚痴なんか言えないだろうしさ。だから、兄ちゃんみたいな友達と少しでも話せば、気晴らしにでもなるんじゃないかって引き止めちまった」
　深く吸った紫煙を溜息と共に大きく吐き出し、その煙を追う男の目には、片倉の心配の色しか見えなかった。
　長年働いている鉄工所が潰れるかもしれない危機に直面し、自分達の生活もあるだろうに、男達の顔に浮かんでいるのは、自分の息子のような片倉の心配だけだった。

しばらくすると、工場の門から一台の自転車が入ってきた。
人のことは言えないが、この暑い中、きっちりとスーツを身に着け、しかし額は汗だくらしく、門のすぐ側にある駐輪場に自転車を置き、前かごの中に入れてあったタオルで無造作に顔を拭く。
片倉の顔を最後に見たのは、託生の壮行会だ。あれから一年も経っていない。しかし、この男は、こんなに細かっただろうか。
「社長、社長！」
隣の男が立ち上がって大きく手を振り、その声に振り向いた片倉がオレを認識したとたん、驚愕の表情を浮かべた。
「ギイっ？」
「よ、片倉、久しぶり」
バタバタと走ってきた片倉が突っ込みそうな勢いのまま右手を差し出し、その手を握りながら左手で片倉の肩を叩いた。
「いつ、こっちへ？」
「つい先日。仙台まで来たものだから、寄ってみたんだ」
「そうかぁ。お茶くらいしか出せないけど、上がっていってくれよ」
嬉しそうな笑顔に疲れが滲み出ていた。頬はこけ目の下も黒ずみ、暑さのせいで紅潮した頬をしているが、全体的に顔色が悪い。軽く叩いた肩も骨ばっていた。
これじゃ、皆が心配するのも頷ける。
相手をしてくれていた男達に礼を言い、オレは片倉の手招きについていった。

工場の横にある建物の階段を上り、通された廊下突き当たりの部屋は社長室らしく、壁や天井は古さを感じさせる色合いであったが、清潔で明るい室内だった。隣は事務所になっているのだろう。たまに電話の鳴る音が聞こえてくる。
「ギイ、コーヒーでも……」
「いや、日本茶貰えないか？できれば冷えた」
「へ？麦茶でよければあるけど」
「あぁ、それは嬉しい。夏は麦茶が一番だよな」
「わかった。じゃ、そこに座って待っててくれ」
片倉は上着を無造作に椅子の上に放り、オレにソファを勧めて、今入ってきたばかりのドアを出ていった。
奥のデスクの上には書類が山積みになり、電源を落としたノートパソコンが開いたまま置かれている。
片側の窓からは門と駐輪場、それと先ほどは気付かなかったが、もう少し奥に駐車場が見えた。そこには『片倉鉄工所』の文字が入った数台の車が置いてある。
「経費節減なんだろうな」
片倉が車を使わず、自転車で銀行周りをしているのは。
片腕に持っていた上着と封筒をソファの上に置き座って待っていると、隣の事務所から持ってきたのか、片倉が麦茶ポットと氷を入れた二つのグラスをトレイに乗せ戻ってきた。
「俺も喉が渇いててさ、ポットごと貰ってきた」
へへへと照れたように笑い、二つのグラスに麦茶を注ぎ入れ一つをオレに差し出し、向かい側に座った片倉は、美味そうにぐびぐびと喉を鳴らしたあと、すぐさまもう一杯麦茶を注ぎ入れた。
そりゃ、あれだけ暑い中、自転車をこいだら喉も渇く。
「日本は暑いだろ？残暑が厳しくってさ。九月なのに、まだ真夏日があるんだよ。曇ってたら、まだマシなんだけど」

「そうだなぁ。気温はそう変わらないと思うけど、この湿度がな」
「だろ？」
「おかげで、麦茶が美味い」
　汗をかいたグラスを目の前に上げると、
「何杯でもおかわりあるよ」
　笑いながらオレのグラスにもう一杯注いだ。
　その様子を見ながら、そういえば、片倉と二人きりで会うことなんて今までなかったなと、ぼんやり思い出した。
　一年生のときはクラスメイトだったし、なにより託生の親友だから話す機会は何度もあったが、こうやって膝を突き合わせて二人で話すのは初めてだ。
　どうやって切り出そうかと話の糸口を探していたら、
「ギイ。もしかして、手形が飛んだこと聞いて来てくれた？」
　一息ついた片倉が、おずおずと、しかしずばり核心を突いてきた。
　驚きに目を見張り、そして苦笑する。
　そうだよな。いくらなんでも気付くよな、訪ねるタイミングが良すぎて。
「まぁな」
「やっぱり」
　片倉は目尻に皺を寄せて笑い、ふと表情を引き締めた。
「古い取引先だって聞いたけど」
「うん、そうなんだ。親父の代からだから、結構古いよな。それと、俺が跡を継いだあとも何度か取引してて さ。いつもと同じだと思って……。俺が甘かったよ」
　大きな溜息に後悔と自責の念が込められていた。
　いつから、片倉をはめようと相手が思っていたのかは知らないが、これまでの取引実績を考えれば、普通の人間なら、ころっと騙されるに違いない。しかも、相手は素直で人のいい片倉だ。託生と同じで、人を疑うことができない。
「幾ら、やられた？」
「六千万」
「……かなり大口だったんだな」
「うん。貸倒引当金で充当しても、賄えるような金額じゃなくてさ。仕入れにも響いてるんだ」
　馴染みの優良な取引先だと思っていたんだ。万が一、倒産したときのために用意する貸倒引当金も、そこまで見積もっていなかった。
　鉄を仕入れ、製品にして売る。その元となる鉄の仕入れができなければ、おのずと仕事は回らない。
　ゴーン・ショック以降、鉄鋼関連は軒並み経営が厳しくなり、大手の赤字決算も珍しくない状況の中、六千万もの不渡りなんて、この規模の鉄工所じゃ大打撃だ。
「お袋の実家の笹かま屋は姉貴夫婦が継いだから、俺がこっちを継ぐことになったんだけど、どっちにしろ、俺、社長には向いていないのかもしれない」
「片倉……」
「皆の就職先を探して、鉄工所を畳んだほうがいいような気がしてるんだ。退職金が出せる間に」
　氷が溶けカラリと鳴ったグラスをぼんやりと見詰めながら、片倉が心中を吐露する。
　調べたところ、事件が起こったのはちょうど二ヶ月前だった。章三から話を聞いたのが、約二週間前。
　この二ヶ月の間、片倉は事態収拾に向けて奔走し、しかし、もうすでに相手は逃げているものだから回収は叶わず、しかも運転資金の融資も受けられない状態に八方塞になっていた。
「片倉はどうするんだ？」
「俺、一人暮らしだからさ。一人分の生活費を稼ぐくらいなら、なんとかなるし。俺のことより、働いてくれている皆には家族がいるから……」

「本当にそれでいいのか？鉄工所を畳んでしまって、片倉は後悔しないか？」
「ギイ……」
　親父さんが作った会社であることはもちろんだが、片倉自身、とてもがんばっていることを託生から聞いていた。
　実際、片倉が継いでから、ほんのわずかではあるが業績も上がっている。
「さっき下で話をしたんだけど、皆、自分のことよりも鉄工所のことよりも、お前の心配をしていたよ。体を壊さないといいんだけどってさ」
「え？」
「いい人ばかりじゃないか。こんなに温かい職場は滅多にないぞ？片倉の人柄が表れている」
　従業員から聞いたばかりのことを口に出したとたん、片倉がボロボロと涙を零した。
「だろ？いい人ばかりだろ？俺、小さかった頃からよく遊んでもらってたんだ。こんなことになって皆に申し訳なくて……」
「先代からの取引先だったんだろ？信用しちまっても仕方ない」
「でも……」
「なにもトラブルのない、そんな運のいい会社なんて一つもないさ。たしかに進退きわまる状態だけど、鉄工所を畳むのはもう少し考えた方がいいんじゃないか？」
　Fグループとは規模は全く違うけれど、オレと片倉は同じような立場だ。
　もしも、オレがこのような状況になれば、経営そのものを見直すことはもちろん、一番の経費である人件費を削ろうとリストラを決行するだろう。そうして残った社員と社を守る。
　しかし、片倉は親父さんから受け継いだ鉄工所を守るより、従業員全員のこれからの生活を考えている。
　その考え方に対して、経営者として甘いという声もあるだろう。だが、あの汗だくで働いていた従業員を、鉄工所を潰してまでも守ろうとする姿勢は、尊敬に値するものだとオレは強く感じた。
「片倉さえよければ、オレには援助する用意があるんだ」
「ギイ……」
　この一言を伝えるために、オレはここに来た。
　鉄工所が潰れれば託生は必ず泣くだろうから、そんな事にはさせたくなくてここまで来たけれど、今はそれ以上に、この鉄工所をオレ自身が潰したくなかった。
　こんなに思いやりの深い場所をなくすなんて、あまりにも惜しい。
　オレの言葉に、しばらくじっと考え込んだ片倉は、しかし静かに首を振りオレを見詰めかえした。
「いや、ギイの気持ちは嬉しいし、従業員のことを考えたら、ギイに頭を下げるのが一番の方法だと思うんだ。でも、俺、バカだと言われるかもしれないけど、自分が撒いた種は自分で刈りたい。尻拭いは自分でしないと。初めから三ヶ月分の資金しか残っていないのはわかっていたから、あと一ヶ月がんばってみて、そこで無理なら諦める」
　きっぱりと言い切った片倉に迷いはなかった。
「そうか」
　なんとなくそういう気がしてたんだ。受け取らないだろうなと。
　空気を読み人に合わせることが得意な片倉だけど……だからこそ、嫌悪症であった託生が一緒に寮生活ができたのだが、この男の筋は竹のように硬くて真っ直ぐだ。人に迷惑をかけることを良しとしない。そして、自分が招いたことを放り投げるような、無責任な人間でもない。
　生真面目で誠実で。もっと軽く考えれば楽な道を歩けるのに、不器用な生き方しかできないのだろう。しかし、裏を返せば、これほど信用できるヤツはいない。
　だから、断られることを見越して、もう一つの案を用意してきた。
「片倉。ここ数年の決算書を用意できるか？貸借対照表と損益計算書も付けて。あと、鉄鋼相場の推移グラフ」

「決算書はすぐに出せるよ。推移グラフの方は、鉄鋼新聞にデータがあったはずだから、とにかく、そっちもちょっと待ってもらえれば出せるけど」
　矢継ぎ早の指示に不思議そうな顔をしつつも、全て出揃うと答えた片倉に、ニヤリと笑う。
「それなら、うちの経営コンサルタントを、明日にでもここによこすよ。その人間と相談して返済プランを具体的に出し、銀行に持っていってみろ。返済原資を明確にしないと、銀行も考えてくれないからな」
「え……？」
「数字を扱う人間に、数字を目の前に出すのって、結構効果的だぜ？」
「……そうか。頭を下げるだけじゃダメだったんだ。資料を用意して確実な返済の意思を示さないと！」
　片倉が運転資金の調達、所謂融資をしてもらうために、毎日銀行を回っているのは知っていた。
　借りるのは片倉個人ではなく、法人の片倉鉄工所。
　今までの業績から計算し、少なくとも一年間売り上げるであろう金額、そして必要経費を差し引いた上で返済に回せる額を算出する。それらを明確に銀行側に示し、もう一度検討してもらうしかない。
　オレの金を受け取ってもらえないのなら、いかにして銀行から金を借りられるか方法を考えるしかないんだ。
　額がそれなりに大きいことが、銀行側の足踏みする理由だろう。しかし、反対に考えれば、それだけ大口の融資なら、銀行側も数年の経常利益である利息が確保される。
　あとは、片倉の信用と……。
「それでもNOと言うのなら、これを出せ」
　持参していた封筒を取り出し、テーブルに置く。
「これは？」
「オレが片倉の保証人になると明記した書類だ」
「えっ？」
「こっちの弁護士が作成したものだから、日本語訳もつけているし安心してくれ」
「ギイ、だから……！」
「NOと言われたら、だ。それに、名前だけだぞ？」
　暗に、保証人になったとしても、絶対的責任は片倉にあるんだと釘を刺す。名前を貸すだけだと。
　じっと封筒を見詰めていた片倉の目が潤み、震える両手で封筒を手に取った。そして、キュッと口唇を噛み締めて、オレを真正面から見上げる。
「……わかった。これは、お守り代わりにさせてもらうよ。もしも……もしも、使わせてもらうことになっても、ギイに迷惑をかけるようなことは絶対しない」
　片倉が書類を受け取ったのを見て、ホッと肩から力が抜けた。資金さえ用意できれば片倉鉄工所は軌道に乗るのだから。
　託生に泣かれることも、あの従業員達が路頭に迷うことも、これでない。
「ありがとう、ギイ」
「がんばれよ。託生も心配してた」
「あ、託生からメール貰ってたんだ。忙しくて返事を書くのを忘れてたよ」
「だと思って、託生には適当に誤魔化してるから。元々、経営に関して託生はよくわかってないし」
　本当の状況を教えたりなんかしたら、コンサートどころじゃない。もちろん、あいつもプロだから仕事を放り出すような無責任なことはしないけど、動揺して佐智が聴いたら眉を顰めるような音になってしまうだろう。
「今はアジアツアーの真っ最中だ。近くにいるのに日本に来れなくて残念がってた。日本公演のときは、聴きに行ってやってくれよ」
「うん、託生、絶対仙台に来てくれるだろ？毎回、聴きにいってるんだ。次も必ず行くよ」
　大きく片倉が頷いて、ふとなにかを思い出したように押し黙り、
「……ギイ。俺、ギイと話せるときが来たら、絶対言おうと思ってたことがあったんだ」
　居住まいを正して、オレに向き直った。

「なんだ、改まって？」
　片倉はテーブルとソファの間に膝を落として座り込み、
「託生を頼む！」
　突然、床に頭を押し付けるようにして勢いよく頭を下げた。
「なにしてんだよ！」
　驚きに慌ててテーブルを回って片倉の横に座り、肩を掴んで顔を上げさせた。その目は真っ赤に潤み、嗚咽を堪えるように口唇を噛み締めている。激情を押さえようしたのか片倉は数度大きく呼吸を繰り返し、訴えかけるようにオレを見上げた。
「俺はもう二度と、あんな託生を見たくないんだ」
「片倉、いつの話だ？」
「託生が、まだ日本の大学に通っていた頃」
「留学前か……？」
「……あいつボロボロで。ほんと思いつめてて。あるとき、託生と連絡が取れなくなって、託生と同じ大学の野沢も数日見かけていないって言うから、野沢と赤池と一緒に託生のマンションに行ったら、カーテンを閉め切った薄暗い部屋の中でぼんやりと座ってたんだ。俺達の顔も見えていない、声も聞こえていない。なにをやっても反応がなくて、そのとき、俺が『託生』って呼んだら『ギイ？』って笑ってそのまま意識を失って……救急車で病院に運び込んだ」
　片倉の話を聞いて、頭を殴られたような衝撃を受けた。
　託生から、パリに留学したのはオレを考えたくなかったから、忘れたかったからだと聞いていたが、日本でそんな状態になっていたなんて……。
　『託生』と名前で呼ぶのは、オレと片倉だけ。
　その場に片倉がいなければ、託生はどうなっていたのか。そのまま、深い意識の中に囚われ、戻れなかったかもしれない恐怖に身震いした。そして、そこまでオレのことを想ってくれていた託生に、胸が苦しくなる。
「診断は睡眠不足に栄養失調。すぐに退院したけど、託生はそのときのこと覚えてなかったんだ。そんな託生を一人に出来なくて、皆代わる代わる託生の部屋に泊まりこんでた。だから留学の話を聞いたとき、こんな状態の託生を一人でパリになんて行かせて大丈夫なのかって思ったんだけど、赤池に『このままだと酒や薬に溺れる可能性もあるんだぞ』って言われて送り出したんだ」
「それで、託生は留学を……」
「うん。留学先で落ち着いたみたいで、皆、安心したんだ。日本に戻ってきてプロになって喜んでたんだけど、やっぱり託生が無理しているように見えてさ。でも、昨年末に託生のコンサートに行ったときに思ったんだ。音が変わったって。聞いているだけで、すごく幸せな気分になってさ。NYに行ってギイの側にいて託生は幸せなんだなって感じたんだよ」
　祠堂を卒業して一年間はSPをつけていたけれど、ターゲットを外されたと確信したあと、オレは託生に関わらないようにした。オレのことは忘れて、普通の人生を送ってほしいと。
　だから、大学二年からプロになるまでの四年間、オレは託生がどのような生活を送っていたのかを知らない。
　それに、祠堂の卒業生も東京の大学に進学した人間が多かったから、オレと別れても支えてくれる人間は何人もいると思っていた。
　事実、片倉も章三も、その場にいた野沢も、託生を気にかけてくれていただろうし、託生の壮行会には、個室どころか広間を貸し切るくらい、学年を越えかなりの人数が集まっていた。
　それだけの人間が周りにいたにも関わらず、章三がそう判断せざるを得ない精神状態だったなんて。
　託生は、強いけど脆い。強さを発揮する裏には、同じだけの傷を心に受けている。
　オレとのことは結果的に「開き直った」と自嘲して笑っていたが、そこに至るまでの間、どれだけの傷を受け

たのか。……どれだけの傷を、オレがつけたのか。
「託生にはギイが必要なんだよ」
「……いや、片倉。オレこそ、託生が必要なんだ」
「ギイ……？」
「託生がいなければ、オレはオレでいられないんだ。離れていた十年、ずっと暗闇の中を彷徨っていた」
　復讐が終わったあと、毎日が空しかった。忙しさに紛れ込ませ、極力託生を思い出さないようにしてはいたけれど、どこにいても、なにをしていても、託生の面影が消えることなんて微塵もなかった。
「どうして、別れたか聞いていい？」
　あのときの虚ろに過ごしていた日々を思い出し息苦しさ感じたオレに、片倉がそっと聞く。
　どうして……。
　一瞬にして記憶が祠堂卒業以前に戻り、走馬灯のように場面が切り替わって脳裏を流れていく。託生に真っ直ぐに向かっていく車。耳に響く警笛と悲鳴。あざ笑うかのように届く白い封筒。
　絶望と無力な自分への情けなさが鮮明によみがえり、ヒクリと喉が鳴った。
「オレのせいで……託生の命が狙われたからだ」
　絶句した片倉の視線がいたたまれなくて、目を反らす。自分の親友が命の危険に晒されていたなんて、聞き捨てならないことだろう。
　罵倒の言葉を待って目を閉じたオレに、
「でもさ、託生は自分の命が狙われてても、ギイと一緒にいたかったと思うよ？」
　思いもよらない言葉を投げかけられ、唖然として片倉を見返した。
「片倉……」
「あ、ギイを責めてるわけじゃないんだ。そうしなきゃ、託生が危なかったのはわかるから。でも、託生はなにがあっても、ギイといたかったんじゃないかな」
　オレの行動に肯定も否定もせず事実を事実として受け入れ、次いで親友の気持ちを代弁した片倉は、
「託生が笑っていられるのはギイの側だけだと思うから、託生を頼むよ」
　初志貫徹。オレの告白を聞いても主張を変えず、もう一度深く頭を下げた。
　託生、お前の親友は、すごいヤツだな。
　オレに関わったせいで、お前の命を危険に晒し、そしてお前が自己を忘れるくらい傷ついた原因なのだと知っても尚、親友のために頭を下げる。オレが託生の側にいる限り、同じような危険があるとわかっているだろうに。
　あのときの対処が間違っていたとは思っていない。託生の命を守れるだけの力を、オレは持っていなかったのだから。
　返事を待つ片倉の眼差しに、オレのすべきことが写っているような気がした。
　危険な目に会うことは承知で、託生はオレの側にいる。それなら、オレが託生を守れと。
　あのときのオレは、力がなかった。今なら……今なら、託生を守れるかもしれない。いや、守らなければいけないんだ。
　目の前に立ち込めていた暗い霧が晴れ渡り、視界の向こうに未来が見えた。
　いつか、離れなければ、手放さなければと、そんな後ろ向きの覚悟を持つのなら、託生を何者からも守る力を身につけ、絶対に放さないと腹をくくらないと、ただの大馬鹿者じゃないか。
「片倉、約束する。もう二度と託生の手を放さない」
「絶対だぞ？頼んだからな、ギイ」
「あぁ」
　オレがお前に恋をしなければ傷つかずに済んだはずなのに、それでも、オレを愛し信じてNYまで来てくれた。
　今ほど、託生を幸せにしなければと思ったことはない。
　託生……。今すぐお前に会いたい。会って、この腕に抱き締めたい。

階下に下り建物を出ると、ちょうど休憩が終わったのか、皆が持ち場に戻りかけているところだった。
その中に、さきほどの気さくな男が混じっていて、オレを見つけたとたん人懐こい笑顔を浮かべ近付いてくる。
「兄ちゃん、もう帰るのか？」
「えぇ、片倉と懐かしい話もできましたし。仕事中にお邪魔しました」
「そうかそうか」
頷きながらオレと片倉に交互に視線を移し、目尻に深い皺を寄せて嬉しそうに笑う。
まるで喧嘩をしていた子供達が仲直りしたのを、目を細めて喜んでいる保護者のようだ。昔から子ども扱いをされることがあまりなかったものだから、これはこれで新鮮だが。
「そうだ、兄ちゃん。これ、持っていきな」
と、ゴツゴツの手でオレに握らせたのは塩飴三つ。
「営業マンは、塩分補給も大切だぞ？」
その台詞に片倉がギョッと目をむいたのが視界の端に映り、吹き出しかけた。
世界中を走り回るオレに、営業マンとは言いえて妙だ。
「ありがたくいただきます」
「おうよ。兄ちゃんも、体に気をつけろよ」
親しげにオレの肩を叩き、男は手を振って工場内に消えた。
もしもオレがFグループの次期総帥なのだと知っても、変わらずに「兄ちゃん」と出迎えてくれるのだろうな。
門まで見送りに来てくれた片倉に別れを告げ、片倉鉄工所の門をくぐった。
さっきより気温は上がり、道の向こうには陽炎が揺れている。しかし、この蒸せるような暑さが心地よい。
託生と再会し、あの小屋でもう一度腕に抱いたときから胸につっかえていた錘が、すっかり消えていた。
そして、オレの中に残ったのは、二つの誓い。
託生を一生守り愛し続けること。そして、二度と託生を放さないという、シンプルかつ最大の誓いだった。

「置いていくか」
「置いていきましょうか」
「あーけーてーくーだーさーーーいっ！」
防弾ガラスの窓の向こうで、松本が喚いている。
片倉のところから松本を拾うために仙台駅まで来たものの、そこで見たのは女といちゃついている松本だった。
お前、仕事中だろうが！なに、やっていやがる！
もちろん、託生と二週間会ってない八つ当たりが込められているのは否定しない。
しかし、駅前でこれ以上注目を浴びるのも面倒なので、
「島岡、うるさいから開けてやれ」
「仕方ないですね」
オレの指示に島岡がロックを外しドアを開けてやると、松本が車内に転がり込んできた。
「副社長、島岡さん、ひどいじゃないっすか！」
「お前、アバンチュールに忙しそうだったから」
「忙しくな……忙しかったですけど、仕事です、仕事！」
「いいのか、さっきの女は？」
「全然知らない人ですってば！話しかけられて困ってたんです！」
「鼻の下が伸びて、困っていたようには全然見えなかったがな。てっきり三日前の女だと思ってた」

「副社長……」
　三日前、報告をしてきた松本の背後から聞こえてた甘い声を指摘すると、気付かれていないと思っていたらしい松本がガックリと肩を落とした。
　別に松本のプライベートに興味はないし、三日前の女は情報を集めるために引っ掛けたのだろう。趣味と実益、どっちにウェイトをかけていたのかは知らないが。
　オレ達と同じく渡日し、松本には仙台で情報を集めるよう指示を出していた。片倉をはめた男の行方について、どんな些細なことでも構わないので集めろと。
　本国とは違い、日本の、しかも初めて訪れた仙台で、どれだけ情報を集められるかと思っていたのだが、なかなかどうして、松本の情報収集能力は相当なものだと証明された。
　調査機関の人間が協力していたとは言え、たった数日で実に有益な情報を手に入れていたのだ。
　ま、ほとんとどが、女経由だろうが。
「もう、ヘトヘトですよ。九月なのに、なんすか、この暑さと湿度」
　日本の夏初体験らしい松本が、ハンカチでは事足りなかったのか、滝のように流れている汗をハンドタオルで拭きだした。
「なんで、お二人とも、そんなに涼しげなんすか？」
「日本には、冷却スプレーや冷却シートなんて便利なものがあるんだよ」
　訝しげに見る松本に鼻で笑う。
「副社長、それなら最初に教えてください！」
「そのくらい、自分で調べろよ」
　情報を集めるのが得意なくせに、変なところで抜けてる松本が不思議だ。
「そんな便利なものがあるなんて詐欺だぁ。知ってたら、拷問のような暑さをしのげたのにぃ。まとめ買いしてNYに送ったのにぃ」
「うるさいぞ、松本」
「だって、副社長～」
「あぁ、松本、これをやる」
　ブツブツとうるさい松本に、ポケットに入れっぱなしの飴を一つ渡した。口になにか入れておけば、大人しくなるだろう。
「……なんすか、これ？」
「片倉んとこで貰った塩飴。熱中症予防にいいんだぞ。ほら、島岡も」
　島岡にも一つ渡し、残りの一つを口に放り込んだ。
「……甘いんだか、しょっぱいんだか、よくわからない味ですね」
「そうか？これはこれで、なかなか美味いぞ」
「手軽に塩分を取るには、ぴったりですね」
　リムジンの後部座席で塩飴を舐める男三人。託生が聞いたら、笑い転げそうだな。
「見つかったらしいな？」
「えぇ、香港に逃げたようです。物もあちらに転売してました」
「やはりな。国内じゃないとは思ってたんだ」
　なにしろ物が鉄製品。日本国内じゃ大きさ的に目立つし、おのずと足がつく。船なら、仙台港から香港へコンテナ船の定期航路もあるしな。
　三日前に貰った松本からの報告と話を総合すると……。
「島岡。香港のチャンと連絡取れるか？」
「今夜、託生さんのコンサートに招待させていただきました。ただし、義一さんは途中で抜けて帰国していただかないといけませんが」
「さすが、島岡」
　オレが片倉と話をしていた間に、松本の報告を受けて連絡を取ってくれてたんだな。ついでに、少しでも

託生のバイオリンを聴けるとはラッキーだ。
「へ？まさか、これから香港……？」
　指示よりも早い島岡の的確な動きに驚きつつも、このままNYに帰れると思っていたらしい松本が引きつり笑いを浮かべ顎を引いた。
　お前が集めた情報なんだから、このくらい予想の範囲内だと思うのだが。
「託生を悲しませてくれた礼はしなきゃあな」
　笑ってられるのも、今のうちだ。

　チャーターしたジェットで仙台空港から香港国際空港に直行し、用意されていた車でコンサートホールまで向かうと、もうすでにコンサート開始から三十分ほど時間が過ぎていた。
　あらかじめ遅れるとの連絡は入れてあったから、チャンも中に入っているのだろう。それは、あちらこちらでガードしている異質な男達で証明されている。
　顔見知りのスタッフに案内されバルコニー席へのドアを開けると、託生のバイオリンの音がオレを出迎えてくれた。
　託生のアジアツアーも、今日が最終日。
　本来なら、香港に訪れることすら予定にはなかったのだから、これ以上贅沢は言えないが、こんな密会の場のＢＧＭではなく、きちんと聴きたかったものだ。
　託生のバイオリンを楽しんでいたらしい男が、オレに気付き振り向いた。
「やぁ、ギイ。招待ありがとう」
「久しぶり、チャン」
　片手を挙げチャンの隣に腰掛け舞台に目をやると、二週間ぶりに見る託生がスポットライトを浴びながらバイオリンを奏でていた。空間全てが託生の音に満たされ、圧倒的な響きで自分の世界に聴衆を引き込んでいる。
　この時間だけは共有することが叶わず歯痒く感じることもあるが、託生が安心して音の世界で舞えるのならば、オレは何者からも守りたいし、それが義務だとも思っていた。
「なにか、厄介ごとでも？」
「いや、オレの方ではなにもないんだけど、ちょっと忠告をな」
「忠告？」
「最近、日本から密輸されてきた鉄製品があるだろ？ついでに、日本人の男が一人そのままこっちに来てるよな？」
　いぶかしげに眉を潜めたチャンに視線を流し、確認がてらに指摘する。
　密輸の大元締めのこいつが知らないわけがない。そもそも、香港に逃げ込むには、この男を通さないと無理だ。もちろん保護してもらうために、いくらかの金を渡して。
「……それで？」
「匿ってても、いいことなんてなにもないぜ？なにしろ、そいつは、騙し取った分け前を分配することなく全てを独り占めして、こっちに飛んできたんだからな。今、血眼になってヤクザが探してる。このままだとチャイニーズマフィアとジャパニーズマフィアの全面戦争だ」
　三日前、松本が仕入れてきた情報。
　組員、構成員全員が借り出されているらしく、おかげで他所者である松本にまで行方を尋ねられ……裏の商売をしている店に、女の紹介で入り込めたためだが、それはともかく、行方よりも先に男の状況を把握した。
「それで、忠告か」
「あぁ。ま、少しばかりその男に腹を立ててるんで、チャンに懲らしめてもらおうって魂胆だけど」
「おやおや、君のような大物を怒らせるなんて、あの男がなにをしたんだい？」

　チャンが楽しそうに口元を歪ませ話に食いついてきた。ここのところ、たいした事件もなくて退屈だったようだ。
「……六千万」
「六千万？」
「あの鉄製品を騙し取られたのは、オレの知り合いなんだよ」
「なるほど」
　だからと言って、今更こいつに返せとは言えない。もちろん正攻法で手に入れたわけではないが、こいつだって金を出している。
　なんのリスク負担もせず笑っているのは、片倉を騙した男一人のみ。
「追いかけているのは、どこの組だ？」
「チャンが最悪だと思うところさ」
　とたん、嫌そうに眉間に皺を寄せる。
　小さな組なら、相手がチャンとわかった時点で金で黙らせることが可能だが、お互いの力は五分五分。組のプライドにかけて正面衝突は避けられない。
　しかし、匿い賃をもらっていても、そこまで義理立てするような男でもないはずだ。所詮、小物。たった一人の男のために全面戦争なんて分が合わない。
「わかった。あそこと揉めたら面倒だからな。その間に本国の勢力争いが過激になる可能性も出てくる。あとで連絡を入れてみるよ。友好的に」
「よろしく」
「こちらこそ、情報提供感謝する」
　取引成立。
　ニヤリと笑って了承したチャンに、男の運命は決まった。
　向こうの要求は、入るはずだった金と、自分達をバカにして逃げた男の身柄。それさえ渡せば関係ない。その後、男がどうなるかなんて、オレが知る必要もない。
「しかし、これが君だったんだね」
「え？」
　言葉の意味が読み取れず、チャンを見返したオレに、
「大切なものが戻ってきたからかな？」
　そう言いながら、舞台の上でバイオリンを奏でている託生に目を向けた。
「……チャン」
「今の方が君らしい。いい感じに人間らしいね」
「まるで、オレがロボットみたいな言われようだな」
「あぁ、ロボット。言いえて妙だよ。初めて会ったときの君は、細部までプログラミングされたロボットのようだった。復讐の文字しかプログラミングされていない」
「そうだったかな？」
　意味深に見やるチャンに苦笑する。
　十一年前、託生を殺そうとした奴らを探していたとき、手当たり次第、コネや人脈を辿って、表世界、裏世界の人間を片っ端から当たっていた。
　チャイニーズマフィアのアジトにアポも取らずに押しかけるという無礼な行為に、周囲の人間の反感を買い命知らずと言われたものだが、当のチャンにはなぜか気に入られ、あれ以来、公私に渡って付き合いを続けている。
「度胸もあるし、冷徹だし、邪魔者はどんな手を使っても排除する。ビジネスもプライベートも。一歩間違えば、我々マフィアより怖い存在だ」
「マフィアの首領にそう評価されるとは、喜んでいいのやら悲しんでいいのやら」
　大仰に嘆いて見せたオレに、「さぁ？」と面白そうに笑う。

　あの事件の結末は伝えていないが、こいつの情報網なら、すでにオレが復讐を成し遂げたことを把握していただろう。そして、託生がこの腕に戻ってきたことも。
「心が洗われるような音色だよ。まるで闇を照らす月のような、柔らかな色合いのね。我々のような黒社会（ヘイシャーホェイ）で生きている人間には、眩しすぎる光だが。……ギイ、君にはこの光が必要だ」
「チャン？」
「君が一番よくわかっているんだろ？」
　言い切ったチャンの目が、マフィアらしかぬ優しい色を乗せて微笑む。
「そうだな……」
　呟いて舞台に目を移すと、託生の弓が大きな曲線を描いてピタリと止まった。
　一瞬の静粛のあと拍手が空間を揺るがし、晴れやかな託生の笑顔が飛び込んでくる。一礼して舞台袖に下がったと同時に十五分間の休憩を知らせるアナウンスが入り、明るく照らされた客席から夢から覚めたような人々のざわめきが耳に届いた。
　休憩時間に入るのを待っていたのか、ノックと共に島岡が顔を出し、チャンに挨拶をしたあと、
「失礼します。義一さん、お時間です」
　告げてドアの向こうに消えた。
「チャン、申し訳ないが、時間のようだ」
「相変わらず多忙だね、君は」
　やれやれと肩を上げ、見送りに立ち上がったチャンに右手を差し出す。
「仙台の片倉鉄工所だったかな。折を見て見舞金を送っておくよ」
「それは、助かる」
　銀行からNOと言われることはないだろうが、今は金があるに越したことはない。
「よかったら最後まで聴いていってくれ」
「あぁ、喜んで。また、一緒に酒でも呑もう」
　軽く手を振り見送ってくれたチャンに別れを告げ、楽屋に寄る時間もないままNYへの帰路に着いた。

　託生のコンサートを抜けて先にNYに帰ってきたが、今日は一日遅れで託生がアジアツアーから帰国する予定だ。
　オレ自身、元から海外出張が多い仕事をしているし、託生もひとたびツアーに出れば数週間戻ることはない。
　すれ違いが多いからこそ託生と会える日というのは特別で、出張の疲れがないわけではないが、こんな日は休みにしたって時間の流れを遅く感じるだけだ。
　それを知っている島岡が、いつも通りのスケジュールを用意していた。ただし、ほとんどが本社内、もしくは外出しても近場だけだが。
　副社長室で報告書を書き上げ、松本にコーヒーでも頼もうと内線に手を伸ばしたとき、胸元の携帯が震えた。
『もしもし、片倉だけど。ギイ、今いいかな？』
「あぁ、大丈夫だ。どうした？」
　おずおずと切り出した片倉に軽い調子で返事をすると、
『あのさ、今日、鉄工所の方に匿名で郵便が届いてさ、三千万円入ってたんだ』
　興奮を押し殺して、慎重に震える声で片倉が言った。
　チャンが早速見舞金を送ってくれたのだと瞬時理解したのだが、普通香港から五日はかかるところを、どんな方法を取ったのかは知らないが、これほど早く届けてくれるとは、かなり気を使ってくれたんだなと苦笑する。しかも、せいぜい数百万程度だと思っていたのに三千万とは、あいつ、取り分がかなり減っただろうに。

「逃げたヤツが罪悪感で半分だけでも送ってきたんじゃないか？」
『やっぱり、そうなのかな……。ギイ、これ、どうしたらいいんだろう？』
「そのまま貰っておけよ。元々は片倉が受け取るはずの報酬だったんだから」
『あ、うん、わかった』
　本当のことは言えないから適当にそれらしいことを言うと、あっさりと素直に片倉は納得した。その反応に託生を思い浮かべたことは、ここだけの秘密だ。
『それから、銀行から無事に借りれることになったよ。色々とありがとう。それで、ギイから預かった書類、結局使わなかったんだ。用意してくれたのに、ごめんな。コンサルタントの人に渡してあるから』
「片倉の力を信じてくれたんだろ？使わないに越したことはないんだ」
　ほんとに真面目で真正直な片倉に、笑っちまった。託生の親友なだけある。
　あのとき、経営コンサルタントに預けることも考えた。なぜなら、最初からオレが保証人になる意思を示せば、銀行がいくらでも金を貸すだろうことがわかっていたから。
　でも、こいつはそういう卑怯な真似はしないだろうと思ったから、片倉に直接渡した。
「片倉の人望だな」
『いや、長年、この鉄工所を経営していた親父への信用と信頼だよ。それを俺が潰すわけにはいかないから、俺なりに勉強しながら、もう一度一からがんばってみる』
「そっか」
『ありがとう、ギイ』
「いや、結局オレはなんにもしてないぜ？」
　それどころか、オレの方が礼を言いたいくらいだ。やっと前向きな覚悟が決まったのだから。
『そんなことないよ。色んなことを教えてもらった。仕入先からも、支払いは待ちますからって言ってもらえたんだ。でも、このお金で返せるだろうから、これ以上の迷惑はかけなくて済みそうだ。あ、銀行で借りたお金、半分返した方がいいかな？』
「いや、今はそのままにしておけよ。二ヶ月間、正常運転できなかった分、様子を見たほうがいい。それから繰上げ返済を考えろ」
　それなりの利息はかかるが、前後を考えれば無理をして返す必要はない範囲だ。
　同じことを繰り返すような片倉じゃない。
　一つの山を越え、己の力だけで銀行を動かしたことは、これから経営者としての自信になるだろう。
　その後、二言三言言葉を交わして片倉とのラインを切り、オレはそのままチャンに連絡を取った。
「片倉から連絡があったよ。見舞金の」
『あぁ、日本にいた部下に届けさせたんだが、無事、着いたようだな』
「でも、よかったのか？取り分が少なくなったんじゃないか？」
　チャンにとってはした金だろうが、一応、報酬の一部だろうに。
『いや、それがな。片倉鉄工所が作った鉄製品の出来が良くて、思っていた以上の値段で取引が成立したんだ。その分とコンサートの礼だよ。まぁ、男を日本側に引き渡すときに、男が持っていた金を多少取り上げた分も入ってるかな』
　可笑しそうに笑うチャンの顔が目に浮かぶ。
「サンキュ、チャン」
『いや、またな、ギイ』
　どうせ金を持ってたって、それこそ激怒している組が全部取り上げるのだろうから、誰の手に金が渡っても問題ないし、そもそも片倉の金だ。
　あのあと、松本が「追加報告です」と持ってきた報告書によると、会社を継ぐまで碌に仕事もせず遊び回り、継いだ後は好き放題に会社を引っ掻き回していたらしい。
　そのうち、やっかいな人間ばかりが出入りするようになって従業員が次々と辞め、営業もままならない状態に会社は傾き、そこに目を付けられた男は、片倉をはめる話を持ちかけられ裏の業者と手を組んだ。

　数ヶ月かけて実績を作り、しかし、金を手に入れ欲にまみれた男は逃げた。自分が手を組んだ組織が、どれだけ大きいかを知らずに。
　力が同等なら狐と狸の化かしあいで済んだものを、相手はチャンでさえ厄介だと思っている組事務所だ。素人が勝てるわけがない。
　因果応報。片倉をはめた報いは、自らがはめられるという結末で幕を閉じた。

　それほど遅くない時間に帰りついたオレは、足早に廊下を抜け居間のドアを開けた。
　託生から昼過ぎに帰国し、事務所に寄って用事を片付けたあと、ペントハウスに帰るとメールを貰っていたのだ。
　居間に入ったとたん、甘いバニラに似たパウダリーな香りが鼻につき、その香りの元を辿って視線を巡らすと、居間の一角に白い可憐な花を咲かせた鉢植えが置かれているのが目に入ったのだが、そんなものより、まずは託生をこの腕に抱き締めたい。
「お帰り、ギイ」
「ただいま。託生も、ツアーお疲れさん」
　ソファから立ち上がった託生を攫うように抱き締め、少し長めのキスをしながら託生の感触を確かめる。
　触れる口唇から、さらりと落ちた前髪から、てのひらに移る低めの体温から、託生が帰ってきた実感を噛み締めた。
　ゆっくりと口唇を離し、甘い溜息を吐きながらオレの肩口に頭を持たせかけた託生の髪を梳き、柔らかな頬に口付ける。
　託生不足に、このまま限度なく触れてしまいそうな自分を苦笑し、そっと託生を放して目を合わせた。
「ギイこそ、忙しいのに来てくれてありがとう」
「え？」
「香港のコンサート、来てくれてただろ？」
「あぁ、誰かに聞いたのか」
「うん？違うよ。バルコニー席にいただろ、右端の？」
「……気付いてたのか？」
　あんなに離れていたのに？
「そりゃ、ギイだし……」
　頬を赤らめボソボソと言い訳する仕草が可愛くて強く抱き締めると、「痛い痛い」と笑いながら背中を叩かれた。
「休憩後いなくなったから、仕事が入ったのかなって思ってたら、チャンさんが『仕事で抜けた』って教えてくれて、あぁ、やっぱりって」
「少しだけ時間ができたから。最後まで聴きたかったんだけどな」
「来てくれただけで嬉しいよ」
　はにかむ託生の可愛らしさに口唇を寄せたものの、託生の台詞になにかが引っかかる。誰が教えてくれたって？
「ちょっと待て、託生」
「なに？」
「チャンって……」
「ギイの友達だろ？楽屋までわざわざ挨拶に来てくださったんだけど」
「あいつ、楽屋まで来て名乗ったのか！」
「うん」
　なんの疑いもなく、こっくり頷いた託生に眩暈を感じた。
　そりゃ、あいつの顔が利かないところなんて香港にはないから、楽屋に入り込むなんて簡単なことだけど、

黒社会の人間が表に顔を出すことはおろか、名乗るなんてご法度なのに。
「あ、もしかして、あの花？」
「うん、チャンさんに貰ったんだ」
　この花の匂いを嗅いでいるうちに、オレはひとつの記憶にたどり着いていた。
　詳しい品種まではわからないが、これは風蘭（ふうらん）を観賞用に園芸した富貴蘭（ふうきらん）じゃないか？
　蘭の一種ではあるけれど、胡蝶蘭のように華やかな存在感を持つ洋蘭に比べ、儚げで慎ましく控えめだ。しかし発せられる香りは、誰もが振り向くくらい己の存在を主張する東洋蘭の一種。
　小さなものなら専門店でも手に入れることができるが、マニアの間ではオークションで高値がつく貴重な花であり、この鉢植えの大きさならば蘭の展示会で警備員がつくほどのレベルだ。プレゼントにしては高価すぎる。だが、チャンなら関係ない。
　チャンのヤローっ。さっき、一言もそんなこと言わなかったぞ。てか、オレが帰ったあと、すぐに手配して届けさせたのか？展示会級の富貴蘭を？
「空港の検疫で止められるかなと思ってたら、翌日アメリカに帰るときに、チャンさんの部下だと名乗る人がわざわざホテルまで来てくださって、検疫もすんなり通過できたんだ。貿易のお仕事をしている人って手続きに慣れてるんだね」
　感心しているみたいだけど、託生。チャンになんて言われたか知らないが、あいつは貿易に携わってるんじゃなくて、本業は密輸その他諸々の裏稼業。でもって手続きなんて必要なくて、顔パス状態。あいつの部下は、どの組織にでもいるのだから。
　託生はなにも知らずに受け取ったのだろうが、想像するに、この鉢植え一千万は下らない代物。頭が痛い……。
　富貴蘭の花言葉は『真の魅力』。
　託生に惚れたなんてことはないだろうが、個人的に託生が気に入ったらしいことは、この富貴蘭を見れば明らかだ。チャンが託生を気に入ったのなら、それこそ中国での託生の身の安全は保証されたようなものだけど。
　そう考えているうちに、昔、何度も繰り返していたのにも関わらず、また同じことをしてしまったのだと気がついた。託生を紹介したオレの知り合いが、託生を気に入らなかったことは一度もなかったことを……。
　自己嫌悪に、こっそり落ち込んでいると、
「この花、ギイに似てるよね」
　突拍子もない託生の言葉に、ポカンと口を開ける。
「はい？」
　富貴蘭がオレに？どっちかと言うと託生だろ？この小さくて可憐な白い花。希少価値云々も、託生に当てはまる。
　もちろん、葉山託生という人間はこの世に一人だけだから、花になんて例えようもないくらい特別なものだけど。
「だってさ、この花、これだけ香りがいいから、離れていても存在感があるじゃないか。ギイも存在感半端ないし」
「は？」
　独自の解釈を披露してみせた託生に唖然とし、そしてガックリ力が抜けた。
　存在感？似ているのは、そこ？ってか、別にオレは存在感なんていらないし、半端ないって、それ使い方間違ってないか？
　姿形を対象にしていないところが、託生らしいと言えばらしいけど。
　花に顔を近づけ香りを吸い込んだ託生は、
「あ、そうだ」
　と、なにかを思い出したのか、満面の笑顔で振り向いた。

「チャンさんが教えてくれたんだけど、この花って夜に香りが強くなるんだって。だから、月夜によく映えるんですよって」
「月夜に……」
　言葉を口の中で繰り返し、その意味の察するところにたどり着き笑いが込み上げてきた。
　チャンのヤツ……。
　月の下でこの花が映えると言うのなら、託生がいるからこそ本当のオレが出せるのだと言いたいのか？
　いや、それとも単純に託生が気に入ったから希少価値のある花を贈り、エピソードを披露しただけなのかもしれないけれど。
　花を贈った意味を思い巡らせながら、チャンって結構おせっかいだったんだなと、旧友の隠れた一面に笑った。
　肩に重みがかかり視線を移してみると、託生が欠伸を噛み殺しているのが見える。
「託生、もう限界だろ？」
「うん、充電残り一パーセント」
「ははっ」
　時差ぼけで眠いのに、オレが帰ってくるまで我慢して起きて待っていてくれたのだろう。
　目を擦り欠伸をしている託生を抱き上げ、寝室のドアを開ける。
　シーツをはぎ、ベッドに下ろしたときには、半分夢の世界に入ってしまっていて、託生はくたりとベッドに沈んだ。
「お休み、託生。愛してるよ」
「う……おや……み、……ギィ……」
　前髪をかきあげ額にキスをしたオレに一瞬ふわりと微笑を浮かべ、託生はストンと眠りの淵の向こうに行ってしまった。

　明日、お前が起きたら、聞いてくれるか？
　なにがあっても、お前を放さないと。二度と放すことはないと。
　もう逃げないと覚悟を決めた。
　危険な目に会わせてしまうかもしれない。
　それでも、お前の幸せがオレの側にあると言ってくれるのなら、オレは一生お前を放さない。
　スーツを脱ぎ捨て、託生の隣に滑り込む。
　無意識に擦り寄ってきた体を抱き寄せたとき、ふと目に入ったベッド上の影を辿ると、カーテンを引き忘れた窓に月が浮かんでいた。
　太陽のように全てを照らす自己主張の激しい光ではなく、見上げればホッと息をつける漆黒の闇に浮かぶ柔らかな月。
　託生の髪にキスを埋め、目を閉じる。
　月の光差す寝室に、富貴蘭の甘い香りが漂っていた。

お読みくださり、ありがとうございました。
時期的には「背中で感じる恋」の一ヵ月後くらいなのですが、そういうことを考えると、ギイタクがどんどん歳を取ってしまうので、Resetに関しては出来る限り同時期をループしたいと思ってます。
離れていた十年の託生くんサイドを書く予定はないので、少し設定を書き加えたつもりです。

途中、約束手形講座のようになってしまいましたが、ギイから一言。

「約束手形の裏書は連帯保証人と同じだから、安易に書くなよ」
だそうです。
商売をされている方以外にはあまり馴染みのない手形の話でしたが、ちらりと覚えてもらえたら役に立つときが来る……かなぁ（笑）
そろそろネタがつきてきた感があるResetでした。

ラビリンス (2014.8)

ResetシリーズとSecret内Lifeシリーズのコラボです。
Lifeをお読みいただいていない方は、ご注意ください。

　背中に柔らかな感触を感じる。草木の青臭い匂いが鼻をつく。まるで祠堂の陽だまりの中で昼寝をしているような懐かしく安らかな気分に、しばし身を任せようとしたのだが、頭の冷めた部分が危険信号を鳴らした。
　だいたいオレが、人に狙われるような場所で、呑気に眠るわけないじゃないか。
　そこまで考えて重い目蓋を開けてみると、木々の間から透けるような青空が見え、眩しさに目を細めた。
「ここ、どこだ？」
　体を起こし注意深く周りを見回す。
　……公園か？いや、どこかの森のようだ。鬱蒼とはしているが暗いわけではなく、何かが襲ってくるような様子はない。しかし、風の音さえ聞こえないってのは不自然だ。
　と冷静に今の状況を把握しようと、頭をフル回転させているオレの耳が、微かな音を拾った。
「……ィ……」
「託生？」
　その場に飛び起きて、全神経を集中させる。今、聞こえた声はどっちだ？もう一度、オレを呼んでくれ、託生。
「……ィ……」
「そっちか！託生！そこを動くな！」
　聞こえたと同時に草木の間に飛び込み、道なき道を走り出す。邪魔な枝を押しのけ、へし折り、オレを呼ぶ声だけが蜘蛛の糸のようにオレ達を繋げているようで、ただただ託生に向かって一心不乱に悪路を突き進んだ。
「託生っ！」
「ギイ！」
　飛び込んだ木の陰の向こう。両手を広げて駆け寄ってきた愛しい姿を抱きとめ、安堵の息を吐く。
　こんなところに、たった一人でいて、さぞ心細かったことだろう。
「よかった、無事だったか、たく……ん？」
　抱きしめあうなんて、数えきれないほど繰り返してきたシチュエーションで、オレが託生を見間違えるはずがないし、もちろんいつもの託生の甘い匂いを感じているし、なにより「ギイ」と言って飛び込んでくるのは、この世で託生のみ。
　しかし、なんとも言えない違和感を感じる。と同時に、自分がイケナイ親父のような気分にもなってきた。
　いつもより抱きしめた感触が柔らかいような気がするのだ。まるで、女の体を抱いているような……って、マジに胸あたってないか？
　飛び込んできた体も、オレの腕の中でピシリと固まっている。
　ゆっくりと腕を外して一歩後ろに下がり、お互い顔を見合わせた。
「託生か……？」
　託生にそっくり……というより、託生そのものなのに、いつも見慣れている託生よりもずいぶん歳若い。祠堂にいた頃の託生のようだ。いや、それよりも服の上からでも分かる柔らかな丸みを帯びた体つきに、頭が一瞬にして錆付き思考が固まった。
　『託生』は『託生』だけれど、『オレの託生』じゃない！

　同じくオレの顔をポカンと見ている託生に、念のため聞いてみる。
「君の名前は？」
「崎託生……」
「崎？」
　ちらりと左手をみれば、銀色のマリッジリングが目に入る。
　この子のオレ、やるなぁ。
　結婚するには早すぎる歳のように見えるが、確かに託生が女であれば、オレだってさっさと結婚してそうだ。
「ついでに聞いてみるけど、旧姓は葉山？」
「うん」
「じゃ、君の配偶者の名前は崎義一？」
　コクリと頷き、反対に問いかけるようにオレを見る託生に、
「オレの名前も、崎義一だ」
　そう自己紹介すると、
「あ、やっぱり」
　あっさり頷くと同時に、お互いなぜかしら納得した。
　オレという人間が二人いて、託生も二人いて、違う世界でそれぞれ巡り合って共にいる。
　それが、なぜかしら嬉しい。
　別の世界の託生が、オレ以外の人間と一緒にいるだなんて考えたくないじゃないか。
　しかし、オレではあるけれど、自分のオレではないことに力を落とした託生が、
「ギイじゃないんだ……」
　その場にペタリと座り込み、慌てて隣に膝をついた。
　オレの託生じゃないけれど、ここにいる託生も託生なわけで、こんな表情をさせたくないし見たくない。
「大丈夫だって。託生を置いて消えてしまう人間じゃないのは、このオレがよく知っている」
「ギイ……」
「とりあえず、これからのことを考えようか」
　心配いらないと、にっこり笑ってやると、おずおずと頷き、ホッと表情を和らげた。
　託生って女の子になっても可愛い……。
　と思ったものの、すぐさま頭を振る。なんとなく……いや、たぶんこの子のオレも、オレと同じ性格をしているような気がする。可愛いなんて一瞬でも思ったことを、この子のオレに知られるとやっかいだ。
　……まぁ、オレが託生を見て可愛いと思わないことはありえないから、全部筒抜けになるだろうけどな。
「まずは、君のことは、託生ちゃんと呼ばせてもらうよ」
「え、どうして？」
「同じ思考だろうから、わかるんだ。オレが君を『託生』と呼んだら、君のオレは絶対いい気はしない」
　確実に。
　オレだって、オレの託生を他人にそう呼ばれたら、ムッとするしな。
「じゃあ、ぼくは義一さんって呼びますね」
「……それも微妙だけど、今回は仕方ないか」
　この不可解な世界に、オレの託生と、この子のオレも、来ている可能性があるし。
「しかし、この森はどこまで続いてるんだ？どこか通り抜けられるところは……」
　オレが目覚めた地点からだいぶ移動しているはずなのに、周りの景色が変わった様子はない。まさか同一地点をぐるぐる廻るリングワンダリングじゃないだろうな？
「あ、あっちに建物がありましたよ」
　そんな心配をよそに、託生ちゃんが自分の背後を振り返り、歩いてきたらしい方向を指差した。

「建物？」
「木の間から、小さく見えただけなんですけど」
「へぇ、じゃ、とりあえずそこまで戻るか」
　ここで立ち止まっていても仕方ない。手掛かりになるものは、片っ端から調べていかねば。
　オレ達は、建物が見えたらしい地点に向かって歩き出した。

「君のギイって、ものすごい心配性なんだ？」
「心配性ってものじゃないですよ。ぼくが外出しようとしたら、滑って転ぶからダメだなんて無茶言うんだから」
　世間話ついでに、もう一人のオレのことを聞いてみると、多少耳に痛いような気はするけれど、それは行き過ぎだろ？と思われることのオンパレード。
　滑って転ぶから外出禁止なんて、さすがのオレも言わないぞ。
「まぁ、なんだ。オレも託生に心配性すぎるとよく怒られるけど、君のギイは心配性を通り越して過保護なんだな」
　それとも、オレもこのくらいの歳のときは、そこまで過保護に考えていたのだろうか。その頃は、託生と離れていたから、わからないが。
「祠堂を卒業するときに心配をかけまくったから、仕方ないんですけどね」
「祠堂？君達の世界では、祠堂は共学なのか？」
「いいえ、男子校です」
　あっさりと否定して苦く笑い、
「ぼく、卒業間際に女の子だってことがわかったんです」
　オレ達の世界と枝分かれした地点を明確に示した。
「……インターセックス？」
「はい」
「それは……大変だったんだな」
「でも、ギイがいてくれましたから」
　自分のことのように、誇らしく嬉しそうに笑う託生ちゃんに、苦しんだ影はない。
　この子の今の姿を見れば、それまでの男としての人生を捨て、新しい人生を生きているだろうことは明白だ。しかし、そこに至るまで、どれだけ苦しんだだろう。普通の人間ならば心を壊してしまっても可笑しくない、天地が引っくり返るような出来事だ。
　こうやって笑えるのは、もう一人のオレが必死に守っていたからだというのがわかる。
　オレは託生の命を守るために別れ、もう一人のオレはこの子の心を守るために側にいた。
　あのときの選択をオレは後悔していないが……。
「あっ！あれです！」
　託生ちゃんの声に顔を上げると、木々の隙間から小さく見えるあれは……ルフェビュール城！
　なぜ、この城がここに……。
「託生ちゃんは、あの城を見たことはないか？」
「いいえ。初めて見ました」
「そうか」
　ということは……。
「よし、あの城を目指そう」
「え？」
「この辺りに目印のようなものはないし、あの城に見覚えがあるというか、何度か行ったことがあるんだよ」
「義一さんの世界で？」
　そう、オレ達の世界で。

「もしも、君のギイとオレの託生が、この世界に来ているのならば、あれを目指すと思うんだ」
　オレと同じ考え方をする人間ならば闇雲に歩くはずがない。なんらかの目印を目指すだろう。託生は言うよしもがな。よく知っている城だからな。
「そうですね。貴方がそう思うのなら、ギイも同じことを考えると思います。行きましょう」
「……君も思いきりがいいな」
「そうですか？」
「あぁ。どこまでも真っ直ぐだ」
　オレの託生と同じように。
　どうして、ここに飛ばされたのか。交わるはずがないパラレルワールドのもう一人の託生が、ここにいる理由はなんだ。
　いくつもの謎を胸に秘め、オレ達は、遠くにそびえ立つルフェビュール城に向かって歩き出した。

　「もう！いったい、ここはどこなんだよ！」

　子供のように両手を天に突き上げ、苛立ち紛れに叫んだ。でないと、心細さに泣き出してしまいそうだから。
　ぼくもいい大人だし、ちょっとやそっとじゃ涙なんて出なくなったけれど、気付けば誰もいない森の中だなんて、
「予定にないんだよーっ！」
　残響さえ残さず森の奥深くに吸い込まれたぼくの叫び声に、返る言葉はない。
「はぁ。どうして、こんなところにいるんだろ」
　ガックリとしながらちょうどいい具合にあった切り株に座り、左手に持っていたバイオリンケースを抱きしめる。
　本当に、なにもわからないのだ。目を開けたら森の中だった。かといって、目を閉じる前になにをしていたのかも覚えていない。現実じゃない、夢の中なんだと自分に言い聞かせながら思いっきり頬を引っ張ったけれど痛いだけで、目の前の景色に変化なし。
「ギイ……」
　今、なにしてるんだろう。ぼくがいないことに気付いてるかな。
　一人になると必ず胸に浮かべるのは、ギイのことだけ。祠堂にいたときも、別れたあとも、再会してからも。ずっとずっと、ギイのことだけを愛していたから。
　ここがどこかわからないけど、ぼく以外、生き物の気配が全くない。周りを取り囲んでいる草木でさえ作り物のようだ。
　こんな不可解な世界に、どうして迷い込んだのかわからないけれど、ここから脱出しなければ、もう二度とギイには会えない。それが、ギイの望みかもしれないけれど……。
　ギイは、ずっと後悔している。ぼくと再会したことを。
　ぼくを離したくないのも本心。でも、巻き込んでしまうくらいなら、別れた方がいいと思っているのも本心。
　この一年、二人でいるのが本来の姿なのだと、事あるごとにアピールしてきたつもりだけれど、ギイの心を変えることはできなかった。
　どう言えば伝わったんだろう。ぼくは、君の側にいることだけが、ただ一つの願いなんだと。
「……っ！」
　今、ギイの声が聞こえた……？！
　空耳かもしれない。でも、この無音の世界に異質な音が紛れ込んだはずだ。
「ギーーーイーーーっ！」
　立ち上がり、腹の底からギイを呼んだ。もしかしたら、ギイじゃないかもしれないけれど、ぼくは、ここから脱

出してギイに会わなければいけないんだ。
　お願い、届いて。
「託生、どこだ？！託生ーっ！」
　ぼくの声に答えて遠くから聞こえてきた声は、間違いなくギイの声だ。
「ギイっ！ギイーーーーっ！」
　ぼくは、ここだよ！
「そこで待ってろ！オレが行く！」
　学生時代、外出時に必ず言い置いていた『迷子の鉄則』通り、ギイがぼくを探して見つけてくれた。
　よかった、ギイがいた……。
　ホッと体から力が抜け、堪えていた涙が溢れそうになり、慌てて袖口で拭う。また泣き虫と笑われるのは嫌だからね。
「託生！」
「ギイ！……あ……れ？」
　草木の影から現れたギイに両手を伸ばし、しかしぼくはそのままの形で固まった。目の前のギイも、両手を伸ばしたまま呆気に取られたような表情をしている。
「託生？」
「ギイ？」
　ギイだけど、ギイじゃない。ギイ、そのものなのに、ギイじゃない。
「託生、だよな？」
　確認するように慎重に問いかけてきたギイは、
「そうだけど、ギイ。君、いつのまに勝手に一人で若返ったの？」
　どう見ても、ぼくより若いのだ。いつも見慣れているギイじゃない。
「オレは、そのままだけど……」
「でも、若くなってる」
　複雑な表情でぼくの頭の天辺から足の先まで、何度も視線を往復させ、
「失礼」
　と言いながら、ギイがペタリとぼくの胸に両手を置いた。
「……ない」
「は？」
　ボソリと呟かれた台詞に首をかしげつつ、
「ぼく男だからいいけど、それ、セクハラだよ」
　もしくは、痴漢。
　真っ平なぼくの胸に大きな溜息を吐き、若返ったギイはその場に力なく腰を下ろした。
「ギイ？」
「オレの託生は、女なんだ」
「……はぁ？」
　ということは、目の前にいるギイは、ぼくのギイじゃない？いったい、どういうこと？

　信じられないことだけれど、ぼく達とは別に、もう一人のぼくとギイが存在しているらしい。
「平行世界……パラレルワールドと言われるものですが、貴方達が生きている世界とオレ達の生きている世界が、なんらかのきっかけで交わってしまったのだと思います」
　若返ったギイ……ではなく、義一君が今の不可解な状況を解説してくれた。
「いったい、なにが原因なんだろうね」
「さぁ？」

　ぼくと同じく、気付けばこの世界にいたらしい義一君は、ぼくが年上だとわかったときから言葉遣いを改め、年長者には節度を持った態度を取るギイそのものだった。女の子のぼくというのは、想像つかないけれど。
「でも、ここが交差している世界なら、君の託生ちゃんと、ぼくのギイも、ここにいるかもしれない？」
「それは充分考えられますね」
　この世界に一人きりじゃないというのは、心強い。しかも、ぼくのギイではないけれど、ギイなのだ。この世界から脱出する方法が見つかりそうな気がする。それに、もしも、もう一人のぼくとギイがいるのなら、早く探さなければ。
　同意して頷いた義一君の左手に指輪が光っているのに気付き、
「結婚してるんだ？」
　驚きの声を上げる。
　さっき、二十二歳だって言ってたよね。
「えぇ。託生が二十歳になるのを待って」
「そっか」
　そういえば、昔ギイが『二十歳になったら結婚しよう』なんて、本気とも冗談とも取れることを言っていたなと思い出し、口元で笑った。そして、ほんの少し羨ましく思う。
　ぼくは、この頃のギイを知らない。
　でも、この二人は別れることなく、手を取り合い未来に向かって歩いている。今更、離れていた十年を後悔しても仕方ないけれど……。
「どこまでが同じ人生だったのかな？それとも、最初から全然違う人生だったとか？」
「おそらく祠堂卒業間際までは、同じだと思いますよ」
「祠堂？女の子なのに？」
「……卒業間際に、女性だと判明したんです」
「あぁ……って、ものすごく重大な事件じゃないのかい？！」
　それなら、そこまでの人生は重なっていたかもしれないなと単純に納得しかけ、しかし、その台詞が度肝を抜かれるような爆弾を含んでいることに気付き、驚きの声を上げた。
　他人事であって他人事じゃないような気がする。違う世界であれど、ぼくなんだ。
「まぁ、色々とありましたけど、今は落ち着いてますから。託生さんと義一さんは、卒業後どうされたんですか？」
　しかし、問題はないと微笑む義一君の余裕のある態度に、ぼく達との差を感じ俯いた。
「……卒業と同時に別れたんだ。一年前に再会して、今は一緒にいるけど」
　ギイと一緒にいたい。心から望んでいるのに、受け取ってもらえない歯がゆさ。ギイの気持ちを疑っていないけれど、ぼくが手を離したとたん、また過去の世界に囚われるであろうギイの弱さを、ぼくは理解しているから。だから……。
「貴方の義一さんは、自分勝手な人ですね」
　吐き捨てるように投げかけられた言葉に、ギイを嘲笑われたような気がして、目の前が真っ赤に染まった。
「ぼくの命を守るために、ギイは離れたんだ！」
　そうだ。あのとき別れなければ、今、ぼくは生きていない。そんなことになれば、たぶんギイも、この世にはいない。そういう人だから。
　ぼく達は、ぼく達の世界で精一杯生きていた。そして、離れていた時間も愛し合っていた。それは、紛れもない事実だ。
　爪が食い込むほど握りしめ震える拳を義一君が両手で包み込み、ぼくは自分がなにをしてしまったのか今更ながら気付いて狼狽えた。
「あ……」

「大丈夫ですよ。手が早いのは、オレの託生も同じですから」
　そう笑う義一君の口唇の端が血で滲んでいる。
「それより、現役のバイオリニストに素手で殴らせてしまってすみません」
「どうして、君……」
「オレの託生と託生さんは違うけれど、オレは託生にそういう顔をしてもらいたくないんです」
「どういう意味？」
「託生さん。今、本当に幸せですか？」
　そう問いかけられて言葉が詰まった。
　十年の時を越え、もう一度ギイと愛し合って、そして今はギイの側にいる。離れていた十年を思い返せば、これほど幸せな日々はない。でも……。
「たぶんオレは、貴方のギイを誰よりも理解できます」
　ギイは聡い人だ。だから、義一君もぼく達の不安定な仲を勘付いているのだろう。
　でも、
「ぼくも、ギイを理解しているよ」
　ポロリと涙が零れた。
　ぼくを愛してくれていること。愛しているからこそ、離れなければと思っていること。そして、そんな自分の心に傷ついていること。
　嗚咽が止まらないぼくを、義一君は、ずっと背中を撫でてくれていた。

　ルフェビュール城に向けて森の中を歩き出し、一時間ほど経った頃だろうか。少し開けた所に、小さな泉が湧きでていた。水面はゆらめいているのに、なんの音も聞こえないのが不気味だが。
「あの水、飲めるかな？」
　ポツリと呟いた託生ちゃんに、オレも少し喉が渇いていることを感じ、
「見てみようか？」
　方向を変えて泉に近寄ってみる。
　底が見えるほど澄んだ泉に、飲用にできるか確かめてみようと手を伸ばしたその時、オレ達を映していた水鏡がゆらゆらと滲み、次に現れた人影に息を飲んだ。
「ギイ！」
「ダメだ！消えてしまう！」
　ビクリと動きを止め、伸ばした指を押さえつけるように胸に抱き、託生ちゃんが「ギイ」と彼を呼ぶ。
　オレ達を映しているようで、微妙に違う。なぜなら、そこに映っているのは、彼女のギイと、オレの託生だ。
　やはり、この世界のどこかにいるんだな。
　水鏡の向こうで、託生が同じように手を伸ばそうとしてもう一人のオレに止められていた。零れ落ちそうな涙を堪えて。
「託生……」
　いつも手を伸ばしていたのはオレだった。そして、繋げた手を離したのもオレだった。
　もう一度触れた手の温もりに安らぎを感じ、心地よい幸福感に酔いしれ、同時に罪悪感がゆっくりと胸の奥底に根付いていくのを、オレは気づいていた。オレの幸せのために、託生を犠牲にしていいのかと。
　水鏡が二人の姿をゆらりと滲ませ、またオレ達二人の姿を映し出す。
　今は、無事でいることがわかっただけでいい。もう一人のオレが一緒なら、必ず大丈夫だ。
　一瞬だけ絡んだ彼の視線が、オレと同じ色を映していたから。
　託生を頼む……。
「彼が、君のギイ？」

　コクリと頷き、ポロポロと涙を零す託生ちゃんの頭を撫でる。このくらいは、お互いさまで許してもらえるだろう。
「大丈夫だったろ？絶対会えるから、もう少しがんばろうな」
「はい……！」
　涙を拭い、ニコリと笑った託生ちゃんは、やはり託生同様前向きだ。彼も、この性格に助けられたことも多いだろう。今のオレのように。
「さて、二人がいるのはどっちの方向なんだろうな。城に着く前に合流できればいいんだけど」
　鬱蒼とした森の中。いったい、どっちの方角に二人がいるのか……。
「あ……あっち！バイオリンの音が聞こえます！」
　託生ちゃんが、城から三時方向を指差し、オレの手を引っ張った。
　耳を澄ましても、全くオレには聞こえない。託生と同じく彼女の耳もいいらしい。
「でも、向こうは、オレ達の場所がわからないよな。そのまま城に直進されたら、遠回りになってしまう」
「ですね……」
　音の聞こえた方向をしょんぼり見る託生ちゃんに、狼煙でも上げられないものかと、周囲を見回しているとき、彼女が嵌めているマリッジリングが光り、空に向かって真っ直ぐに白い光が伸びた。まるで、オレ達の場所を教えるように。
「あ……」
「へぇ、便利なもんだ」
「どうせなら、どこでもドアが出てきたらいいのに」
「そこまで贅沢はさせないぞって？」
「あはは、かもしれませんね」
「では、行こうか」
　大切な人に会うために。

　山越え谷越えは大げさだが、時折聞こえてくるバイオリンの音に向かって真っ直ぐ道なき道を直進し、そろそろ合流できるはずだがと注意深く進んでいると、進行方向に二人の人影が小さく見えてきた。
「ギイっ！」
「託生、走るな！オレがそっちに行く！」
　同時に、隣で歩いていた託生ちゃんが走り出したのだが、焦った義一君の声に素直に足を止めた。確かに、この悪路で走ると間違いなく転ぶ。
　ここまで来れば、あとは彼に任せていいだろう。全速力で走ってくる彼に負けじと、オレも走り出した。
「ギイ」
「託生、大丈夫か？どこも怪我はないか？」
「うん、義一君が守ってくれてたか……ん」
　抱きしめてキスをして、本物の託生か確認する。しっくりと腕に馴染むこの抱き心地。これがオレの託生だ。
「ギイ、ちょっと……」
　あっちの二人を慮って小声で抗議する託生に、
「向こうは向こうで、同じだと思うぜ？」
　振り向かずともわかる。なにしろ、もう一人のオレだからな。
「無事でよかった……」
「……うん、ギイも」
　もしかしたら託生もこの世界に囚われているかもと気づいたとき、ゾッとした。離れて生きていたときとは違い、こんな不可解な世界に放り込まれたら、生死さえもわからなくなる可能性があったのだ。本当に、よ

かった……。
　ひとしきり託生の無事を確認し振り向くと、もう一人のオレはまだまだ忙しいようで、そのメロメロ具合に微笑ましくなる。なるほど、たしかにオレより過保護だな。
「わ、ほんとに女の子なんだ……」
「でも、それ以外は、託生とそっくりだぞ？」
　胸さえなければ、託生と瓜二つだ。顔も性格も。もちろん、オレの愛しているのは、隣にいるオレの託生だけどな。
　そろそろ話をしようかと二人に向かって歩きだし、しかし聞こえてきた会話の内容が、オレの眉間に皺を寄せた。
　彼とオレは、ほぼ考え方が一緒のはず。にも関わらず、オレ以上に過保護なのは、なにか理由があるのではと、なぜ気付かなかったのか。
「本当に、無理してないだろうな？！」
「大丈夫だってば」
「腹が痛いとか、違和感はないか？！」
「しつこいよ、ギイ。無理してません。大丈夫」
「もしかして、託生ちゃんって……」
　隣で呟いた託生の声に、警笛が鳴った。
　過保護すぎて鬱陶しいと訴えていたが、オレが同じ立場なら、そりゃ過保護にもなる！
「大丈夫だって。心配性だなぁ。ギイの子供なんだから強いに決まってるじゃないか」
　……はい、確定。
「託生ちゃん……」
「はい？」
　今までの会話を総合するに、
「君、妊娠中？」
「五ヶ月に入ったところなんです」
　頬を染めて俯いた託生ちゃんに代わり、義一君が答えた。少し彼が疲れて見えたのは、オレの気のせいじゃない。
「わー、すごい！おめでとう！」
　素直に歓声を上げ、託生が託生ちゃんの手を取って喜んでいるが、今まで一緒にいたオレは、どれだけ彼女が無茶をしていたのかよくわかっている。
　走って、つまづいて、転びかけて、もちろんオレがいるから転ぶ前に抱き留めたが、自分のギイがこの世界にいると知ったあとからは、ピョンピョンとスキッ プをするように「早く早く」とオレを急かして……。ここに来るまでの数時間の出来事が、走馬灯のように脳裏を流れ、ザーッと血の気が引いてきた。
「パッと見、わからないね。全然気付かなかったよ」
「あ、そうですか？それなりに大きくなってきてるんですよ、ほら」
「た、託生、止めろ！」
　託生の言葉に答えながら、躊躇いなくシャツの裾を捲ろうした託生ちゃんに、義一君が声を裏返しそうになりながら慌てて止める。
「どうして？」
　心底不思議そうに見返す託生ちゃんに、乾いた笑いが浮かぶ。オレも託生も一応男だということに気づいているのか、全くもって疑問だ。あぁ、それとも、これが祠堂に在籍していた弊害というやつか？男に対して、なんの警戒心も持っていないらしい。彼も苦労するな。
「お腹、触らせてもらっていいかな？」
「はい、どうぞ」
　腹を撫でさせてもらっている託生を横目に、

「オレが付いていたのに、すまない。かなり無理をさせたと思う」
　義一君に頭を下げた。知らなかったとはいえ、妊婦に無理をさせたなんて、許されざることだ。
「いえ、いつもそうなんで、気にしないでください」
「いつも？」
「えぇ、四六時中、毎日」
「大変だな」
「それが託生ですしね」
　ハハハと力なく微笑む義一君に同情を禁じえない。
「でも、ギイは過保護すぎ」
　彼の言葉に、むーっと隣で頬を膨らませた託生ちゃんが噛みついた。
「お前が、無茶ばかりするからだろうが！」
「してない！」
「してる！」
「してない！」
「しーてーるー！」
「しーてーなーいー！」
　目の前で、ぎゃんぎゃんと始まった夫婦喧嘩に、こめかみを押さえる。オレ達も、はたから見ると、こうなんだろうな。なんとなく章三の気持ちがわかったような気がした。あいつの前では、控えてやるか。
「でも、やっぱり、過保護と心配は違うような気がするよ。ね、託生ちゃん？」
「ですよね！」
　託生の声に味方を手に入れたとばかりに、嬉しそうに託生の手を取って喜んでいるけれど、そもそもこの二人は一緒なんだ。無茶をするところはそっくりなのだから、託生の言葉は当てにならない。
「そちらも、同じようですね」
「……どの世界のオレも、託生に振り回される運命なんだな」
　げっそりとした気分で、しかし、それが心地いいとさえ感じるオレは、託生に勝負を挑む気さえ起らない。
　恋は、惚れたものが負けなのだ。

　この世界に唯一存在する建物、ルフェビュール城を目指しここまで来たが、何者かが出迎えることもなければ襲ってくることもなく、かと言って、都合よく元の世界に帰れるかと思えばそうでもないらしい。

　結局、行くところもないのだからと、とりあえずオレの部屋で休もうと話が付いたのだが……。
「託生、城の探検はダメだぞ」
　跳ね橋を渡り中庭抜け、ホテル棟のドアに手をかけたとき、背後から義一君の釘を刺す声がした。
「えぇ、どうして？」
「石造りの廊下でつまづきそうだから」
「大丈夫だよ」
　と言いつつ、中庭を抜けるだけで何度つまづいたことか。そのたびに誤魔化していたが、さすがに側で見ている方が怖い。
　まぁ、城なんて見学コースが決められていることが多いし、隅から隅まで見て回れる機会なんて滅多にないから彼女の気持ちもわからないでもないが、生憎ここは彼の言う通り足元が悪い。なにしろ作られたのは建築技術の発達していない１４世紀だ。石垣が崩れている個所もある。
　そういえば託生とこの城に来たとき、目を輝かせて興味津々にあちらこちらに飛び回っていたことを思い出した。拷問部屋まで案内したのは、ちょっとした悪戯心。
　しかし、涙目の託生に上目遣いに睨まれてノックアウトされ、調子に乗った自分の行動を深く悔いた。己

を押さえつけるのは並大抵の努力ではなかったのだ。
「ギイ、ちょっとだけ」
「託生……」
「ね？」
「あのな、託生……」
　そろそろ義一君が陥落しそうだなと、声のトーンでよくわかる。自慢じゃないが、あれには、オレも勝てたことがない。
　さっきまで「ラスボスが出てきそう」なんてあんぐりと口を開けて城壁を見上げていたのに、好奇心が旺盛なところは、やはり託生と同じだ。
「そういえば、こういう古城って昔は要塞に使われていたことが多いんですよね、義一さん？」
　説得を手伝ってくれと言わんばかりに、何気ない振りをして義一君が振った話の意図を察し、「そうだよ」と生真面目な表情を作って頷いた。
「この城も他国の侵略から守るために作られてて、ほら、城壁の周りに日本の城と同じように堀もあっただろ？地下には拷問部屋もあるし、当時は捕虜の悲鳴が絶えなかったらしい。今でも、夜な夜な廊下を彷徨い歩く人間がいるとかいないとか……」
「ぎ……義一さん、それって……」
「託生が鎧を着た人間にぜひとも遭いたいと言うのなら、オレは止めない」
　顔を引きつらせる託生ちゃんに、義一君がとどめを刺す。
「ううん、ぼく、止めとくよ」
　あっさり主張を退け、義一君の腕に抱き付きながら隠れる託生ちゃんに吹き出しそうになりつつ、ホテル棟の重厚なドアを開けた。素直なのはいいことだ。
「頼むから、大人しくしててくれ、託生」
「失礼だなぁ。ぼく、子供じゃないよ？」
　不服そうな口ぶりに、口唇を尖らせているだろうことが、見なくてもわかる。なにしろ、そのモデルがすぐ側にいるからな。指摘すれば、同じようにふくれっ面になるだろう。
　しかし、人気のないホテル棟に足を踏み入れた途端、
「美味しそうな匂い」
「ダイニングの方からだね」
「おい、託生」
「こら、託生」
　舌の根も乾かないうちに、さっさと二人で方向転換し、階段奥のダイニングに向かってしまった。託生が二人いると、マイペースぶりは倍ではなく数倍に跳ね上がるらしい。ってか、託生、お前一応年上なんだから、彼女を止めろ！
　二人を追いかけてダイニングルームに入ると、そこにはなぜか四人分の食事の用意がしてあった。
　なんだかなぁ。突っ込みどころ満載のロールプレイングゲームのような展開に、頭が痛くなってきた。誰が用意したって言うんだ、この食事は。
「あ、トマト」
「託生……！」
　さっさと席に着いた託生ちゃんが、皿に盛ってあったプチトマトを摘まんで、パクリと口の中に入れ、
「美味しいよ？」
　もぐもぐと咀嚼しながらニコリと笑う様子を見て、眩暈を感じる。
　もしも毒が入っていたら……！
「義一君……」
「四年間、危機管理を教え込んでいるんですが、まだまだ甘……」
「ギイ、食べないの？」

　同じように椅子に座った託生が、テーブルの上に置いていた葡萄を口の中に放り込み、キョトンとした表情で当たり前のように手招きして顎が落ちた。
　託生、お前もか……！
　彼女と一緒にいて薄々感じていたが、仕事中は桜井が付いているから安全なだけで、もしかしたら、託生ちゃん同様、託生もきちんとした危機管理を持っていないのかもしれないと、今更ながら気づき冷汗が流れる。
　お前、よくそれで、フランスに留学なんてできたな？！なにもなかったことが奇跡だぞ？！
「義一さん……」
「オレも、今、とんでもなく不安を感じている」
　ガックリと脱力しドアに懐いているオレ達に、
「早く早く」
「お腹、空いちゃった」
　と急かす二人に大きな溜息を吐き、渋々食卓に着いた。
　……まぁ、誰が用意したのかわからないが、毒は入ってなさそうだな。
「ギイ、トマト」
「ほら。トマト以外も食べろよ」
「うん」
　いそいそと自分の皿にある手つかずのトマトを、託生ちゃんの皿の上に乗せる義一君の様子に首を傾げ、託生にこっそり聞いてみる。
「託生は、特別トマトが好きなわけじゃないよな」
「うん、ぼくは人並みだね」
　同じ託生でも、食べ物の好みはまた違うのか。
「妊娠してから、異様にトマト好きになったんです。今はマシになりましたが、初期の頃は三食トマト尽くしで……」
　そんな疑問を的確に見抜いた義一君が、苦笑いしながら説明する。
「へぇ」
　あまり妊婦と縁がないから、世間一般の知識程度しか持っていないが、そこまで味覚が変わるものなのか。
　そんなにトマトが好きならばと、託生ちゃんの皿の上にトマトを置くと、同じように思ったのか、その横に託生もトマトを並べた。とたん、彼女の目が輝く。
「ありがとうございます！」
　嬉しそうに食べる託生ちゃんは見ていてとても微笑ましいが、これが三食？
「生命の神秘だな」
「ですね」
「と言いつつ、期待を込めた目で、ぼくを見るの止めてくれない、ギイ？」
　やはり無理か。

　食後、これ以上二人を放牧……基、自由行動をさせておくと、オレ達の寿命が縮みそうなので、真っ直ぐオレの部屋に案内した。閉じ込めておけば、なんとかなるだろうという、かすかな望みをかけてのことだ。
　意気投合したタクミーズほど、怖いものはない。
　鍵もなく開き、いつもと変わらぬ部屋の中、ある一点を見て託生が驚きの声を上げた。
「あれ、ヴィエル？」
「わぁ、ヴィエルですか？」
　さすが音楽家の卵。託生ちゃんもヴィエルを知っていたようで、二人がヴィエルに群がる様子を見て心の

底から安堵の溜息を吐く。

「どうせ誰も使わないから、お前の部屋に置いておくよ」

　と、ミシェルが電話を寄越していたが、この世界のオレの部屋にもあるとは思わなかった。しかし、こういうときにおもちゃがあるのはありがたい。
　義一君もやっと一息つけたらしく、目が合ったとたん頬を緩ませた。
「以前、これを見に、この城に来たんだ」
「そうだったんですか。ぼく、ヴィエルを見るの初めてです」
「でも、これ壊れちゃってるんだよね。数百年前の物だし物置に置きっぱな……え？」
　託生がハンドルを回した途端、独特の音が流れ始める。
「わ、鳴ってる。バグパイプみたい」
「直ってる……」
　素直に託生達は喜んでいるが、オレはヴィエルを凝視した。
　あれだけ壊れていたんだ。部品を交換したって、ここまで完璧に直すことはできないし、修理を請け負う人間も少ないはず。楽器に明るくないミシェルに、そのような伝手もないだろう。
　この世界は、まさか……。

「託生、先に休ませてもらえ」
「え、ぼく、大丈夫だけど……」
　その後、散々ヴィエルで遊び、しかし、まだまだ遊び足りないと不満そうに見上げる託生ちゃんに、義一君が真剣な表情でベッドを勧める。
「ギイ、もう少しだけ」
「だーめ」
　彼女自身、色々と興奮しているから自覚がないらしいが、少し顔色が悪いことにオレも気づいていた。
「お前はそうでも、赤ん坊は疲れてると思うぞ。今日は結構歩いているはずだから」
「そうかな……」
　両手で腹を撫でながら「疲れちゃった？」と話しかける託生ちゃんが微笑ましい。自分の体調には無関心でも、赤ん坊のことはやはり心配なのだ。
「託生さんも、よかったら託生と一緒に休んでください」
「え、ぼく？」
　続けて託生にかけられた言葉に「おや？」と思った。
　この四人の中で、一番守らなければいけないのは、もちろん妊婦の託生ちゃん。それは、ここにいる三人の一致した意見だ。その次を考えれば、義一君には悪いがオレの託生。
　けれども、男である託生が、託生ちゃんの横で休むのは失礼な気がして言い出せなかったのだ。子供のようだが、れっきとした人妻だしな。しかし、義一君からそう言ってもらえるのならありがたい。
「託生、そうさせてもらえよ。二人一緒にいてもらった方が、オレ達も動きやすい」
「そう？」
　託生は、同じく頷いている義一君を交互に見て、
「じゃ、託生ちゃん、ぼく達、先に休ませてもらおう」
　あとのことはオレ達に任せて、自分は託生ちゃんの護衛代わりになることに決めた。
「はい。じゃ、おやすみなさい」
「おやすみ」
「ゆっくり、休めよ」

二人がベッドに入ったのを確認して部屋の照明を落とし、ソファ横のスタンドのスイッチを入れる。
オレ以外の人間が託生と同衾とは少々複雑な気分だが、託生の妹だと思うことにしよう。
しかし義一君は、オレより懐が大き……、
「託生の兄弟だと思えば……」
……いわけないよな。うん。もう一人のオレだもんな。
二人とも、疲れていたのだろう。ベッドに入って、あっという間に深い寝息が聞こえてきた。
無理はない。こんな不可解な世界に放り込まれ、オレ達に会うまで一人で心細い思いをしていたはずだ。強がっていても託生。寂しがり屋で泣き虫で、オレの愛しい……。
「さてと。義一さん、隣の部屋、空いてますか？」
「義一君？」
「ここじゃ煙草も吸えませんし、二人を起こしたくないですしね」
やれやれといった体でオレを誘うが、どういう意味で彼はこの部屋を離れると言ってるんだ。
「でも、君……」
「あの二人を襲うような物がいないのは、貴方が一番よくわかっていると思いますが？」
真っ直ぐに視線を合わせ、今更隠すなよと自分の手の内を見せてくる。
あー、気付かれていたのか。考えてみれば、彼もオレなんだよな。こういうとき、自分の勘の良さが苦々しい。
「……さすがと言えば、自画自賛しているみたいで照れ臭くなるんだが、よく気付いたな」
「そりゃ、オレは貴方と同じですから」
クスリと目を細め、返事を待たずに義一君はソファから立ち上がった。

瞼の向こうがほんの少し明るく思えて、目を開けた。馴染みのないレトロな天井。
不思議に思い横を向くと、
「ぼく？」
自分の顔が飛び込んできて、一気に目が覚める。
えっと、ここ……あ、そうだった。変な世界に迷い込んでしまったんだ。一晩寝たら戻っている、なんて都合のいいことはさすがにないよね。
「ギイ達は……あれ？どこか、行ってるのかな？」
部屋の中にはぼく達二人だけ。
不可解な世界で、なにが起きるかわからない状態の中、ギイが離れるなんて腑に落ちないけれど、とりあえずは大人しくこの部屋にいた方が良さそうだ。託生ちゃんを一人にするわけにはいかないし。
窓のカーテンをほんの少し捲って、外の景色を見てみた。遠くの方は霞んで、よくわからないけれど、あの暴漢に襲われた小道が存在している。いったい、どこまでがルフェビュール城の領域なんだろう。
あのとき、ギイはこの窓からぼくを追う暴漢を見つけ、慌てて追いかけてきたらしい。ギイの俊足でなければ、とうの昔に、ぼく一人だけ誘拐されていただろう。
卒業間際に起こった事件の全貌、ぼく達の変わらぬ気持ち。
知ってしまったら離れて暮らすことなど考えられず、ギイの暴走に乗じて慌ただしくNYに移転した。あの短期間に一気に物事を進めたから、ぼくはNYに来 れたんだ。あと少しでも遅れていたら……ギイが心の奥底にある気持ちに気付いてしまっていたら、全てが白紙になり、ギイと連絡が取れなくなっただろう。そ して、また同じような十年を過ごしていたような気がする。
新しい事務所を用意したとき、ぼくを巻き込む危険性が高まったのだということに、ギイは気が付いた。
あの厳重なセキュリティが施された事務所に、SPの増員。ぼくが気付いていないだけで、もしかしたら事務所の外にも、ガードがついているのかもしれない。

　そこまでしてもギイの不安は晴れず、行き着くところは、別れだ。
「ん……」
　ぼんやりと裏庭を見ながら考え込んでしまっていたぼくの耳に、小さな声が届いた。
　振り返ると託生ちゃんが目をこすりながら部屋を見回してぼくに視線を定め、不思議そうな顔して、
「……ぼく？」
　ポツリと呟く。
　身に覚えのある反応に吹き出した。やっぱり、ぼくはぼくだった。
「え、あぁっ、託生さん！」
「うん、おはよう、託生ちゃん」
「おはようございます」
　ベッドに座りきっちりと頭を下げて、お腹を撫でながら「おはよう」と赤ちゃんにも声をかける。
　それが、とても可愛く微笑ましい。
「あの、ギイは？」
「それが、ぼくが起きたときには二人ともいなくて」
「そうですか」
　と答えつつ、でも、それ以上の詮索はしない。ぼくも同じだけれど。ギイが無意味な行動をしないのを知っているから。
　じっとぼくの顔を見ていた託生ちゃんが、心配そうに小首を傾げた。
「なにか悲しい夢でも見られたんですか？」
「え？そんなことないけど、そんな風に見える？」
「んー、じゃ、もしかしたら元の世界には戻れるかの心配しているとか？」
「それはあるかもね」
　苦く笑いながら頷いた。昨日から、なにがなにやらさっぱりわからない状態なんだ。心配になるのは仕方がない。
　でも同じ環境にいるはずなのに、
「大丈夫ですよ、きっと戻れます」
　なんの心配もいらないと、彼女がニコリと笑った。
　その笑顔を見るだけで、本当になにも心配がないような気分になり、ぼくの心は軽くなったけれど、根拠があるのだろうか。
「なにか知ってるの？」
「いいえ、なにもわからないですけど、いつの間にかここにいたから、またいつの間にか帰れそうだなって」
「前向きだね」
　清々しいくらいに。
　もしかしたら、ぼくもこのくらいの歳のときは、そう考えたのかもしれない。今は、大人の嫌な部分とか社会とか色々なことを見てしまった分、何事も後先の繋がりを理屈で考えてしまう。
「自分の意思で状況が動かないときもあるんだと思うんです。だから、今は待つしかできないかなって」
　しかし続けられた言葉は、さっきの前向き発言とは裏腹な、後ろ向き発言。……の割には、さっぱりとした表情。
「努力しても無駄ってこと？」
「ときには…です。どう努力したって、男に戻れなかったんですから」
　あ……そうだった。女性の体つきをして、お腹に子供もいるから忘れていたけれど、元々、託生ちゃんは男として生きてきた。卒業間際に判明してから、新たに女性としての生活を送っている。
「それなら、今を受け入れて、これからのことを考えようって」
「今を受け入れる、か。君は強いね」
「強くはないです。何度も落ち込んで、ギイに迷惑かけたりしてますし」

　託生ちゃんは何気ない風に言っているけれど、その考えに行きつくまで、どれだけ苦しんだのだろう。もしも、ぼくが女性だったら……全く想像できない未知の世界だ。
　卒業後、別れることなく一緒にいる二人を羨ましいと思ったけれど、義一君が側にいなければ、託生ちゃんはこのような笑顔を取り戻せなかったのではないだろうか。
「今の目標は、託生さんのように自立することです」
「え、ぼくぅ？」
　突然、ぼくが目標だなんて言われて、思いっきり狼狽えた。そんなキラキラした目で見られたら、とんでもなく照れ臭い。
「託生さんは、バイオリニストなんですよね？」
「う……うん」
「すごいですよね。ご自分の力で努力して道を切り開いてバイオリニストになれるなんて」
「そうかな？」
「そうですよ。それって、自立してるってことですよね」
「うーん、でもこの歳だからね。ぼくだけじゃなく、他の人も同じじゃないかな？」
　世間的にアラサーなんて言われる歳で、赤池君なんて奈美子ちゃんと結婚して新しい家族を作ってるし、普通のことだと思うのだけど。
「ぼくは、ギイの保護下にいるようなものなんです。ギイは、こういうことを言うと嫌がるけど、金銭的にも全部ギイに頼ってます」
「でも、それは色々と仕方ないことなんじゃないかな」
　どのような経緯でNYに行き、どんな生活をしているのかよくわからないけれど、高校卒業後すぐってことは、彼女は当時未成年の子供。しかも、右も左もわからないNY。学校や病院のことも含め、下手に動くより義一君に頼ってしまった方がいいような気がする。
　気持ち的に納得できないところがあるかもしれないけれど。
「だから、自立したいんです。託生さんを見ていると義一さんと対等に支え合ってるように見えるから。……もっと強くなりたい」
　彼女の目が、力強い色を持ち眩しく光る。
「でも、君とぼくとでは立場が違うし、今は自分の意思だけで動くこともできないだろ？極端な例だけど、赤ちゃんがお腹にいるんだから行動そのものが制限されてる」
「はい。だから、何年後になるかわからないけれど、いつか自分の生き方を見つけたいなって」
「長期計画だね」
「はい。いつか見てろよ！な気分で」
　拳を握り、まるで義一君に勝負を挑むような彼女が可笑しくて、吹き出した。
「義一君、過保護だから邪魔されないようにね」
「邪魔したら、蹴っ飛ばします」
　今を受け入れて前を見る。そして、未来を見ている。
　あぁ、たしかこの歳くらいだったな。ギイを忘れようとして、忘れられなくて、それならギイを愛し続けようと自分に誓ったのは。溢れる思いを封印しようだなんて、元からできるものじゃなかったんだ。
　ギイを愛してる。これは、誰にも止められない。ギイにも。ぼく自身にも。
　十年、ぼくがギイを想って生きてきたように、ギイにもギイの十年がある。
　それだけ離れていたんだ。その間に根付いた考え方を変えるのには、同じだけの時間がかかっても仕方がないような気がした。
　ぼくは、焦りすぎてたんだ。
　努力は必要だけど、今を認める勇気も必要だ。
　ギイがぼくの気持ちを受け取ってくれるまで、それまで待とう。何度別れても、ぼくとギイは巡り合うような気がするから。そういう運命を感じるから。

「あれ、起きてたのか？」
　ノックもなしにドアが開き、ギイと義一君が揃って部屋に入ってきた。
「おはよう。どこに行ってたの？」
「ちょっとな……。託生」
　指先でちょいちょいと呼ばれて側に寄ると、ギイはそのままぼくの腕を引き、廊下に連れ出した。
　ギイの背後に見える窓から光が幾重にも折り重なり、幻想的な空間を作り上げている。ギイの輪郭が、光に融けそうだ。
「託生は、元の世界に帰りたいか？」
　ぼくの手を握り締めたまま、ギイが真剣な瞳で聞く。
「なに言って……」
　帰りたいに決まっているじゃないかと答えようとして、ふと気が付いた。
　ここなら、誰も邪魔する人がいない。なぜなら、ぼく達だけだから。ぼくを自分の世界に巻き込む心配がないということは、ギイがぼくを手放すという選択がなくなる。
　ずっとギイが隣にいて、ずっとぼくだけを見詰めてくれる極上の世界。綿菓子のように甘い夢の……。
　でも、それでいいのか？止まった時間の中に生きていくのは、未来を捨てることに繋がるんだ。
　ギイを取り巻く世界、ぼくを取り巻く世界。桜井さんや事務所スタッフ、島岡さん、松本さん……大勢の人達を捨てて生きるぼく達は、本当に幸せを感じるのだろうか。
　いや、違う。ぼくは未来を見たいんだ。ギイと生きる世界は、こんな世界じゃない。
「ぼくは……帰りたい！」
　ギイと歩ける元の世界へ。
「……わかった。元の世界に帰ろう、託生」
「帰れるの？」
「あぁ、帰れるよ」
　驚きに目を丸くしたぼくに優しい笑顔を浮かべ、
「一緒に帰ろう。託生、愛してる」
　囁きを直接注ぎ込むように降ってきたキスに答えつつ、そっと胸で呟いた。
　ぼくも、君だけを愛してるよって。

　遅れて部屋から出てきた義一君と託生ちゃんも一緒に、ぼく達は裏門から裏庭に続く小道に出た。歩くたびに乾燥した砂が砂埃となって舞い上がり、匂いが鼻をつく。
　そのときになって、初めて昨日から感じていた違和感の理由に気付いた。
　あの森にいたとき、音も匂いも風も、ありとあらゆる自然に起こる現象が存在しなかったのだ。目に映っているのに幻のように感じていたのは、これが原因だったのかと、ようやく思い至った。
　変わったのは、四人が合流しルフェビュール城の門をくぐったときだ。今思えば、目に見えない境界線のようなものがあったような気がする。
　普段当たり前のようにあるから、それほど気にはならなかったけれど、あの瞬間から全ての物が存在していた。石壁の冷たさも、料理の匂いも、靴音も、布の温かさも。
　そして、今、この小道を歩いて同じ感覚を感じているから、ここも存在しているんだ。
「気分悪くないか、託生？」
　ギイの声に顔を上げると、心配そうにぼくを見るギイの瞳とぶつかった。
「ううん、全然」
　と答えながら、なんとなく見覚えのある風景に首を傾げる。

そういえば、この辺りだったっけ。暴漢に襲われたのは。
心配性のギイ。あの事件を思い出して、ぼくが嫌な気分になったのではと心配になったのかな。
嫌な記憶じゃないよ。それどころか、こうしてギイの側にいれるのは、あの事件がきっかけなのだから、今は感謝さえしてる。あの頭痛は、二度と経験したくないけど。
顔を曇らせているギイに全然気にしていないよと笑いかけ、繋いだ手に力を込めた。
小道を逸れ、このまま行けば、あのボート小屋のあった場所だ。
案の定、湖の畔に変わらず建っている崩れ落ちそうな小屋に、クスリと笑った。誰も来ないとは言え、よくあんなボロ小屋で、ギイに迫ったものだ。
「まだ、残ってたんだね」
「いや。オレ達の世界では、もう小屋はないぞ」
「そうなの？」
「ミシェルが恨みでもあったのかってくらい見事に解体してくれたからなぁ」
「へぇ」
散々、お貴族様の領地に似つかわしくないと騒いでいたから、ぼく達が帰った後、すぐに壊してしまったんだろう。
「改めてボート置場を作って、今は白鳥のボートが並んでるぞ」
しかし、続けられた言葉にポカンと口を開けた。白鳥のボートって……。
「公園の池とかに浮かんでる、あれ？」
「そ、あれ」
目の前の湖に白鳥のボートが、とぼけた顔で優雅に水面を行き来しているのを想像して吹き出した。
これこそ、お貴族様に相応しいとかなんとか言いながら、ミシェルがいたずらっ子のように笑っているのが目に浮かぶ。ナタリーもそういうの好きそうだし。城の見学に飽きた子供達には好評かもしれない。
「義一さん」
「あぁ」
義一君に呼ばれて、ギイは表情を引き締めた。そして、二人に向き合い頭を下げる。
「義一君、託生ちゃん、付き合わせてすまなかった。ありがとう」
「いいえ。こういう冒険もなかなかオツなものでしたよ。な、託生」
「……お城の中、見たかったなぁ」
「お前、まだ言うか」
呆れ半分、でも愛しくてたまらないという風に肩に回した腕で託生ちゃんを引き寄せ、ついでに、その手でコツンと頭を小突く。
「ギイ？」
「この小屋をなくしたら、オレ達は元の世界に帰れる」
「えぇっ？！」
どうやってここに来たのか、なんのために来たのか。いったい、ここはどこなのか。なにもわからないのに、なぜギイは断言できるんだ？
「ど……どうして、そんなことがわかるの？」
「それは、ここがオレの心の中の世界だから」
予想もしなかった答えが返ってきて、ギイを呆然と見つめた。
ギイの心の中の世界……？あの森も、ルフェビュール城も、この湖も、ギイの心の中にあったということ？じゃあ、なぜ、ぼく達だけじゃなく、別世界にいるはずの二人までここにいるんだろう？いや、そもそもギイの心の中って、そんな漠然とした目に見えない世界に入れるものだろうか。
謎だらけで、どこから紐を解いたらいいのか、いや、紐の先さえもぼくにはわからない。
「君達の子供が見れないのが残念だよ」
「オレと託生の顔を足して二で割って貰えば、想像できますよ」

「それ、なかなか難しいぞ」
　しかし、ギイと義一君の間では話がついていたらしく、差し出したギイの手を義一君がしっかりと握りしめた。
　その様子を見て、ハッとする。元の世界に戻ると言うことは、この二人には、もう二度と会えないんだ。
「託生さんもお元気で」
　差し出された右手に手を重ね、ギュッと握った。
　同じギイの手なのに、ほんの少しギイとは違う。もう一人のギイ。
「うん、色々とありがとう、義一君。殴っちゃって、ごめんね」
「いえいえ、慣れてますから」
「気にしなくていいですよ。どうせ、ギイが義一さんの悪口でも言ったんでしょうし」
「たーくーみーっ」
　二人のじゃれ合いに、笑みが浮かぶ。ぼく達もこうなのかなと思うと、ちょっと複雑だけど。
「元気いっぱいの、赤ちゃん産んでね」
「ギイの子供ですから、絶対元気ですよ」
「がんばってね」
「託生さんも」
　同じぼくだけど、違う世界で生きるぼく。こんなことがなければ、会えなかったもう一人のぼく。これから先、人生が重なることはないだろうけど、彼女には彼女なりの幸せな人生が待っているに違いない。
　そう思うとなぜか愛しさが胸にこみ上げ、思わず託生ちゃんを抱きしめた。
「あ……」
「託生……」
　背後で、唸るような二人の声が聞こえたような気もするけど。
　もう一人のぼく。どうか、幸せに……。
「じゃ、つけるぞ」
　名残惜しいけれど、ずっとこうしているわけにはいかない。ギイの合図に託生ちゃんを離して義一君に返し、小屋から数歩後ろに下がった。
　ホテルから持ち出したらしい紙にライターで火をつけ、ギイが小屋の入り口に置いた。そして、ぼくの側に駆け寄りしっかりとぼくを包み込む。義一君も託生ちゃんを抱きしめていた。
　右に左に転がりながら紙を燃やしていた火はパチパチと大きくなって、すぐ小屋に燃え移り、瞬く間に視界を真っ赤に変えた。元々ボロボロだった小屋は、そ の古さもあって乾ききっていたのだろう。ゆらめく炎の中で、徐々に小屋が形をなくしていく。壁が倒れ傾き、そのたびに大きな火の粉が飛び散った。
　これだけ大きな炎を間近で見るのは初めてなのに、なぜか恐怖はなかった。
　炎は焼き尽くすことで浄化の作用があるのだと聞いたことがある。水も流し清めることで浄化すると。どこで聞いたのか忘れてしまったけど。
　大きな音を立てて小屋が崩れ落ちる瞬間、ぐにゃりと視界がゆがんだ。
「帰ったら、大切な話がある」
　抱きしめられた腕の中。耳元で囁かれた言葉に頷いて、背中に回した腕でしっかりとギイを抱きしめた。離れないように。元の世界に一緒に戻れるように。

　　テレビのチャンネルを変えたかのように、さっくりと目の前の景色が変わったような気がした。それはたぶんオレの気のせいで、実際にはベッドで寝ていて目覚めただけだが。
　富貴蘭の香り漂うここはオレ達の寝室で、昨日は託生がアジアツアーから帰ってきた日。
　時差ボケで半分眠りに入っている託生をベッドに運び、オレもそのまま託生の隣に滑り込んだはずだ。
　しかし、あれが夢でないのは、このオレがよくわかっている。あれはオレの心の中の……託生と再会して

からずっと彷徨っていた迷いの森だったからな。
　離れることなく一緒に帰れるようにと、小屋の前でしっかりと抱きしめた託生が腕の中にいて、ホッと息を吐いた。
　大丈夫だとは思っていたが、万が一、一緒に戻れなければ、もう一度あの世界に行く方法を調べなければいけないところだった。なにしろ小屋は燃やしてしまったのだから。
「ん……」
「託生？」
　小さく身じろぎした託生にしっとりと口唇を合わせ、覚醒を促す。
「ギ……あ……ここ？！」
　勢いよくベッドの上に起き上がり、忙しなく周囲を見回して、ついでに自分の体をペタペタと確認した。
「夢？あれ？」
　小さく呟いた託生は、鮮明な記憶に残る夢を見たと思っているのだろう。しかし、このまま夢だと思わせておいてもいいが、いつか綻びが出てくるだろうし、きちんと話をしなければいけない。
　だから安堵の息を吐きかけた託生の頬に口唇を押し当てながら、
「夢じゃない、託生。オレ達は戻ってきたんだ」
　驚かせないようにそっと囁くと、ピタリと動きを止め呆然とオレを見つめ返した。

　わけのわからない世界に放り込まれて振り回され、しかもパラレルワールドのオレ達にも会い、託生の処理能力も限界だったのだろう。そのままパニックを起 こしそうになった託生をキスで黙らせたのはいいが、そうなればツアー期間中離れていた分の精力が溢れ出し、気付けば託生を組み敷きもつれ合っていた。
　本当に、二人でこちらに帰ってきたのかを確かめたかったのかもしれない。
　足を抱え上げ押し入った瞬間、全身を包み込んだ安心感と安堵に溜息が零れ、上半身を倒して託生の口唇を求めた。
　乱れた吐息の間に絡めあい触れる舌先に、本能がむき出しになる。視界に入った肌を濡らす汗さえもオレ以外の異物なのだと思え、独占欲が我が身を支配していく様に苦笑した。
　腕の中に託生がいて、オレを求めオレを受け止め、そして愛の言葉をオレだけに囁いてくれるこの至福の時間を知っているのに、託生を手放そうなんて到底無理な話なんだ。足掻くだけ滑稽だ。そんな単純なことに、オレはやっと気が付いた。
　大きく体をゆらめかして辿り着いた頂に眉根を寄せ、二人で快楽に身を投げる。
　幸せそうに微笑んだ口唇にキスをして吐息を交換し、やっとオレ達はこの世界に戻れたことを実感した。

「ほら」
「ん、ありがとう」
　枕を背もたれにした託生にカフェ・オ・レを手渡し、オレはブラックを片手にベッドに腰掛けた。
　一口飲んで大きな溜息を吐き、
「あの世界は、本当だったんだ」
　確認するようにオレを見上げた託生に苦笑しつつ頷く。
「ギイの心の中って言ったよね？」
「あぁ」
「ギイは、いつわかったの？それとも、初めから心の中だって知ってた？」
「いや、最初は全然わからなかった。託生と同じで、いつの間にかあの世界にいて託生ちゃんと会って……、ただルフェビュール城を見たとき、あっちの二人ではなくオレ達に関係しているんだろうなと思った」

「うん。義一君も知らないって言ってた」
　だから、この世界から脱出するのは、オレしかわからないのではないかと思ったんだ。あの二人には無関係な世界だったから。唯一存在していた城に行けば、なにかしらのヒントが必ずあると思った。そして、見つけた。
「じゃあ、いつわかったの？」
「ヴィエルだよ。ミシェルがオレの部屋に置いておくと言っていたから、実際のオレの部屋にヴィエルは置いてあるはずなんだが、あれ以来触っていないらしいからは壊れたままだ。でも、いつか修理できる人間がいたら、直してもらおうと思っていた」
「心の中で思っていたギイの望みが叶っていたから、ギイの心の中の世界だと。そういうこと？」
「あぁ」
　ヴィエルが直ったら託生が喜ぶだろうからと、腕のいい職人を探していたところだったんだ。
　託生は、少し考え視線を彷徨わせ、
「ぼくのため？」
　躊躇いながら、遠慮がちに小さく聞いた。
　どうして、そう自信なさげなのかわからないが、託生のためじゃなかったら、誰のためだって言うんだ。
　苦笑しつつ頷いたオレに、
「過保護」
　嬉しさ半分、呆れ半分といった表情を浮かべ、溜息交じりにボソリと呟く。
「義一君ほどじゃないぞ。彼なら、その場で職人を探してきそうだ」
「……言われてみたら、たしかに、そうかも」
「だろ？オレの方が、まだマシ」
「……自慢にもならないよ、それ」
　心底呆れた風情の視線を受け流し、少し温くなったコーヒーを飲んだ。そして気付く。ルフェビュール城で食事をしたときに飲んだコーヒーと、寸分違わない味に。
　あの時点で気付くことも可能だったんだな。勘がにぶくなってるのか？
「そうそう、義一君と託生ちゃん。あの二人はどうして迷い込んだの？」
　義一君の名前が出て思い出したのか、託生がさっくりと次の質問に移した。
　オレも、自分の心の中だとわかったとき、それが謎だったのだ。あの二人が迷い込む理由がなかったから。しかし、その後、彼と話をして、たぶんこういうことなんだろうと仮説を立てた。
「義一君は、呼ばれたんだろうと言っていた。どちらかと言えば託生ちゃんの方が」
「託生ちゃん？」
「彼女は、オレ達が思っている以上の運命の歯車に巻き込まれていたんだ。それこそ、普通の人間なら生きていたくないと思えるほどの」
「……女の子だったという話以外に？」
「あぁ、それが前提にあって、色々なことが複雑に絡み合っていた」
　プライベートなことだからと詳細に聞いたわけではないが、生まれ育った家庭環境があそこまで根深く、生き方そのものに影を落とす事になろうとは思わなかった。それは、オレの託生が男だからだ。女性の立場で考えると、全てが糸で繋がっているのがわかる。
　それだけならまだしも、両親の件は怒りに目の前が真っ赤に染まった。オレの託生ではないが、託生なんだ。オレの託生は、両親とそれなりの付き合いを続けているが、イレギュラーなことが起こったとき、同じようなことがないとは言い切れない。
　分別を持ち、絶縁だけで終わらせた義一君は尊敬に値する。オレなら怒りの感情そのままに、実行部隊を送り込んでいる。
「何度も落ち込んだとは聞いたけど……」
「あの二人が落ち着いたのは、ほんの数か月前のことだそうだ。託生ちゃんは、離婚を申し出ていたらしい

ぞ」
「そんな……！」
　痛ましげに顔を歪めた託生の肩を抱き、髪にキスを落とす。
　今の二人を見れば、全く想像がつかないが、事実なんだろう。
　いくつもの山谷を乗り越え、そのたびに結び合わせた二人の絆はオレ達より強いかもしれない。
「何度も傷ついて立ち上がって前を向いて……彼女の腹の中にいる赤ん坊は、あの二人の未来の象徴だ。過去を振り返らず未来を生きていくという覚悟なんだ」
　子供を産めないと言っていたらしい彼女が、愛しそうに腹を撫でる姿は、愛情に満ち溢れていた。大切なのは過去より未来。彼女はその身を持って、オレに教えてくれた。
「あの二人が迷い込んだのは、彼女の強い意志が、今一歩前に進めなかったオレの背中を押すためだったんだと思う」
「ギイ？」
　空になった託生とオレのカップをベッドサイドのテーブルに置き、託生に向き直る。
　再会以後、託生はいつも笑っていたけれど、笑顔の裏にある影にオレは気付いていた。心の底から笑えない状況に置いているのに気付きながら、それでも、いつか手放さなければいけないからと、解決するつもりもなかった。原因はオレだったのに、無責任に見て見ぬ振りをしていた。
「オレと一緒にいると、命の危険が伴う。それでも、一緒にいてくれるか？オレの未来に、託生は存在してくれるか？」
　オレの言葉に、託生は目を大きく見開き、なにか言おうとして小さく口唇を開き、しかし言葉にならずきつく噛みしめた。
「託生なしで生きていくことができないとわかっていたのに、覚悟を決めることができなかった。だから、オレの心の中にあの小屋があったんだ。遅くなったけれど、一緒に未来を歩いてくれないか？」
　溢れる涙を懸命にこらえ、オレを睨む託生の頬に手を当てた。とたん、ポロリと涙が零れ落ち、
「バカだよ、ギイ。ぼくは……ぼくは、ずっと側にいるって言っているじゃないか！」
　オレの胸を力任せに両手で殴りながら、一つ覚えのように「バカ」と繰り返す。

「命を守るためだと聞きました。でも、オレの託生も、そういう意味なら危険があります。Fグループ次期総帥崎義一の妻ですから」
「義一君……」
「わかっていても、オレは託生を手放すことなんて考えられません。それなら、オレにできるのは、託生を守ることだけ。これから生まれてくる子供も。オレが全力で守ります」

　オレより年若い、もう一人のオレ。
　はっきりと言葉に出さずとも、覚悟を決めろと言われたような気がした。

「ぼく達の未来です」

　きっぱりと言い切った彼女の顔が鮮やかに浮かぶ。
　誇らしげに、傷ついた過去を忘れてしまいそうになるほどの強さで、笑顔を絶やさないもう一人の託生。
　そして、親友のために躊躇いなく頭を下げた片倉。オレが知っている中で一番懐の大きい男。
　託生と別れた直後からずっと側にいて、覚悟を決めろと言い続けてくれた島岡。

「過去も未来も、ずっと託生を愛してる」
「ぼくの台詞だよ。……愛してる、ギイ。これからも、ずっと」

もう二度と会うことがない君達に誓うよ。
見守られてきたオレ達の恋に終止符はない。ずっと未来永劫、二人の恋は続いていく。

一度やってみたかったReset、Lifeのコラボでした。
でも、両方の時期は違います。
Resetの方は「月夜に揺れる白い花」直後の９月末。Lifeは「受け継ぐ心、伝える想い」後の２月末。
そのあたりは、コラボだから適当にと思ってください;
元々（書き始めたのは今年１月）、迷いの森で出会うギイタク×２の妄想をしていたのですが、ラスボスは決まらないし、ResetなのかLifeなのかよくわからない状態で、いつものごとくお蔵かなと思っていたんです。
それとは別に「月夜～」の翌日をいつか書こうと思っていて、それをミックスさせてみたらどうだろう…と考えてみた結果、Resetでなら書けるかもしれないと仕上げてみました。
書き分けに思っていた以上に悩むことになりましたが、野望が叶えられて私的には満足してます。
(2014.8.27)

奥付

Reset

りか

URL http://greem.shop-pure.net
MAIL greenhouse@shop-pure.net